CamScannerでスキャン

1

チャールズ・サミュエル・ブション——通称〝シェイク〟、十九歳のときにはじめて自動車泥棒でパクられて以来、そう呼ばれている——は自分の前に伏せてあるカードにもう一度目を向けた。

彼は、エースが一枚見えていて相手が大きく賭けているときは下りるタイプだったが、手のなかにはハートが二枚あった。テーブルの向かい側にすわっている野獣は、たとえカードが膝から飛びあがって口にキスしてもフラッシュに気づくまいと確信できる相手だった。

野獣の名はヴェーダー・ウォレス。Cブロックの卑劣な若い黒人既決囚で、長いロープのような筋肉がぐるりぐるりと巻きついていて、歩けるのが不思議なほどだった。第一級殺人罪——それも悪質な——で十二年の刑期を勤めている最中だ。うわさによれば、きわめて悪質ということだった。

一方シェイクは、またもや自動車重窃盗で服役しているひょろりとした白人男にすぎない。年齢四十二歳で、ことあるごとにその事実を実感している。とはいえ、このカリフォルニア州

CamScannerでスキャン

立ミュール・クリーク刑務所での十五ヶ月を無事に生きのびており、筋肉ムキムキの思いあがった既決囚ににらまれたからといってあっさり降参するつもりはなかった。

彼はコールした。「まあ負けは承知だが、その最後の札を見たいからね」そう言って、にこやかな笑みをヴェーダーに向ける。

親のミズーリ・ボブはわざとぐずぐずしてじらした。ミズーリ・ボブの手の甲は粗雑な青いタトゥで飾られていた——薔薇の花と薔薇の茎と棘に。

やがてようやく、芝居がかった手つきで、ミズーリ・ボブは最後の札をみなに披露した。

ハートのクイーン。

「ハートの売女(ばいた)だ」ミズーリ・ボブは言った。「きれいだが危険だ。気をつけろよ」

ヴェーダーがこちらを見つめていると確信できるまで待ち、シェイクは顔をしかめた。

ヴェーダーはそのしかめ面を見てほくそえんだ。シェイクはちょっと悲しくなった。あまりに簡単に運びすぎることに。

「全額賭けるぞ」ヴェーダーは言い、賭け金がわりの〈トップ・ラーメン〉のふたをすべてテーブル中央に押し出した。

「不当に殺人罪の判決を受けて機嫌の悪い兄さんが全額賭けるとよ」ミズーリ・ボブが言う。

「その機嫌の悪い兄さんが言ったことは聞こえたよ」シェイクは言った。

「シケた白パン野郎が時間かせぎをしてるぜ」

「あんたの解説がなかったらおれたちはどうすりゃいいかわからんよ、ボブ」シェイクはもう

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

一度ハートのクイーンに顔をしかめて見せた。もう一度ヴェーダーがほくそえむのを見るためだけに。ヴェーダーの頭はそれをのせている筋肉全体からすると小さすぎることに、彼は気づいていた。

テーブルについている四人めは、片方の目の焦点が合っていないヤク中の若造で、シェイクのカードをのぞこうとしていた。

「そうなんか、シェイク?」若造が訊く。「あんた、シケてんのか?」

「七十二時間後にゃ自由の身になってここから出ていくやつだからな」ミズーリ・ボブが言う。

「六十八時間後だよ」シェイクは言った。「いちいち数えてるわけじゃないが」

「やるのか下りるのかさっさと決めろよ、くそったれ」ヴェーダーが言った。

シェイクはコールした。「あんたの札を見せてくれ。それからおれのを見せる」

「スリーカードだ、エースの」

ヴェーダーは賭け金を集めにかかった。シェイクは自分のカードを開いた。フラッシュ。

ミズーリ・ボブははげた頭をぴしゃりと手でたたき、ウッヒーと声をあげた。ヴェーダーは腹立ちと困惑の目でカードを見つめていた。ガラスドアに気づかずに頭を思いっきりぶつけてしまった犬みたいに。

「何だ?」

「ハートが五枚」シェイクは一枚一枚、指先でたたきながら説明した。「若くてピチピチだ」

ヴェーダーはミズーリ・ボブに顔を向けた。哀れっぽさと人を殺しかねない凶暴さが同居し

CamScannerでスキャン

ている表情。

「エースのスリーカードより強いのか？」

ミズーリ・ボブは同情のこもった顔つきで首を振ってみせた。「借りてきた騾馬(ミュール)を負かすようにな」

ヴェーダーは両腕をどんとテーブルにたたきつけた。衝撃でハートのクイーンがひらりと舞い、コンクリート床に落ちた。「くそったれめが！」

ヴェーダーは立ちあがった。その顔は、今や人を殺しそうに凶暴になっていた。哀れっぽさは消え失せていた。ヤク中の若造のいいほうの目が大きく見開かれ、ミズーリ・ボブは慎重にじりじりと離れはじめた。

「くそったれ野郎、いかさましやがったな」ヴェーダーが言った。

シェイクは賭け金がわりのふたを集めた。あと六十八時間で自由への切符が手にはいるというときにもめごとを起こすのは賢いとは言えない。だがいかさまはやってなかった。いかさまと非難されるのは心外だ。それに、ヴェーダーをちらりと見上げて直感した。このもめごとは自分がいなくてもはじまったにちがいない。問題は、どうやって終わらせるかだった。

部屋の向こう端で、看守がひとり、チョロ（インディオとスペイン人との混血の人）たちがチェッカーをやっているのを見張っている。だが看守たちはヴェーダーの私事に干渉するのに見合うほどの給料をもらっているわけではない。ことが無事に解決するまでは、口も出さないだろう。

「このくそったれ野郎がいかさましたって言ってるんだ！」

「ちがうよ、ヴェーダー」シェイクは言った。「あんたがちょっと注意不足だっただけだ。こっちの伏せ札がハートだってことは、確率からわかるはずだ」

「確率なんぞくそくらえだ、くそったれ野郎」

シェイクは肩をすくめて、床に落ちたハートのクイーンを拾おうと身をかがめた。テーブルの下から、ヴェーダーがうしろ脚に体重を移すのが見てとれた。蹴ろうとしている。

「走って逃げてもいいぞ、くそったれ野郎。だが――」

シェイクは思いっきりうしろに蹴りつけ、かかとをヴェーダーのひざの皿に叩きつけた。ヴェーダーのうしろ脚がひび割れる鈍い音をたて、野獣はまっぷたつに斬られたかのように倒れた。

「ウッヒー！」ミズーリ・ボブが声をあげ、足の運びが許すかぎりの速さでまっしぐらにドアに向かった。シェイクはすぐそのあとに続きながら、いい捨てぜりふはないかと考えた。ヴェーダーは痛みと怒りにのたうちまわっている。

「おまえはもう死んだ！」ヴェーダーがどなった。「ここを出るときはくそまみれの死体袋にはいってるぞ！」

「歩いて出ていくつもりだよ」ようやく返答を思いついたときには、すでに部屋を出て中庭を半分ほどつっきっていた。

昼食時、シェイクはトレーを持って部屋をつっきり、テイタムを探した。テイタムはカリ

フォルニア州におけるもっとも有用な男と考えられている。独自にまとめ役を擁している黒人ギャングやメキシコ人ギャングたちですら、重要な場面ではテイタムを利用していた。テイタムは最上層から最下層まで、裏表くまなく通じていて、だいたい何でもおおむね適正な価格で手に入れることができる。

「ほしいものがある」シェイクはテイタムのとなりに腰を下ろした。「大至急だ」

「何だ？」テイタムは言った。「棺桶か？」笑いだす。

笑い終えるまで、シェイクは辛抱強くじっと待った。「うわさ千里を走る、だな」

「ヴェーダーをしとめるにゃバズーカ砲が必要だろうな」

シェイクはさっと紙きれをすべらせた。

テイタムはそれを読み、もう一度読み直した。「何だと？」

「明日の午後までに」

「いったいこりゃ――」

「手に入れられるか？　このとおりのものだぞ？」

テイタムは肩をすくめた。「もちろんできるさ」

ちゃんと通じる公衆電話に並ぶ列は長かった。列の先頭は〝フレズノのブルドッグ〟、マネー・ロンダリングがらみで知っている男だ。シェイクは近づいていき、先週オマハ（ポーカーの一種）をやって勝ち取った〈クレスト・ホワイトストリップス〉（歯のホワイトニング用品）のパックをこっ

そりブルドッグにわたしした。ブルドッグは列の先頭をシェイクにゆずった。ちょうど間に合った。その一分後にヴェーダーが足を引きずりながらやってきたからだ。

シェイクは受話器を取り上げ、発信音にじっと聞き入った。酸っぱい臭いと汗臭さでヴェーダーがすぐうしろに来たのがわかると、首を振った。

「ちがう、火曜と言ったんだ」シェイクは電話に向かって言った。「火曜までにおれから連絡がなかったら、それを実行してもらいたい。わかったな?」

ヴェーダーに発信音が聞こえて電話の相手がいないことがばれる前に受話器を置く。それから向きを変え、はじめてヴェーダーに気づいたふりをした。

「ヴェーダー! いったいどうしたんだ?」

ヴェーダーはシェイクをにらみつけた。ロープのような首の筋肉が鉄筋のように太くかたくなっていた。「くそったれ野郎め」

戸口にいた看守が、不意に緊張が高まったのを感知して、親指を無線の緊急ボタンの上に動かした。

「外に友だちがいるんだ」シェイクは電話機をこぶしで軽くたたいて言った。「友だちがいるってのはいいもんだ、そうだろう?」

「おまえの友だちが火曜までに連絡を受けることはねえ」ヴェーダーは言った。「保証するぜ、くそったれ野郎め」

ヴェーダーはその脅しがシェイクにしみこむのを待った。シェイクは恐れ入ったという表情

を浮かべてみせた。

「そうなのか？」訊いてやる。

「そのとおりだ」ヴェーダーはうなずいた——ゆっくりと顎を上げ、ゆっくりと顎を下げて。

それから肩をシェイクに強くぶつけ、押しのけていった。

シェイクはヴェーダーが足をひきずりながら進んでいくのを見送り、壁の時計で時刻を確認した。

静かなる日曜日の食後。二台のステレオラジカセが競い合っていた。〈50セント〉のラップにかぶさるように〈メタリカ〉の曲が流れている。だが囚人のほとんどはまだ中庭にいて、よからぬことを企んだり夢見たり、退屈のあまり緩慢なる死を迎えようとしたりしている。

シェイクは寝床に寝そべり、頭のうしろで両手を組んで、自由の身になったら開きたいと思っているレストランのメニューについて考えていた。

フライパンで揚げるフライドチキン、小麦粉はごく薄く振り、スパイスはたっぷりと効かせて。マッシュポテトにまったりと濃厚なグレーヴィー・ソースを添えて。オクラも数本、もちろんシェイクの祖母がよくつくってくれたようなルーをからめて。

魚のグリル焼き。種類は、新鮮でおいしければ何でもいい。かけるのはグルノーブル・ソース（魚介料理に合うレモン風味のさわやかなソース）あたりか。でもそれだと彼が求める味には華やかすぎるかもしれない。

シェイクはしばし思考をさまよわせた。ここでできる唯一のことだ。サンクウェンティン

（カリフォルニア州の重罪刑務所）の死刑囚監房について聞いた話を思い出す。以前聞いた話では、死刑囚は最期の食事に好きなものを注文することができるということだった――ロブスターにクレーム・ブリュレ、直火で焼いたエビなど、何でも言えばいい。だがどうやらそうした注文は刑務所内の厨房にあるもので間に合わされるようで、フィレ・ミニヨンとストロベリー・アイスクリームを注文した哀れな死刑囚は、たいていは、粗挽きハンバーグステーキとチェリー味のアイスキャンデーですまされる。

ひどい話だ、とシェイクは思った。そんなふうにひとりの男に望みを抱かせるなんて。たとえそれが赤ん坊を殺したサディストだったとしても。だがそれがカリフォルニア州矯正局なのだ――ひとの人生を本当にひどいものにする達人ども。

ゴムタイヤがきしる音が聞こえた。テイタムが監禁房用の配膳カートをころがしてきた。シェイクの房の前で止まる。

「手にはいったか？」シェイクは言った。

テイタムはあたりを見まわして詮索好きな看守のいないことを確認し、シェイクに精肉用の茶色い油紙の包みを渡した。その形と大きさはちょうど電話帳のようだ。

「何のためにそいつがいるのか、どうしても教えちゃくれんのか？」

シェイクは寝床の下に包みをすべりこませた。「ああ」

ヴェーダーはひとりではやってこなかった。シェイクもそれは予想していた。施錠時刻の直

前に、ヴェーダーはもうひとり黒人の囚人を連れてやってきた。黒人の囚人にラインストーンで飾られた犬の首輪をつけ、革のリードを引いている。どちらもテイタムから調達したものだろう。

寝床の縁に腰かけていたシェイクは、ヴェーダーと連れの坊やに礼儀正しくうなずいてみせた。「何か用かな?」

「こいつはおれの子飼いのイカれ度トップ野郎だ」ヴェーダーは言った。「マッド・タイだ」

シェイクは考えた。「マッドってのはかんかんに怒ってるのか、イカれてるのか? それともヒップホップですばらしいって意味のマッドか?」

マッド・タイはリードをぐいとひっぱって飛びだし、うなった。麻薬で興奮させられているか、興奮剤で興奮させられているか、もしくはその両方か。

「こいつがおまえのそのおりこうな口を永遠に黙らせてくれるさ」ヴェーダーは言った。

「そいつにその役目が果たせると思うか?」

ヴェーダーはにやりとした。「どっちでもいい。おまえに運があってマッド・タイを殺したら、おまえは監禁房にまっしぐらだ。このミュール・クリークにとどまって、出ていくことはなくなる」

「そしておまえの手は汚れないってわけだ」

「そのとおり」

「悪い案じゃないな」シェイクは認めた。寝床の下に手を入れる。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「やれよ。おまえの得物を出していいぞ」
「得物なんか持っちゃいないよ、ヴェーダー。おれは活字の力を信じてるんだ」
シェイクはちょうど電話帳ぐらいの形と大きさの茶色の紙の包みにはいっていたものを取り出した。
電話帳だった。ネヴァダ州クラーク郡の個人別電話帳、二〇〇七—二〇〇八年版。
ヴェーダーは一瞬、目をぱちくりさせた。「そいつは何だ?」
シェイクは答えなかった。その質問は形だけのものだと考えたからだが、ヴェーダーが相手では確信がもてなかった。
ヴェーダーはついに、嘲(あざけ)るように鼻息を漏らした。「そいつでこいつをぶっ叩こうってか?」
シェイクはその重たい本を両手で持ち上げた。考えるに、ぶっ叩くのも世界一悪い案というわけではない。だがそうはせず、電話帳を床に落とした。電話帳はどすんと音をたてた。
「ネヴァダ州ヘンダーソン」シェイクは暗記していた事項を声に出した。「マンザニータ・ランチ・コート二八一番地」
マッド・タイがまたもやリードをひっぱった。「そのチンケなキツツキ野郎を殺させちくれ！　殺しちやる！」
ヴェーダーはマッド・タイをぐいと引きもどした。「待ちやがれ、くそったれめが」
「その住所におまえの兄貴と嫁さんが住んでる、そうだろう?」シェイクは楽しげに言った。
「姪もふたりいるよな?」

CamScannerでスキャン

そして、ヴェーダーが公衆電話での会話を思い出すのを待った。そのスピードをあげてやるべく、ちょっと助けてやる。

「『火曜までにおれから連絡がなかったら、それを実行してもらいたい』外の友だちにおれが言ってたのを覚えてるか？」

「殺せ！　そのキッツキ野郎のどタマをむしりとって、おれの——」

「黙れ、くそったれ」

ヴェーダーはまたもやマッド・タイを引きもどした。前よりも強く、ぐいっと。ラインストーンの首輪が喉に食いこみ、マッド・タイは毛玉を吐き出そうとするかのようにえぐえぐと声を漏らし、くそったれ口は黙った。

「前に一度、ヘンダーソンに家族がいると言ってただろう」シェイクは言った。「だから調べてみたんだ。思ったとおりさ」

「いったい何をするつもりだ、くそったれ野郎？」

「いいか、ヴェーダー」シェイクは言った。「おれはただ注意を払ってるだけだ。前からそう言ってるだろう」

ヴェーダーのからみあった筋肉がどうしようもない怒りに震えていた。身体に比して小さすぎる頭にしては大きすぎる口が開きかけた。シェイクは思わず笑みを浮かべた。

「くそったれ野郎め」かわりに言ってやった。「だろ？　ああ、わかってるさ」

CamScannerでスキャン

巨大な鉄のゲートがごろごろと開くほうがいい。太陽の光が降り注ぎ、目を細めなくてはならないほうが、広大な地平線が目の前に無限にのびているほうがいい。そしてたくさんのバイオリンの盛りあがる演奏に迎えられるとかするほうがいいに決まってる。自由の身になって刑務所から出るときはそういうものだ、ちがうか？

だが実際は、看守が横手の通用扉を開け、金網塀の二重ゲートを抜けて、ハイウェイのバス停の向かい側にある砂利敷きの駐車場にシェイクを置いて去っていった。

シェイクは文句は言わなかった。

CamScannerでスキャン

2

シェイクは市バスに乗って街に出た。LA（ロサンジェルス）行きの次のバスが出るまで数時間あったので、ファストフード店でランチを食べた。その店の——ああ——まばゆく照らされたプラスチックのメニューボードにある選択肢の多さと眺めに、ちょっと目がくらんだ。各種のサラダ、ピタパンのラップサンド、ブリート。節約サイズ、特大サイズ、茶色い紙袋にはいったコンボセット。一分ほどカウンターから離れ、並び直してから注文しなければならなかった。

トレーを窓際のテーブルに持っていく。持ち金は四百ドルとちょっとあった。服は逮捕されたときに着ていたのを今また着ている——リーバイスの501ジーンズ、薄いグリーンのストライプのボタンダウンシャツ、〈ノードストローム〉（全米にある高級デパート）のセールで買ったはき心地のいい茶色の革靴。茶色の革ベルト。イングルウッドの空港のそばにある貸し倉庫の鍵もある。その貸し倉庫に、多少の衣類と本や道具、それからもう千ドルかそこらがはいっている。LAに着いた晩には、真っ先にその貸し倉庫に行くことになるだろう。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

それが問題だった。
ランチがすむまではその問題に深く取り組まないことにした。今はただ、グリルドチキンのピタ・ラップをじっくりと味わい、埃っぽい緑の苺畑の眺めを楽しみたかった。有刺鉄線も銃を装備した警備塔も視界にはいらない眺めを。未来も過去も無視して、現在に生きることにしよう。今この瞬間を生きるのだ、はじめて刑務所入りした最初の週に看守のひとり――更正した元コカインの売人で仏教徒を自称していた――に薦められたとおりに。もう何年も昔のルイジアナ。シェイクはまだほんのガキで、おびえて震えあがっていた。今この瞬間を生きよ。それが刑期を勤めている男に与える助言として、果たして最善なのか最悪なのか、今でもシェイクにはわからなかった。
「これで全部おすみですか?」明るいオレンジ色の制服を着た、うつろな目の女の子が訊いた。
シェイクはトレーを見下ろした。丸めた包み紙、空になったケチャップのパック。ホイッスルが鳴って、食事やめ、と告げるのを待っていたのだと、彼は気づいた。
LA行きのバスで、となりは、ありえないくらいに歳をとっているちっちゃな鳥みたいな婆さんだった。少なくとも百歳はいっていそうだ。シェイクが席にすわったときには、婆さんはもう眠りこんでいて、軽いいびきをかいていた。
バスが動きだして十分もすると、太陽はファンファーレもなくごくふつうに沈んだ。不意に世界から色が失せ、ただひとつ残された明るい泡のようなバスが闇のなかをひたすら突き進ん

CamScannerでスキャン

でいく。ほぼ一分ごとに、バスのヘッドライトに照らされた緑色のマイル標がぎらつきながら浮かびあがる。

ＬＡに着いたら誰に連絡しようかと、シェイクは考えた。なかなかいい家に住んでいる女性をふたり知っていた。まだシングルでいれば、幾晩か泊めてもらえるという確信はあった。だがもし彼女たちがシングルなら、その幾晩かはややこしい事態になるということだ。それよりは安モーテルにでも泊まるほうがましだという結論に達した。どこかビーチの近くのモーテルに、次の仕事のめどがつくまで泊まることにしよう。

次の仕事。落ち着いたらフランクを訪ねてみよう。フランクならシェイクのために何か用意してくれるか、もしくはそうできる誰かを知っているだろう。自分がこの業界でいちばん腕利きのドライバーだと考えているわけではない――そんなことを考えるのはあさはかなとんまとずぶの初心者だけだ。だが、シェイクが戦線復帰した今、この西海岸に、彼を雇いたいと考える者は大勢いるはずだ。そうわかっていた。

そう考えると、昔なら気分がよくなったはずだった。だが今は、正反対の効果をもたらしていた。ここにいる彼、四十二歳の彼が生きていくには何をしなければならないのだろう？

今あるのは四百ドルと身に着けた服、イングルウッドの貸し倉庫の鍵。そして前方にのびる道は、気をつけないと、過去にたどってきた道とよく似たものになるだろう。

いったい自分の人生のどこで、どういう理由で、横すべりしてしまったのかと考える。それを指摘するのはむずかしかった。彼の人生の針路を決定したのは、一、二度の重大な決断など

ではない。火山の噴火のような大きなできごとが彼の人生の地勢図を塗り替えたわけでもない。そうではなく、通ってくる道すじでのささいな決断がいくつもあっただけだ。そのほとんどは、そのときには自分でもそれが決断だとは気づきもしなかったようなもの。それに偶然の一致や状況、幸運や不運、そういったささいなことがらが重なりあい、少しずつ着実に、ゆっくりとこびりついてきたのだ。岩や土くれや沈殿物が堆積するように。

今必要なのは、火山の噴火だった。行動を起こす必要がある。今から十年後に、さらに十歳年老いた自分がまたこのバスに乗って、まったく同じことを考えている姿を見たくなければ。もしくは自分が死んでいるか、もっと悪いことになっているのを見たくなければ。

開きたいと思っているレストランについてはいろいろといい案があった。厨房でうまく仕事をしていけそうな技能が自分にあることもわかっている。だが実務面や資金、いろんな許可や一緒に働く相手の調達、水面下に沈まないでいられるという見込みの笑いだしたくなるような薄さ——そういったことを考えるだけで硬直してしまう。

火山の噴火を楽しむには、若さがなければならないのだ。若いか、ばかか、持ち前の奇蹟のような能力があらゆる逆境に打ち克つという確信があるか。残念ながら、そのどれもシェイクにはなかった。

となりの席の婆さんがもぞもぞと動き、目を覚ました。婆さんは青筋の浮いた小さな両手で膝のバッグをつかみ、シェイクがこれまで見たことのないような澄みきった青い目で、まじまじと彼を見た。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「あんた、刑務所から出たばかりだろう」婆さんは言った。
「ええ、そうです」シェイクは言った。
婆さんは満足げにうなずき、それから三百キロあまり、ずっと朗らかにしゃべりつづけた。毎月リヴァーサイドにいる妹を訪ねているのだと、シェイクに話した。昔ウォルト・ディズニーとデートしたことがあるとシェイクに言った。それはつまり——万が一シェイクに意味が伝わっていない場合に備えて——ちょっとしたロマンスがあったってことだよ。それから、太平洋戦線勝利の日の翌日に海兵隊員と結婚したのだとシェイクに語った。子どもは四人いるけど、大成したのはひとりもいない。でもその四人の子どもがもたらしてくれた孫が十二人いて、驚くなかれ、その全員が大成したのだ。ひとりはアリゾナ州の小さな市の市長をしている。夫はもうずっと前に亡くなったよ、まだリンドン・ベインズ・ジョンソンが大統領をしていたころだ。それから彼女は自立することを学んだ——彼女の母親にはなかった精神を。
「あんたはきっとあたしに、何か賢明な助言とか忠告をもらいたいと思ってるんだろうね」婆さんは言った。
「そうしていただければ」とシェイクは言った。「それを役立てたいと思います」
「あげられるような助言なんか何もないよ。あんたはなりたいと思うような人物を選んで、そういう人物になれるように最善を尽くすことだね」
「それはきわめていい助言だと思いますよ」
婆さんはまるでご機嫌取りをされたとでもいうように、唸るような笑いを漏らした。シェイ

CamScannerでスキャン

クはご機嫌取りをしたわけではなかったのだが。
夜遅くなってようやくLAに着くと、シェイクは婆さんがバスを降りるのを助けてやり、婆さんのスーツケースを引いて、客待ちをしているタクシーに向かった。
婆さんはシェイクの腕を驚くほどの力でぎゅっと握り、澄みきった青い目で彼を見つめた。
「あんた、仮釈放かい?」
「いいえ、ちがいます。刑期を終えて出所したきれいな身です」
「散髪に行きなさい。あんたは男前だ。気立てのよさそうな目をしてるし、鼻も格好がいい。でも刑務所で散髪したみたいに見えるんだよ」
シェイクはにっこりした。「刑務所で散髪したんです」
「あんた、彼女はいるかい?」
「いいえ、いません」
「前にはいたんだろう?」
言っている意味はわかったような気がした。「よくわかりません」
婆さんはひやかすように笑った。「今にわかるよ」
「はい、そうですね」シェイクは言った。
「そのままでいなさいよ」
「きれいな身で?」
「大当たり」

タクシーが婆さんを運び去るのを見送った。それから向きを変えると、すぐ横の縁石のところに、長い黒のリムジンが音もなくすべりこんできた。
彼の居場所はおろか、出所したことすら、誰も知らないはずだった。だが、助手席側の後部窓の黒く色づけされたガラスがゆっくりとドアフレームに溶けこみ、アレクサンドラ・イランドリャンが微笑みかけてくるのが見えたとき、シェイクはなぜか驚きはしなかった。
「こんにちは、シェイク」彼女は言った。
「やあ、レクシー」
「わたしを見て驚いたかしら？」
シェイクは首を振った。
「わたしに会えてうれしい？」
こちらの問いはちょっと複雑だった。シェイクは彼女にウインクを送った。
「そっちしだいだね」ドアが開いたとき、彼は言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

3

シェイクはリムジンのなかで、アレクサンドラと向かい合う席に落ち着き、じっくりと彼女を見つめた。最後に会ったときから、少しも変わってはいない——物憂げなグレーの瞳も頬骨も、ちょっとおもしろがるようにかすかに開いた唇も。

「どんどん若くなっていくみたいだね」シェイクは言った。リムジンがスピードを上げ、ハイウェイの流れに乗ったのが感じられた。「おれに分別ってものがなかったら、悪魔と取り引きしたんじゃないかと思うところだな」

アレクサンドラは優美な白い手を振って、その考えを払いのけた。

「悪魔なんて」とはねつけるように言う。

アレクサンドラ・イランドリャンは、おそらくシェイクが知るなかでもっとも美しい女性だ。そしてまた——こちらはおそらくではなく、確実に——もっとも恐ろしい女性だ。いろんなことをすべてくわしく知っているわけではないが、それでもじゅうぶんだった。十六の歳に、アルメニアのトルコ国境まぢかの山岳地帯で活動する、中位の部族軍の残忍野蛮な頭領に嫁入り

CamScannerでスキャン

させられ、二十歳のころにはもう夫を始末して軍事作戦行動を引き継ぎ、近隣の競合部族全員を崩壊させていた。そしてその数年後、アメリカに移住したのだ。ものの十年で、持ち前の魔力のような魅力と知性、そして底なしの貯水池に貯めこんだ情け容赦ない意志の力を活用して、LAじゅうのアルメニア人ギャング全体の支配権を手中にした。彼女こそがボスだった。パカン（アルメニア語の頭領）。アレクサンドラ・イランドリャンのもとには悪魔がお願いをしにやってくるが、その逆はない。

彼女は角氷をひとつ、グラスに落とした。グレーの瞳と同じけぶるような色あいのシルクのブラウスにオーダーメイドのスラックスを着て、シンプルな黒のサンダルをはいている。そのサンダルはひと財産と言えるぐらいの値段だとシェイクは知っていた。

「メーカーズマーク（米国のバーボンウイスキーの商標）よね？」彼女は訊いた。「ロックね？」

「記憶力がいいな」シェイクは言った。

「あなたを忘れるのは不可能よ、シェイク」

「褒め言葉と受け取っておくよ」

彼女はシェイクのためにバーボンを注いだ。その笑みからは何ひとつ汲み取れない。汲み取れたためしはない。

「きついところに十五ヶ月もいたのね」アレクサンドラは考えこむように言った。「どうして司法取引に応じなかったの？」

シェイクは肩をすくめた。「西海岸でもっとも危険なレディを密告するって？　それもおそ

らくもっともキスの上手な女を？」

「おそらく？」彼女は片方の眉をぐいと上げ、シェイクを見つめた。なぜおれはここにいるのだろう、とシェイクは考えた。何かの仕事がからんでいるのは間違いないが、それだけではなさそうだ。ミュール・クリークに送られる原因となった仕事をする前の数ヶ月間、彼はアレクサンドラと短いが濃密な関係を愉しんだ。その関係がいつの間にか消えたのはなぜなのか、そうなった責任はどっちにあるのか、いまだにはっきりとはわからなかった。

「あなたの誠実さはありがたいと思うわ」ようやく彼女は言った。「だからお返しをするわね。あなたにちょっとした仕事をあげて、懐にいくらかお金がはいるようにするわ」

シェイクは首を振った。「どうかな、レクシー。タイミングがな」

「あなたは人生のこの時期にいる、何やかやの隙間の時期に」アレクサンドラは彼に微笑んだ。「新たなスタートを切りたいと思っている。そんなところかしら」

シェイクは何も言わなかった。その必要はなかった。彼女は手をのばして、彼の肩にふれた。「決める前にまず聞いてちょうだい」そう言った。「いいでしょう？　聞いて損はないはずよ」

シェイクはバーボンをすすり、市街地の明かりが流れ去っていくのを見つめた。

聞いて損はない？

「これはきみの車だ」そう言った。「おれはきみにまかせるだけだ」

彼女はハリウッドにあるタイムカプセルのようなステーキハウスにシェイクを連れていった

CamScannerでスキャン

——壁に並ぶ四、五〇年代の有名人の額入り顔写真、赤い模造革（レザーレット）張りのブース席、タキシードに糊のきいたエプロンをしめた、旧共産主義者のようなむっつり顔のウェイターたち。
シェイクはニューヨークカット・ステーキ——芯のところが薔薇色の熱々のやつ——とホウレンソウのクリーム煮を注文した。どちらも絶品だった。シェイクが食事をじっくりと味わい、アフターディナーのブランデーを楽しんでから、アレクサンドラは仕事の話を切り出した。簡単な仕事よ、と彼女が言ったのは、だいたいの概要を説明したあとだった。それから、言い直した。
「ちがうわね。〝仕事〟と言うほどのことも……ないわ」
「おつかい？」シェイクは言ってみた。
「そうよ」
「ヴェガスまで車を運転する。男と会ってその車を渡す」
「これ以上ないくらい簡単でしょ、ね？」
「その男からブリーフケースをもらう。飛行機でＬＡにもどって、ブリーフケースをきみに渡す」
「ちょっとしたおつかいよ」
「するときみが二万ドルくれる。それは……」
「あなたが好きだからよ、シェイク。あなたが社会への借りをきっちりと返して、人生の新しいスタートを切ろうとしているから」

「その車のトランクには何がはいってるんだ？」シェイクは訊いた。
「それはあなたが気にすることじゃないわ」
「ブリーフケースの中身は？」シェイクは訊いた。
彼女は楽の音のような笑い声をあげ、甘美な調べがひとしきり音階を上っていった。グレーの目がきらめく。
「あなたがいなくて寂しかったわ、シェイク。あなたはユーモアがわかるもの」
「ヴェガスでおれが会う男ってのは？」
「ある男に仕えてる男よ」アレクサンドラは言った。「ディック・モビーに」
「あの〈クジラ〉か？」
「知ってるの？」
よく知っていた。ミシシッピ川の西で服役すれば、ディック・モビーのところで働いているやつや金を借りているやつ、ディック・モビーに殺されかかって命からがら逃げ出したやつに会わないことはない。その三つ全部に会うこともある。〈クジラ〉はヴェガスでストリップ・クラブを所有しているが、本業は麻薬の売買や高利貸し、財物強奪、性の奴隷用の移民売買といったところだ。
「そう」アレクサンドラは言った。
シェイクは彼女の頭の上に掛かっている額入り顔写真の俳優の名前を思い出そうとしていた。『殺人者』にバート・ランカスターと一緒に出ていた性格俳優で、いいやつのように思えるが

CamScannerでスキャン

最後に悪いやつだと判明する男をしばしば演っていた。もしくはその逆を。だが名前は思い出せなかった。

現実の世界ではそんなふうに突然役柄が一転することなどありえないが、いい映画のなかではあるのだろう。そう思った。

「おれは真剣に言ってるんだ、レクシー」シェイクは言った。

「知ってるわ」

「もう四十二歳だ」

「そうね」

シェイクは説明した。もし、もしもこの仕事を引き受けるとしても、それが最後になる。そしてその仕事を引き受けるのは、将来開く予定のレストランの資金に二万ドルをあてるためだ。もちろん二万ドルでもとうてい足りないが、それが元手になる。おれは新たにはじめようと決意したんだ。

アレクサンドラは礼儀正しく耳を傾けていた。彼女が信じていないことはわかっていた。シェイク自身が本気でそう思っていると彼女が信じていないことが。

ニキータ・フルシチョフ（ソビエト連邦の第四代最高指導者）にそっくりのウェイターがつかつかとやってきて、シェイクの空になったブランデーグラスをにらみつけた。

「おかわりは？」うなるように言う。

はシェイクを見た。

シェイクはためらった。自分では本気でそう思っていた。でも同時に、レクシーのリムジンがやってきたときにほっとしたことは否めなかった。そう気づいたとき、最後にもう一度だけ流れに身をまかせてみようと思った。運命が望むところに連れていくにまかせてみよう。

明日、その新たなスタートを切るのだ。

彼はウェイターに首を振った。「今夜、長距離ドライブをしなきゃならないんでね」

CamScannerでスキャン

4

アレクサンドラは携帯電話を取りだし、テーブル席に着いたまま電話をかけ、アルメニア語で短く二言三言話した。ふたりがレストランから出ると、リムジンの横に黒のリンカーン・タウンカーが停まっていた。そのタウンカーのわきに、アレクサンドラの専用ボディガードにして、汚れ仕事を引き受ける一の子分、ディクラン・ガザリアンが立っている。つるつるに剃った、まだ発射されていない弾丸のような頭を持つ先史時代の原始人のような悪党だが、顔のつぶれた潰瘍は、すでに発射され、コンクリート壁から掘り出された弾丸のように見える。

「シェイク」アレクサンドラが言った。「ディクランは覚えてるかしら？」

もちろん覚えていることを、彼女は知っていた。ディクランはこの惑星上でおそらくもっとも醜い男であるだけでなく、愚かなサディストの弱い者いじめ野郎で、前に一度、愚かにもシェイクをいじめようとした。シェイクは愚かにも、頑としてあとに引くまいとした。何年も前の、シェイクがアレクサンドラの最初の仕事を引き受けたときのことで、結局彼女があいだにはいり、休戦協定を結ばせた。シェイクの肉体から脊髄をむしり取り、それで首を締めて殺

すのは神から与えられた権利だと考えていたディクランは、それを否定されたせいで、それ以来ずっとシェイクを目の仇にしていた。
「まだ進化が起きるのを待ってるのか、ディクラン？」シェイクはにこやかに言った。アレクサンドラの庇護下にあるとはっきりしているかぎりは、ディクランが向かってくることはないとわかっていた。もし何かの理由で、アレクサンドラがその庇護をやめたら、この世でもその次の世でも、ディクランがシェイクを殺すのを止められるものはないこともわかっている。どちらにせよ、シェイクの運命は決まっている。だからいつも、このでかくて醜いトカゲ野郎をつついて刺激することで脳血管を破裂させることができるかどうか、やってみることにしていた。「もっと高次の運動機能が備わるのを待ってるのか？」
ディクランは威嚇するように一歩踏み出し、シェイクの両足のあいだのアスファルトにつばを吐いた。マドラスチェックの半袖シャツに、彼の身体には短すぎる黒いサテン地のパラシュート・ズボンをはき、ソックスなしでスーツ用の靴をはいている。
「くそったれが」ディクランは言った。「まだ母親と姦ってるのか？」
「ちょっと、あんたたち」アレクサンドラが言い、ぱちんと指を鳴らした。ディクランはまだシェイクをにらみつけながら、彼女に一通の封筒とひと組の鍵と携帯電話を渡した。そのやりとりのときに、ディクランのむきだしの上腕に布パッチが貼られているのが見えた。
「そいつは何だ？」シェイクはディクランに訊いた。「自分の電話番号を忘れないように入墨にしたのか？」

「ディクランは医者に、コレステロール値が高すぎるって言われてるの」アレクサンドラが言った。まじめくさった面持ちだったが、これをおもしろがっていることがシェイクにはわかった。「テストステロン（男性ホルモンの一種）値が低すぎるとも、医者に言われたのよ」

ディクランは首を締められて咳きこんだような音を口から出した。目の下の皮膚がどす黒くなった。

「テストステロン昂進パッチか？」シェイクはおもしろがって言った。「副作用はないのか？」

「くそったれが」ディクランの悪罵のレパートリーの限界はそのあたりのようだった。彼はつぶれた顔をアレクサンドラに向けた。「どうしてこの仕事をこんなくず野郎にやらせるんです？」

「頭痛か？」シェイクは声に出して考えた。「吐き気か？　勃起がおさまらないとかか？」

アレクサンドラはディクランの肩に手を置いた。

「それはわたしがパカンだからよ」ディクランに言う。その声は穏やかながら死をもたらしそうな響きがあった。「いいわね？」

ディクランの動きが一瞬止まった。それから、彼はリムジンに歩いていき、乗りこんで、バタンとドアを閉めた。

「あのパッチはね」アレクサンドラはシェイクに説明した。「彼をいつも以上に怒りっぽくさせるのよ。なかなか信じられないでしょうけど」

「落ち合うのはどこだ？」

「ラスヴェガス・ストリップ（ラスヴェガスの中心を南北に貫く大通りに沿った細長いエリア）のモーテルよ。明日の朝七時。住所はその封筒のなか」封筒と車のキーと携帯電話をシェイクに渡す。「それから、とりあえず三千ドル。今度はありがとうと言って」

「ありがとう、レクシー」

シェイクはタウンカーのドアを開け、乗りこんだ。アレクサンドラが身を乗り出して顔を寄せた。最後にひとつ。

「シェイク?」

「ああ?」

「ラスヴェガスのディック・モビーだけど。怒らせていい相手じゃないわ」

「わかってる」

「シェイク?」

彼女の顔の不可解な笑み。

「わたしも怒らせていい相手じゃないわ」

シェイクはうなずき、笑みを返した。「わかってる」

午前一時半ごろにロサンジェルスを出発した。三時ごろには、ウェストコービナやオンタリオ、ランチョ・クカモンガといった、不規則にのび広がった見苦しい近郊地をあとにして、何もない真っ暗な砂漠の奥深くにはいっていた。法定制限速度の時速七十マイル（約百十二キロメートル）に

CamScannerでスキャン

ぎりぎり達しないスピードで突き進む。下ろした窓から甘い香りのする春めいた風が車内になだれこみ、抜けていく。

風は冷たかったが、シェイクは気にしなかった。ミュール・クリークに十五ヶ月間収監されていた身としては、これこそ夢見ていたことだった。おいしい食事よりも、女よりも。こうすること――ただひたすら運転する――両手でハンドルを握り、二百四十馬力、四・六リッター、V8エンジンの低い喉声のようなうなりに全身の全細胞を振動させながら運転することを。はじめてのキスを思い出すことはできなかったが、はじめて車を運転したときのことは明瞭に覚えていた。それはまた奇しくも、はじめて車を盗んだときでもあった。八年生、十三歳のとき、ルイジアナ州ニューオーリンズで。悪ガキだったというわけではなく、ただちょっとやんちゃだったのが、もっとやんちゃな年長のガキどもとつるんでいただけだ。車は一九七四年式のフォード・マーヴェリック、白い車体に褐色のハードトップ。持ち主はキーをさしっぱなしにして、K&Bコンビニ店に寄っていた。シェイクとふたりの友だち、ウエランとチャンクスは二時間ほど街なかを乗りまわし、つぶれたスーパーの無人の駐車場で、スピンターン・スライドを考案した（と思っていた）。それからマーヴェリックを土手のそばに放りだし、シェイクは徒歩で家に帰った。有頂天気分で疲れきって。その夜は死んだように眠り、次の日の三時まで目が覚めなかった。それを思い出すと、シェイクの顔に笑みが浮かんだ。

ウエランはそれから数年後に盗みに失敗し、盗もうとしてエンジンを直結したコルヴェットにつぶされて死ぬことになる。チャンクスは、最後にシェイクが聞いたところによると、[illegible]

者になってフロリダのどこかに住んでいるということだった。
ラスヴェガスまであと百六十キロという標識がヘッドライトに浮かび上がった。シェイクはFMラジオをいじり、ある局が明瞭に聞ける周波帯を見つけた。残念ながら流れているのはスローなジャズで、ハイウェイをぶっ飛ばしているときにほしい音ではなかったので、ほかの局を探った。ラップ、ラップ、ラップ、カントリー。ようやく、デジタルダイヤルのはるか左端で、なつかしのスプリングスティーンのB面、〈ビー・トゥルー〉が見つかった。ビッグ・マンのサックスが吼え、ブルースがさわやかなほど大人らしい調子で、愛と真実は一時的なものにすぎないという本質を歌いあげていた。その麗しい三分間、シェイクの世界のあらゆるものがほぼ完璧だった。
マイティー・マックスのタムタムが轟くようなクレッシェンドをつくっていくのに合わせて、シェイクはハンドルを指でたたいた。とにかく、自分の選択は間違ってはいないと自分に納得させようとしていた。この仕事を引き受けたのは間違ってはいないと。もうすでに決めたことだし、もう二度と以前の怠惰な習慣にもどりはしないぞ、と。
歌が不意にとだえ、雑音になった。うしろのほうで、小さくくぐもった音が聞こえた。どすん、どすん、どすん。
パンクか。小刻みにブレーキを踏み、タウンカーを路肩に寄せた。奇妙なことに、パンクならハンドルがひっぱられるはずだが、それがなかった。だがシェイクは深く考えはしなかった。エンジンを切り、ドアを開けた。スペアタイヤがまともでボルトがちゃんと留められれば、十

分もかからずにふたたび走り出せるだろう。
ところが、車から出て後部にまわってみると、どちらのタイヤもパンクしてはいなかった。かすり傷ひとつない。
「どういうことだ」声に出してつぶやいた。すると、どすん、どすん、どすんという音が再開した。その音はトランクの内部から出ていた。
『運転席にもどれ』とシェイクは自分に言い聞かせた。『トランクを開けるな。運転席にもどって、ヴェガスまで運転するんだ。この車を届けて飛行機でLAにもどる、そしてアレクサンドラから残金を徴収する。金を受け取って、レストランをはじめる方策を見つけ出すんだ。そしてもう二度と、絶対に、こんな仕事は引き受けない。
トランクを開けるな』
シェイクはトランクを開けた。
なかには二十代の若い女がいた。絶縁テープでさるぐつわをされ、手錠をかけられて。女は涙に濡れ、おびえた目でシェイクを見上げた。
風はおさまっており、夜が不意にひどく暖かく、ひどく静かに感じられた。まるで砂漠が大きな汗ばんだ手のひらになり、五本の指がゆっくりとシェイクの上で閉じてきたかのように。
女はふたたびもがきはじめ、スペアタイヤ入れを蹴りつけた——それがパンクかと思えた音[illegible]ているのが見てとれた。
[illegible]警察の車が

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

見えた。女はまたもや蹴りつけ、その音はシェイクの耳に、真っ暗な夜の闇のなかで爆弾が炸裂したかのように響いた。

「くそ」シェイクは言った。だがパニックに陥ってはいなかった。そんなことには絶対にならない。それが第一の、そして唯一の鉄則だ。トランクのなかに手を入れ、女の両脚にしっかりとひもを巻きつけ、ほどけるなと祈りながらしっかりと結ぶ。トランクのふたをばたんと閉めたと同時に、州警察官が警察車のドアを開けて出てきた。

シェイクは警察官のほうに歩いていき、二台の車のちょうど中間点で警官と向き合った。

「もうちょっとでコヨーテを轢くところでした」説明する。「タイヤがパンクしたかと思ったんですが、大丈夫でした」

警官はちょっと顎を動かした。うなずいているとも、そうでないともつかない。大きく鈍そうな顔の中心で小さな目がせめぎあっている、古参の警官だ。太鼓腹のせいで制服シャツのボタンがはちきれそうだ。

「どこに向かってたんです?」

「ほかのどこに行くってんです?」シェイクは言った。

「スロットをしに?」

「弟が結婚するんです。明日の夜、〈フラミンゴ〉で独身最後のパーティーをするんです」

州警察官は待っていた。まだほかに聞くべきことがあるとでもいうように。

「ストリッパーをひとりかふたり、かな」シェイクは続けた。「ビールにプレッツェル。その

CamScannerでスキャン

程度です」

「そこは二年前に取り壊したと思ってたが」州警察官は言った。

「え?」

「〈フラミンゴ〉だよ」

シェイクは笑った。くったくなさそうに聞こえるように。

「そうでないといいな」と言った。「さもないと、えらいことになってしまう」それは、この警官に言った、最初の本当のことだった。

警官は考えこむように顎の下の皮膚をひっぱった。一台のセミトレーラーが轟音を響かせて通っていった。東から西へ。あれに乗って行けたら、とシェイクは思った。

「もしかしたら、〈サハラ〉と勘違いしてたかもしれん」とうとう、州警察官は言った。「まあ、知ったこっちゃないね。いちいち全部を把握するなんざ、もう不可能だ」

「でしょうね」

「スロットマシンには近寄らないほうがいいぞ。いつだって胴元が儲けてるんだ、たとえあんたがしめたと思ってるときでもな」

「そのとおりです」この警官は経験から言っているんだろうかと、シェイクは思った。どちらにせよ、その見方は健全だ。

「よし、いいぞ。安全に行けよ」

州警察官は車にもどっていった。警察車が走り去るのをシェイクは見送った。燃えるような

CamScannerでスキャン

テールライトが彼方に消え去るとようやく、この十分間かそこらずっと詰めていた息をゆっくりと吐き出した。一秒後、タウンカーのトランクから、またしても聞こえてきた。どすん、どすん、どすん。

「くそ」シェイクは言った。

CamScannerでスキャン

5

日の出の直前に、ヴェガスの南端にたどりついた。ストリップに乗り入れたときに、ちょうど地平線上に、血のように赤い細いすじがあらわれた。ピラミッド、エンパイア・ステート・ビルディング、エッフェル塔。あとどれぐらいしたら、このヴェガスの街そのものをテーマにしたカジノつきホテルができるだろう、とシェイクは考えた。ホテルを囲むこの都市を正確に映す縮小レプリカとなるホテル。その縮小都市には、ヴェガスをテーマにしたそのホテル自体のレプリカも含まれ、そうやって無限に小さくなっていく——

シェイクは首を振り、冷たい空気を深く吸いこんだ。ちょっと頭がおかしくなりかけていた。ずっと寝ていないからだ——もう何時間になる？　今はもう、やわらかなベッドで数時間眠ること以外にほしいものはなかった。今運転している車のトランクのなかに、縛られてさるぐつわをされている女なんていない。そう、それもだ、忘れるな。

その女をどうするつもりか、自分でもわからなかった。これは罰かと思う。あのバスのなかで、きれいな身でいるようにと言った婆さんの言うことをきかなかったことへの。楽勝ものだ

という理由でこんな仕事を引き受けたことへの。
この一瞬を生きるんだ、と自分に助言する。ダッシュボードの時計を見た。ディック・モビーの運び屋と落ち合うまでに、まだ一時間ある。モーテルを見つけて部屋をとり、ちょっと考えを整理してみよう。
交通量は少なかったので、カジノの勤務交代ラッシュにはかからなかったようだ。ストリップを北進し、ヴェガスらしい熱っぽさが薄れてうらぶれた感じになる界隈にはいる――大きな新しいホテルの並びが大きな古いホテルの並びに変わり、大きな古いホテルの並びが小さな古いホテルの並びに、そして小さな古いホテルがついには酒屋やアダルト本屋、クラック常用者どもが集団で住む複合アパートや、みすぼらしい時間貸しのモーテルに席をゆずっているあたりに。
〈アパッチ・モーター・イン〉はウェスト・ユタ通りとサウス・ラスヴェガス・ブールヴァードとの交差点に建っていた。向かい側は〈ジャングル〉というストリップ・クラブだ。ストリップからのびるこの界隈でいちばんシケたモーテルというわけではないが、中心街にはそこそこ近い。ウィグワム（北米インディアンのテント小屋）の形をした看板の下に車を乗り入れ、その裏に停める。すぐ横にからっぽのプールがあり、なかの半分ほどにいくつもの錆（さび）の浮いた便器やバスルーム用の洗面台がころがっていた。
フロント係がルームキーを渡してくれた。キーについているかたくて赤いゴム製の球には歯型がついていた。まごうかたない、成人の歯型が。どういう状況でそんなことになるのか、

CamScannerでスキャン

シェイクは想像したくもなかった。部屋の鍵を開け、ドアを開けて椅子をつっかいにし、駐車場にもどっていく。タウンカー以外に車はなかった。

後部タイヤの横にしゃがみこむ。タイヤの損傷具合を調べているかのように。

「聞こえるか？」シェイクは言った。

返事はない。

「一回蹴ってくれ」シェイクは言った。

どすん。

「トランクから出してやる。だが静かにしてもらわないと困る。いいね？」

どすん。

周囲を見まわして、駐車場に相変わらず誰もいないことを確認してから、シェイクはトランクを開けた。女の顔の、絶縁テープで覆われていない部分は青ざめて汚れており、乾いた涙のすじのところはそれ以上に青ざめてはいるが、汚れかたは少なかった。

「手荒なことをするつもりはない」シェイクは言い、女の脚を縛っているひもをほどいた。女はジーンズにスウェットシャツという服装で、靴はなかった。両手は前で手錠をかけられていたので、シェイクは彼女の腕の輪に自分の首を入れて腰のまわりをかかえ、トランクから抱き上げた。むきだしの両足が地面にふれた瞬間、彼女のふくらはぎが痙攣し、ふたりともアスファルトの上に倒れこんだ。シェイクは彼女の腕から抜け出して立ちあがらせようとしたが、彼女は腰から下が麻痺しているかのようで、結局ふたたび抱き上げることになった。シェイク

CamScannerでスキャン

の鼻に押しつけられた金髪は強烈にタイヤのゴムくさい臭いがしたが、かすかに桃のような香りもまじっていた。

シェイクは女を部屋に運びこみ、ドアを足で蹴って閉めると、ベッドの上に下ろした。彼女の前に膝をつく。

「喉が渇いてるんじゃないか？　水、ほしいか？」

女はうなずいた。

シェイクはバスルームでプラスチックのコップを見つけ、冷たい水をいっぱいに入れた。それから蛇口レバーを温水に切り替え、ウォッシュタオルを濡らした。

洗面台の上の鏡に映る自分の顔を見る。

「何かいい考えは？」たずねてみる。

鏡のなかの顔は悲しげに首を振った。あるもんか。

水のコップとタオルを持って部屋にもどる。最初に気づいたのはドアだった。開いている。次に気づいたのはベッドだった。からっぽ。

女はいなかった。

シェイクはコップとタオルを落として、外にダッシュした。それほど遠くないところをよろよろ歩いている女を見て、心臓の鼓動が再開した。からっぽの駐車場までほぼ半分というところだった。シェイクの手が届く寸前、女は地面に倒れた。シェイクが引き起こすと、女は泣きわめきはじめた。

CamScannerでスキャン

「来い」シェイクは静かに言い、部屋のなかに連れもどした。
椅子にすわらせ、枕カバーを使って両足首を縛りあわせる。
「次は痛いかもしれない」シェイクは言った。「でも一気にやればそれほど痛くないかもしれない」

絶縁テープの縁の剝がれかけているところを見つけ、一気に口から引きはがす。女は声ひとつあげなかった。ただ目を閉じて、下唇を噛んでいた。

いい唇だ、とシェイクは目を留めた。ふっくらとして薔薇色。今はじめて、女の顔が汚れにまみれていながらもきれいな顔立ちだということに気がついた。目は一見茶色のようだが、よく見ると、深い水底のような緑色だ。完璧な形の頬骨に、完璧ではない鼻。気の強そうな鼻の鼻梁には細かくそばかすが散っていた。鼻も目も健全に見えるが鈍そうではない——郷里で同窓会の女王になれるかもしれないが、時間をうまく使えばそれ以上のことができそうな女を思い起こさせる。

最初思ったよりもうちょっと若そうだ、とシェイクは見当をつけた。たぶん二十三か二十四というところだろう。

で、こういう若い女がどうして車のトランクに詰められ、ディック・モビーのような悪いや**[illegible]なことになるのだ？　いろんな可能性があるだろうが、あまり考えた**

CamScannerでスキャン

「叫びはじめたら、またテープでふさぐぞ」シェイクは警告した。
女はうなずいて何か言ったが、シェイクには聞き取れなかった。シェイクは顔を近寄せた。女の声はソフトでかすれていた。
「水」
シェイクは新しくコップに水を入れてやった。手錠で繋がれた手を震わせながら、女はコップを口もとに持ち上げ、水を飲んだ。シェイクは湯で濡らしたウォッシュタオルを見つけて、女の顔の汚れをそっとぬぐってやった。
「名前は？」たずねる。
女の大きな目は茶色なのか緑なのか、はっきりと決められないようだった。
「ジーナ」彼女は言った。
「ジーナか」シェイクは言った。「どうしてあの車のトランクにはいっていたのか、聞かせてくれ」
「お願い、助けて」
「助けてやりたいとは思う。だがまずは――」
「わからないの！　あたしはただの……ただのママなのに！　小さい息子がふたりいるのよ」
咳きこみともすすり泣きともつかない声を漏らす。シェイクはもう一杯水を持ってきてやり、彼女はそれを飲んだ。
「ここはどこなの？」女は訊いた。

「ラスヴェガスだ」
驚愕。「あたしはここに住んでるのよ！」彼女は言った。
「でも、ＬＡにいたんだろう？」
「休暇だったの。夫と一緒に。息子たちをあたしのママにあずけて、そして……カタリナ島に行こうとしてたのよ？　ピクニックしようって？　でもそれからロニーは新聞を買いに出て、もどってこなかったの」言葉はどんどん速くなり、矢継ぎ早にころがり出た。「その次の日、男がドアを押し破って、それで――」
「落ち着け」
「あたし――これを脱がなきゃいられない」顎でだぶだぶのネヴァダ大学ラスヴェガス校(UNLV)スウェットシャツを指し示す。「暑くて燃えあがりそう。お願い」
シェイクはためらったが、スウェットシャツを女の頭から引き抜いた。下に着ているのは薄手の白のＴシャツで、汗で濡れていた。ノーブラで、おっぱいは小ぶりながら完璧な形をしている。暗い映画館から陽光のなかに足を踏み出した男のように、シェイクは目をしばしばさせた。それからすぐに目をそらし、スウェットシャツを手錠の上から抜くことに意識を集中した。刃のついた道具が何も見あたらなかったので、結局歯で縫い目を噛みきり、生地をまっぷたつに引き裂いた。
「ありがとう」彼女は言った。
シェイクはもうひとつのベッドの上に、彼女と向かいあって腰を下ろし、パズルのピースを

裂ぎあわせようとした。
「きみの夫。ロニーだっけ？　出ていって、もどってこなかった？」
「まるで別れを告げてるみたいだったのよ、さよならって言ったとき」
彼女はまたもやさめざめと泣きはじめた。大きな涙の粒が一滴、頬からころがり落ち、一瞬、透きとおってわななきながら口のすみにとどまった。
「彼に棄てられたような気がするの」彼女は言った。「どうして棄てられたのか、わからない」
「ジーナ」シェイクは言った。「よく考えてみるんだ、ジーナ」
「何もないのよ、ほんとに。あたしはただ――」
不意に、彼女はシェイクを見上げた。
「どうした？」
「彼、ギャンブルが好きだった」
「ロニーがだな」シェイクは言った。
「あたしたちの教会のみんなが、彼が縁切りするのを手伝おうとしてたの。あたしたちって、モルモン教徒よ？　でも彼はお金を借りつづけてたのよ、わからないわ……わからないのよ、どうしてあたしが――」
「ジーナ。頼むから落ち着いてくれ、いいな？」
ジーナは深呼吸をひとつした。シェイクはふたつのベッドにはさまれているテーブルのラジオ時計に目をやった。あと十五分で七時だ。チク。タク。

「ロニーは誰かの名前を言ったことはなかったか？　誰に金を借りてたとか？」
「ううん」ジーナは言った。「でも一回あったかも。ディックなんとかかとか、なんとかディックとか？　思い出せないけど、ロニーは――」
何が起きたのか、シェイクにはわかりはじめてきた。胃が何か不快なことになりかけていた。犬がぐるりと輪を描いてまわってから、ばたりと地面に倒れるというようなことに。
「ディック・モビーか？〈クジラ〉の？」
「ク……ジラ？　そうかも。そうだわ。ディック・モビーよ」
ジーナはまじまじとシェイクを見つめた。
「それって何？」彼女は訊いた。シェイクはさすがに今回はポーカーフェイスが崩れたことを自覚していた。
「きみの夫はとうてい返せない額の借金ができたせいでズラかったんだと思う」
「でもどうして――」
「ディック・モビーはきみの夫を見つけることができなかったんだ。だから回収命令を出した。で、おれを雇っている人物がきみを見つけた」
「あたし？　どうしてその――ディック・モビー？　その人があたしをほしがるの？　あたしはお金なんて持ってないわ。いつだってロニーが全部……」
声が細くなり、消えた。目からふっと生気が失せるのを、シェイクは見守った。頭のいい女だ。そうだという確信がすでにあった。

CamScannerでスキャン

「その人、あたしを殺そうとしてるのね」ようやく、彼女は静かな声で言った。「あたしがロニーの居場所を教えないかぎり」

シェイクは立ちあがって、窓際に歩いていった。人差し指でブラインドの羽根の隙間を広げ、まばゆく照りつける外の陽射しに目をすがめた。駐車場にはまだ黒のタウンカーがあるだけだ。

「ディック・モビーはきみをただ脅したいだけかもしれない。もしかしたら、ただ単に——」

「あたしはロニーの居場所なんて知らないのよ」

ジーナの声は平板で落ち着いていた。シェイクの気休めを真に受けていないのか、それとも聞いていなかったのか。

シェイクは窓に背を向けた。彼女はちょっとぼんやりしているように見えたが、事態を理解しているようだった。同じ状況に陥(おちい)って、これと同じ態度をとれる人間がいるだろうかとシェイクはいぶかった。

モビーがこの女にどういうことをしようとしているかは、かなりよくわかっていた。長年のあいだにしたどの願いごとよりも強く、彼女を助けてやれたらと願った。そしてそれと同じくらい強く、選択肢が自分にあればと願った。

かつて、以前の仕事仲間に、おまえはこの稼業をやるにはひとがよすぎると言われたことがあった。だが、ほかの仕事ができるほどではない、とも。

「ジーナ」彼は言った。「すまない。きみを逃がしたらどうなるか？　今度はおれがあの車のトランクにはいることになる」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

顔をそむけるだろうと思ったが、彼女は彼の視線をしっかりと受け止めた。
「わかってるわ」彼女は言った。
本気で言っていることがシェイクにもわかり、そのせいでこれまで以上に浮かない気分になった。

ドアに鋭いノックの音があり、彼女はすくみあがった。シェイクはラジオ時計に目をやった。七時ジャスト。

ジーナは顎をぐいと上げ、肩をいからせた。
「ほんとに幸せな人生だったわ」彼女は言った。「ママはあたしの坊やたちを愛してくれてるし、きっとよく世話をしてくれるわ。ママはプールつきの大きなきれいな家に住んでて、そして――」

もう一度、ドアをたたく音。シェイクはテレビの上に置いてあった絶縁テープのきれに手をのばした。
「速くすむかしら?」ジーナは訊いた。
シェイクはためらった。それから、彼女の口にテープを貼りなおした。
「すまない」もう一度言った。思った以上に湿っぽい声になり、喉が砂でざらついているようだったが、彼女に聞こえたかどうかはわからなかった。彼女は目を閉じて、ゆっくりと静かに呼吸をしていた。

シェイクはモーテルの部屋のドアを開けた。〈ナジラ〉の部下は大男だった。タックル攻撃

にうってつけの、下半身がどっしりと重たい構造をしている。丸い顔に眠たげな目、コーヒー色の肌。

男は穏やかながら油断のない目でシェイクの全身を見渡した。

「よう」男は言った。

「あんたが〈クジラ〉の使いか？」シェイクは訊いた。

「彼はそう呼ばれるのを好まない」その口調は威嚇するというよりはうちとけた会話のようだった。

「おれはシェイクだ」

「ジャスパーだ」

ジャスパーはシェイクの肩越しに室内を見やり、ベッドの端にすわっているジーナを見つけた。

「あの女は車のなかにいるはずだが」数秒してから、まったく同じ会話口調でジャスパーは言った。

「はいってくれ」シェイクは言った。

ジャスパーは部屋にはいった。持っていた革製のブリーフケースをドレッサーの上に置き、ロックをはずしてふたを開けた。それから礼儀正しくうしろにさがり、シェイクが中身をたしかめられるようにした。

なかには、ケースにぴったり合うようにカットされたスチロールで揺れや衝撃から守られる

CamScannerでスキャン

ようにして、もうひとつのケースがはいっていた。大型のマニラ封筒のサイズで、厚みもそれほどではなく、全体がガラスでできていた。ガラスの内側に押しつけられるようにして、何十枚という親指の爪ほどの大きさの四角いものがはいっていた。乾いて黄ばんだ羊皮紙のように見えるものが。シェイクは数えてみた。横に十列、縦に十列。

「百枚だ」ジャスパーが言った。「全部ある」

「切手か?」シェイクは訊いた。

ジャスパーは肩をすくめた。知ってると思うか?

シェイクはガラスケースを持ち上げ――びっくりするほど重かった――近くでよく見てみた。羊皮紙片のどれにも、書きこみや印など何もついていなかったが、どの一枚もわずかながら、となりのものと微妙に違っている――なめらかさや質感の違い、茶色い斑点が散っていたり、角のところが漂白されたように白かったり。

シェイクはガラスケースをスチロールのくぼみのなかにもどした。

「おれは何を持って帰ることになってるのか、それも知らないんだ」白状した。

「これがそれだ」ジャスパーはブリーフケースのふたを閉じ、ふたつの掛け金をきちんとはめた。「これでいいな?」

シェイクはうなずいた。女のほうを見るな。そう自分を戒めたが、ちらりと女のほうを見てしまった。女の目はかたく閉じていた。表情は……ほとんど平和とすら言える。頬が紅潮し、くるりと巻いた金髪のほつれ毛が顔に垂れかかっていた。

CamScannerでスキャン

シェイクの脳裡に一瞬、ある光景が閃いた。驚くほどの明瞭さで。ジーナ——きれいな家のポーチに立って、芝生の上で遊ぶふたりの幼い男の子を見守っている。それから、その脳裡のジーナは目を上げ、微笑んだ——まっすぐシェイクに向かって。

「ちょっと待て」ジャスパーが彼女のほうに足を踏み出したとき、シェイクは言った。

ジャスパーの動きが止まった。「何だ？」

自分がこれからやろうとしていることが信じられなかった。あまりに信じがたいことなので、シェイクは首を振ってくっくっと笑わずにはいられなかった。それから、鼻の穴から深く息を吸いこんだ。

「その子は渡したくない」シェイクは言った。「もしそれでよければ」

ジャスパーはかなり長いあいだシェイクを見つめ、言葉の意味を考えていた。この大男はちょっと頭のめぐりが鈍いのか、ちょっとマリファナ酔いしているのか、とシェイクは考えた。でなければ、ただとてもとても冷静なのか。いわく言いがたかった。だが、ついに——

「この女を渡したくない？」ジャスパーはやんわりと言った。

「そっちはその……何か知らんが、それを持っていっていい。そのブリーフケースを。それをあんたのボスにもどせ。取り引きはボシャったが、すべて大丈夫だとボスに言え」

ジャスパーの大きな月の形の顔に小さな笑みが浮かんだ。まるで、ジョークのおちをやっと理解したとでもいうように。

「ミスター・モビーに取り引きはボシャったがすべて大丈夫だと言えって？」

CamScannerでスキャン

「そうしてくれ」シェイクは肩をすくめた。いかにも簡単なことじゃないかと言わんばかりに。ジーナの横のナイトスタンドの前に行き、そこにあった電話帳を取り上げる。「ジャスパー、もしかしたらあんた、このあたりでおいしいテキサス・スタイルのバーベキューが食べられる店を知らないか？　この十五ヶ月ってものずっと、食べたくてしょうがなかったんだ。ヒルカントリー・ブリスケット（薄切り牛肉に野菜と一緒に火を通した料理）ってやつのことだ。ソースまみれのイーストテキサス・リブステーキのことじゃないぞ」

ジャスパーはまたしてもおもしろがるような視線をじっくりとシェイクに向けた——観察し、評価を下し、意見を整理している目。

「行くぞ」ついに、そうジーナに言った。

シェイクは最後にもう一度、これからしようとしていることの結果について考えた。それから、ジャスパーが自分の前を通ってジーナのほうに足を踏み出すと同時に、電話帳をしっかりと握りしめ、大きく振りかぶってジャスパーの後頭部にたたきつけた。

ジャスパーは前によろめいた。シェイクはもう一度電話帳をたたきつけた。ジャスパーは壁にぶつかって、酔っ払いのように跳ね返り、ナイトスタンドにうしろ向きに倒れこんだ。巨体の下でナイトスタンドが砕け、ジャスパーはカーペットに激突した。電気スタンドが彼の上にころがり落ち、片方の腕にコードがからまっていた。

シェイクはじんじんする両手から電話帳を落とし、ジーナの腕をつかんだ。うしろを見ずに、彼女をドアのほうにひっぱっていく。落ち着け、と自分に言い聞かせる。背後でジャスパーが

うめく声が聞こえた。砕けた残骸のなかでもう身動きをはじめている。
シェイクはジーナを駐車場に連れていった。タウンカーの横にジャスパーのＳＵＶが停めてあった。ジャスパーがこの車でタウンカーをふさごうと考えていなかったのはラッキーだった——ただ日常茶飯事の受け渡しをするだけだと思っていたのだ、ディック・モビーの運び屋が、それ以外のことが起きるかもしれないなどと、考えることがあるだろうか？　ＳＵＶのディストリビューター・キャップをはずしておいてやりたいとちょっと思ったが、そんなことをしている時間はなかった。
「走らなきゃならないぞ」シェイクはジーナに言い、ふたりはそうした。灼熱のスポンジのようなアスファルトの上を走った。ジーナは一度ころびかけたが、すばやくバランスを立て直した。タウンカーにたどりつくと、シェイクはポケットに手をつっこんで鍵を探りながら、肩越しに振り返った。モーテルの部屋の戸口には、まだ誰もいない。ジャスパーはまだ追ってきてはいない——今のところは。もう一度タウンカーのほうを向いたとき、ジャスパーはまだ追ってきていない。ジーナの手錠をかけられた手が革のブリーフケースをつかんでいることに気づいた。
「それをどうするつもりだ？」シェイクは訊いた。
女は肩をすくめた。「ちょっと思いついたの。よくわかんないけど、持ってくるのがよさそうって」
口論している時間はない。
「乗れ」シェイクは彼女に言った。

CamScannerでスキャン

ジーナを車に押しこみ、そのあとからすべりこむ。タウンカーを猛スピードで走らせ、サウス・ラスヴェガス・ブールヴァードに曲がるときに、最後にもう一度、〈アパッチ・モーター・イン〉を見た。バックミラーに、よろめきながらモーテルの部屋から出てくるジャスパーの姿が映った。片手に四十五口径のオートマチックを持ち、満月の形をした顔にひどく不快そうな表情を浮かべていた。

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

6

ストリップを流れる車の量はずいぶん増えていた。シェイクにはありがたかった。レンタカーに乗ってまごついている観光客を縫うようにして、車線変更をくりかえしながらタウンカーを飛ばし、ジャスパーが追ってきてはいないと確信できると、やれやれというように首を振った。自分がやったことのまったき無謀さと自殺行為に等しい愚かさに。

「こんちくしょう」彼は言った。「うっわー」

「ありがとう、ミスター」ジーナが言った。「本当にありがとう。何て言ったらいいか――ほんとに……」

シェイクはカップ・ホルダーとグラブ・コンパートメントを調べ、それから灰皿を開けた。そこに、それはあった。

「ほら」ジーナに小さな銀色の鍵を渡す。彼女は手錠の鍵を自分ではずそうとしたが、両手が震えて危うく鍵を落としそうになった。次の赤信号で、シェイクは身体を横に向け、手錠をはずしてやった。手錠を床のブリーフケースの横に落とし、ジーナがすりむけて赤くなった手首

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

をこすって感覚をとりもどそうとするのを見守った。
「シェイクだ」シェイクは言った。「おれの名前だ」
「ああ、なんてこと。あいつら、あたしを殺そうとしたわ」
今すぐじゃないけどな。シェイクはそう言おうとしたが、やめた。そのかわりに目を上げて、前方のストリップの両側に立ち並ぶ大手のカジノを見つめ、この通りから離れなければならないと彼女に言った。
「腹はへってるか?」
「ぺこぺこよ」ジーナは言った。「死にそう」

〈鉄の大砲(アイアン・キャノン)〉は大盛況だった。船のデッキのあちこちで炎が燃え盛っている。レースアップのコルセットからおっぱいがこぼれそうな女海賊がマストのてっぺんの見張り台から飛び下り、空中でゆっくりと一回転して、完璧な姿勢で水中に飛びこんだ。
木製デッキに詰めかけた人々が拍手喝采する。
シェイクは窓に寄りかかるようにして、ダイビングした女海賊が浮かびあがってくるのを待った。だが、出てこなかった。きっと水中にスキューバタンクを用意してあるか、気密室(エアロック)が隠してあって、死んだ海賊たちはみなそこを通って楽屋にもどっているのだろう。どちらにせよ、なかなかイカした仕掛けだ——指をぱちんと鳴らせば、永遠に消え失せる。自分にもそういう隠れた切り札があればいいのに、とシェイクは思った。

CamScannerでスキャン

「グッモーニン、お仲間！」ウェイトレスが言った。「巻きかたやめ！」フリルシャツを着てバンダナを巻き、眼帯をつけているが、靴はニューバランスのクロス・トレーナーだとシェイクは気づいた。「何か飲むかい？」

「朝っぱらからバーボンを頼んだら、軽蔑するかい？」シェイクは言った。

ウェイトレスは一瞬、海賊キャラを忘れて笑みを浮かべ、目の玉をぐるりとまわしてみせた。

「ここはラスヴェガスよ、お兄さん」

「よし」シェイクは言った。「それじゃ、ダブルのロックで。メーカーズマークがあるならそれ。なければジャックダニエルで」それからジーナに目を向けた。どうやらアドレナリンが引いたようだ、と推察する。かわりに心的外傷後ストレス症候群が全開になっている。ジーナはスワヒリ語ででも書かれているというように、メニューをじっと見下ろしていた。「何がいい？」

「え？」彼女は言った。

「何か飲むか？」

「レモネード？」

「モルモン教か」シェイクは言った。「忘れてた」

「あなたが考えてるようなんじゃないのよ」ジーナはちょっとむっとしたように言った。「みんながみんな、ああいうモルモンってわけじゃない――あなたたちがテレビで見るようなのとはちがうの。あたしたちはただの、ふつうの人々なのよ」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

それから、今いるのがどこで、自分の身に何が起きたのかを思い出したようだった。
「ああ、どうしよう」そうつぶやいて目を閉じ、いやいやというように首を振る。ウェイトレスが興味深げに見つめていた。
「ふたりとも、ベーコンエッグにするよ」シェイクはすばやく言った。
「両面焼き半熟？」ウェイトレスは言った。
「やわらかめのスクランブルで、エシャロットと生クリーム(クレーム・フレシュ)をちょっと添えて」
「アイアイ・サー」ウェイトレスはオーダーを書き留めると、クロス・トレーナーをはいた足で、パンタロンの衣擦れの音をさせながら、ダイニングルームをつっきっていった。ジーナが目を開け、シェイクを見た。
「あたしたち……ここって安全なの？」
彼女が今言っているのは、〈宝島(トレジャー・アイランド)〉ホテルのコーヒーショップのことだ。だがたとえ言っているのが惑星地球で、ふたりが死ぬかどうかという質問だったとしても、シェイクの返事は同じだろう。
彼は、ウェイトレスがバーボンを持ってもどってくるまで待った。ぐいとひと息で半分ほど飲み、それからため息をつく。ディック・モビーとレクシー、どっちがよりさし迫った脅威になるだろうと考える。だが長期的に見れば、疑う余地はない。
「いや」シェイクは言った。「だがしばらくはたぶん大丈夫だ」
「警察に行こうかしら。あたし――」

「だめだ」
「でも――」
「警察はだめだ」ディック・モビーがこの市の市警のチェスセットまる一個分ほどの人数を手中におさめていることは疑う余地がない――巡回警官や刑事、ことによると警部もひとりふたりいるかもしれない。「家に帰るのもだめだ。友だちや家族に電話するのもだめ。何も言わずに飛行機に乗ってここを出ろ。できるかぎり遠くまで、ディック・モビーから遠ざかれ」
「お金がないわ」ジーナは言った。「それにあたしの子どもたち――」
「飛行機に乗ってここを出ろ」
彼女がこのことを理解しようともがき苦しむのをシェイクは見守った。人生が一瞬にして――心臓の鼓動一拍ほどのあいだに――くるりと反転して、取り返しのつかないことになったという、突然のめまいのような事実。
「あたし、ちょっと」ジーナは言った。「ちょっと……」
「気分が悪い？」
彼女はうなずいた。シェイクはレモネードのグラスを彼女のほうに押しやった。ジーナはグラスを口元に持っていったが、飲まずに下に置いた。うっすらとほのかな笑みを浮かべる。
「ああ、なんてことかしら。先週、あたしは工作実習をする三年生全員に配れるだけのゼリー菓子があるかしら、なんて心配してたのよ？　ね、わかる？」
「わかるよ」本当だった。

CamScannerでスキャン

ジーナは頭のなかで自分自身と短い会話をしたと見えて、一度うなずくと、テーブルの上に手をのばした。シェイクのグラスをつかんで、彼のバーボンをひと口飲んだ。鼻にしわを寄せ、グラスを返す。

「やっぱりレモネードにしといたほうがよかったかも」

「飛行機代ぐらいは出すよ」シェイクは言った。

「そんな……あなたにはどんなにお礼を言ってもたりないわ。シェイク」

シェイクは肩をすくめた。ウェイトレスが料理を持ってもどってきた。ふたりは食べた。ジーナの頬にいくぶん色みがもどってきた。シェイクも、胃におさまった料理と血流にのって循環するバーボンのおかげで、希望に満ちたとは言わないまでも、ちょっとは落ち着いた気分になってきた。

「あなたはどうするの？」食べ終えると、ジーナが訊いた。

「少なくともブリーフケースは手にはいった。きみのおかげでね。それでおれの雇い主の女性をなだめられるかもしれない」

そうできないかもしれない。すべてはこの切手——だか何だかをレクシーがどれぐらいほしがっているかによるだろう。ディック・モビーとの業務提携に、彼女がどれほど重きを置いているかにもよる。けっして彼女を密告することなく、そのせいで十五ヶ月の禁錮刑をくらった昔の恋人に、どれくらい寛恕の情を感じるかにもよる。

彼女にその点を思い出させることにしよう。

「あなたはすごく困ったことになってるの？」ジーナが訊いた。

シェイクは笑みを浮かべずにはいられなかった。「ほんの二十四時間たらず前に出所したばかりなんだ。きっと何かの世界新記録になるんじゃないか」バーボンの残りを飲み干す。「きみと一緒に飛行機に乗るべきなのかもな」

ジョークのつもりで言ったのだが、彼女の目を見ると——驚いたような、それでいながらうれしそうな目——もしかしたらまったくのジョークとは言えなかったかもしれないと気づいた。

シェイクは気恥ずかしくなって目をそらし、すばやく話題を変えた。

「まあいい。訊いてくれ」

「あたしの知ったことじゃないわよね」

「自動車窃盗で服役してたんだ。地方検事と司法取引をしなかったから十五ヶ月まるまる勤め上げた」

「あなた、車を盗むの？」

「ええと……」シェイクはためらった。それから考えた。ふたりしてあれだけの修羅場をくぐり抜けたのだから、今さら恥ずかしがる理由はないはずだ。「おれは車を運転するんだ。おれはドライバーだ。逃走車ドライバーってやつ？」

「まあ」ジーナは言った。「それってきっと、すっごくスリリングよね」

「実際はそんなんじゃない。主に制限速度内で走って、警察に止められないようにするだけの仕事だ。前もってオイルの残量とタイヤ圧とブレーキ灯のチェックをするんだ」

ウェイトレスが通りかかり、バーボンのおかわりはいらないかとシェイクに訊いた。ほしかった――脳みそがやわらかくて甘い綿菓子のようにふわふわになり、ディック・モビーやアレクサンドラ・イランドリャンのことなど、絶縁テープや四十五口径オートマチックのことなど、はいりこむ余地がなくなるまで、ずっと飲みつづけていたかった――が、そこまで無分別ではなかった。彼の武器は機知に富んだ理性だけだ。これをずっと保ちつづけていなければならない、そうわかっていた。彼はバーボンを断った。ウェイトレスは会計を持ってきますと言って、去っていった。

「きみの子どもはいくつなんだ?」シェイクはジーナに訊いた。

「ウィルは四つよ。ジェフは二歳。あなたは――」

「いない」

しばらく、ふたりは黙ってすわっていた。誰かが、ずっと向こうのカジノのフロアでスロットマシンのジャックポットをあて、歓喜の叫びをあげはじめた。

「ああ、やっとわかったわ」ジーナが言った。「まず車を盗むのね。逃走用の車ってやつ?」

「車から正体をつきとめられることのないようにね。前後のナンバープレートだけを盗むやつらもいる。急いでるときでも、何もしないよりはいいからね」

「どういうふうにやるの?」

「やるって?」

「車を盗むの。どういうところから盗むの?」

CamScannerでスキャン

「おれは空港の長期駐車場を使うのが好きだ。車のエンジンを直結して、仕事をやって、盗難届が出される前にもどすんだ」
ジーナはレモネード・グラスの縁越しに見上げ、唇の片端を上げた笑みを向けてよこした。
「それじゃ、どうしてつかまったの？　そんなにりこうだったのに？」
そのからかうような言いかたにシェイクは驚いた。これまで予想もしていなかった、彼女の一面だ。「おれがりこうだなんて誰が言った？」
シェイクは笑みを返した。一瞬、むきだしのイグニッション・ワイヤー二本を交差させ、プラグがスパークし、エンジンが動きはじめるのを指先で感じとる瞬間と同じ感覚に襲われた。ウェイトレスが会計を持ってもどってきた。シェイクとジーナは同時にたがいから目をそらした。
「空港までタクシーで行くんだ」シェイクは言った。「あのタウンカーは危険すぎる」
ジーナは顔をしかめた。「あの、ちょっと――ここで部屋をとる時間はあると思う？　ちょっとシャワーを浴びるだけだけど？」
シェイクはちょっと考え、それからうなずいた。
「いいんじゃないか？」

CamScannerでスキャン

7

刑務所ですごした、幾晩もの長く息詰まる夜、時間がじりじりとすぎていく夜――彼が夢に見たものがここにあった。本物のマットレス。本物の枕。そしてほかの何よりもほしかった、沈黙。あるのはただ、強にしたエアコンと、バスルームから聞こえてくるシャワーの、心をなだめてくれるような静かな水音だけ。

シェイクはベッドの上に身体をのばし、両手を頭のうしろにあてて、まったく身動きせず横になっていた。目を閉じて一週間ほどただ眠れたらと願う。そして目覚めたら時間がもどっていて、ミュール・クリークのあのゲートから足を踏み出しているのだ。まだジーナもジャスパーも、今まったただなかで泳いでいるくそまみれの海も、すべて知らないまま。

「それって、本名なの？」バスルームからジーナが呼びかける。「シェイクっていうのは？」

ただ、正直なところを言うと、本当にジーナを知らないままでいたかったのかどうか、よくわからなかった。天井を見上げながら、おそらく時間がもどってほしいとは思っていないということに気づき、シェイクは自分でも驚いていた。きっと頭がイカれている。

CamScannerでスキャン

「ニックネームだ」シェイクは声をはりあげて返した。

シャワーの蛇口が閉まる音が聞こえた。シャワーカーテンが開く音。

「それはミルク・シェイクが好きだから?」

「おれがミルク・シェイクみたいに白いからだ。はじめて投獄されたときに黒いやつらの誰かがおれをそう呼びはじめたんだ。ヴァニラ・シェイク。それが縮まった」

「何歳だったの、はじめてのおつとめをしたのは?」

シェイクははじめて郡の護送車から降り立ったときのことを思い出した。腰鎖をがちゃがちゃいわせ、背中のくぼみに汗がたまっていた。M16自動小銃を肩にななめ掛けした監視塔の監視員がチョコバーを食べていた。空は薄青く、雲はなかった。こう考えていたのを覚えている。『こんなのってないぜ。こんなの、現実じゃないよな、なあ』

「十九歳」シェイクは言った。

「もしかしたら、あなたはミルク・シェイクみたいにクールだって思われたのかも」

「どうかな」

バスルームのドアが開き、ジーナが出てきた。タオル一枚巻いただけの姿で。髪は湿っていて、むきだしの肩には水滴の玉が連なってきらめいている。彼女はシェイクに笑いかけた。その笑みはこれまでの彼女には見られなかったものだった。物憂げで狡猾そうな。まったく別人——ジーナにとてもよく似ているが、それ以外に共通点のあまりない美女——のように思える笑み。

CamScannerでスキャン

「あなたはクールだって、あたしは思うわよ」彼女は言った。

シェイクは立ちあがった。ジーナは部屋をつっきってきて、彼の首に両腕をまわした。シェイクははじめて郡の護送車から降り立ったときに経験したのとまったく同じ、奇妙に乖離した気分を感じた。『こんなのってないぜ。こんなの、現実じゃないよな』

彼女の顔が間近に迫り、呼気のなかにウィンターグリーンの歯磨き粉の匂いが感じられた。顔があまりに近すぎ、焦点を合わせることができなかった。

「目がくらみそうだ」シェイクは言った。

「あたしはその効果をもたらすことで知られてるの」

シェイクは目をしばたたき、目をそらした。今や、ジーナの顔だけでなく、部屋全体がぼやけていた。周囲の壁がありえない角度に傾き、自分も一緒に傾くのが感じられた。首にまわされたジーナの両腕はひんやりしてなめらかだった。

「どうして知っているんだ？」シェイクは訊いた。「刑務所にはいるのを？　おつとめと言うことを？」

「しぃぃぃぃ」ジーナはささやいた。ひんやりしたなめらかな腕がはずれる。床がうねりはじめ、ひどくゆっくりと、シェイクの足の下から離れていった。シェイクはよろめいたが、どうにかバスルームに向かって何歩か歩いた。そこに行けば冷たい水があり、それを顔にはねかけることができる。もう少しで洗面台というところで、すべるように遠のいていった床が唐突に止まり、彼はどさりと尻もちをついて倒れた。

CamScannerでスキャン

バスルームの床から、ジーナがタオルをわきに放り投げ、服を身につけはじめるのをじっと見つめる。タイルから起きあがろうとしたが、両手両足がプディングのようにぐにゃぐにゃだった。照明が薄暗くなった。雲が太陽の前を通りすぎるときのように。舌がもつれて重く感じられた。

今こんなことになっているのは愛のせいではないことはわかっていた。バーボンのせいでもないことも。

「わかった」必死で意識を集中させようとしながら、シェイクは言った。「おい。いったい……?」

ジーナはベッドの端に腰を下ろし、ジーンズをはいているところだった。

「ガンマ・ヒドロキシブチラートよ、スウィーティ」彼女は言った。

シェイクの脳みそがのろのろとその意味を考えた。「おれに一服盛ったのか」

「いつもポケットにひと粒入れてあるの。〈バーツビーズ〉のリップバーム缶に入れてね。非常時のために」ジーナはジーンズのジッパーを上げた。「あなたが何を考えてるかわかるわ」

そうだろうかとシェイクは考えた。自分でもいったい何を考えているか、よくわからないのに。

「もっと早いうちにそれを使うチャンスがなかったのよ」ジーナはちょっと申し訳なさそうに説明した。「拉致されるのがほんとにあっという間だったのよ、一瞬であのばかげたトランクに詰めこまれちゃって」

彼女はシェイクがはずしてやった手錠を持って、バスルームにはいってきた。片方の輪をシェイクの手首にぱちんとはめ、もう一方の輪を洗面台の下のパイプにはめた。それから身をかがめ、彼の唇にすばやくかすめるようなキスをくれた。
「ほんとに、あなたはクールだと思うわ」ジーナは言った。
「おい、ちょっと」シェイクは言った。
ジーナはブリーフケースをつかみ、戸口で一瞬立ち止まってシェイクにウインクした。
「ひとつ借りね、いいでしょ？」彼女は言った。
シェイクはどうにか苦い笑みを浮かべた。ほぼ同時に、まったき闇が彼の上に落ちてきた。
「きみはモルモン教徒の主婦じゃないな、そうだろ？」
「まあそうよ」彼女は言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

8

四日と十三時間九分前、〈アパッチ・モーター・イン〉からラスヴェガス・ブールヴァードを隔てて五メートルほどのところで、ジーナはマルボロのパックに残った最後の一本に火をつけていた。頭をうしろに傾けて天井にけだるげな煙の柱を吹き上げる。ディスコのミラーボールに反射する無数の光が揺らぎ踊っていた。バーテンダーが注いだテキーラのショットグラスを飲み干し、にこやかに笑う。

「ぶっはー！」彼女は言った。

「だめだ」彼女がそれ以上何か言う前に、バーテンダーが言った。

「あたしにただで飲ませたら、ほかの子たちがあんたに腹を立てるから、よね？」

「ああ、そうだ」

「でもあたしはほかの子たちとはちがう、でしょ？」

バーテンダーはため息をつき、もう一杯酒を注いだ。ジーナが思っていたとおりに。

「ああ」バーテンダーは認めた。「あんたはちがう」

ジーナは彼にウインクを送り、バー・スツールをくるりとまわしてボックス席が見えるようにした。新人DJはリズムを聞き分ける耳を持たない、メタル・フリークだ。そいつがターンテーブルから目を上げたとき、ジーナは親指と人差し指でピストルの形をつくり、狙いを定めた。彼女の出番のときにこんな頭ががくがくなるようなくそ音楽をかけようとしたら、こっちから尻(ケツ)を蹴飛ばしてやる。

DJは頭を振りたてながら、あほ面を彼女に向けてにやにや笑った。最後の曲のギターの甲高い叫びが消えていった。メイン・ステージの子――うしろ一本のおさげ髪にカトリックの学校制服ふうのチェックのスカートを着たキュートな子――が黒のストラップ靴のつま先で、ステージの端にカーネーションのように散らばっているしわくちゃのドル札をかき集めている。

「ジェントルメン」DJがマイクに息を吹きつけた。「〈ジャングル〉が誇るダンサーがステージ1に登場、セクシーでじゅわじゅわ～ん……」

ゆっくりと、物憂げなようすで、ジーナは混み合うクラブハウスを縫うように動いていった。着ているのはお気に入りの服のひとつだ――黒い革のサイハイブーツ(太ももまでの長さのブーツ)に、赤い革のボーイズふうのショートパンツ、DUH(ダー)と大書された、ぴったりと身体に沿うカットオフ・Tシャツ。ブーツの厚底のおかげで、ぽかんと口を開けて彼女に見とれているぼんくらどもの大半より頭ひとつ分高かった。

ひどくいい気分だった。なめらかに流れているような気分。微風に揺られている絹のカーテンのような気分。

CamScannerでスキャン

ジーナはくすくす笑った。というか、それに近いことをした。
今夜がその夜だ。
「ジェントルメン、拍手でお迎えください……ジャングルの女王の登場です」
ジーナはメインステージへの階段を上がっていく。プリンスの〈キス〉のイントロのファンキーなリフが流れはじめる。ジーナはＤＪに投げキスを送る——いい曲よ、おりこうさん——クラブじゅうの薄暗い隅ずみから男たちがわきでてステージに押し寄せ、手すりの前でひしめきあう。空にお金の雨が降る。

二曲が——リロ・カイリーの〈スモーク・ディテクター〉とフレイミング・リップスの〈ターン・イット・オン〉——終わったころには、ジーナはＴバック一枚になっていた。おっぱいとうっすらと輝く汗の膜、それ以外には何もない姿に。通常、トップの子たちはお金を払ってステージ出演からはずしてもらうものだ——本当にもうかるのは床（フロア）に落ちる金だ、ＶＩＰルームの——が、今夜のジーナは高い場所から見晴らす必要があった。そう、たしかに……

ちょうど、〈クジラ〉がクラブにどたどたと乗りこんできたのが見えた。苦虫を嚙みつぶしたような顔の肥満男、青白いせいで〈ジャングル〉のブラックライトの下では地虫のように光を帯びて見える。ステージ上で最後に手すりにそってひとわたり動いている最中にそれを見つけたジーナは、恐怖と興奮で背すじが軽くぞくっとするのを感じた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

〈クジラ〉はうんざりしているような視線を室内にすばやく走らせ、それから何かの理由でドアマンを叱りつけた。〈クジラ〉に同伴しているのはルーシーで、〈クジラ〉の一軍用心棒頭のジャスパーもいた。それから、ジーナの知らないちょっとイタチに似た男も。〈クジラ〉は片手をかわいそうなルーシーの尻にまわし、もう一方の手をズボンの前ポケットに深くつっこんでいる。小銭をじゃらじゃらいわせているのだろう。おそらく彼のソーセージも。

〈ジャングル〉のステージに出演するようになる前から、〈クジラ〉についてはいろんなばかげた話を耳にしていたが、今は――この不機嫌でくさい臭いのするいけすかないデブ男のもとで五ヶ月働いた今――そのほとんどはたぶん本当だと思えた。ねえ、聞いた……

前に一度、〈クジラ〉に生意気な口をきいたダンサーがいたんだけど、〈クジラ〉はその子をめちゃくちゃひっぱたいて顎の骨を折ったって話?

前に一度、〈クジラ〉がある男の車に火をつけてさ、しかもその男をなかに閉じこめたままでよ、そのあとダウンタウンの〈ゴールデン・ナゲット〉にディナーに出かけて、特上の厚切りステーキを頼んだって話?

それからさ、〈クジラ〉はいくつか所有してるヌードバーを使って麻薬売買の金をロンダリングしてるけど、現金をわざわざ金庫にしまったりはしないんだってさ、だって〈クジラ〉から金をくすねようなんてばか、いると思う?

ジーナはにっこり笑って、手すりの上に顎を乗せた白髪男が歯にくわえている十ドル札をつまみとった。少なくともこの最後の話が本当でありますようにと願う。それをあてにしていた。

CamScannerでスキャン

曲が終わった。ジーナはステージの階段に腰掛け、Tシャツとショートパンツをふたたび身につけた。〈クジラ〉がまだルーシーの尻に手をあてたまま、部屋をつっきって『立入禁止』と記されたドアに進んでいくのを見守る。

「なあ、クッキー」手すりにかぶりついていた白髪男が言った。ジーナの横にしゃがみこんだ男の、水で薄めたジンの安っぽい臭いのする息が顔に吹きつけてくる。「おれと一緒におれのホテルに来て、プライベートタイムの踊りをするってのはどうだ？ ちょっと時間を割くのに見合うことはしてやるぜ」

ジーナは立ちあがり、両手を腰にあてて男を上からまっすぐにらみつけた。身長三メートルの美女と、みすぼらしい灰色のネズミというところだ。

「ほんとに一対一であたしの相手ができると思うの？」

一秒がすぎ、それから男はまばたきした。

「いや」弱々しく認める。

ジーナは親しみをこめて男の頬をつねってやり、〈クジラ〉を追って人ごみをかきわけはじめた。

ルーシーは、あせっているときは手の動きの癖で気づかれる恐れがあるとわかっていたので、手を忙しくするためにバッグを開け、〈チクタク〉を手探りした。〈クジラ〉はうっとうしそうに顔をしかめてみせ、それからデスクの上に身を乗り出した。

「何て言った？」ＯＴに訊く。

ルーシーはあくびするふりをして、深く息を吸いこんだ。ちらりと腕時計に目をやる。食べたランチを吐きそうな気がしていた。それほどおびえていた。頭のなかでロザリオの祈りをスペイン語で唱えはじめた。それがいくらか助けにはなった。

ＯＴは金属製の折りたたみ椅子にすわったままもぞもぞと身体を動かし、笑おうとした。

「こう言ったんです、ミスター・Ｍ、今週もちょっと少なかったですが、それは――」

「おれの知ったことだと思うか？」〈クジラ〉は言った。前のデスクに置かれた百ドル札の束をぱらぱらめくる。うんざり顔。「ジャスパー？」

「は？」ジャスパーはＯＴのまうしろで、ドアにもたれて立っていた。

「おれの知ったことだと思うか？」

「いいえ」

「だよな」

〈クジラ〉はすぐうしろの合板張りのキャビネットのスライドドアを開け、札束を投げ入れた。〈クジラ〉がスライドドアを閉める前に、ルーシーはちらりとすばやくのぞいた。すべての棚に札束がぎっしりと積まれていた。

『お救いください（ディオス・テ・サルベ）、慈悲深き聖母マリア様（マリア、リエナ・エレス・デ・グラシア）……』

「金庫を買ったほうがいいですよ、ミスター・Ｍ」ＯＴが言った。うわずった笑い声をあげ、この部屋にほかにも誰かいてそいつも笑っているのではないかと期待するような顔で、あたり

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

を見まわした。
〈クジラ〉はデスクの上に両腕をのせた。大きくて青白く、吹き出物だらけの肉塊。青空市で太い鉤で吊るされ、ハエをたからせているような。〈クジラ〉はOTを見つめた。「なぜだ?」
OTは笑うのをやめた。「へ?　おれはただ――」
「なぜおれに金庫が必要なんだ?」〈クジラ〉は訊いた。「おれから盗もうとするようなばかはどこのどいつだ?」
ルーシーはジャスパーが自分を見ているのに気づいた。だがそれは、たいていの男ども――特に〈クジラ〉――が自分を見るときのようなぞっとする感じではなかった。ジャスパーは彼女を、ひとりの人間を見るように見る。誰かの娘か妹を見るように。ただの、ぴっちりしすぎたストレッチ素材のミニワンピースを着て七・五センチヒールをはいた、36Dカップのゆさゆさ揺れるおっぱいふたつではなく。
この場にいる紳士(ジェントルマン)はジャスパーだけだった。彼が出てきているときは、ルーシーの勤務時間が終わったあとで帰るときに必ず用心棒をひとりつけてくれた。彼女だけでなく、ほかの子たちにも同じことをしていたので、いっそう彼に好感が持てた。
〈クジラ〉はジャスパーのことを〝ぼんくら〟と呼ぶ。彼の目の前で言うこともたびたびあった。ルーシーは、ジャスパーがぼんくらだとは思わなかった。まん丸な顔には知性があった。ただ、もの静かでちょっと眠たげに、もしくは内気そうに見えるだけだ。自分にもジャスパーのようなお兄ちゃんがいてくれたらよかったのにと、ルーシーは思っていた。

CamScannerでスキャン

ジャスパーの肌はきれいな色をしている。ちょっと黒っぽく、ちょっとクリームがかって、高価な木材のようだ。眠たげな目はもうちょっと黒くて、クリームの色味が少ないが、それでもやはりきれいな色をしていた。

ルーシーはかすかながらにこやかな笑みを彼に向けた。ジャスパーはさっと目をそらした。

「おれは訊いたんだ、『おれから盗もうとするようなばかはどこのどいつだ?』とな」

「ミスタ……ミスター・M」OTは口ごもりながら言った。「そんな意味で言ったんじゃ――」

「おまえ以外はな」〈クジラ〉は言い、立ちあがった。

ジャスパーが咳払いをした。〈クジラ〉は顔をしかめた。

「何だ?」

ジャスパーはルーシーのほうに頭を傾けた。「外に出しましょうか? ルーシーですが?」

「こいつのくそったれた名前ぐらい知ってるさ。だめだ」〈クジラ〉はOTの背後にまわっていた。OTはそちらを向くべきなのか、それともまっすぐ前を見つめつづけるべきなのか、迷っているようだった。「もう大きなお姉ちゃんなんだ。ちゃんと乗りきれるさ」

「ミスター・M」ジャスパーが言いかけたが、〈クジラ〉は突然太った青白い、吹き出物だらけの腕をOTの首にまわしてかけ、椅子から身体を持ち上げた。

ルーシーは恐怖に駆られて、OTがげえげえ言いながら足を蹴りたてるのを見つめた。〈クジラ〉はさらにきつく締めつけた。OTは身をよじり、手足を振りまわした。目がやけに白くなった。不気味に濡れたような白目が、眼窩から飛び出しそうになっていた。

ルーシーは凍りついたように凝視していたが、ジャスパーが戸口から彼女のほうに移ってきた。大きな手を上げ、そっと彼女の目をふさいだ。
「大丈夫だ」彼はささやいた。
ジャスパーがOTの身体を引きずって、廊下を裏口に向かっていく。〈クジラ〉は事務室のドアに鍵をかけた。
ルーシーは頭がふわふわと浮くような、うつろな感覚を感じていた。照明の薄暗い、狭い廊下には、煙草の煙の臭いとメロンの香りのボディスプレーの匂いが濃厚に漂っている。長い長いトンネルの端から〈クジラ〉の声が聞こえてくる。
「ステーキを食いにいくぞ」
〈クジラ〉は歩きはじめた。それから、ルーシーがついてきていないのに気づいて振り返った。
「どうした?」
「ちょっとトイレに」ルーシーは言った。
「はやくしろよ、くそ。車で待ってるからな」
ジーナは私服――手袋のようにしっくりフィットする〈ダーク・バハ・トゥルー・レリジョン〉のジーンズに、〈ランニン・レーベル〉のスウェットシャツ――に着替え、リップライナーを引いていた。髪を上げ、ポニーテールにまとめ、それから引き下げようとした。アッ

プ？　ダウン？　アップのほうが見映えがいいと判断する。真夜中を三十分すぎたところ。一分後、ルーシーが化粧室のドアを押し開け、はいってきた。

　ひどい顔をしていた。血の気が失せ、目がうつろだ。洗面台に向かい、冷水を流す。それから、呆然とした目で鏡に映る自分の顔を見つめていた。ジーナはちょっとのあいだ、そうさせておいたが、時間の余裕はそれほどあるわけではなかった。手をのばして、蛇口をひねり、水を止める。

「ルーシー？」

　ルーシーは鏡に映る自分の顔を見つめつづけている。

「本当にやるつもりなの？」とうとうルーシーが言った。声が震えていた。

　ジーナは彼女の顎の下に二本の指をあてがい、鏡から顔をそむけさせた。唇にキスする。もう一度、キス。ルーシーの上唇を自分の唇のあいだにはさみ、そっとやさしくひっぱる。

「今さらあわてさせないで、ルーシー・チェンジ。いいわね？」

　ルーシーは深く息を吸いこみ、そのままためた。「本当に本気なの？」ささやく。「あたしを愛してる？」

　黒いスペイン系の目でジーナを見つめる。ジーナは覚えのある甘やかな憂愁(メランコリー)のかすかな疼(うず)きを感じたが、それははじまるとほぼ同時に消えた。それは、木の葉をざわつかせるほど強くはない風の吐息に似ていた。

　彼女はルーシーの手を取り、その温かな手のひらを自分の胸骨に押し当てた。「あなたはあ

たしの心の鍵を持ってるのよ、スウィーティ」
「午前三時」ルーシーは言った。
「午前三時ね」
「火山の前で」
「絶対に行くわ」ジーナは言った。
ルーシーはうなずき、急いで化粧室を出た。
ジーナは笑みを浮かべ、ルーシーが流しの縁に置いていった鍵を取り上げた。

〈クジラ〉の専用事務室は廊下の奥の端、左側にあり、化粧室と非常出口にはさまれている。二、三分のあいだは、人通りが多かった。麻薬切れ休憩にはいった女の子たちがハイヒールをカタカタいわせてバスルームに向かい、もどってくる。だがそれから、次の曲がはじまり、両側の壁を震わせるのが聞こえてきて――冗談じゃないわよ、またあのばかげたくそメタルって？――廊下には人けがなくなった。

ジーナは鍵穴に鍵をさし入れ、デッドボルトが解錠される小さな音を聞いた。ディック・モビーの事務室にすべりこみ、背後のドアを閉める。明かりをつける。キャビネットはデスクのうしろ、小型冷蔵庫の下。ルーシーが言ったとおりだ。

室内の空気は暑くよどんでいて、〈クジラ〉臭でじっとりしていた。ジーナはカーペットの上に膝をつき、キャビネットのスライドドアを開けた。なかの棚にぎっしりと積まれている札

束を見て、思わず声に出して笑うところだった——煉瓦のような百ドル札の束。一束一万ドル。三十束、三十五、四十。うわ！　口に手を押しあて、それから声に出して笑った。

デスクの上のパッケージから〈クジラ〉のクールを一本失敬し、あとで吸うために耳にはさんだ。煙草の一本ぐらい消えたところで〈クジラ〉は気にしないだろう。そう考えると、またもや笑いがこみあげてきた。だがもう笑ったりせず、いちばん真剣な、仕事一辺倒の真顔になって、スポーツバッグのジッパーをぐいと開け、金を詰めこみはじめた。

ディック・モビーは駐車場の向こう端にいるのろま女を急がせようとクラクションを鳴らした。だが——いつものように——ルーシーはのんびりと時間を負っている。メキシコ女には、人並みのてきぱき動くという感覚は通用しない。本当にのらくらと怠惰だ——メキシコ女だか、コスタリカ女だか。ルーシーがどっちだと言ってたかも忘れたが。ラッキーなことに、ルーシーは男の頭をくらくらさせる女だ。長い長い脚。その上に乗っている完璧に丸い尻。茶色い尻の下半分がはみ出すタイプのショートパンツをはかせてみろ。美術館にかかる絵画のようだ。でかいおっぱい。モノホンのおっぱいはちょうどいい感じでたわんで揺れるボリュームだ。おそらくもう何年かすれば、パッケージ全体がゆるんでたるみ、しわだらけになって救いようがなくなるだろう。メキシコ女は必ずそうなるものだ。メキシコ女にはインド女の血が流れているからだ。だがだからといって、誰が気にする？　ディック・モビーは気にはしない。また別の新鮮な桃を木からもぎとってむしゃぶりつき、果汁を顎からしたたらせるだけだ。

もう一度クラクションを鳴らしたが、軽くだった。ＯＴで楽しんだあとだったので、寛大な気分になっていたからだ。それに、ルーシーが〈ジャングル〉の駐車場をつっきってくるのを待っているあいだに、事務室に煙草を忘れてきたことを思い出していた。

ルーシーがキャディラックに乗りこんできた。ディック・モビーはエンジンを切った。

「どうかしたの？」ルーシーの声がおびえにわなないていることが、ディック・モビーにはうっとうしくもあり、満足を与えてもくれた。

「煙草を忘れた」ディック・モビーは言った。

「事務室に？」

「あの腐れ事務室以外にどこがあるんだ？」

ディック・モビーはドアを開け、キャディラックからのそりと巨体を押し出した。建物の戸口にたむろして、カバーチャージを払おうと待っている、酔っ払った大会（コンベンション）参加者の一団を押しのける。入り口で働いている長髪男――自分をロックスターだと思っているやつだ――が彼に目を留め、あわてたような顔になった。

「ああ、ミスター・M、てっきり――」

「さっさとこのまぬけどもをなかに入れろ」ディック・モビーは言った。「外はくそったれたバス停みたいになってるぞ」

「おい！」大会参加者のひとりがまわらない舌で陽気に声をかけてきた。「いったいいられをまぬけと呼んれるんら？」

ディック・モビーは無視した。酔っ払ったとんまのひとりぐらい、駐車場でぐしゃぐしゃになるまでぶちのめしてやって、非番の警官どもの喝采の声を浴びてもいいようなものだが、昨今ではビート族もどきのオカマ野郎に見えるやつはもれなく、光ファイバー・インターネットのマイクロチップだの何だののくそったれたものをつくっているでかい会社の副社長だったりして、こっちが声を荒げでもしようものなら、弁護士どもを這い出させてこの世の終わりまでこっちの尻の穴にたからせやがる。ディック・モビーはわざわざ挑発したりはしない。それに、分厚い高級ステーキを早く味わいたくてたまらなかった。

習慣から、メインフロアで足を止め、全体をチェックする。四つのステージはどこもショーの最中で、壁ぎわのブース席もほとんど全部ふさがっている。バーの近くをうろついてビデオ・ポーカーゲームをやっているダンサーはひとりもいない。ディック・モビーは満足して、『立入禁止』と記されたドアを押し開けた。

新入りのダンサーのひとり、ジーナが廊下をこちらに向かって歩いてきていた。すでに私服に着替え、スポーツバッグを肩にひっかけている。彼女は落ち着いた、無関心そうな視線を向けてきた。

ディック・モビーは通りすぎようとしたジーナの腕をつかみ、止めた。

「何?」ジーナは面くらったように言った。

ディック・モビーは目をすっと細め、女をじっと見つめた。何かがちがう、そう感じられた――頭蓋底の神経の末端がチリチリと疼く――が、それが何かはっきりとはわからなかった。

昔ダラスで彼を使っていたマフィアの親分に、爬虫類なみのレーダーを備えていると言われたことがあった。ディック・モビーはそれを褒め言葉と受け取った。

「おまえは四時まで仕事だと思ってたがな」ディック・モビーは言った。ジーナは彼の稼ぎ頭のひとりだが、彼はそんなことはおくびにも出さなかった。鼻を直し、本物のおっぱいをくっつけてやり、日曜学校で教えていそうな顔つきをやめさせてもっと娼婦っぽい笑みを浮かべることを教えてやれば――もっとずっとお金（アシ）を稼げるようになるだろう。

「そのはずだったんだけど」ジーナは肩をすくめた。「一時間前に生理がはじまっちゃって。だからあたしがラップダンス（ヌードダンサーがチップを出した客の膝にすわる踊り）をするたびにあたりを切り裂き魔の襲撃現場みたいにしたいんでなきゃ、その丸っこい手をあたしからどけてちょうだい」

ディック・モビーはちょっと笑みを漏らさずにはいられなかった。この女の度胸に。きっと、このおかげであれだけの金を稼げているのだろう。きっとこの女のこういうところが好きな男どもがいるのだろう。彼女の腕を放した。

「おれはおまえを信用していない」彼女に言う。「おまえから目を離しはせんぞ」

ジーナはまたもや肩をすくめた。「いいわよ、何だって」

彼女が落ち着いた足取りでゆったりと廊下を歩いていき、彼の背後のドアから外に出るのを、ディック・モビーは見送った。

「おまえから目を離しはせんぞ」もう一度低い声でうなり、それから背を向けて事務室に向かった。デスクからクールのパッケージをさっと取ったところで、動きが止まった。またして

CamScannerでスキャン

も、例の奇妙な爬虫類のレーダーが作動した。目玉をゆっくりと動かして事務室全体を見渡す。一周。それからもう一周。デスク、デスクの椅子、デスクの向こうのキャビネット、キャビネットの上のテレビ。ドア、椅子、ダンサーの身上書が詰まったボール紙製のファイルボックスの列、肉色のカーペット、ガラスにひびのはいった額に入れられた酒類販売許可証、デスク、デスクの椅子、デスクの――

デスクの向こうのキャビネット。

ディック・モビーは苦労をしてしゃがみこみ、キャビネットの傷のはいった金属扉をじっと見つめた。きっちりと、入念に閉まっている。

あまりにもきっちりと、あまりにも入念に。

ディック・モビーは不意に、半世紀にわたって肉体に蓄積した未消化の動物性脂肪を意識した。その重み、厚切りの高級ステーキ肉やプライムリブがじわじわと動脈の穴を狭めて針の先ほどにし、そこから血液が心臓に迸(ほとばし)り、めまいをもたらすのを。胸の中心からかすかな動悸が同心円を描くように広がった。池のさざなみのように。

キャビネットのスライドドアを開ける。なかに、ブリーフケースはまだあった。だが棚はすべてからっぽだった。現金が全部消えていた。

「くそ女」ディック・モビーは怒りの声をもらした。

両手でキャビネットのスライドドアをひっつかみ、レールからもぎ取ると、凶暴に投げ飛ばした。扉は回転しながら室内を吹っ飛び、ボール紙製のファイルボックスのひとつに突き刺さ

CamScannerでスキャン

り、そのままとどまった。ディック・モビーは猛然と引き返してクラブ内を通り、大会参加者のオタク野郎どもやダンサーたちをわきへ押しのけながら駐車場に出ていった。タクシー乗り場には誰もいなかった。あのくそ女――ジーナ――は消えていた。

ルーシーは火山の下のベンチにすわり、噴火を見つめていた――煙が噴き上げ、赤い光が明滅し、数人しかいない観光客が息を呑む。ここに来てから、これで五回目の噴火だった。腕時計に目をやる。午前四時。ジーナは一時間も遅れていた。タクシーが一台やってきたが、出てきたのはビジネス・スーツを着た男ふたりだった。

もしかしたらジーナは遅れて、走ってきてる？

もしかしたらジーナは渋滞にひっかかってる？

もしかしたらジーナは寄り道して、ルーシーと一緒にお祝いができるようにシャンパンのボトルを買ってる？

もしかしたらジーナは三時ではなく四時のつもりだった？

もしかしたらジーナは……？

タクシーから降りたふたりのビジネスマンはカジノにはいっていった。火山の噴火を見ていた観光客たちは離れていった。〈ミラージュ〉の前の大通りには、ほとんど人がいなかった。

もう腕時計は見ちゃだめ、とルーシーは自分に言い聞かせた。泣いちゃだめよ。

午前四時九分。

火山は今はもう静まり、硫黄と塩素の臭いがゆっくりとルーシーのほうに漂ってくるだけだ。そして彼女の喉を詰まらせ、むせばせる。

ジーナはタクシーに乗り、まっすぐ空港に向かった。そここそ、彼女の行き先としてまず〈クジラ〉が予想するところだ。やつのとんまな手下どもが嗅ぎまわりはじめたときのために、ここに目撃者を何人かつくっておきたかった。追跡の方向を惑わせるために。

タクシー運転手に指図して国際線ターミナルの前につけさせ、こう訊いた。エールフランスにはここから乗れるの？　運転手は、ああ、と答えた。エールフランスよ、たしかなのね、パリに行くのよ？　ああ。それから、運転手に百ドル札のチップをやった。運転手がのちのちこの会話を確実に思い出せるように。

いったんターミナル内にはいり、なかをつっきって国内線ターミナルに行き、手荷物受取所に下りる。マッカラン国際空港ではレンタカーの営業所はすべて二十四時間開いている。スタッフが二十代の坊やのようなブースは無視して、きつい目つきをした四十代のギャルふうの女がひとりだけいるブースを選んだ。元売春婦か、元ストリッパーか、その両方か。漂白した金髪、日焼けで乾燥した肌、完璧なマニキュア。ジーナをひと目見て嫌悪するか、そうでなければ、目の前に出現した若いころの自分の亡霊だと気づいて母親らしいやさしさに突き動かされるか。ジーナはあとのほうに賭けた。

「ハイ」ジーナは言った。「車を借りたいんだけど、クレジットカードがないのよ？　現金な

んだけど?」
「現金でのレンタルのときでも身分証明が必要なのよ」
「そうね」ジーナは言った。「すばらしいわ。今から取れるかしら」
女はジーナの全身を見渡した。表情がわずかながら和（やわ）らぐのが見えたように思えた。
「三週間から四週間かかるわよ、あなた（シュガー）」
「ああ」
「悪いわね」
ジーナは前に身を乗り出した。声を震わせるが、大げさすぎるほどではない。「お願い、すごく大事なことなの。これがだめだと――あたし、どうしても――お願い、何とかできないかしら、あの……」
長い沈黙が続いた。女が迷っているのが感じられた。これまでの自分の経験から、語られなかった空白を埋めつつあるのが。もしかしたら、何年も前からのドラッグびたりの彼氏がいて、この子を殴っていたのかもしれない。もしかしたら、何年も前からのドラッグびたりの彼氏によく殴られていたせいで、激怒のあまりかっとなって射殺して、即座に街から逃げ出さなくてはならないのかもしれない。
「シュガー」とうとう女はため息をついた。「あのね――」
ジーナはカウンターの上に百ドル札の束をすべらせた。一万ドル。
「それから、あなたはあたしを見なかったのよ」ジーナは言った。「あなたはあたしのことな

んて何ひとつ覚えていないの」
女は一秒ほどじっとジーナを見つめた。それから顔をそむけ、コンピュータに数字を打ちこみはじめた。ジーナが目を下に向けると、一万ドルはすでにカウンターの上から消えていた。魔法のように。
「普通サイズの車でいいですか、お嬢さん？」女は訊いた。

車はクリーム色のフォードのクラウン・ヴィクトリアで、大きくて贅沢だった。バター色のレザーシートに、最高級音響システムが装備されている。クルーズ・コントロールを時速百四十キロにセットし――どうしてぐずぐずしなきゃなんないの、そうよね？――誰もいない砂漠の夜のなかをぶっ飛ばす。バーストウでちょっとだけコーヒー休憩を入れ、それからＬＡ郊外にさしかかったころ、背後の空が真珠のような光沢を帯びたピンク色に変わった。
州間（インターステート）高速十号線を離れてビヴァリー・フラッツを抜け、ウィルシャー・ブールヴァードにはいる。〈ペニンシュラ〉の駐車係が礼儀正しい笑みを浮かべてジーナの車のキーを受け取った。彼女をもう一度見直したりはしない。ジーンズにスウェットシャツを着て、サングラスと野球帽をつけた彼女は、ボーイにしてみれば、人目につかない格好をした映画スターがまたあらわれたというところだ。
ジーナはベッドに直行してお昼すぎまで眠った。それからルームサービスのパンケーキとシャンパンを頼んだ。そのあと、ロデオ・ドライヴを歩いてあちこちのブランドショップには

いる、〈ジャンフランコ・フェレ〉で、ちょっと小生意気なおてんば娘という雰囲気の黒のカクテルドレスを買ったあと、〈ルネ・カオヴィラ〉でドレスに合うハイヒールを買い、笑いだしたくなるほど高価な下着数枚と、涙滴形の真珠のイヤリングを買った。オープンカフェでカフェラテ休憩をとり、それからさらに靴を何足かとバッグとネックレスを買った。化粧品も五百ドル分買った。さらにドレスを買い、バッグを買い、〈ジェームズ・パース〉のキュートなトップスも二枚買い、どこだかの超高級デニムも買った。

「こういうことってすぐ慣れちゃえるわね」交差点で信号が変わるのを待っていたときに、すぐ横に立っていたブルカをまとったアラブ女性に打ち明けた。女性はジーナの全身にさっと目を走らせ、それからすばやくよそに向けた。黒い布に笑みのしわが寄ったのが見えたように、ジーナには思えた。

たしかに、すぐに慣れた。次の二日間は、おとぎ話のお姫様のような暮らしをした。少なくとも、ジーナが書きそうなタイプのおとぎ話のお姫様のような暮らしを。〈メルローズ〉のショップでファンキーなカジュアル服を買い、アルゼンチン製のハンドメイドのレザーバッグやきらきらするアクセサリーを買い、モンタナ・アヴェニューでビーチウェアと超高級ローションとオイルとエキゾチックな香水（とさらにまたきらきらするアクセサリー）を買い、〈ザ・グローヴ〉のモールでアイポッドとくだらない雑誌をひとかかえ買った。そうやってガンガン買いまくる合間合間に、スパの完全攻略もした——タイ式マッサージ、海藻パック、フェイシャルエステ、岩盤なんとかかんとか。LAでの三日目の午後、ホテルにもどる

CamScannerでスキャン

と、これまでに買ったものをすべてベッドの上に広げてみた。五万ドルあまりを二日ちょっとで使いまくった戦果としては悪くない。そのうち、ラスヴェガスに残してきた持ち物を回収する算段を考えたくなるだろう。今しばらくはヴェガスに置いておいても大丈夫だろうが。でも回収するのが無理そうだとわかったところで、たいしたことじゃない。持っていたもので、お金で贖えないものは何ひとつないのだ——新しく買うほうがずっといいくらいだ。

一時間ほどゆったりとバスタブにつかってから、〈ジャンフランコ・フェレ〉の黒のドレスを着て、真珠のイヤリングをつけた。ホテルのバーに下りていく。マティーニを注文して、客のなかに映画スターはいないかと探す。顔がわかったのはただひとり、テレビで見る男だ。マイナーなネットワークのひとつで、ホームコメディのずんぐりした父親役をやっている。フライドチキンのコマーシャルにも出ている男だ。バーの端からジーナに秋波を送ってきたが、相手をすることに何のおもしろみもうまみも感じられなかったので、ジーナはマティーニを持ってロビーに出ていった。

スーツ姿のマッチョな黒人男ふたりに目が止まった。コンシェルジュ・デスクの向かい側に、大きな木のドアをはさむ形で身動きひとつせずに立っている。好奇心をそそられて、ジーナはそちらに向かった。手持ちの数ある笑顔のうち、どれを選んでふたりに向けようかと考える間もなく、ふたりのうちのでかいほうがさっとわきに寄り、彼女のためにドアを開けてくれた。

室内のきらめくシャンデリアが見え、弦楽四重奏の哀調を帯びたメロディが聞こえた。

「どうぞ」マッチョ男が言った。

ジーナは平然とした顔でうなずき、ホテルのロビーと同じくらいの広さがある舞踏室（ボールルーム）にはいっていった。ロビーよりさらに豪華と言ってもいい——そんなことが可能ならばだが。大理石の円柱、周囲の壁にはアジアの絹の織物（タペストリ）が垂れ下がり、磨きぬかれた寄木細工の床の上で、タキシード姿の男たちが宝石で飾ったパートナーを優美にリードして踊らせている。

ああ、これこそが——ジーナは感激とともに実感した——パーティーなのだ。弦楽四重奏団の反対側にしつらえられたバーに行き、空になったマティーニのグラスをシャンパンのはいったクリスタルのフルートグラスに替えた。ちびちびと飲みながら、人々の群れを見渡し、純資産の総額を推測する。男性のほとんどは五十代から六十代で、銀髪でピンク色の頬をしている。対して女性は平均してゆうに十歳ほど若い。明らかに愛人ではなく妻同伴の催しだ。ジーナのような二十代の女はほんの数人しかおらず、彼女たちはジーナを無視していた。

「もしもし」背後で声がして、肘がつかまれるのを感じた。やさしいが独占的な感触。振り向くと、金持ちの爺さんがにこにこと笑いかけていた。ダンスフロアから離れたばかりで、ピンク色の頬とひたいにうっすらと汗が浮いている。本物というにはあまりに完璧にそろいすぎている髪の生え際にも。ちょっとかび臭いような匂いがしたが、高価なかび臭さだった。「妻がベビーシッターに電話しにいったんでね、このパーティーでいちばん魅力的なお嬢さんとちょっといちゃつこうかと思ってね」

「あらすてき」ジーナは言った。虫酸（むしず）が走る、と心では思った。こんな爺さんにベビーシッターのいるような小さな子どもがいるなんて。

CamScannerでスキャン

「バーナード・クレイグだ」爺さんは言い、にやにや笑いながらじっと待っている。まるでジーナがその名前を知っていて感銘を受けるとでも思っているかのように。ジーナはすでにうんざりしていた。

「キャロライン・グレアムよ」ジーナは言った。

「あててみようか」バーナード・クレイグは言った。「きみはゲティ(米国の石油王・美術作品収集家)のところのキュレーターだろう。専門は印象派初期」

ジーナはにっこりと微笑み、新しいシャンパンのグラスに手をのばした。バーの端に、目の覚めるような美女がぽつんとひとりで立っているのに気づいた。三十代後半ぐらいだろうが、十歳は若く見える。つややかな黒い髪の前髪を切り下げにして、霜のような淡いグレーの目をしている。そして目とまったく同じ色をしたとても趣味のいいシルクのドレスを着ていた。

「ニューヨークのサザビーズの収集部門の副責任者よ」ジーナは言った。「担当地域は中近東の古美術品なんだけど、翡翠(ひすい)にも興味があるの」

「ほう」バーナード・クレイグは満足そうだった。「当たらずとも遠からず、だったろう?」

「かなり近かったわ」ジーナは言った。このころにはやんわりと、バーナード・クレイグの動作につれての服地の動きから、財布はジャケットの内ポケットにはいっていることに気づいていた。「それに印象派初期の作品は本当に大好きなのよ」

バーナード・クレイグは機知に富んでいるにちがいないと思わせることを言おうとしかけた [illegible]

はこの機をとらえてクレイグにぴったりと寄り添い、タキシードのシャツのプリーツの上にごく軽く、だが思わせぶりに指を這わせた。

「キャロライン・グレアムよ」ささやきかけ、爺さんの耳に軽く唇をこすらせる。「もし電話をくれたいと思うなら、ビヴァリーヒルズのオフィスがわたしの番号を知ってるわ」

それから、振り返りもせずにすっと離れた。戸口のマッチョなガードマンふたりのあいだを通り抜け、ロビーの婦人用化粧室に向かう。

化粧室にはいると、バーナード・クレイグの財布をバッグから取り出し、鼻先に持っていって仔牛革（カーフスキン）のリッチな匂いを吸いこんだ。いつも自分相手にやっているあてっこゲームをする。そうね、中身は八百ドルってとこ？　それにアメリカン・エクスプレスのブラックカードとか？

だが財布を開けて調べるより先に、化粧室の入り口のスイングドアが開く音が聞こえた。ジーナはかろうじて財布をバッグのなかに落とし、鏡のほうを向いた。黒い切り下げ前髪にグレーの目をしたあの美女がはいってきた。鏡の前に来てジーナの横に立つ。ジーナは髪を直すふりをしたが、すぐに美女が見ているのは鏡に映る彼女自身ではなくジーナだということに気づいた。

「あなたの顔に見覚えがある気がするわ」美女は言った。その声はドレスのシルクと同じくらいなめらかで、ジーナにはどこだかよくわからないアクセントがあった――ロシア語あたりだ、たぶん。

CamScannerでスキャン

「あらそう?」ジーナは訊いた。
「あなた、映画スターでしょ?」
ジーナはにっこり微笑んで美女のほうを向いた。夜がはじまったころには、どちらかというと男と寝たい気分だったが、いつでも偏見のない公平な心を保つことにしていた。
「あたしをナンパしようとしてるのかしら?」ジーナは訊いた。
美女は笑みを浮かべて見つめ返した。
「今わかったわ」美女は言った。「ラスヴェガスに仕事がらみの知り合いがいるんだけど。彼が今朝、写真をファックスで送ってきたの」
ジーナはふたたび鏡に向き直った。口紅を取り出す。
「ヴェガス? 行ったことないわ。でも愉しいところだって聞いてる」
「その写真の女の子だけど? あなたの双子の片割れと言っても通りそう」
「誰でもどこかにうりふたつのそっくりさんがいるって言うから」
「そしてここにあなたがいる!」美女は相変わらず微笑んでいた。「人生っておもしろいわよね、でしょ?」
「たしかに」ジーナは口紅を軽く塗ってからぱちんと閉め、美女に最後の笑みを向けた。クールに、落ち着いて、特に急ぎもせずに、化粧室から出る。クールに、落ち着いて、ゆっくりとロビーをつっきり、エレベーターに向かう。自分の部屋の階で扉が開くと、前にいたボーイを押しのけ、ハイヒールを手に持って自分の部屋まで廊下をダッシュした。カクテルドレスを脱

ぎ捨て、大急ぎで〈トゥルー・レリジョン〉のジーンズとスウェットシャツを着ると、ベッドの下から現金が詰まったスポーツバッグをひっぱりだす。六十秒後、業務用兼非常用のセメントむきだしの階段を十二階分駆け下りていた。防護用のバーにぶつかりながら走り、防火扉から路地に走り出る。一瞬だけ止まって現在位置を確認する――ウィルシャー・ブールヴァードは……左、それからまた左――そしてふたたび走り出した。もう少しで路地から出るというとき、一台の車がタイヤをきしらせて急停止し、行く手をふさいだ。ジーナは勢いあまって車の側面に激突した。ピンボールのように跳ね返ってアスファルトの上にころがる。ジーンズに穴があき、膝がすりむけた。

　大きな手が両肩をつかみ、ぐいと引いて立ちあがらせた。巨人のようにでかい、信じられないほど醜いはげ頭の男がにやにや笑いながら見下ろしていた。ジーナは振りほどこうと抗(あらが)ったが、男は平手で強く頬をぶった。火花が散った。

「放してよ」ジーナは静かに、理性的に言った。

　はげ頭の男はただにやにや笑いつづけるだけだった。それから、ジーナの知らない外国語で、ジーナにはわからないことを何か言った。

「ファック・ユー」ジーナはかなり万国共通と思われる言葉を口にした。男はまたもや平手打ちをくわせた。一瞬、〈ジャングル〉のステージ上にもどって、ミラーボールが天井一面にまばゆくきらめく光のかけらを散らすのを眺めているような気がした。口の端をなめる。血の味がした。

「あらあら」誰かが言った。

振り向くと、淡いグレーの目をした、なめらかなアクセントのあの美女が見えた。

「ハイ」ジーナは言った。顔にかかる髪の毛を振り払い、朗らかな笑みを浮かべる。「取り引きってできない？」

美女は片手を挙げ、やさしくジーナの頬をなでた。同情的と言えないでもない笑みを浮かべる。それから彼女は首を振った。

CamScannerでスキャン

9

ジャスパーの頭はどすどすと踏みつけられているような感覚だった。まるで裏返しにされたような、くそったれのどえらく痛かった。

電話帳で殴られる――誰がそんなことを考えつく？

生まれてこのかた、ジャスパーはいろんなもので頭を殴られてきた――肘鉄で、こぶしで、二十五セント玉の束を握りしめたこぶしで、頭突きで、椅子で、銃の台尻で、フォードのコントップのうしろから引きはがしたファイバーグラス製のスポイラーで。だがそのどれも、少なくとも思い出せるかぎりでは、これほどにしつこい、踏みつけられるような痛みをもたらしたものはなかった。棚から取り上げた超強力タイレノールの壜を、かなり長いあいだ見つめて考えていたが、これでは差し迫った任務を果たすにはたりないと判断した。もう少し闘志のわきそうなものが必要だ。

通路の端まで進み、ピラミッド形に詰まれた炭酸飲料のボトルの横を通りすぎて――ここはストリップの南のほう、昔は〈アラジン〉という名前だったが今は〈ちょっと考えなければな

らなかった）〈プラネット・ハリウッド〉という名前のホテルの向かい側にある〈ウォルグリーン〉（ドラッグストアのチェーン店）の店内だ——薬局カウンターの前に並んだ。すぐ前にいるのは、白人の女性旅行客だ。おおよそ三十歳前後、高価そうに見える眼鏡をかけ、尻ポケットにおもしろいステッチのはいったブルージーンズをはいているが、尻そのものは取りたてて言うほどのものではない。

　薬剤師の男は女性観光客が渡した紙きれを見てつくり笑いをしていた。それから、女性を見てにやにやした。それから、ジャスパーを見てにやにやした。

「ハネムーンの苦労ってやつだね」薬剤師は女性に言った。「ヴェガスじゃよくありますよ」

それから、またもやジャスパーを見てにやにやした。

　ジャスパーはそれが気に入らなかった。女性を気の毒に思った。そばかすの浮いたうなじが恥ずかしさで真っ赤になっている。クラブの女の子たちを見て知っていたが、膀胱炎は冗談にしていいようなものではない。ジャスパーが薬剤師をにらみつけると、にやけた笑いは消えた。

「さっさと急いでそのご婦人に、頭痛に効く薬を出したらどうだ」ジャスパーは薬剤師に言った。

　薬剤師はそうした。女性に白い紙袋を渡した。女性はジャスパーにちらりと感謝の笑みを向け、急ぎ足で出ていった。ジャスパーは笑みを返しはしなかった。少しでも皮膚を動かすと頭が痛むからだ。薬剤師に急ぐように言ったときに、このことに気づいたのだ。

「どういう症状でしょう？」

「頭痛に効く薬がいる」
薬剤師はジャスパーを見上げ、ちょっと面くらった顔をした。
「膀胱炎ですか？」ひそひそ声で訊く。
「頭痛だ」ジャスパーはいらいらと言った。「ひどいんだ」
「処方箋はお持ちですか？」
ジャスパーはため息をついた。
一日がこんなはじまりかたをするのは薬剤師にとってもありがたくはないだろう。薬剤師はカウンターにのせたジャスパーの両手をちらりと見た。半ばこぶしになりかけている。ジャスパーの手はとても大きかった。ほんの子どもだったころからずっと。
「ちょっと聞いて」薬剤師は言ったが、ジャスパーに聞いてもらうべきことが何かあるようには思えなかった。
ジャスパーはじっと待った。とうとう薬剤師は奥に行き、小さな白い袋を持ってもどってきた。
「ありがとう」ジャスパーは言い、百ドル札をカウンターに置いて店を出た。
この遠出で身体が熱くなったので、ジャスパーはエアコンをかけた。小さな白いカプセルを三錠飲み、レザーシートを気分よく思える位置までリクライニングさせた。
九時をちょっとまわったところだ。ミスター・モビーにこのよくない知らせを電話で伝える

CamScannerでスキャン

のは気が進まなかった。いい知らせは、まだそれをする必要はないということだ。ミスター・モビーはいつも夜更かしで、朝は遅い時間まで眠る。そのため早くても昼までは携帯電話をつけることすらしないのだ。それに、この交換についてのジャスパーの報告を聞くのは今夜遅い時間になると思っているはずだ。したがって、あの小娘とブリーフケースと、いまいましい電話帳で殴りつけてきたあの男を追跡する時間はたっぷりある。あいつらを見つけることができれば、でなければせめて（これを考えつくのに一秒ほどかかった）あの小娘だけでも見つければ、ミスター・モビーによくない知らせを電話で伝える必要はなくなる。よくない知らせはなくなるからだ。

それはいい知らせだった。

白いカプセルが効き目をあらわしてくるのが感じられた。ミスター・モビーが夜通し寝ずにかわいそうなルーシーをどういうふうにいたぶってすごしているか、考えたくはなかった。ルーシーがかわいそうだった。ダンサーたちの多く、ああいう境遇の暮らしを送っている女たちがかわいそうだった。ドラッグ漬けになり、くそったれた客や性悪のヒモ男や膀胱炎にはふんだんに取り憑かれているが、霊的な次元と呼ばれるようなものにはほとんど縁がない。ジャスパーはルーシーのことを特別かわいそうに思っていた。それはミスター・モビーが――当然ながら――恋人としては特別性悪の男だからというだけではない。

以前、新聞で、ジャングルで川が氾濫したときに、タランチュラが集まって真っ黒になった木々の梢が重たげに垂れ下がっていたという記事を読んだことがあった。

これを読んで、ジャスパーは——なぜだかはわからないが——ミスター・モビーのことを考えた。

ルーシーにはどこか愛らしさがあった。霊的な次元か、少なくともそういうものの可能性を思わせるものがあった。彼女はこちらの内に潜む人間性を見てくれていた。

自分はルーシーに恋しているのだろうかと考える。それがたいした意味を持つというわけではない。重要性としては、パキスタンやシベリアの食べ物が自分に合うかどうか考えるのとたいして変わりはしない。

だが、あのかわいそうな娘がひと晩じゅうミスター・モビーといるのかと考えると……

『やめろ、ばか野郎』ジャスパーは自分に言い聞かせた。『考えるんじゃない』それにかけてはジャスパーは得意だった。意識を集中させるのだ。フットボールの試合をしているときのように。ラインを見つめろ。ディフェンスの穴を見つけろ。行け。

以前頭を殴られたものがもうひとつあった。フットボールのヘルメットをかぶった頭だ。

集中しろ。

〈エクスペディション〉のレザーシートにすわったまま姿勢を変える。頭のなかで時間を遡り、今朝あのモーテルの部屋の前に立ち、ドアをノックしている時点にふたたびもどった。自分が世界一考えのまわる男ではないということはわかっていたが、記憶力はほぼ完璧と言ってよかった。だから、自分のペースでものごとをきちんと整理して考える時間があれば……そう、解けない結び目などないはずなのだ。

CamScannerでスキャン

目を閉じて、あのモーテルの部屋のドアが開くさまを思い描く。あの女はベッドにすわっていた。水のはいったプラスチックのコップを持って。カーペットの上に、もうひとつプラスチックのコップがころがっていた。あの男——シェイクという名前だ——は刑務所で散髪した髪形で、疲れた顔をしていた。

すべてが見えていた。光景が鮮やかに、細部まで実にはっきりと、彼の目の前に広がっていた。ジャスパーはエアコンをひと目盛りだけ強くした。目は閉じたままで、手がかりを探しはじめた。

CamScannerでスキャン

10

シェイクが完全に意識を失ったと確信できるまで、ジーナは待った。手錠がはずれないかためし、それから部屋を出た。廊下に出てドアを閉め、『起こさないでください』のカードをスロットに入れる。エネルギーと明るい見通しではちきれそうだった。同胞たる人間すべてに親切にしたい気分だった。見くびっちゃだめね、と自分に話しかける。たっぷりの朝食と熱いシャワーの回復力ときたら。それに、殺されてバラバラにされるとか――〈クジラ〉がどうしようと考えていたのかはわからないが――そういう危機からからくも逃げ延びることができた運のよさを。あと必要なのは一本の煙草だけだ。それがあれば完璧、もう言うことはない。

LAですごせたのは二日と半分だった。そのあとタウンカーのトランクに放りこまれたのだ。あの醜いはげ頭の巨人がその車を運転して、どこか水上の人けのない場所に行き、貨物コンテナのなかに閉じこめて置き去りにしたのだ。光も空気も煙草もなしで、生きているかぎり絶対に忘れることがないと思える臭いとともに。あのときは、生きている時間はそれほど長くはないように思えていた――あの淡いグレーの目の女性がディック・モビーに彼女をいくらで売る

か、それを考えるのにどれだけかかるかという問題だけだと。
でももうすべてすぎたことだ、遠い昔になってしまった。ジーナは片手にブリーフケースを持ち、もう一方の手を腰にあてた。山の頂上に立ったときのように。新鮮な山の空気を大きく深く吸いこむ。
「ああ！」声が出た。
シェイクにした仕打ちについて、ほんのちょっとうしろめたさを覚えるかもしれないという気はしたが、定かではなかった。うしろめたさというものには、妙によくわからないところがある。いつも彼女の胸にごく軽く——ほんのわずか、蝶の翅のごく静かなはばたきのように——下りてはくるが、あまりにかすかなのでそれが本当にそこにあるのかどうか、わかったためしはなかった。この問題についてはあとでもうちょっと深く考えてみようとジーナは心に誓った。あとで、もっと都合のいい日に。もちろん、あとのいつかになってもまだその問題が残っているかどうかとなると、彼女の経験からいって、そういうことはめったになかった。
今はとにかく、何か着る服が必要だった。それが無理でも、せめてトップス一枚ぐらいはほしい。今着ている、ほとんどスケスケで垢じみた薄い布地のTシャツ一枚でラスヴェガスの街を歩きまわるわけにはいかない。いつも以上に人の注意を惹きつけたくないというなら、絶対に。
長い廊下のつきあたりの客室のドアが開いており、その前に客室清掃係のカートが止まっていた。

ジーナはルンバのステップを踏みながらカートをまわりこみ、そのまま部屋にはいっていった。

「カメラを忘れちゃった！」バスルームに向かって叫ぶ。

清掃係の女が頭をつきだした。ジーナを見てちょっと疑うような、なんとなく非友好的な顔つきになったが、それからまた便座から陰毛だの何だのをつまみあげる作業にもどった。

ジーナはまっすぐ、スーツケース置き場の上に開けっぱなしになっているスーツケースに向かった。ピンク色。大当たり。スーツケースにはいっていたジーンズはデザイナーズ・ブランドのイミテーションで趣味もよくなかったが、トップスは好みのものが一枚見つかった。サイズもちょうどぴったりだ。ワッフルニットの長袖ヘンリーネック・シャツで、体形をきれいに見せてくれるカットになっていて、フロントにちょっとファンキーな漢字がシルクスクリーンで転写されている。ジーナは汚れたTシャツを脱ぎ捨て、ごみ缶に投げ捨てた。ヘンリーネック・シャツを着て、さらにスーツケースをかきまわす。

今本当に役にたつものは……

やった、これこれ。つばの長い〈J・クルー〉の野球帽だ。

でもマルボロはない。どうやらこのあたりがジーナの超強運の限界のようだ。

バスルームで、メイドが水を流す音がした。ジーナは髪をポニーテールにまとめ、野球帽を目深にかぶった。〈ドルチェ＆ガッバーナ〉のサングラスも拝借してかける。鏡に映して点検し、それから、ドレッサーの上に置いたまますっかり忘れかけていたブリーフケースのことを

思い出して、もどってひっつかんだ。
　忘れるなんてとんでもない。
「ありがと(グラシアス)！」部屋を出ていきながら、メイドに声をかけた。

　ホテルのギフトショップで煙草を買ってから、ジーナは車でサマーリンに出た。もちろん自分のアパートにもどることはできない。パスポートを〈メイルボクシズ・エトセトラ〉のレンタルボックスに入れておくことを思いついていて、本当によかった。空港につくと、居並ぶレンタカー・ブースの前を通らないようにして、エスカレーターに向かった。〈エイヴィス〉のあのきつい目をした元ギャルが見えたような気がして、ちょっとびくついた。ここがそもそものはじまり——まだ一週間もたってないなんて、信じられない——最終的に手錠をはめられてリンカーン・タウンカーのトランクに詰められるという結末に向けてまっすぐ向かった道すじに最初の一歩を踏み入れた場所なのだ。
　実にくそったれた道すじだった。もう二度とあんな道に近づくのはごめんだ。今度は賢くなって、この〈ポプシクル〉（アイスキャンデーの商標）の屋台(スタンド)からずらかるのだ。この場合の〈ポプシクル〉スタンドとは、北アメリカ大陸まるごとのことだ、ほんとにありがとう。
　デルタ航空のチケットカウンターで、意識を失ったシェイクのポケットから抜き出した封筒にはいっていた札束を取り出した。
「今すぐアジアのどこに行けるかしら、ファーストクラスで、ええと……」言葉を切ってお金

を数える。望ましい額より少なかったが、だいたい予想していたあたりだ。アジアのどこかについてからのホテル代を差し引いて、しめくくった。「……そうね、二千ドルぐらいで」
「本気で言ってるの、それ？」カウンターのゲイ男が言った。
「本気そうに見えるでしょ？　そうね、ドバイとか」
男は片方の眉をくいと上げ、それからキーボードにタカタカと打ちこんだ。
「ファーストクラスはご予算の範囲外ね」男は言った。「でもエコノミーなら――」
「げっ。やめてよ」
「げって、そっちこそ」
「ヨーロッパはどう？」
タカタカタカ。
「ロンドンなら四千」
「エコノミーならいくら？」ジーナは言った。それから、「くそ、もういいわ。忘れてちょうだい」
現金をしまいこむと、くるりと背を向けた。コンコースの残りの部分からスロットマシンの列でおおむね遮断された待合エリアに空席を見つけた。
この状況について、真剣に分析してみる必要があるだろう。二千ドル、プラスそこそこまともなホテルに一週間泊まれる額だが、気分よくスタートを切れるほどではない所持金。断じて、気分よくスタートを切るのにたりる額ではない。

CamScannerでスキャン

それなら。

ジーナは親指の爪をかじった。通りかかった男がちらりと目を向けた。特にあやしげなところはなかったが、確信はもてない。ラスヴェガスで自分が第一級のおたずね者になっていることを思い知っていた。〈クジラ〉の人脈は広く、ほぼ一週間前から彼女の上にはアドバルーンがあがっているようなものだ。今ごろは街じゅうのうさんくさいならず者ども全員、そしてそのうさんくさいならず者どものまわりにいるあらゆる男友だちや女友だちや愛人やバーテンダーやタクシー運転手が残らず——はっきりいって残る人間はいるのだろうか?——鵜の目鷹の目でジーナを探している。ジーナを密告すれば支払われる大金を目当てに。

今朝の〈トレジャー・アイランド〉の海賊ウェイトレスがじっと自分を見つめていたことをジーナは思い出した。あれはジーナを前に見たのはどこだったか思い出そうとしていたのではないか。

もう一方の親指の爪をかじりながら、ジーナは身震いした。たくさんの目玉がぎょろぎょろと自分を探していると考えるのはいい気分ではなかった。この思考の連鎖のせいで、たっぷりの朝食、熱いシャワー、〈クジラ〉の顎からかろうじて救出されたことからくる強運の好ましいバイブレーションがぐいぐい引きずりおろされていくのも気に入らなかった。

ブリーフケースをぱちんと開け、なかを見る。モーテルで男ふたりが話し合っているときに聞こえたとおりだ——百枚の古物切手。年を経て黄ばみ、第二のケースのガラスの下に縦十枚、横十枚、整然と並んでいる。だがそのすべてに、何も書かれていなかった。数字もなし、文字

もなし、絵もなし。こんなものが、どうしてそんなに貴重なのだろう？　それとも、古いから価値があるのだろうか？　たしかにとんでもなく古いものに見える。なかには紙がひどく薄いものもある。ほとんど透きとおっていると言えそうなほど薄く脆そうなものも。

どれくらいの価値があるんだろうか？

〈クジラ〉が相当切実にジーナを自分の手中におさめたいと思っていたことは推察できる。本当に、本当に切実に。ということは、あいつがこの――切手――に支払う代価は本当に高いのだろう。

それじゃ。

それじゃ……もしある女の子、運命がこの切手をその手に運ばせた女の子がどうにかして誰か――まあ、言ってみるだけだけど――この切手をおたがいに満足できる額で引きとってくれる相手を見つけ出したとしたら？　たとえ本当の価値の半額でも、この切手のおかげで絶対に気分よくスタートが切れるにちがいない。二千ドルよりは相当大きい額、それは間違いない。

もう一日か二日ヴェガスにとどまる――それだけの危険を冒す価値があるだろうか？

階下の〈エイヴィス〉のカウンターの、あのきつい目をした元ギャルのことを考え、またもや全身総毛だった。あの女がジーナを見て、若いころの自分にそっくりな女が目の前に出現したと思ったのだとしたら、それは裏返せば、ジーナが将来の自分自身の、疲れて苦々しく、挫折を重ねたきつい目をまっすぐのぞきこんでいたということではないだろうか？

あの女の二十年前は、今のジーナと同じだったのではないか？　空港ターミナルの真珠貝の

形をしたプラスチック製の椅子にすわり、ある危険を冒す価値があるかどうか考えていたのではないか？

ぞっとする。

真珠貝の形をしたプラスチック製の椅子の上で、ジーナは不安そうに身じろぎした。『まさか』自分に言い聞かせる。『このあたしがあの女だなんて。とんでもない、二十年後に疲れて苦々しく、挫折を重ねたきつい目になって、空港のレンタカー・カウンターで働いているなんて』

まあ、おそらくあの女も二十年前にそう自分に言い聞かせていたんだろうけど。

ジーナは永遠に若くイカした女でいつづけたいという気は満々だったが、同時に、そんなことはありえないと認めてもいた。イカしているという部分ではなく——お肌の手入れはきわめて念入りにやっていたし、極力日光にあたらないようにしていた——若いという部分、その部分では彼女の容姿の価値はドルやユーロや円とちがって今以上に強くなることはけっしてない。その部分はただ、いつか必ずはじける泡のようなものだ。泡というものがすべからくそうであるように。

ジーナはその覚悟はできていた。その覚悟をしておいたほうがいいとわかっていた。

シャトルバスに乗って長期使用の駐車場に行き——用心深く——目指すタウンカーの二列前で下ろしてほしいと運転手に指示した。運転手が去っていくと、十セント玉を使ってタウン

カーのナンバープレートをはずし、近くのエスカレードのプレートと取り替えた。エスカレードはぴかぴかときれいで、何日も何日もここに鎮座して砂漠の砂埃を浴び、上空のジェット機の排気を吹きつけられているようには見えなかった。ついさっきやってきたばかりで、持ち主は当分もどってきそうにないというように見えた。

ジーナはにんまりして、こういう考えを働かせる自分をシェイクはきっと誇りに思ってくれるだろうと考えた。

今でもまだあの男のことを考えていた。そんなことはめったにない。でも不快ではなかった。彼は三十代後半ぐらい、と彼女は推測する。もしかしたらもうちょっといってるかも。引き締まった身体にいくらか風雪を経た顔、でもそのわりにおもしろい。トランクをはじめて開けたときに彼女に向けた目。彼の目はあの車を運転していた男の目や、ああいった仕事をする男の目とはちがっていた。ありがたいことに。

エスカレードを運転してストリップにもどる。野球帽とサングラス姿で〈ヴェネシャン〉ホテルのロビーを静かに通り抜ける。誰にも目を留められませんようにと願いながら。二百ドルで部屋をとり、上階に上がっていき、また下りてきて部屋にゲロの臭いがすると文句を言う。実際はゲロの臭いなどしていなかったが、フロント係が目をぱちくりさせもしないほどもっともらしい嘘だった。フロント係は彼女の情報をコンピュータに打ちこみ、二階上の新しい部屋のカードキーを出してくれた。

その新しい部屋を使うつもりはなかった。ジーナは急いでもとの部屋にもどった。さっき、

ドアを真鍮のストッパーで支え、ちょっと開いたままにしておいたのだ。
もし誰かに見とがめられていたとしても、またはあのフロント係が密告したとしても、おとなしくことを運ばせてやるつもりはなかった。
ミニバーから〈ルナ〉のプロテイン・クッキーとウォッカのミニボトルを略取する。ナイトスタンドの下から職業別電話帳をひっぱりだし、ベッドの上で開いた。
『S』の欄までめくっていく。
『切手(スタンプ)と硬貨(コイン)、稀少品——販売店』
お茶の子さいさい。ウォッカと〈ルナ〉のクッキーを平らげたところで、とても眠いことに気づいた。最後に眠ったのはいつだったか思い出せなかった。タウンカーの窒息しそうなトランクで一、二時間眠ったのは数えていない。あれは眠る前よりもいっそう疲れるはめになった。
電話帳のページを破り取り、ちょっとひと眠りすることにした。課題が思った以上にすばやくできたごほうびだ。彼女のような行け行け娘はときどき立ち止まってエネルギーを充填し直す必要があるのだ。
まだ時刻も早い。昼間はまだたっぷりある。目が覚めてからでも、古物切手の買い手を見つけにいく時間はたっぷりある。
ジーナは服を脱いで下着姿になり、ベッドの端のほうで丸くなって、上掛けをかぶった。
ひと眠りしても悪いことはないわよね、ほんのちょっと眠るだけなら?

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

11

目が覚めたとき、不安でどきどきするほどしばらく、何もわからなかった。自分がどこにいるのかすら。彼のいる部屋は暗くて静かでひんやりしていた。刑務所にはそんなところはまったくない、だから少なくとも送り返されたのではない。右の手首がとんでもなく痛かった――なぜなのかはわからない――そして口のなかに、何か臭くて毛むくじゃらのものがもっと臭くてもっと毛むくじゃらのものを引きずりながら這いまわっているような味があった。

シェイクは横向きになろうとしたが、手首に刺すような痛みが走り、すぐさま下に引き倒された。それで手錠のことを思い出した。洗面台の下の錆の浮いたU字型パイプのことも、ベッドわきの壁に古地図っぽくつくられた海賊のお宝地図が額に入れてかけられているホテルの部屋も。

ジーナのことも。

「くそ」シェイクは言った。

ゆっくり、ひどくゆっくりと、痛む手首をねじらないように気をつけて身を起こし、すわっ

CamScannerでスキャン

た姿勢になる。身体をのばし、自由に動く左手でバスルームのカウンターまわりを探って、壁に掛けられたドライヤーと、すぐその下の明かりのスイッチを見つけた。スイッチを入れると、まばゆいばかりの白い光が炸裂し、鏡から鏡へと反射して、シェイクの眼球の小さな硝子体をハンマーのように殴りつけた。

今が何時なのか、見当もつかなかった。バスルームのドアを足で押して開ける。ホテルの部屋の窓が見える角度ではなかったが、壁にそって光と影が交互に並んで杭垣のような模様をつくっているのが見えた。少なくともまだ屋外に光はある。だがそれほど長いあいだではないだろう。

それの意味するところは、おそらく……ええと？　五時か？

「くそ」またもやシェイクは言った。

手首にかけられた手錠を調べる。多少の遊びはあるが、たいして余裕はない。身体をのばし、自由に動く左手でもう一度カウンターまわりを探って、今度はプラスチックのミニボトルのセットを見つけた。シャンプー、コンディショナー、ボディローション。ちょっと考え、それからもっとも粘着性が強かろうという理由でシャンプーを選んだ。歯でふたをこじ開け、どろどろした液体を——ラベンダーの香りがした——手と手首の上に搾りだし、手錠の下やそのまわり一面に塗りこんだ。それから、これをしたらどんなに痛いだろうと考えないように気をつけ、ぐいと強くひっぱった。

シェイクはベッドの縁に腰掛け、そっと手をマッサージしていた。コードレスのルーム・テレフォンを耳と肩のあいだにはさんでいる。ナイトスタンドの上のラジオ時計によれば、もうすぐ午後五時半だ。考えていたよりかなり遅い時間だった。

電話の呼び出し音に耳をすます。

『出るなよ』心のなかで念じた。『それならまた次のときに引きのばせる』

彼女が出た。

「はい?」アレクサンドラは言った。

「おれだ」

「終わったのね? 問題はなかった?」

シェイクは考えた。「ちょっと問題が起きた」

「あら」

「女が逃げた」シェイクは言った。「ブリーフケースを持って」

間があった。

「ちょっと訊きたいんだけど、シェイク」アレクサンドラは軽い口調で言った。「その状況って、ふつうは〝大きな〟問題って言うんじゃないかしら?」

シェイクは顔をしかめ、バスルームに行って右手に冷水をかけはじめた。

「女は連れもどす。ブリーフケースも。両方回収する」

「ちょっと時間がほしいだけなのね」アレクサンドラが言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「そうだ」
「いいわ」
いいわ。シェイクはまたもや顔をしかめた。今度は手の痛みのせいではない。この件が思っていたよりずっとまずいことになっており、この先さらにかなりまずいことになるだろうと予想できたからだ。アレクサンドラの次の質問を覚悟して待った。
「ところで今どこにいるの？」アレクサンドラは言った。「万が一、あなたに連絡をとる必要ができたときのために訊くけど？」
シェイクは通りの向かい側に立つホテルを思い描いた。たくさんのゴンドラ、〈総督の宮殿（ドージェズ・パレス）〉。
「〈ヴェネシャン〉にいる」シェイクは言った。「１５１２号室だ」
「明日電話するわ」アレクサンドラが言った。「ちょっと休みなさい。それから女とブリーフケースを見つけなさい。両方よ。いいわね？」
「ああ。両方を」
シェイクは電話を切り、冷水を止めた。そしてはじめてソープディッシュに目を留めた。痛む手首をふきながら、ため息をつく。ソープディッシュのど真ん中に、アルミ箔に包まれたミントチョコと並んで、ジーナが残してくれた小さな銀色の手錠の鍵があった。

12

アレクサンドラは電話を切り、お茶を口にした。ため息をつきたいという――一瞬よぎっただけだが、強烈な――欲求に屈しはしなかった。

バカンの心に憂愁の忍びこむ余地などない。バカンの心は小さくてなめらかな丸い石だ。もしこの石がときおり、雨だか川だかであたかも濡れたかのようにきらりと光ったと見えたとしても、それは単なる光か遠近法のいたずらによる錯覚、その石の美しさの証明にすぎない。それだけでしかないのだ。

アレクサンドラはもうひと口お茶を飲み、ため息をついた。そう、小さなため息を、たしかに。情を感じながらもなお澄んだ目で世界を見ることができる、そのことで恐るべきバカンの脅威がいっそう増すのではないか？　自分が見たものについていっさいのためらいや疑念を感じることなく行動でき、自分の感情を無視できることで？　濡れた石でもやはり石にはちがいないのだ。

そう、たしかにまだシェイクに穏やかな愛情を感じてはいる。だがそれ以上のことは絶対に

ない。このささやかなおつかいを頼んだのは、彼がいつも忠実だったからだ。彼がいつも信頼するにたりたからだ。あれはただのいい稼ぎ仕事にすぎなかった。

ただのいい稼ぎ仕事だったのだろうか——自問する。彼女みずから、このささやかなおつかいにシェイクを送り出したことが？　ディクランか、ほかの誰かを送ったほうがずっと簡単だったというのに？

『黙りなさい、頼むから』自分自身に言い返す。

法務副長官がローブ姿でバスルームから出てきた。ばか面にはにかむように、にやけた笑いを浮かべている。

アレクサンドラは彼に目をやり、それから顔をそむけて考えた。『ああ、シェイク、シェイク、シェイク、シェイク。あなたはどうしてわたしをこんな立場に追いこむの？　どうして、心を石にしてこんな不愉快な決断をしなきゃならないような目に遭わせるの？』

それから電話をふたたび取り上げた。不意にずしりと重く感じられた——この小さな物体が。まるで電話が——もしくは彼女が——おとぎ話の魔女に魔法をかけられたかのように。電話を持ち上げて耳にあてるというだけのことに、持てる力すべて、意志の力すべてが必要だった。

だが、彼女はやりとげた。

ディクランは娼館の女将に別の女を連れてこいと告げた——今度は中国人でないのを。

「その子、タイ人ヨ」

「それがどうした?」
「ウクライナ人がいいノ?」
「ああ。ウクライナ人を連れてこい。今すぐにだ!」
枕の下にリモコンを見つけて、テレビをつける。ベッドの上で彼の横にいる中国女はいびきをかいていた。中国人は小さすぎる。スタミナもない。ウクライナ女ならもっと頑丈だろう。
股間の〝小さな兵士〟が太腿の上にずしりと重く横たわっている。紫色でべとべとぬめり、ひりひりしているが、またもや怒張をはじめようとしている。スポーツ放送ネット(ESPN)を見るだけで眠りにつけたらと願った。だが、〝小さな兵士〟は彼を嘲っていた。
怒りを覚えながら、腕のテストステロン昂進パッチをにらみつける。こうしたトラブルをもたらすことで〝小さな兵士〟を責めてはいなかった。責めるべきはこのばかげたパッチと、これを貼らなければきみの心臓はフットボールが割れるみたいにプシュッとつぶれてしまうよと言ったあのばかなくそ医者だ。
皮肉なのは、ディクランの好みは中国女だということだ。中国女の秘密めいた瞳と邪気のない笑みが好きなのだ。だがこのテストステロン昂進パッチのせいで、それほど頑丈ではない中国女では〝小さな兵士〟の相手ができないのだ。スタミナもない。
テレビでは、フィールドのサイドライン上でオレンジ色の髪の若い女がぺちゃくちゃしゃべっている。おっぱいがはみだしそうだ。〝小さな兵士〟がむくむくとうごめく。指でひっぱられ、ぴんと張りつめたバイオリンの弦のように。びぃぃぃぃん、びぃぃぃぃん。くそ!　いった

CamScannerでスキャン

いどういう了見で、ESPNに女が出てるんだ？　ディクランは怒りにまかせて考えた。サイドラインの上に、おっぱいを両側にはみださせた女が？　眠りたかったが、怒りが強すぎた。
「ウクライナ女はどうしたんだ、くそ！」壁の向こうに向けてわめく。しゃべりながらどんどんと壁をたたき、最後の〝くそ〟で二連打した。
ばかなくそ医者め。あのくそ野郎を殺してやりたかった。テストステロン昂進パッチを丸めてかたくかたくして、つっこんでやる、やつの――
電話が鳴った。ディクランは出た。
「いいわよ」彼女が言った。
「くそったれ野郎はどこにいるんです？」
「〈ヴェネシャン〉にいるって言ったわ。1512号室よ」
「よし。そこに行ってやる」
彼女はいらだたしげに舌打ちした。「彼は〈ヴェネシャン〉にはいないわ、ディクラン」
「どっちにせよたしかめに行きます。見つけます」
「急いでね。わかった？　ごたごたが大きくなるのはいやよ」
ディクランは自分が笑みを浮かべていることに気づいた。本当に久しぶりに――憤りを感じていたが、それは喜ばしい種類のものだった。
「心配はいりません」ディクランは言った。「ビニールシートを敷いて、あとはきれいに片づけます」

13

シェイクは手早くシャワーを浴び、それからミニバーの缶入りアーモンドを食べた。ホテルの部屋のドアを開けて廊下に出て、下に目を向けると、英語とスペイン語で書かれた『起こさないでください』カードをジーナがキースロットにさしこんだままにしているのが目にはいった。シェイクはカードをはずし、笑みを浮かべた。そのとき、撃鉄が起こされるカチリという音が聞こえた。

A45オートマチックだ、もし間違っていなければ。

冷たい金属がうなじにふれた。

「なかにもどれ」背後の声が言った。

シェイクは室内にもどった。ディック・モビーの用心棒は背後でドアが閉じるにまかせた。

「早かったな」シェイクは言った。

「ベッドにあがれ」

「ジャスパー、だったな?」

「そうだ。すわれ」

シェイクは言われたとおりにした。「どうやっておれを見つけた？」

肩をすくめる。「まあな」

「いや、ほんとのところ」シェイクは言った。「こんなに早く？ 教えてくれよ、知りたくてたまらない」

ジャスパーの眠たげな目をした丸い顔に、ちらりときまり悪そうな笑みが浮かぶのが見てとれた。

「ついてたんだ」ジャスパーは言った。「下のレストランのウェイトレスだ」

シェイクはちょっとのあいだ考えた。あの海賊ウェイトレスか。「あの子がジーナに気づいたのか」

ジャスパーはうなずいた。「あのウェイトレスはミスター・モビーがあの女を探していることを知っていた。ミスター・モビーが先週、通知を出したからな。だからおれに電話してきたんだ」

「それはそうと、念のために言うが、覚えてるか、ジャスパー」シェイクは言った。「あのモーテルで、あんたを電話帳で殴って気絶させるなんて、本当はやりたくなかったんだ」

「覚えてる」

「あの女はとっくに消えた」

「そのようだな」ジャスパーは言った。

「ブリーフケースを持ってな。あんたはあの女を知ってるのか？」
「ああ、まあ」
「あの女に薬をもられたんだ。おれの頭は今、高いところに吊るされて棒でがんがんたたかれる張子の福人形(ピニャータ)みたいな気分だ。お祭り騒ぎが終わってぶち割られたとこみたいだよ」
ジャスパーはちょっとのあいだ考えた。それからポケットに手を入れて、錠剤のはいった壜をシェイクに投げた。バイコディン（中毒性のある鎮痛剤）。シェイクは壜を開け、二錠飲んだ。
「ありがとう」
「あの女は油断のならないやつだ」ジャスパーは言った。
「でもかわいい。そう思わないか？」
「それが今おまえの話したいことか？」
「ジーナってのは本当の名前なのか？」シェイクは訊いた。
「ジーナ・クレメントだ」ジャスパーは言った。
「何者なんだ？　ストリッパーか？」
「ああ。あの女はミスター・モビーから剝ぎ取った」
「おれにはモルモン教徒の主婦だと言ったぞ」
ジャスパーはまた笑みを浮かべた。「あの女の言うことを信じるのか？」
「どっちにせよ、たぶんおれは彼女を助けてやったと思う」シェイクは言った。「本当のことを言うとな」

CamScannerでスキャン

ジャスパーはそれについては何も言いはしなかった。シェイクとドアのあいだに立っている。シェイクが銃を奪いにつかみかかるのは無理という距離だが、もしシェイクがそうしようとすれば、眠たげな目を閉じたまま風穴をあけられるぐらいには近いところに。

「おれを撃つ気か？」シェイクは訊いた。

「おまえがあの女の居場所をおれに教えたあとでな」

シェイクはこの男の正直さをありがたく思いはしたが、だからといって今置かれている状況がちょっとでもましになったわけではなかった。

「おれが知ってると思うか？」

「いや」

ジャスパーのアクセントにはどこか聞き覚えがあるような気がして、シェイクはかまをかけてみた。

「ジャスパー、あんたはニューオーリンズ出身か？」

「そうだ」

「どのあたりだ？」

「南九丁目（ローワー・ナインス）。水没する前のな」

「おれはジェンティリーだ」シェイクは言った。「そこもひどくやられたと聞いてる。九丁目ほどじゃないが」

「ファッツ・ドミノ（黒人ジャズピアニスト）だな」

「そうだ。彼の家はおれの家から三ブロック先にあった。おれはよく、九丁目の小さな店で散髪してたよ。ジャイアンツの野球選手のウィル・クラークを覚えてるか？　ニューオーリンズ出身だった？」

ジャスパーはうなずいた。「床屋の洗面台のすぐ上にウィルの写真が掛けてあったな」

「世間は狭いな」シェイクは言った。

「そう見えるときもある」ジャスパーは言った。「だが本当はそうでもない」

ジャスパーの忍耐力は相当なものだが無限ではないと、シェイクは感じた。

「ちょっと訊いていいか、ジャスパー」

「言ってみろ」

「あんたはおれを撃てと命じられてるのか、それともそれはあんたの自己裁量なのか？」

「おれの……何だと？」

「ちょっとまずいことになってるってのを、〈クジラ〉はまだ知らないんだろう？」

ジャスパーは答えなかった。どうやら、彼の正直さにも限度があるようだった。

「だからあんたはあの切手のはいったブリーフケースとあの女を早急に見つけなきゃならない」シェイクは続けた。「〈クジラ〉にばれる前に」そろそろ話のしめくくりにはいることにする。「だからおれたちふたり、組んでみないか。ふたりで時間をかせいで手取り給与をもらうってことだ。おれたちは今、同じ舟に乗りあわせてるんだから」

ジャスパーは手にした四十五口径銃を見下ろした。

CamScannerでスキャン

「あんたは銃を持ってる、わかってるよ」シェイクは言った。
「同じ舟じゃない」ジャスパーは同意した。
「ああ。だがあんたはおれを撃ちたくはない、それはわかってる。そんなことをしたら、結局あんたにとって厄介なことになるからな」
「悪く思うな」
「おれとあんたで一緒にあの女を見つけよう。あんたがおれを助けて、おれがあんたを助ける」
「おまえがどうやっておれを助けるんだ?」ジャスパーが穏やかに訊いた。
シェイクは一秒ほど考えた。いくつか答えを思いつきはしたが、もっともらしいものはひとつもなかった。説得力のあるものも。
「あの女がどこにいるか知ってるのか?」ジャスパーが言った。
「いいや」
「立て」ジャスパーが言った。
「ジャスパー」シェイクは言った。「もし、あんたが――」
ドアにノックがあった。シェイクとジャスパーはさっと振り向いた。
「室内清掃デス!」女の声がした。
シェイクの耳に、カードキーがはいるシュッという音が聞こえた。
「出ろ」ジャスパーがシェイクに言った。ドアが開きはじめており、ジャスパーはドアの裏側

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

にすべりこんだ。巨体のわりに驚くほどの敏捷さだ。シェイクはドアを押さえて半分ほどのところで止めた。ジャスパーはきっとディフェンス側で、攻撃タックルはしていなかっただろうと考えて。

客室清掃係のラテン女は半開きのドアの隙間からのぞきこみ、シェイクを見上げた。

「ここは全部そろってる」シェイクは言った。

ラテン女は半信半疑という顔で、やんわりと嫌悪を浮かべているように見えた。「タオル、イラナイ?」

「いらないよ。何もかも大丈夫(ブエノ)だ」

ラテン女はかぶりを振り、くるりとカートの向きを変えた。シェイクはドアを閉めかけ、それからバタンと強く押しもどして完全に開け、ジャスパーを扉面ではさみこんだ。四十五口径銃がカーペットの上にころがった。シェイクはそれをつかみ、ドアを閉めた。

ジャスパーは目をまわしてうずくまり、血まみれの鼻を押さえた。

「くそ」ジャスパーは言った。

シェイクは弾丸が弾倉に送りこまれたのを確認してから、銃をジャスパーに向けた。バスルームのほうに手を動かす。

「はいれ」シェイクは言った。

ジャスパーは洗面台わきの床の上にすわり、シェイクは彼を洗面台の下のU字形パイプに手

CamScannerでスキャン

鋲で繋いだ。それからジャスパーに鼻を押さえるタオルとバイコディンの壜を渡してやった。
「気をつけたほうがいいぞ」ジャスパーが言った。
「恕みっこなしだよ、ジャスパー。あんたも言ったろう、悪く思うな」
ジャスパーは首を振った。「あんたが気をつける相手はおれじゃない」
「〈クジラ〉か？」シェイクは訊いた。
「あの女だ」ジャスパーは言った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

14

ホテルから出たシェイクに、ベルボーイが口笛を吹いた。
「タクシーですか？」
シェイクはジーナが残してくれた――というより、もっと正確には、ジーナが彼のポケットを探ったときに見逃した――しわくちゃの二十ドル札をボーイに見せた。
「これで郊外に出られるかな？」
「もどってはこれませんよ」ボーイは言った。
「それは問題ない」シェイクは言った。

タクシーはゆっくりと通りを進んでいき、運転手が二八一番地を見つけた。その家は小さいが見映えのいいスペインふう家屋で、寝室が三つあり、実際よりも大きく見えるように設計されていた。赤いタイル屋根とありえないほどみずみずしい緑色の芝生が備わっている。この新興住宅地のほかのあらゆる家とほぼそっくりなのは否めないが、シェイクはその手のことをあ

CamScannerでスキャン

げつらうような俗物ではない。
ドアベルを鳴らす。家のなかでやわらかなチャイムの音が響くのが聞こえた。一秒後、小さな黒人の女の子が元気いっぱいにドアを開けた。八歳ぐらいだろうか。
「やあ」シェイクは言った。
「ハーイ」
「きみの名前は?」
「ナンシー」女の子は言った。「eがふたつつくの」
シェイクは一瞬、考えた。ナンシーか。
「かわいい名前だね」
「フランス語よ」ナンシーは言った。「妹はeがふたつつくエイミーよ」
エイミー。
「そういう名前、好きだよ」シェイクは言った。「ほかになくて個性的だけどそれほど変わってるわけでもないからね」
女の子はしげしげとシェイクを見つめ、それからドアを閉めた。
数秒後、ふたたびドアが開いた。今度立っていたのは三十代の黒人女性だ。やせてとがった感じで、威厳があった。
「やあ、エイミー、こんにちは」シェイクは言った。「さっききみのお姉さんと話をしてたところだよ」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

この物言いに女性が笑みを浮かべるかもしれないとシェイクは思った。女性は笑わなかった。
「ふうん」彼女は言った。
「アルテミス・ウォレスさん？」シェイクは訊いた。
「今から夕食を食べるところなの。もし、ここに何かを売りつけにきたんならだけど」
「きみはヴェーダー・ウォレスのお姉さんだろう？」
女の目が険しく細められた。ヴェーダー。「義理の姉よ」
「おれの名前はシェイク。ヴェーダーとは――」
シェイクは言葉を切った。ナンシーが母親のうしろからのぞいているのに気づいたからだ。
「――会社での友だちだ」彼は言った。「街に来ることがあったら寄ってくれと言ってたんでね。会社の出張なんだが」
「どういう会社なの、ママ？」ナンシーがたずねた。
「この人はVおじさんと刑務所で一緒だったのよ」アルテミスが娘に言った。
ナンシーの目が丸くなった。「Vおじさんには白人の友だちがいるの？」
母親のアルテミスはじっとシェイクを見つめた。同じ質問を自分でも考えているのだろうと、シェイクは想像した。
シェイクはキッチンのテーブルの椅子にすわり、コカ・コーラを飲みながらアルテミス・ウォレスが夕食の支度をするのを眺めていた。ナンシーと姉より一歳程度下のエイミーはテー

ブルの向かい側にすわり、じっとシェイクを見つめていた。
「それじゃ、あなたはただ挨拶をしに立ち寄っただけなのね」アルテミスはシェイクを見ずに言った。質問というよりは思考を声に出しているというように。
「ああ」シェイクは彼女に言った。「ヴェーダーがいつも言ってたんだよ、実をいうと。おれが出所してもし何か入用なものがあったら、きみたち家族が助けてやれるだろうって」
「そんなことを言ってたの」
「おれたちはかなり親密だったんでね。やつがおれの背後を見張り、おれがやつの背後を見張ってた」
小さな忍び笑いが聞こえたような気がしたが、アルテミスは背中を向けたままなので、確信はできなかった。
「あなたがVの背後を見張ってたって？」
「刑務所ってのはけっこう複雑な場所なんだ」シェイクは言った。少なくともそこのところは本当だった。
「刑務所って何？」エイミーが訊いた。
「会社のことよ。Vおじさんが働いてるとこ」ナンシーが妹に説明する。
「そのとおりだ」シェイクは言った。それから、「すまないが」アルテミスに言う。「それはしないほうがいい」
アルテミスがとうとう振り向いてシェイクを見た。愛想がいいとは言えない目つきだった。

「何をしないほうがいいって？」
「ニンニクをつぶすこと。薄切りにするほうがいい味が出るんだ」
「あなたはシェフなの？」
「いや、だが料理はけっこううまいんだ。それにおれの知ってるおれ以上に腕のいいコックたちも、今きみがやってることを見たら卒中発作を起こすだろうよ」
アルテミスはしばらくじっとシェイクを見つめたが、それからまた背を向けた。ニンニクつぶし器を置いて、ウッドブロックの包丁差しから肉切り包丁を引き抜き、ニンンクを薄切りにしはじめた。
「あなたの名前、もう一回言ってもらえる？」
「シェイクだ」
「シェイク」
「いつの日かレストランを開くのが夢なんだ。だがなかなかむずかしそうだ」
アルテミスが目を上げ、シェイクの背後を見た。それから視線がシェイクの左に動いた。
「お帰りなさい、あなた」彼女は言った。
シェイクはくるりと身体をまわした。キッチンの戸口に立ち、黒いローブのような凶悪そうな筋肉にビジネス・スーツをまとって顔をしかめていたのは、ヴェーダー・ウォレスだった。
シェイクは命がけで笑顔を貼りつかせた。
「ヴェーダー」ようやく言う。「やあ」

ヴェーダーは首を振った。「ぼくはダースだ」
「双子なのよ！」幼い少女ふたりが声を合わせる。
シェイクは心の底からほっとした。安堵は一瞬にして地平線まで広がり、そこから下を向いて地球全体を大きく強く抱きしめ、包みこんだ。
「やつはそんなことは――ああ、そうか」シェイクは言った。「当然だな。やつがうりふたつと言ったときは、まさかこんなこととは――」
「パパにはほくろがあるんだよ」ナンシーが言った。
「そろそろお黙り」ダースが愛情のこもった声で娘に言った。幼い娘ふたりにキスをし、それからアルテミスのほうを向いた。「この人は誰だ？」シェイクのことだ。非友好的というわけではない口調だった。
アルテミスはちょっと考えていた。彼女はシェイクが話したヴェーダーとの親密で友好的な一対一関係を信じこむようなばかではないことは、シェイクにもわかっていた。刑務所にはいっている義理の弟に彼女が愛情を感じているわけではないことも、感じられていた。ただ、もしかしたら、シェイクの演技を評価してくれたかもしれないという可能性があった。
「こちらはシェイクよ」とうとう彼女は言った。「ヴェーダーのいいお友だちですって」
夕食のあと、ダースはシェイクを外のガレージに連れていった。〈シャーピー〉で大きく"V"と書かれた段ボール箱を出してきた。

ダースがアイフォンで株価情報に目を通しているあいだに、シェイクは箱のなかを探りはじめた。

「ぼくたちは少しも似ているところがなかったんだ」ダースは言った。「おかしいだろう。ぼくはコミック本が大好きで、〈Xメン〉のフィギュアを収集してたんだ。わかるだろう？　部屋にこもって、厄介ごとには近づかなかった」

「〝陰〟ってやつだな」シェイクは言った。ヴェーダーの〈ロレックス〉の腕時計が見つかった。たぶんにせものだろうが、それをポケットにすべりこませた。「それとも〝陽〟のほうかな？　よく覚えてないんだが」

「オタクってやつだよ。でもそれでよかったんだ。中学のとき、教師がぼくを数字の奏でる音楽の世界に導いてくれた。それまでにぼくに起きたことで、それがいちばんよかった」

シェイクは一瞬手を止め、自分に起きたことでいちばんよかったのは何だったろうと考えた。

「もちろん、家のなかにいる三人の女性陣は別にしてね」ダースはすばやく言い添えた。

「あのふたりのお嬢ちゃんは地球上でいちばんかわいいにちがいないね」シェイクは心の底から言った。「きみはりっぱに成功したな」

ダースはため息をついた。「弟に言ってやりたいよ。しっかり働いて、自分が大事だと思うものに投資しろってね。そういうことはすべて、いろんな意味で自分に返ってくるんだから。きみは『人生を導く5つの目的』って本を読んだことがあるかい？」

「残念ながらないな」シェイクは箱からマイケル・ジョーダン・モデルのバスケットボール・

CamScannerでスキャン

シューズをひっぱりだした。二サイズほど大きい。箱に投げこもうとしたが、考え直した。靴の片方の奥まで手をつっこみ、丸めた札束を引き出した。

「ほかのいろんな本と一緒で、おおかたは眉につばをつけて受け取らなきゃならないけど、いくらかの真実はふくまれてるんだ。というより、役に立つ真実にそこそこ近いものがって感じかな、ぼくの言ってる意味がわかるかい？」

「その本なら思い出したよ」シェイクは言った。「その男はアトランタで判事を殺して、裁判所から逃げ出した。予備判事ともうひとりも殺したっけか」

「そのとおりだ」ダースは言った。「それから女性を人質にとって彼女のアパートに立てこもったけど、その女性がそいつに話しかけたんだ。そのとき持ってたこの本のことを話したんだよ。そいつも神様の大いなる計画の一部だってことを。ふたりは夜通し寝ずにその本について話し合った。男は彼女を殺さなかった。翌朝、彼女は男にパンケーキをつくってやった」

「自首するように説得したんだ」

「笑っちゃうよね？　のちにその女がメタンフェタミンを隠し持ってたことが判明した。ふたりはまず最初に覚醒剤を嗅いでたんだ。そのおかげで彼女は解放してもらえたんだな。事件が起きたときは、新聞にはそこのところは出ていなかった」

「おれも神様の大いなる計画の一部だとしても」シェイクは言った。「それがどういうものか知りたいとは思わないような気がする」

ダースはアイフォンを押しやってシェイクに向き直った。シェイクは思わずちょっと縮みあ

CamScannerでスキャン

がった。彼は不気味なほど弟にそっくりだった。
「Vの足を見たいかい？」
「Vの足って？」シェイクは言った。
ダースはガレージをつっきって、ホンダのパイロットの向こうに行き、もう一台の車から埃の積もったカバーを引き剥がした。リンゴ飴のように真っ赤な、新品同様の状態の一九六九年式プリマス・ロードランナーだった。
シェイクは、いつもなら自家製ガンボシチューに向ける賞賛の目でその車を見つめた。
「うわ」シェイクは言った。
「Vはこれのことを言ってたか？」
家のなかで電話が鳴りはじめるのが聞こえた。
「聞いたよ」シェイクは言った。「すり傷ひとつでもつけたら、おれは死体袋に詰められて家に帰ることになるって」
「それでこそVだ」ダースはくっくっと笑った。
家のなかで電話が鳴りやんだ。
「誰だ？」ダースは声を張り上げてアルテミスに訊いた。
「誰でもないわ」アルテミスが叫び返した。
ダースはロードランナーに向かい、うなずいてみせた。「乗っていくといい」シェイクに言った。「キーはさしてある」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

15

「誰でもないってどういうことだ?」ヴェーダーは電話に向かって言った。お高くとまった色の浅い黒人女め。だが、彼女がいい母親であることは認めざるをえなかった。ヴェーダーはふたりの姪が大好きだった。「おれだって言っただけじゃないか」

「あなたのお友だちがたった今出てったところよ」アルテミスは言った。

ヴェーダーはプラスチック製の送話口の臭いを嗅いだ。ひどい臭いだった、腐ったピクルスのような。目を上げると、電話の臭いを嗅ぐ自分を見ていた看守と目が合った。看守は実にすばやく目をそらした。そう、たしかに。

「いったい何のことだ?」ヴェーダーは言った。くそ女め。「兄貴を出せ。どういう友だちだ?」

「知ってるでしょ。シェイクよ」

ドアが突然閉じたみたいに、まわりの音がすべて消え失せた。

「シェイクだと」ヴェーダーは言った。

「あなたの車を借りてったわよ。あなたがいいって言ったんでしょ」
ヴェーダーは電話を切った。それからふたたび受話器を取り上げ、シンダーブロック壁に投げつけた。プラスチックが砕け、ばらばらと飛び散った。それからヴェーダーは電話機本体を壁から引きちぎり、たたきつけて粉々にした。それから自分のこぶしを壁にたたきつけた。何度も何度もたたきつけるうち、こぶしが生の肉塊のようになり、シンダーブロックに血のすじ模様ができた。二本になり、三本になる。看守たちがどこからともなく飛んできて、吼えつづけるヴェーダーを床に引きずり倒した。

CamScannerでスキャン

16

ジーナは夢を見ていた。ニューヨーク市内でルーシーがタクシーを運転している。雨が降っていたが、ルーシーはジーナのために停まってはくれなかった。夢のなかのジーナはまごついて、むっとした。ちょっとお、いつまで根に持ってんのよ？　そのタクシーの後部座席にはシェイクがいたような気もする。一瞬で走りすぎたので、はっきりとは言えなかったが。

目を覚まし、ベッドのわきの時計を見た。午後四時近かった。眠りこんでいたのだ――うわ、くそ、心臓が胸のなかでちょっとばかり、ヒップホップダンスのように飛び跳ねた――三時間も。

すばやく身を起こす。三時間。モビーの手下が空港かこのホテルのロビーで彼女を見かけていたとして、そいつがあのおとりの部屋を調べて、フロント係と話をしにいって、どういうことか察しをつける時間はじゅうぶんにあっただろう、そして――

部屋のドアがビーッと鳴った。ロックにカードキーがさしこまれる音。

ジーナはベッドから飛び起きた。ドアにつっかいをしたっけ？　何か武器になりそうなもの

はないかとあたりを見まわしたが、ドアはすでに開きはじめていた。つっかいはしていなかったのだ。

三十代はじめの男が部屋にはいってきた。キャリーつきのスーツケース二個と格闘しながらはいってくる。下着一枚のトップレス姿で立っているジーナを見て、男は動きを止めた。

「うわ」男は言った。

「あなたの奥さんから3P要員に呼ばれて来たの」ジーナは言った。

男は目をぱちくりさせた。

ジーナは腕時計を見た。「早すぎたかしら？　まずっ。ごめんなさい」

急いで服を身に着け、靴とブリーフケースをつかむ。

廊下をこちらに向かってやってくるのが、男の妻だった。ゆっくりと歩きながら、両手の親指でブラックベリーの画面にすばやく入力し、同時にブルートゥースのヘッドセットに話しかけている。

「そんなのばかげてるわ」妻は大げさな物言いをしていた。ジーナには目もくれない。

「一時間後にまた来るわね！」ジーナは肩越しに叫び、大急ぎで妻とすれちがうと、エレベーターに飛びこんだ。

ジーナは駐車場に車を入れた。その小規模商店街はたいていの小規模商店街と同じように、うさんくさい感じにうらぶれていた。コインランドリー、アジア系の食料雑貨店、そのアジア

系食料雑貨店に怖いほど間近に隣接している、「蛇その他」と書いてある看板を出している店。
彼女が探している店は、コインランドリーのとなりの、やはりうさんくさい感じの建物だった。窓は汚れ、玄関ドアの上のビニール製の張り出しは大きく裂けている。張り出しには、裂け目の下に「マーヴィン・オーツ宝石及び質店」と印刷文字が並んでいた。
ドアにはもっと小さな文字で、「稀少貨幣、切手、及びその他高級収集品指定取扱業者」と謳われていた。
うさんくさい。
これには失望させられた。ジーナが思い描いていたのは……まあ、よくわからないけど、すわり心地のいい革張り椅子とディケンズの小説を思わせるような、本がずらりと並ぶ落ち着いた雰囲気の店だろうか。鼻眼鏡をかけ、甘ったるい匂いのするパイプをくわえた、親切な老店主とか。
だがその一方で、「マーヴィン・オーツ宝石及び質店」のうさんくささは有望でもあると認めないではなかった。少なくとも、マーヴィン・オーツは、あれこれ質問をせずに迅速に現金払いをしてくれるタイプの買い手と繋がっていそうではないか。数字を予想するのは悪運を呼ぶわけじゃない、と自分に言い聞かせる。幸運をもたらすんだから。ジーナは指を交差させ、ブリーフケースにはいってる切手が五万ドルをもたらしてくれますように、と願った。けっこうイケそうな額じゃない?
(ドバイがもう目の前よ。ドバイだろうがどこだろうが)

ブリーフケースを持ち、車から出てドアをロックする。小規模商店街の前の通りでは、数台の車が減速せずに通りすぎていく。尾行車がいないことは確信できた。

店のドアには鍵がかかっていたが、ドアの横にねばついた感じに見える赤いボタンがあった。ジーナは肘でそのボタンを押した。一秒後、ブザーが鳴り、ドアがごく細く開いた。

ジーナは店に足を踏み入れ、硬貨(コイン)や腕時計や指輪や、二個の古い銃弾のように見えるものが並んでいる埃っぽいガラスケースのあいだの狭い空間を通っていった。店の奥に、埃っぽいガラスケースがもうひとつあり、その向こうに丸々と太った五十代ぐらいの、目玉のつきだした男がすわっていた。消化不良みたいな機嫌の悪そうな顔をしている。

「店は開けてない」男は言った。

「それならなぜ入れてくれたの？」ジーナは言った。

「間違った。真剣なコレクターかもしれないと思ったんだ」

「あたしが真剣なコレクターじゃないって、どうしてわかるの？」

男はげっぷをして、読んでいた本を取り上げた。分厚いペーパーバックで、表紙にはドラゴンと、メタル・ブラをつけた少女と、巨大な剣を持ったちっちゃな男が描かれていた。

ジーナは悪気ではなく、事実として思った――この男はびっくりするほど昆虫に似ている。大きな飛びだしぎみの目は間隔も離れていて、今にもころげ落ちそうに見える。

それ以外では、この男はそこそこふつうに見えた。プルーン色のニットベストにカーキのズボンという服装がふつうと言えるならだが。

CamScannerでスキャン

「あなたがマーヴィン・オーツさん？」ジーナは言った。「ここはあなたの店なの？」
「そうだ」男は言った。「さあ、出ていけ」
ジーナはくしゃみをした。埃だらけだ。店主の前のカウンターにブリーフケースを置いた。
「このなかにあるものをちょっと見てもらいたいんだけど？」ジーナは言った。「そのあとでフェラチオをやってあげるって言ったら？」
店主は本から目を上げた。びっくりしたような顔。
「本当に？」店主は言った。
「ううん」ジーナは言った。「でもあたしが出ていってから想像するのは許してあげる」
ジーナはにっこりと微笑んでみせた。店主は顔をしかめたが、それからケースを開け、なかを見た。
「この切手にどれだけの価値があるか教えてちょうだい」ジーナは言った。「嘘はつかないでね、ちゃんとわかるわよ」
店主は答えなかった。ひゅっと息を吸いこみ、切手を凝視している。ジーナは彼が息を吐き出すのを待ったが、彼は吐き出さなかった。好奇心に駆られながら、ジーナははげ頭のてっぺんにピンク色の斑点が広がっていくのを見守った。
「大丈夫？」ジーナは言った。この切手の買い手を見つける前にこの男が心臓発作を起こしたら、それも運というものだろうか。
とうとう店主は息を吐き、それからもう一度ジーナを見上げた。飛び出しぎみの目は興奮の

あまり飛び出したがっているものの、すでに最大限まで飛び出ているためにそれ以上行き場がないようだった。

「これは切手じゃない」店主は小声で言った。

ジーナはマーヴィン・オーツについて店の奥にはいっていった。奥の部屋は表側よりいっそう埃っぽく、おびただしい量の本や箱や袋がひしめいていた。〈ノーディックトラック〉（室内用クロスカントリー運動器具の商標）のトレッドミルが片隅にあったが、たいして動きそうには見えなかった。

マーヴィン・オーツはブリーフケースをテーブルの上に置き、鑑定用ルーペをあててかがみこんだ。

「完璧な状態だ」小声で言う。「驚異的だ。こういう聖遺物のことは読んだことはあった。うわさだの揣摩憶測だの何だので耳にしてはいたが、まさか本当に――」

「聖遺物って？」

「宗教的に重大な意味を持つ歴史的な物品のことだ」マーヴィンは言い、辛辣な目をジーナに向けたが、すぐさままた注意をもどした……ブリーフケースのなかの、ガラスの下に並ぶ何だかよくわからない物体に。「収集され、保存され、崇拝されるもの。聖人の遺骨とか、本物の十字架の釘とか、屍衣の布とかだ」

「『ダ・ヴィンチ・コード』みたいなやつ？」

マーヴィンは、今度は辛辣な目を向けることさえしなかった。ただ飛び出た目をぐるりとま

CamScannerでスキャン

わしただけだったが、それは一度見たら二度と見たくないと思わせるものだった。
「聖遺物は初期のキリスト教徒にとって重要なものだった」マーヴィンは言った。「だがその後、中世のあいだに十字軍の働きのおかげで、聖遺物の収集と展示が熱狂的に行われるようになった。司教だの枢機卿だの何だのという教会組織のエリートたちにとって、究極のステータスシンボルになったんだ。誰の大聖堂にもっとも古い聖遺物があるか？　もっとも重要な聖人を象徴しているのはどのコレクションか？　もっともゴージャスに宝石で飾られた薄片収集を所有しているのは誰か？」
「薄片収集？」
「透きとおった聖遺物のことだ」
ジーナはため息をついた。本当は、こんな蘊蓄（うんちく）につきあっている暇はないのだ。「それじゃ、すばらしいわ、これって聖遺物なのね」
マーヴィンの肩越しに、きっちりと十枚ずつ十列に並んでいる、小さな四角い羊皮紙を見つめる。もしかしたら、古い聖書か巻物から破りとられた紙片なのかもしれない。でなきゃ、何か古代の乾燥しきった生地見本みたいなものなのかも。何でもいい。その問題についてのジーナの興味はまったくの無に等しい。本当の問題は……
「そのくそったれはどれだけ価値があるの？」ジーナは訊いた。
「これが何か知りたくないのか？」
ジーナはブリーフケースから目を上げた。マーヴィン・オーツがにやにやしている。

いいわ。それで話が先に進むのなら。
「わかったわ」もう一度ため息をつく。「これって何なの?」
「あててみな」
ジーナはこぶしを挙げ、殴ろうとした。マーヴィンは悲鳴をあげて身をすくめ、ぽちゃぽちゃした腕で顔をかばった。
「これは包皮だよ!」マーヴィンは言った。
ジーナは驚きのあまりこぶしを下ろすのを忘れた。きっと何かの聞き間違いにちがいない。
「今何て——」
「百枚の包皮。これがそれだ」
「それって——」
「見てみろよ」マーヴィンはケースを彼女のほうに傾け、ルーペを差し出した。
ジーナは迷った。やんわりとした嫌悪に、やんわりした好奇心が打ち克った。ジーナはルーペを受け取り、飛び出た目の汁がついていそうな気がするのをぬぐいとって、ガラスケースの上ぶたに押しつけた。
言われてみると、切手サイズの小さな四角形はたしかに皮のようなものに見えた。日焼けしたときに鼻の頭から剝がれる皮みたいじゃない?
「包皮って赤ちゃんの?」ジーナは訊いた。「割礼で切り取るようなやつ?」
「いや、ははは、ちがうさ」マーヴィンは言った。久しぶりに思いきり楽しんでいるように見

えた。「この包皮は成人の男から取ったものだ」

「でも――」ジーナは言いかけた。

「当時の人々は今より小さかった」マーヴィンは言った。「あらゆる点でね。言ってる意味がわかるならだが」

それから、冷笑した。「今のは冗談だ。まあ、当時の人々は今より小さかった、それは本当だ。だがこの標本が小さいのはもちろん、包皮のごく一部にすぎないからだよ。全部を保存する必要はなかったんだ、戦勝の記念品なんだから」

「記念品？」この話の向から先はジーナには気に入らなかった。だが――意に反して興味をそそられて――もっと近くでよく見ようと、手をのばしてガラスケースの留め金をはずそうとした。

「開けるな！」マーヴィンがどなり、ジーナの手をたたいてひっこめさせた。

「わかったわよ。うるさいわね」

「これがどんなに脆いものかわかってるのか？　おそらく千年以上昔のものなんだぞ！　博物館にあってしかるべきものだ！」

マーヴィンは言葉を切り、目をすがめてジーナを見た。まあ、飛び出た目なので比較にすぎないのだが。

「どこで手に入れた？」マーヴィンは訊いた。

ジーナは精緻で愉しげで説得力のあるうそをつくりあげようかと考えたが、この男を相手に

そんな努力をする価値はないと判断した。そこでただ目を細くして彼を見つめ、煙草に火をつけた。マーヴィンはわざとらしく派手に咳きこんでみせた。
「遠慮してくれないか？　喘息持ちなんだ」
「乗り切りなさいよ」
マーヴィンは何か言いかけたが、ジーナは人差し指を立てて止めた。
「しぃっ」ジーナは言い、聞き耳をたてた。
まただ。遠くのほうで。タイヤが砂利の上をきわめてゆっくりと、静かに静かに動く音。車が忍び足で歩いているみたいに。
「聞こえる？」ジーナは訊いた。
「聞こえるのはあんたの煙草のせいでこっちの胸がぎゅっと締まる音だ。肺が縮んで、ニコチンで真っ黒に――」
ジーナはマーヴィンに煙を吹きつけると、部屋をさらに奥に進んで、非常出口のドアを髪の毛ひとすじほど細く開けた。
外をのぞく。太陽は沈んでしまい、店の裏の人けのない路地は真っ暗だった。ひとつだけある街灯の弱々しいうるんだ光のすじが見えるだけだ。砂利がきしむ音はやんでいた。
奇妙な感覚が背すじを這いあがってきた。もしかしたら、この路地にはまったく誰もいないわけではないかもしれないというような。
「それで、この博物館級の包皮は」言いながら、ジーナは外の路地に目を凝らした。光をほと

んど与えてくれない街灯なんて意味があるんだろうかと考える。「はっきり言って、どれぐらいの価値があるの？」

「五百万」マーヴィンは言った。「そんなところだと思う」

ジーナは肩越しに振り返った。マーヴィンはふたたびルーペを目にはめていた。

「五百万？」

「よくない知らせは、買い手が見つからないだろうってことだな」

「五百万ドル？」

ジーナの肌がぞくぞくと粟立った。心を落ち着けようとマルボロを深く吸いこみ、砂漠から吹きつけてくる夜風の肌寒さにわが身を抱きしめる。マーヴィンのピンク色のまだらが散った頭のてっぺんにキスをしたい気分だった。少なくとも言葉の上では。

五。百万。ドル。

「買い手なら見つけるわ」ジーナは言った。絶対に見つけてやる。

「評判の高いコレクターはこんなものには手を出さないぞ」マーヴィンは言った。「どんなにほしいと思ってもな」

「それなら、それほど評判の高くない買い手を見つけるだけよ」

「五百万もの値段でか？　ふん」

ちょっとのあいだ、マーヴィンは静かになった。

「何？」

CamScannerでスキャン

「ひとりいるな。はっきりと有望な候補者だよ、もちろん。今はパナマにいると聞いてるが」
「パナマ？　何ていう人？」
マーヴィンはしばらく答えなかった。
「いや、いない」唐突に言った。「何でもない。気にするな。忘れてくれ。ただのうわさでしかないんだ。うわさが本当かどうかも疑わしい。まったくのガセだろう、たぶんね」
ジーナは煙草を外の路地に投げた。アスファルトの上にオレンジ色の火花が散り、大型ゴミ容器のあたりで何か動くものが見えたような気がした。
ふたたび緊張する。たぶんただの影だ。たぶん、疑心暗鬼に陥っているだけだ。そうよね？
背後でマーヴィンが爆発するような派手な咳をした。ジーナはぎょっとして飛びあがりかけた。
「しぃっ！」
もう一度路地をのぞく。やはり何もない。すばやくドアを引いて閉め、しっかりと鍵をかけた。マーヴィンがまた咳をした。
「あたしの古代の包皮の上にあんたの菌を撒き散らさないでよ」ジーナはマーヴィンに言った。
マーヴィンはばちんと音をさせてブリーフケースを閉め、ジーナの前に持ってきた。
「この話は終わりだ。こっちはこのブリーフケースの中身とはまったく何の関係も持ちたくない。これを開けたことも調べたことも認知しない」
「臆病者」

「弁護士を探すか、地元の警察に連絡することを勧めるね」
「どうやったら買い手を見つけられるの？」ジーナは訊いた。
「あんたがそれを盗んだやつらに訊いたらどうだ？　そいつらが売ろうとしていた相手は誰だったんだ？」マーヴィンは喘息治療用の吸入器をあてて吸い、せせら笑った。「ま、ばつが悪いだろうな、わかるよ」
ジーナは頭にきて、マーヴィンからブリーフケースをひったくった。
「お世話様」マーヴィンに言った。「それから、フェラチオをあたしがするところを想像していいって言ったわよね？　あれは取り消すわ」

CamScannerでスキャン

17

ヴェーダーのロードランナーは、たしかにそれができた——道路を走ることが。それも華々しく。シェイクはダウンタウンを余分に一周するという誘惑に抵抗できなかった。アクセルをふかすたびに、完璧に調整された426ヘミ・エンジンが愛の睦言を返してくれるのだ。午後十時をまわったころ、クラーク郡の登記所にやってきた。車を停め、何度かちがう角度からロードランナーを鑑賞してから、なかにはいった。

ロビーは、結婚許可申請者たちでこみあっていた。安物のタキシードを着た男たちと、貧乏白人用の安物ながらたっぷりと流れるようなウェディング用の正装に身を包んだ女たちがひしめきあっている。大量のポリエステル製の白いレース、ラインストーンをちりばめたティアラ。二メートル近い長い裾を踏んづけないように、もうすぐ花嫁になる女性たちは両腕で大量の布をたくしあげていなければならない。そしてほぼ全員が酔っ払っているような顔をしていた。

シェイクは安物タキシードとラインストーンのティアラのうしろに並んだ。係員は女性で、前のカップルにネヴァダ州議会は最近、結婚許可証を出すために身分証明書を必要とする旨を

定めたと知らせた。ふたりはその知らせを快くは思わなかった。
「そんなのおかしいぞ！」男が言った。
「嘘ばっかり！」女が言った。片手で大量の裾をたくしあげ、もう一方の手にはビールがいっぱいに詰まった長さ九十センチのプラスチック・チューブを持っている。こちらのほうがフィアンセよりも酔っ払っていたが、たいした差ではなかった。
「わたしもそうでないといいと思ってます」窓口の女性はため息まじりに言った。彼女はかわいかった――だからこの列を選んだのだ――が、酸欠が長らく続いたような濁った目をしていた。
「そんなたわごとをぬかすのは誰だ？」男が問いただす。
「ネヴァダ州議会です」係員は言った。
「うそっぱちだ！」
シェイクは一歩前に出た。「ちょっと失礼」男に言う。「だけどリノなら身分証明書は必要ないんだよね」
男はくるりと向きを変えたが、勢いあまってまわりすぎ、シェイクと向き合うまでちょっともどるはめになった。
「ほんとか？」
「本当だよ」
「リノか」男がその情報を解析しようとしているあいだ、未来の花嫁はビールを十五センチは

とぐいぐい飲んだ。「どれぐらい遠い？」
「リノかい？　半時間ぐらいだな、おそらく。ハイウェイ95号線をまっすぐ北上すればいい。絶対に見落とす心配はない」
未来の花婿の顔に抜け目のない表情が広がった。男はくるりと係員のほうに向き直り、カウンターを手のひらでバシンとたたくと、勝ち誇った目でにらみつけた。
「ふん！」男は言った。
そしてどかどかと出口に向かった。未来の花嫁は急いであとを追った。ずるずると（靴を）引きずり、ばしゃばしゃと（ビールを）はね散らしながら。
シェイクはカウンターの前に進み出た。係員は微笑みかけた。
「リノでも身分証明書は必要なのよ、知ってるでしょうけど」
「そうかい？」
「それにここからじゃ、半時間よりはかなりかかるわ」
「いい勉強になるさ」シェイクは言った。
「ありがとう」係員は言った。
彼女の肘の内側に興味深いタトゥがあった。カエルだ。この女性に言い寄る男はみな、このタトゥが大好きだと言うにちがいないと、シェイクは想像した。だからそのかわりにこう言った。「その腕のタトゥを入れたのはきっと、きみの人生で最悪のまちがいだったんだろうな」
「ええ」係員は笑った。彼女はこれまでは彼を気に入っていたが、今は――もっと重要なこと

だ——興味をそそられてもいた。「どうしてそんなことを言うの？」
「それは、きみに言い寄る男はみんな、そのタトゥが大好きだって言うに決まってるからさ」
彼女はシェイクを見つめた。彼の狙いを探ろうとする。それから、結婚許可証を求める酔っ払いどもの相手をするより、彼の狙いを探ろうとするほうがずっと楽しいことに気がつく。
「それじゃ、あなたはわたしのタトゥが好きじゃないの？」彼女は訊いた。「それとも好きなの？」
「その質問に答えるのは、本来の用事がすんでからだ。個人的な関係ができたせいで、きみの職業的判断を危うくさせるのはいやだからね。いいだろう？」
彼女はもう一度笑った。「いいわ」
「ラスヴェガスのストリップ・ダンサーたちだが」シェイクは言った。「働くためには保安官の認可証が必要なんだろう？」
「そのとおりよ」
「そしてきみのところにはそういう認可証の情報の記録があるよね？」
「ええ、でも——」
「その情報を外部に出すことは許されていない」
「ごめんなさい」
「妹なんだ。昨夜泣きながら電話してきて、今は携帯電話に出ないんだ」
「本当に無理よ」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「妹の新しい彼氏は妹をぶちのめすのが好きなやつなんだ。サンフランシスコから車を飛ばしてきたんだよ、なのに何をしたらいいかわからないんだ」

係員は迷っていた。シェイクはちょっと心がとがめた。どうしても必要というとき以外はなるべく避けるようにしていた。ヴェーダーの義理の姉に嘘を見破られたときは、かえってほっとしたくらいだった。

いやちがうぞ、と苦笑しながら修正する。実のところは、嘘をつくのがそれほどうまいわけじゃない。ジーナに比べれば。

「気にしないでいいよ」シェイクは言った。「こんなこと、訊いたこと自体がまちがいだった」

「あなたはその子のお兄さんなのね？」係員は言った。「彼女が働いてるクラブのストーカー客とかじゃないのね？」

「とんでもない、絶対にそんなのじゃない。誓うよ」

彼女はじっとシェイクを見た。それが本当だと感じとったようだ。そのとおりなのだから。

「妹さんの名前は？」

「ジーナ・クレメント」

係員は奥に行った。一分ほどして、細長い紙片を持ってもどってきた。紙片をシェイクに渡す。

「もし明日の夜、ぼくがまだこの街にいたら」シェイクは彼女に言った。「ここに寄ってきみ

をディナーに誘うよ」
それも本心だった。
「あら、そう？」彼女は笑いながら言った。それから、シェイクが背を向け、戸口に向かって歩きはじめたときに、「ちょっと」
「何だい？」
「わたしのタトゥを好きかどうか、まだ教えてくれてないわ」
「たぶん、きみのもうひとつのほどは好きになれないと思う」
彼女は顔を赤らめた。シェイクはウインクして、ドアを押し開けた。

その複合アパートの建物は、胃腸薬のペプトビズモルの色に塗られた日干し煉瓦ふうのコンクリートの、とりたてて特徴のない箱が並んでいるようだった。看板は〈マウンテン・パームズ〉と謳っていたが、あたりにヤシの木は一本もなく、いちばん近い山も近いとは言えなかった。

シェイクはB棟の金属階段を上がって二階へ行き、２０１号室のドアをノックした。のぞき穴の明かりが暗くなった。それから、かなり長い間ののち、ふたたび明かりがもどった。バスローブをまとったラテン系のかわい子ちゃんがドアを開け、防犯チェーンの長さの隙間からシェイクを見た。
「ハーイ」彼女は言った。獰猛な黒い目をシェイクに向け、噴霧器の缶をからからと振ってみ

CamScannerでスキャン

せた。「今すぐ催涙スプレーをかけてほしい？　それとも夜中の十一時にドアをノックしたのはどうしてなのか、くそったれた理由をあたしに言うまで待ってほしい？」
「待ってほしい」シェイクは言った。「絶対に」
「聞いてやろうじゃないの」
「友だちを探してるんだ。ジーナ・クレメントだ」
ラテン娘の黒い目から獰猛さが消えた。
「ジーナがあんたにここの住所を教えたの？」
「まあね」
ラテン娘はドアを閉めた。チェーンがはずれる音が聞こえた。ドアがふたたび開いた。今度は全開で。ラテン娘は今にも泣き出しそうな顔をしていた。
「信じられない、あんたにここの住所を教えたなんて」
「おれはシェイクだ」
「ルーシーよ」
「業務記録カードにここがのってたんだ。ジーナはここに住んではいないのか？」
ラテン娘の黒い目にふたたび獰猛な色が宿った。「そうよ、あの子はここには住んでない。あたしはあの子と会ってないわ。あの子を見たら殺してやる。だからもしあんたがここに来た理由がそれなら、列に並びなさい」
「ちょっとその催涙スプレーをしまう気はないかい、ルーシー？」

「ああ」ルーシーは、安全性にあまり注意を払わずに振りまわしていたスプレー缶をバスローブのポケットにしまった。

「ジーナがどこにいるか知らないか？」

「月にでもいるんじゃない？　知るもんですか。この街からずらかったのよ、ええと、一週間前に」

「もどってきてるんだ」シェイクは言った。

「どうかしら」ルーシーはシェイクを見やった。「じゃ、あんたがあの子の最新の相手？」

「きみの言う〝最新〟の意味によるな」

ルーシーは鼻を鳴らした。シェイクの言う意味が理解できたようだった。

「あの子がよく行ってた場所があるわ」ルーシーは言った。「あの子の知ってる男のハウスボートがそこにあるの」

「ミード湖か？」

「その男の名前は知らない。ダブニー・何とかだっけ。もしかしたらそっちが名字だったかも。あの子、あたしのことを何か言ってなかった？」

「きみのこと？」

「ただの通りすがりとか、ほら――」

「そう思うよ」シェイクは礼儀上言った。「きみのことを話してた」

「ミード湖、そうよ。でもぐずぐずしてちゃだめよ」不意にルーシーはふたたび、泣きだしそ

CamScannerでスキャン

うな顔になった。「あたしだってあの子を探しに行ってみたもの。ええと、百回ぐらい」

シェイクは〈マウンテン・パームズ〉の駐車場をつっきった。左手にストリップのきらめく明かりの連なりが見えていた。何キロか向こう、地平線の上にくすぶるように。右手の空は暗く深く、濃厚だった。星もいくつか見てとれた。

ミード湖。

シェイクはやれやれと首を振り、ヴェーダーのロード・ランナーの運転席に乗りこむと、スタートさせた。

18

ルーシーは男が歩み去るのを見送った。ドアを閉め、ボルト錠をしめ、ふたたびチェーンを掛けた。

「彼、なかなかイケてる、でしょ？」ジーナが言った。ソファの上に長々と寝そべり、素足をコーヒーテーブルの上にのせてリンゴを食べている。右足の中指には、ルーシーが以前贈った銀のリングがまだはまっていた。出会ってから二、三週間たったころの週末に、ビーチへ小旅行したときのことだ。ヴェニスの板張り遊歩道（ボードウォーク）で見つけた瞬間、これこそ完璧な贈り物だとルーシーは直感したのだ。

（はずしてちょうだい、お願いだから）そうジーナに言いたかったが、言わなかった。

「あれは誰なの？」ルーシーは言った。

「あら、ただのLAからあたしを乗せてきてくれた男よ」ジーナは言った。

「そうなんでしょうね」

「あら、ちょっと、おバカなルーシーちゃん。妬（や）かないでよ」

「妬いたりしてないわ」ルーシーは言った。本心からだった。ただばからしくてもの悲しくなっただけだった。「ただばからしくてもの悲しい気がするだけよ」

ジーナは立ちあがってルーシーのところに飛んでくると、両腕でルーシーを包みこんだ。

「そんなこと言わないでよ！　あんたはばかじゃない。あんたは誠実で愛情にあふれてる。それって人としてすばらしい資質なのよ」

「ゴールデン・レトリーバーとしてね」

だがルーシーは身体を離さず、ジーナはルーシーをかたく抱きしめ続けた。まるで、純然たる自分の意志の力だけでルーシーに何でも信じさせることが、何でもやらせることができる、どんなものにでも変えることができるとでもいうように。

もちろん――ルーシーは知っていた――彼女にはそれができる。

ジーナはルーシーが一緒に寝たふたりめの女の子だった。ジーナを知るまでは、ルーシーはそういう意味でほかの女の子のことを考えたことはめったになかった。

ルーシーは目を閉じて、ジーナを深々と吸いこんだ――ピーチと煙草と溌剌とした生命力の香りを。ルーシーが目を開いたとき、ジーナの目はルーシーの肩のむこうを見ていた。

当然だ。

「本当にいなくなったか確かめなきゃ」ジーナは言った。

ルーシーはため息をついて、窓辺に行った。ブラインドの隙間からのぞく。下の駐車場で、あのシェイクという男は車のドアロックをはずしていた。そう、たしかにイケてるっぽい。そ

う認めざるをえなかった。男が砂利を蹴りつけるのを見守る。どんな窮状だかは知らないが、ジーナのおかげでそれに陥ったことに気づいたのだろう。それがどういう気持ちか、ルーシーは知っていた。自分では気づかずに、やれやれと首を振る。男は車に乗り、走り去った。

「行ったわ」ルーシーは窓に背を向けた。ジーナはすでにかつらをつけていた。長い三つ編みおさげを両側に垂らしている漆黒のやつだ。ルーシーがときどき、原宿スタイルのファッションをしてステージで踊るときに使う小道具だ。

「あっそ」ジーナは言った。

「あんたってイカれてるわよ、わかってるでしょ」ルーシーは言った。「あんたのせいで、あたしまで一緒に殺されちゃいそうよ、ジーナ」

ジーナはただ笑みを浮かべただけで、リビングルームの姿見で自分の姿を点検していた。耳にはさんでいた煙草を取り、ライターを探してあたりを見まわした。ルーシーがこれまでに百万回となく、こう言っているというのに――「お願いだから煙草はベランダで吸って」

こんなのは健全な関係とは言えない。ルーシーは想像してみようとした。もし今すぐ――今まさにこの瞬間、一瞬の躊躇もなしに――携帯電話を持ってバスルームにはいり、内緒のEメールをジャスパーに送ったら、どんなに解放された気分になるだろう。あんたが探してる相手が今ここ、あたしのアパートでソファにすわってるわよとジャスパーに教えてやれたら。

短いメッセージひとつ送るだけで、永久にジーナとおさらばできるのだ。

「ちょっとトイレに行ってくるわ」ルーシーは言った。罪悪感と不安と喜びと恐怖でぞくぞく

CamScannerでスキャン

する。絶対に実行することはないとわかっていても。
「いいわよ」
「携帯も持ってはいるわね。もしかしたら、メールをひとつふたつ送るかも」
「行ってらっしゃい、大砲ルーシーちゃん」
ルーシーはため息をついて、ソファにすわりこんだ。
「トイレに行くのかと思ってたわ」ジーナが言った。
「煙草を吸うんなら、ベランダで吸ってもらいたいんだけど」
「あのシェイクって男、かなり有能なのよ」ジーナは考えこむように言った。満足げな顔をして。「いつか彼、本当にあたしを見つけ出すかも」

CamScannerでスキャン

19

ジャスパーは片足をパイプの左側の壁にあて、もう一方の足をパイプの右側の壁にあてた。両手でパイプを包みこみ、ぐいとひっぱる。パイプははずれたがらなかったが、しばらくすると選択の余地がなくなった。あちこちから水が噴き出し、ミスター・モビーに会いにいく前に自宅に帰って服を着替えなければならないという口実をジャスパーに与えてくれた。

手錠もまだがっちりと手首にはまっており、それも、錠前師ではないが道具をすべてそろえている友人のトレーラーに立ち寄らなければならないという口実を与えてくれた。

八時すぎにクラブについた。今夜はグリースでてからせた長い前髪を目にかからせている若い用心棒、店の子たちみながロックスターか何かのように思っているやつが勤務番だった。そいつはいつも愛想よく慇懃な態度をとっているが、ジャスパーは何か気に入らなかった。もしかしたら、そいつがあまりに愛想がよすぎ、あまりに慇懃すぎるためかもしれないが、ジャスパーにはよくわからなかった。もしかしたら、そのロックスター野郎が、どんな健全な評価基準においてもそんなことはないのに、自分はイケてると思っているせいかもしれない。もしか

CamScannerでスキャン

したら、あるときロックスター野郎がジャスパーにこう言ったせいかもしれない。絶対ルーシーは3Pのやり方を知ってるぜ、なあ、おれの言ってる意味がおまえにわかるか、ヒッヒーッ？　ジャスパーはうなずいただけだった。ロックスター野郎のようなやつに本心を知らせる必要などあるものか。

「よう、ジャスパー！」ロックスター野郎がグリースでてからせた長い髪をさっと振りたてた。そのせいで、前髪が最初以上に目にはいることになった。「調子はどうだ、おい？　元気か？」

もしかしたら、ほかのどの理由よりもこいつが気に入らないのは、二十二歳のころのミスター・モビーはこういうふうだったのではないかと想像させるところかもしれない。まだか細いながらも、今後の人生で手を染めることになるさまざまな悪事を早くはじめたくてうずうずしている鞭（むち）のようだったころの。

とはいえ、このロックスターがミスター・モビーと同じくらい頭がよさそうだというわけではない。そんな人間はほとんどいない。そのことを生きとし生ける神の創造物はすべて神に感謝するべきだとジャスパーは思う。

ジャスパーのような人間がたくさんいないことについても、おそらくみなは神に感謝するべきなのだろう。それについて、ジャスパーは異論を唱えはしない。

「その鼻はどうしたんだい、お仲間？」

「折れてはいない」ジャスパーは言った。錠前師ではない彼の友人は医者でもないが、そのための道具もすべてそろえていた。その友人がジャスパーの鼻を見て、大丈夫だと宣言したのだ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「ミスター・Mはどこだ?」
「電話があった。真夜中ごろにやってくるそうだ。あんたに待ってるように言ってたぞ。えらく機嫌が悪そうな声だったぜ」
ジャスパーは鼻に手をふれ、白いカプセルをさらに二個飲んだ。今日一日はひどいはじまりかただと思っていた。だがさらに——ありえないことだが——いっそうひどいことになってしまった。それが今になって、ついに最悪の絶頂に達するかというときに、一日がだらだらと間延びしてきたのだ。車に轢かれた動物が車の下にひっかかってさらに四時間ものあいだ引きずられていくようなものだ。
「待ってるあいだ、何か飲むか?」ロックスターが訊いた。
ミスター・モビーはありとあらゆる悪口雑言を駆使してジャスパーを罵倒した。つばが飛び散り、つばのついた歯がぎらぎらと光っていた。
ジャスパーは無表情で罵倒に耐えた。ミスター・モビーの耳のすぐ左の一点をじっと見据えて。こういう反応がミスター・モビーの怒りを緩和するのか、いっそうあおりたてるのか、ジャスパーにはわからなかった。だがジャスパーは生まれつき無表情で、それ以外のふるまい方を知らなかった。それに、こんなことになった以上、罵倒されるのも文句は言えなかった。
「おれはおまえをどうすればいいかわかるか、このとんまのくそ野郎?」
ミスター・モビーが自分にどういうことをするか、考えたくはなかった。ミスター・モビー

がロサンジェルスやシカゴから雇った男たちにどういう仕事をさせるかということも。そういう男たちは通常、飛行機に乗ってやってきて、その日のうちに帰っていく。

ジャスパーももともとはそうした男たちのひとりだった。そういう経歴を経て、今の仕事に落ち着いたのだ。

「いったいくそどうして、どっかのとんまな前科者の使い走り野郎が、おれがこのくそ一週間、夜も昼も費やして探していたあのくそ女を連れて逃げ去るようなことになるんだ？　おまけにあのくそブリーフケースもだと？　いっそのこと、そのくそったれ野郎におまえの車のキーとくそ腎臓もくれてやりゃよかったんじゃないか、この能無しとんま野郎？　おれのような地位にある者がこんな日に遭うとは、同業者の目にどんなにくそ恥ずかしいことかわかるか？」

ジャスパーが報告するより前に、ミスター・モビーはLAのアルメニア人組織と話をしていたが、そのことで、ジャスパーの立場が少しでもましになったわけではなかった。

ミスター・モビーは息が切れたため深く息を吸いこみ、それからげっぷをした。彼はデブデブに太っていたが、陽気なタイプの太り方ではなかった。また、今にも心臓発作を起こしそうに見えるような、ひ弱なタイプの太り方でもない。ミスター・モビーのような男がおめおめと心臓発作に忍び寄らせて殺されるようなことを許すと思うなら、愚かとしか言いようがない。

「くそったれめ、ジャスパー」ミスター・モビーはそれほど大きな声ではなく、つばもそれほど飛ばさずに言った。「おれはおまえを頼みにしてるんだぞ！」

これはほかの何よりもジャスパーにはこたえた。

「ふたりを見つけます」
「絶対に見つけろよ、くそ、絶対だぞ！」
それから突然、ミスター・モビーはデスクの椅子にどすんとふたたび腰を下ろし、くっくっと笑った。
「今度の件で昔の日々を思い出したよ。認めざるをえんな」
ジャスパーはあえて質問するようなばかではなかった。
ミスター・モビーは一分ほどそうしてすわり、デスクの椅子のなかで身体を揺らしながら、何か愉しげな記憶をしみじみと味わっているようだった。
「ラオスでのことはおまえに話したことがあるか？　六〇年代のことだが？」
ジャスパーは返事をするようなばかではなかった。
「もしかしたら、おれの活力をもう一度勢いよくめぐらせるためにはこういうことが必要だったのかもしれんな」ミスター・モビーは言った。「ちょっと軟弱になりかけてた」それからさらに一分ほど、人生の今ほど軟弱でなかったころの愉しげな記憶を味わっていたが、ふたたびジャスパーに気づき、またもや罵倒しはじめた。

CamScannerでスキャン

20

ジーナは駐車場の反対側に、〈ジャングル〉の正面入り口がはっきり見通せる角度でタウンカーを停め、ライトを消した。助手席のルーシーはまたもや、この計画をやめさせようと説得を開始していたが、ジーナはうわの空で、半分しか聞いていなかった。いや、四分の一にすぎないかもしれない。彼女の頭は忙しく働いていた。

▼正面入り口を見張る。

▼原宿スタイルの変装がうまくいきそうかどうか、確率を計算する。

▼マーヴィン・オーツから、包皮の買い手がいると思われる場所を聞いて以来ずっと頭のなかに流れているヴァン・ヘイレンの歌〈パナマ〉を無視すべく努力する。

▼明日ミード湖の陽射しに灼かれながらシェイクが必死でジーナを探しまわり、まったく何も見つけられないでいるところを想像する。

▼五百万ドルのさまざまな使い道を考える。

自分で起業したいことははっきりしていた。どこかのばかのように、服だの宝石だの、保険をかけるだけでひと財産かかるような高価な車だのにお金を浪費する気はないこともはっきりしていた。まあ、もちろんいくらかはそういうことにお金を浪費するだろうが、そのあとは忙しくなるだろう。いろんなアイデアが山ほどあった。それも、クラブ客が満杯になって世界が希望と可能性に満ちているように思える前の、夕方早くのけだるい時間にそこらのストリッパーが夢想するような、愚かで中途半端なくそみたいなアイデアではない。たとえばルーシーは、おめでたいことにモビーから奪った金の自分の取り分を使って犬のためのディズニーランドをつくりたがっていた。ジーナは説得してやめさせようとしたが、ルーシーは頑としてゆずらない。彼女はテレビに出ているオプラ・ウィンフリーだか誰だかのせいで、自らの情熱にただ従っていれば巨万の富を築けると信じているのだ。

ジーナはそんなことはないと知っていた。そういうのは心温まるお涙ちょうだいのたわごとのひとつで、現実的な根拠は何ひとつないのだ。

ジーナは知っていた。最高の金持ちたちは、退屈だが頭のいいやり方で金持ちになったのだ。退屈だが頭のいいことをいろいろとやるという方法で。どんな手段であれ、巨万の富を築いてやるという情熱を持つことで。

ジーナのアイデアのひとつはこうだ。高級ドライクリーニング店のチェーン展開。店は木張りの床で照明をふんだんに使い、すわり心地のいい椅子を置いて、ドライクリーニング臭は

CamScannerでスキャン

いっさいさせない。オフィスに出勤する途中で服を置いていくと同時に無脂肪の最高級ヴァニラ・ラテを買うことができる。

わかる？　たいていの女がいやがる雑用を引き受け、しかもそれほどいやでないものにしてやるのだ。忙しいビジネスウーマンに、一ヶ所に立ち寄るだけでふたつの雑用（ドライクリーニングに出す、ラテを買う）を片づけるチャンスを与えてやるのだ。これこそ一石二鳥というものだ。

それは自分の会社につける名前にいいんじゃないかと、ジーナは思った。〈一石二鳥〉。そう、それこそが彼女の支持する哲学だ。

ひとつだけ、たしかなことがあった。いくらおもしろそうな計画でも、それを実行するのに今後の人生すべてを費やすつもりはなかった。小さな声がこうささやいていた。あんたが年を取ればとるほど、計画はおもしろみの少ないものになっていくわよ。

「わかった？」ルーシーが言った。

「わかったわ」ジーナは言った。まったく注意を払っていなかったので、ルーシーが何を言っているのかまったくわかっていなかった。「そうする」

そしてルーシーが膝の上に置いていた手をぎゅっと握りしめた。ルーシーは握り返してきた。ジーナは一瞬、ちょっといちゃいちゃする時間はあるだろうかと考えたが、すぐにそんなたわごとは吹っ飛んだ。

もしこの車にシェイクも一緒に乗っていたらとジーナは考えた。ワオ、そしたら三人ともに

愉しめそうなのに。
ルーシーの太腿を指先でなぞる――ルーシーの脚は世界一官能的ですらりと美しい――がそのとき、おっとだめ、遅すぎる、〈ジャングル〉のドアが大きく開いた。駐車場にまで明かりがあふれ、〈クジラ〉がどたどたと出てきた。彼が怒っているように見えると言うのは、とんでもなく控え目な表現と言えた。あとに従ってきたジャスパーが不幸そうに見えると言うのは、さらにひかえめな表現と言えるだろう。
「何かひどい知らせを聞いた人みたいね」ジーナは言った。
モビーとジャスパーは駐車場の〈クジラ〉の車に行き、乗りこんで、走り去った。
「ジーナ――」またもや、ルーシーが説得をはじめようとした。
ジーナはルーシーの唇に人差し指を押し当てた。「しぃぃっ」彼女は言った。
ドアを守っている用心棒は、かつらをつけて化粧をしたジーナを見破れなかった。
ルーシーは、ありがたいことに完璧に冷静にふるまってくれた。
「深夜勤のぷりっぷりの新人よ」そう男に言い、ジーナを押して一緒にクラブにはいっていった。
〈クジラ〉の事務室の鍵は、先週ジーナが廊下の先から〈クジラ〉が歩いてくるのを見つけたときに置いたとおりの場所にあった――カーペットの上、にせのシダの鉢植えのすぐ陰の壁ぎ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

わに。運がいいのはたしかだが、〈ジャングル〉のコカイン浸りのドミニカ人守衛たちのチームには名折れと言えそうだ。
ジーナは膝をつき、ルーシーに借りたラメできらきらしているつま先がのぞいているスタックヒール・サンダルのストラップを直すふりをした。廊下には誰もいなかったので、鍵を鍵穴にすべりこませた。
「ぐるるる」ジーナは言った。「ちっくしょう」
「何？」ルーシーが訊いた。
「あのとんま、鍵を替えやがった」
「そんなことだと思ったわ。言ったでしょ。それに、〈クジラ〉はついに金庫を買ったわよ」
「今回は金庫を開ける必要はないのよ」
「ねえお願いよ、ジーナ。こんなことは忘れて、もう――」
「心配はいらないわよ。鍵の開け方は知ってるから」
本当に知っているわけではなかった。だが、錠前破りをするところを見たこともあったし、かつての客からやり方の説明を聞いたこともあった。どれほどのものだっていうのよ、そうでしょ？
「もし〈クジラ〉がもどってきたら？　もどってくることはよくあるわよ」
ジーナは数週間前にかつての客から借りた錠前破りセットを用意してきていた。まさにこういう事態を予測してのことだ。

CamScannerでスキャン

ジーナは鍵穴にピックをすべりこませ、ピックの先で周囲を探った。何か、押し下げられそうなものが感じられた。それから、もう一本のピックをすべりこませ、指導を受けたとおりに両方のピックをまわすように動かした。

カチリという鋭い音がしたとき、ルーシー以上にジーナのほうが驚いた。

「ちょっと！」ジーナは言った。「どうやったのよ、あたしってば？」

ルーシーをせかして〈クジラ〉の事務室にはいり、ドアを閉めた。

「電話線とコンピュータのコードを抜いて」ルーシーに言う。それはただ、彼女を忙しくさせて、取り乱すのを防ぐためだった。

ジーナはモビーの回転式住所録を手早く繰っていった。残念ながら、それは巨大サイズで、住所カードは三百から四百枚はありそうだった。だが、あわてて失敗するわけにはいかない。これは一回きりのチャンスだということは重々わかっていた。

ルーシーは電話線とコンピュータのコードを抜き終え、ドアのそばに立っていた。ぎゅっと目を閉じ、取り乱す直前の緊張状態に陥っているように見える。それはこの状況下では、ジーナには好都合だった。彼女がおとなしくしていてくれるかぎりだが。

でも、実のところは、くそったれと言いたかった。これは永遠に時間がかかりそうだ。

「そのいまいましいものをまるごと持っていきましょうよ！」ルーシーの声はとげとげしく、パニックを匂わせていた。

ジーナは回転式住所録を順序正しく繰る作業を続け、目を上げなかった。

CamScannerでスキャン

「何かがなくなってることを気づかれるわけにはいかないわ」ジーナは言った。「それが大事なの」頭を軽くたたいてみせる。「わかる？　常に考えることよ」

そしてようやく、ほとんど最後に近いところに――それはあった。きっとこれだ。

ローランド・ジーグラー　パナマ

住所はなかったが、電話番号はあった。

「行きましょ！」ルーシーが言った。

ジーナはローランド・ジーグラーの電話番号を手首の内側にボールペンで写し取り、それからカードをもとの場所にもどした。

「いいわよ」ジーナはにっこりして言った。またしても頭のなかいっぱいに、エディ・ヴァン・ヘイレンのオープニングのリフが鳴り響きはじめた。

〈パナマ……アア……アア〉

駐車場にもどると、ジーナは両手でルーシーの両手を取った。

「あんたがあたしのためにしてくれたこと全部、本当に感謝してるわ、ルーシーちゃん」

「あたしも一緒に連れてって」

「危険すぎるわ。お金がはいったらすぐに電話する。それからマウイ島あたりで落ち合いま

しょ」
「嘘よ、あんたは電話なんかくれない。あたしたちが落ち合うことはない」
「約束するわよ！　本当よ！」
ふだんのルーシーはあまりややこしい性格ではない。が、今ルーシーが向けた笑みを見て、ジーナは驚いた——あきらめと、おもしろがるような興味と、怒り。失恋の悲しみと同時に安堵も。
「約束よ」ルーシーは言った。
「約束するったら！」ジーナは抗議した。だがそれ以上続けるより先に、ルーシーがすばやくキスをして黙らせた。
「気をつけてね、いいわね？」ルーシーは言った。それからくるりと背を向け、歩いていき、〈ジャングル〉の東側を流しているタクシーを呼び止めた。
マウイ島のことが嘘だって、どうしてルーシーにわかったのだろう。ジーナは感嘆した。ジーナ自身、ほんの一秒前までそのことに気づいてもいなかったというのに？
その疑問と、ルーシーが笑みも見せず、振り返って手を振りもせずに歩み去ったこととが、ジーナをちょっと感傷的な気分にさせた。
タウンカーに乗りこんでエンジンをかけ、それから窓を下ろした。夜中のこの時間、午前三時の砂漠からの風はこの上なく涼しく、この上なく甘美だったからだ。
だが、ギアをドライブに入れる前に、馬力のある真っ赤な車がすぐ前に走ってきて、行く手

をふさいだ。
ジーナは興奮の小さな戦慄が走るのを感じた――戦いだ！　戦いだ！
シェイク！
シェイクが出てきて、開いた窓枠に両腕をのせ、にんまりと笑った。
ジーナは笑い返した。

CamScannerでスキャン

21

「ミスター・ヴァニラ・シェイクじゃないの」ジーナは言った。
「きみみたいなすてきなお嬢さんがこんなとこで何をしてるんだ?」シェイクが言った。
あれだけのことをされてジーナに腹を立てるのは当然だとシェイクは思っていたし、実際腹を立てていた。だがそれ以上にほっとしてもいた。とりわけ、彼女が盗んだブリーフケースが彼女の背後のバックシートに横たわっているのを見たときに。
そして、奇妙なことに、ほっとする以上に、もう一度彼女に会えたことがうれしかった。ライトを浴びて淡いグリーンにきらめく瞳。ちょっと歪んだ笑み。興味をそそる鼻の上を横断して散らばる淡いそばかす。はじめて見たときから、シェイクはジーナの顔を気に入っていた。が、その裏にある本性をかいま見て知っている今は、いっそうそれが魅力的に思えた。
「わかってたわ」ジーナは言った。「そんな気がしてた」
「そうか?」
「あんたがあたしたちをつけてたってことはね」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「きみのセクシーな友だちは、嘘つきの技量ではきみの足元にも及ばないな」
「あの子は純粋で正直な、黄金の心の持ち主なのよ」ジーナは打ち明けた。
「きみの心は何でできてるのかね？」
ジーナは嘲笑った。「今日び、心なんて誰が必要としてる？」
バックミラーにちらちらと目をやっているジーナに、シェイクは助け舟を出してやることにした。
「きみのうしろには車が一台停まってる。きみの前にはおれの車が停まってる。どこにも行けやしないよ」
「どうしてあたしがどこかに行きたがったりするの？」ジーナは驚いたように言った。いかにも真に迫っているようにシェイクには思えた。願望もまじっているかもしれないが、少なくとも一部分は本物かもしれない。
それから、「あたしよりセクシー？」
「そのボカホンタスかつらをはずせばね」シェイクは言った。「そいつはきみには似合ってない」
不意に彼女は二本のおさげがさがっている黒髪のかつらのことを思い出したと見え、かつらをむしり取った。
「さっきの質問に答えてくれない？」ジーナは言った。
「セクシーってのは主観的なものだ」シェイクは言った。「見る者の目によるしね」

「そういう答え方って、ある種の女の子たちには本当にうまくいくの？」ジーナはおもしろがるように言った。「それほど興味はもってないっていうふりをするときに？　さっとかわして、向こうに疑問を残すのが？」

「きみはあの黄金の心とすばらしい脚を持つ友だちよりもセクシーだよ」シェイクは認めた。

「そうだ」

「あれって相当きつかった？」

シェイクは笑みを浮かべた。自分の脚は張り合えるかとジーナが考えずにいられないことが見てとれたからだ。だがジーナはそれを彼に知らせるはずがなかった。

「前にも考えてたんだけど」ジーナは言った。「あれって『白雪姫』みたいだったわね。知ってる？　邪悪な女王が狩人に命じて白雪姫を殺させようとするの。狩人は白雪姫を森のなかに連れていくんだけど、かわいそうに思って逃がしてやるのよ」

「笑っちゃうね。白雪姫が狩人に一服盛って、バスルームの洗面台に手錠で繋いで金をくすねるなんて話だった覚えはないぞ」

「絶対そういう話だったわよ。DVDを借りて見てみるといいわ」

そう言ってジーナはにっこり笑い、ギアをバックに入れると同時に、ハンドルを思いきり右に切ってアクセルを踏んだ。タウンカーの鼻先が不意に左に向き、シェイクにぶつかって尻もちをつかせそうになった。後部バンパーがうしろに停まっていたホンダ・シビックにがつんとぶつかり、タウンカーよりずっと軽量のシビックは横に傾いた。ジーナはタイヤの向きを変え、

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

バックのままものすごい勢いで隙間から抜け出した。
「くそッ」シェイクは言った。あわててヴェーダーのロードランナーにもどり、追いかけた。先まわりをして退路をふさぐべく、駐車場の出口に向かったが、ジーナはそれを予期しており――まだバックギアのまま――シェイクのうしろの縁石を飛び越えた。シェイクがストリップに出たころには、ジーナは少なくとも四、五ブロックは前方にいた。
せいぜいがんばってみるがいいさ。シェイクは考えた。この世のリンカーン・タウンカーで、四百メートルを十三秒で走れる一九六九年式プリマス・ロードランナーとレースして勝てるものがあるか。たとえ――と謙虚に考える――走らせているのが運転のプロだってことを差し引いたとしても。
心臓の鼓動ひとつ分のあいだに、タウンカーとの距離をぐっと詰める。
ジーナは二台のタクシーのあいだをスラロームして抜け、直線路を突っ走った。
「ふっ」シェイクはバックミラーからミニチュアサイズの輪縄で絞首刑のようにぶらさがっているミニチュアサイズの小人の人形に向かってつぶやいた。「あの娘も運転はできるってことか」
シェイクはジーナが抜いたのと同じタクシー二台をスラロームで抜いた。ジーナがバックミラーでちらりとこちらを見た。シェイクはハンドルから人差し指をあげ、振ってみせた。
「道路をよく見たほうがいいぞ」ストリップの南端に近づいたあたりで、シェイクはジーナに助言した。そのあたりは午前三時だというのに、交通量はかなり多くなっていた。前方の

〈ヴェネシャン〉ホテルの向かい側で接触事故が発生し、南行き車線のほとんどがふさがれていた。
ジーナは急ブレーキを踏み、市バスの後部から三十センチ手前でタイヤを鳴らして止まった。
シェイクも何台か車をはさんだうしろで止まり、ヴェーダーのロードランナーから降りた。
街角にいた酔っ払った物乞いがシェイクに気づいた。物乞いは周囲を見まわして自分が今どこにいるかを思い出し、それに合わせて声の高さを調節した。
「トモダチ」物乞いは言った。「兵隊さんにちょっと何かくれないかね？」
シェイクはヴェーダーのロードランナーのキーを投げてやった。
「あんたにやるよ」シェイクは言った。「ちゃんとあつかってやってくれ」
物乞いはキーを見た。車を見た。
シェイクは歩いて、車の列ぞいに前に進んだ。ジーナはクラクションを鳴らしていたが、車の列はほとんど動きはしなかった。シェイクはジャスパーの四十五口径銃の銃身で、ジーナの助手席側の窓をノックした。
ジーナはもう一度いらだちまぎれにクラクションを鳴らしたが、それからボタンを押し、ドアロックを解除した。
シェイクは彼女のとなりに乗りこんだ。
「そっちの言い分を聞こうか」シェイクは提案した。「どこか静かに話しあえるところに行くか？」

CamScannerでスキャン

22

〈シーザースパレス〉に向かうあいだ、ジーナのはらわたは煮えくりかえっていた。シェイクは車を路肩に寄せて大きな屋内駐車場に停めるよう、指示した。ジーナがエンジンを切ると、手を差し出してきた。ジーナは一瞬、何を求められているのかわからないというふりをした――一応やってみる価値はあると思ったのだ――それから車のキーをシェイクの手のひらに落とした。シェイクはキーをダッシュボードの上に置いたが、銃は手に持ったままだった。

本当に撃たれるとは思っていなかったが、以前その手の判断を誤ったことがあったので、おとなしくふるまうことにした。

おかしい？　ある意味、彼につかまえられたことがうれしかった。というより、自分をつかまえるのが誰かだとしたら、それがシェイクだったことがうれしかったと言うべきだろうか。

シェイクはいい匂いがしていた。ラベンダーのような。

「シャワーを浴びたの？」

「いいや」シェイクは言った。「だがシャンプーは使ったよ。気づいてくれてありがとう」

「まさかあたしを引き渡すつもりじゃないわよね？　〈クジラ〉は悪いやつなのよ、シェイク。嘘じゃないわ」
「だからやつからむしり取るのがいい考えだと思ったのか？」
ジーナはくすくす笑った。「それじゃ、あの話を聞いたのね？」
「今はもう、きみについての知識は身につけた」
それはどうかしらとジーナは思った。だがたしかに、シェイクが見る目つきからすると、本当にそのようだ。ジーナはその目つきが気に入った。
「三十万ぐらいよ。現金でね。スウィート」
「モビーがふれを出して、ＬＡのアルメニア人どもにつかまるまでの命だったな」
「ちょっと、いったいどんだけの確率だっていうのよ？　あんな大都市で、あのグレーの目の女の人、あの人とあたしが同じパーティーに顔を出すなんて？」
「当たってほしいときにかぎって確率がどんなに当てにならないか、知ったらきっと驚くよ。それがおれの不幸な経験から生まれた教訓だ」それから、彼は言った。「いいや」
ジーナはくいさがった。「いいや、あたしを引き渡すつもりじゃない、でしょ？」
「おれはそのブリーフケースを、さっき言ってたグレーの目の女の人のところに持っていく。そして彼女が許して水に流してくれることを祈る」
「あの人があんたのボスなの？」ジーナはかまをかけた。結局こいつもただの男にすぎないのか。

CamScannerでスキャン

「彼女はおれのボスじゃない」
「でもあの人のために働いてるんでしょ？」わからないふり。
「そういう答え方は、ある種の男にはうまくいくのか？」シェイクは言った。
ジーナはにんまりした。「あの人がそうしてくれると思ってるの？　許して水に流してくれるって？」
出会って以来はじめて、彼は落ち着きと自信を失いかけたように見えた。手錠で洗面台の下のパイプに繋がれたときでさえ、どうにか落ち着きと自信――アイスクリームなみにクールなヴァニラ・ミルクシェイク――を保っているように見えたというのに。
「彼女はおれにいくらかの好意を持ってくれていると思う。もし可能なら――もしおれの運がよくて、彼女の機嫌がよくて、プロ的な実況判断を迫られていない場合に――彼女の判断に訴えてくれるかもしれないと思える程度のね」
「その確率はどれぐらいなの？」
シェイクはため息をついた。「モビーの用心棒がこの都市で半日もたたないうちにおれを見つける確率はどれぐらいだと思う？」
ジーナはちょっと彼ににじり寄って、彼の膝に手を置いた。
「ね、聞いて」彼女は言った。「いい考えがあるの」
シェイクは彼女の手を膝から引きはがし、ハンドルの上にもどした。
「切手はおれがもらう」シェイクは言った。

「切手じゃないのよ」
「何でもいい」
「あれは包皮なの」
シェイクはジーナを見た。
「あなたは知りたくもないでしょうけどね」ジーナは言った。「話せば長くなるんだけど。でも大事なのは――」
「何だっていい。おれが持っていく」
「あれの価値がどれだけのものか、知りたくないの？」
「知りたくない」
ジーナは指を一本立てた。それから二本めを。さらに三本め、四本め、それから親指。エリザベス女王の挨拶のように手首全体を振ってみせる。
シェイクは訊きたがっている。それがわかっていた。だから待った。必要とあれば、いつまでも待てる、それにかけては誰にも負けない。ほら絶対、もう一秒もすれば……
「五十万か？」シェイクが訊いた。
「五百万よ」
彼の目が大きく見開かれないところが、ジーナは気に入った。口笛を吹いたり、「どっひゃー」と言ったりしなかったのも。彼はクールなままだった。
「どうしてそれがわかった？」

「それだけじゃないわよ」ジーナは言った。「〈クジラ〉が売りつけるつもりだった男の名前もわかってる」
「包皮か」
「わかってる。奇妙よね。大昔の宗教的な遺物だか何だかなんだって。昔の人が大聖堂に、特別な入れ物に入れて置いてたんだって」
「聖遺物か」
「それそれ！」
「おれはニューオーリンズ育ちなんだ」シェイクは説明した。「あそこじゃ誰もかれもがカトリック教徒なんだ」
「ローランド・ジーグラーっていうのが、その男の名前よ」
シェイクは声をあげて笑った。それがなぜなのかまったくわからないのが、ジーナは気に入らなかった。
「何よ？」
「ローランド・ジーグラーが買い手だって？」
「そうよ？」
「ローランド・ジーグラーは幽霊だ」
「幽霊って、死んでるみたいな？」
「目に見えないみたいな幽霊だ」

CamScannerでスキャン

「説明してよ、お願い」ジーナは楽しくなってきていた。まるで仕事の会議をしているみたいだ。ふたりはすでにパートナー同士というような。

「ローランド・ジーグラーは亡命者だ。この九年だか十年だか、司法省が躍起になってつかまえようとしてる」

「誰がジーグラーを殺そうとしてるの？」

「司法省が躍起になってつかまえようとしてるのは、そういう理由じゃない」

ジーナは頭を働かせた。「お金ね」

「よくできました」シェイクは言った。褒められて、ジーナはちょっとぞくっとしたが、面映くて認めたくなかった。もう一度、シェイクの膝に手を置く。シェイクはその手をつまんでまたハンドルの上にもどした。「やつは九〇年代にヘッジファンドを運営してたんだ。おれがやつを知ってるのは、アルメニア人マフィアが詐欺用の会社をいろいろつくるのに、やつが手を貸してたからだ」

「でも、それが連邦捜査官に追われる理由じゃないでしょ？」

「ああ。やつは派手にやったんだ、大勢の老人をだまして退職後の蓄えを奪い去った。聞いた話じゃ一億を越えるもうけだったそうだ。まあ、たぶん誇張もはいってるんだろうが、それはどの誇張じゃないかもしれない。連邦捜査官が一度逮捕したんだが、保釈金に出した小切手のインクが乾かないうちに不渡りにした。それ以来、やつの姿を見た者も、話を聞いた者もいない」

CamScannerでスキャン

「一億って。つまりそれって、包皮を買う資金があるってことよね、ちがう？」
「やつのことは司法省がこの九年だか十年だかずっと追ってるって言わなかったか？　それ以来やつの姿を見た者も、話を聞いた者もいないって言わなかったか？　やつは目に見えないって言わなかったか？」
「彼の居場所はわかってるわ」
「パナマか？」
「ちょっと！　知ってるの？」
「それはうわさのひとつだ」シェイクは肩をすくめた。「もうひとつのうわさじゃ、クロアチアだ。ペナンにいるっていううわさもあったっけか」
「ちょっと、ミスター・クール。パナマにいるっていうのはたしかな話なのよ」
ジーナは〈クジラ〉の回転式住所録から見つけたカードのことを話した。電話番号のことも。
シェイクはまたしても笑った。今度も、それがなぜなのかわからないのがジーナには気に入らなかった。
「何がそんなにおかしいのよ？」
シェイクはダッシュボードのなかを探って携帯電話を見つけ、ジーナに渡した。「その番号にかけてみろ」
「こんなもの、どこで手に入れたの？」ジーナはたずねた。
「きみとあの車と、おれが陥った災厄全部と一緒にころがりこんできたんだ。その番号にかけ

てみろ」
「いいわよ」ジーナは言った。手首の内側に書いたメモを見ながら番号を押し、スピーカーホンにした。何回かのコール音ののち、録音された女性の声がスペイン語で何か言った。それから同じ女性の声が英語で、パナマのパナマ・シティにある〈アニタ・ベーカリー〉ですと告げた。ビーッという音が鳴ったらご注文をおっしゃってください。
ジーナは電話を切った。「きっとちがう番号にかけちゃったんだわ」
「番号を間違えたんじゃない。電話を使って秘密裡に情報の受け渡しをしてるんだ」
ジーナは顔をしかめた。「注文のしかたを知ってなきゃだめってことね」
「暗号だな。おれの推測だと」
ジーナは肩をすくめて受け流した。ささやかな後退。「それなら、ジーグラーはたしかにパナマにいるってわかったのよね。それってなかなかのことだわ」
「人口七十万の首都だぞ。いいか、いったん首都から外に出たら、人里もないジャングルだの、人が近づけない山岳地帯だの、私有の島々だの、汚職と堕落の文化だのに取り巻かれるんだ。おまけに燃やすほど金を持ってて、見つかりたくないと思ってる男が相手だ」
「あたしに数学をさせようとしてるのよね、ちがう?」
「その言い方は大嫌いだ」
「あたしもよ」ジーナは考えた。「パナマ。運河があるだけだと思ってたけど」
「美しくて魅力に満ちて、まだ発見されていない宝石みたいな国だ」

CamScannerでスキャン

「それと洋服屋。それと帽子」
「パナマ帽は本当はエクアドルで発明されたんだ」
「刑務所でずいぶんたくさん本を読んだのね、でしょ？」
「『ニューヨーク・タイムズ』の日曜版の旅行欄を隅から隅まで読んだ。なぜかはわかるだろう。あっちの料理はうまいって聞いてる」
「いいじゃない。あたしたちも行きましょ。そしてその億万長者野郎を隠れ家から飛び出させてやりましょ」
シェイクは笑い出しかけ、もう少しでこう言いそうになった。『そんなこと、どうやってやるんだ？』ジーナが予想したとおりに。だがそれから、口をつぐんだ。それもまた、ジーナの予想どおりだった。
シェイクはちょっとのあいだ、ジーナを見つめた。そのひとときを、ジーナは楽しんだ。
「悪い考えじゃないかもしれんな」ゆっくりと、シェイクは言った。「だがいい考えとも言えない」
「ジーグラーは包皮をほしがってるのよ。あたしたちがうわさを流したら、向こうからやってくるわ」
「慎重にやらないと、敵にまわすのはやつひとりじゃすまなくなる可能性がある」
「だから慎重にやるのよ。あたしたちで売り払って、もうけは折半するのよ、半々で」
シェイクはさらにしばらく彼女を見つめた。

CamScannerでスキャン

「でなきゃ、あの女ボスのところにもどって、こんなことがありましたって報告してもいいのよ。きっと彼女はあんたのことがすごく好きよ。あたしだって、会ってから二十四時間もたってないのに、そうなってるんだもの」
「まあ、一緒にずいぶんな修羅場をくぐってきたからな、ジーナ」シェイクは言った。
ジーナはにんまりした。シェイクが彼女をからかいながらも、同時に真剣に（頭脳がぐるぐると回転しているのが、彼の目のなかに見てとれた）ジーナの提案について検討しているところが、好ましかった。その提案に乗ろうとか乗るなとか自分に言い聞かせようとしているふうではないものの、頭のなかの隅ずみにまで目を配り、あらゆる角度にクールで客観的な視線を走らせているところが、好ましかった。
「もしおれたちでこれをやるなら」とうとうシェイクは言った。ジーナは幸せのあまりはずむような心地になった。「それが——その包皮とやらが——本当のところどれだけの価値があるか知っておく必要がある。それが本当に包皮なのかどうかも。おれのなかのかなりの部分は、そうでないことを願ってるんだが」
「それはもう言ったでしょ」ジーナは言った。「五百万ドルの値打ちがあるのよ」
「その情報源は？」
ジーナはシートのなかで、居心地悪そうにもぞもぞと動いた。「プロの目利きよ」そう言った。
「そんなことだろうと思ったよ」シェイクは言った。「悪いが、おれならどこか独立した機関

の検証を求めるね」
「それって何が言いたいの？」
「きみは田舎者の女の子だってことだ」
ジーナがそれについて考えているあいだに、シェイクはダッシュボードから車のキーを取り、銃を持っていないほうの手で揺らした。
「それっていらいらするんだけど」ジーナは言った。
「そりゃいい」
「ちょっと待って！」ジーナはクラブの常連客を思い出した。いつもネクタイにコーデュロイのジャケットという格好でクラブにやってくる、内気で不格好な年配の男。ネヴァダ大学ラスヴェガス校の教授だった。「何か知ってそうな男を知ってるわ。行きましょ！」
シェイクはさらに一分ほど、手のなかでキーを揺らしていた。彼がただ、この包皮の価値について何かを知ってそうな男を訪ねるかどうかを決めようとしているだけではないことを、ジーナは感じていた。彼は五百万ドルの件にからむことにするかどうかを決めようとしているのだ。ジーナと一緒にからむのかどうかを。
この日の朝——昨日の朝だっけ？——モーテルの部屋でこれと同じ表情を彼の顔に見たことが思い出された。ジーナをジャスパーに渡そうかどうか決めようとしていたときの顔に。
でも今は、彼が悩む理由が理解できなかった。こんな取り引き、頭を使うようなことなんてこれっぽっちもないのに！

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「あのいまいましいヴァン・ヘイレンの歌が」とうとうシェイクは言った。「ここ十五分のあいだずっと、頭のなかで鳴り響いてるんだ」

「結論を言ってよ」

シェイクはキーを揺らすのをやめ、ジーナに渡した。

「わかったよ」シェイクは言った。「こんちくしょう」

CamScannerでスキャン

23

ネヴァダ大学ラスヴェガス校についたときには、東の山脈の上から夜明けの光がさしはじめていたので、アリーナわきの駐車場に車を停め、しばし時間をつぶした。ジーナはぐっすり眠っているか、眠っているふりをしていた。シェイクは起きていた。ラスヴェガスですごしている時間はまだ二十四時間たらず。この騒動のはじまりからでも四十八時間たらずだ。シェイクはそのあいだにわが身に起きたことをすべて数えあげはじめたが、リストの半分あたりであきらめた。刑務所では何週間も、ときには何ヶ月も、決まりきった日常生活がまったく何の変化もなく続くことがよくある。それは一種、重くのしかかって気力を吸いとる退屈な倦怠のようなもので、シャワー室でのとがらせた歯ブラシを使ってのけんかや、このうえなくまずい発酵スモモジュースを飲まされたりする経験以上に、永続的なダメージを与えるものだ。

この四十八時間というもの、自分がひとときも退屈を感じていないことを、シェイクは認めざるをえなかった。はっきりとそう言うことができた。

パナマに行くことは——もしこれが五百万ドルの価値をもつ包皮だとしたら、もしこれが本

当に包皮なら——気の利いた一手だ。そう自分に言い聞かせる。アレクサンドラとディクランとディック・モビーの手から生き延びたいと思うなら、何か対抗手段が必要だ。もしくは、彼らを上回るほどの大金が。

だが本当のところは、気の利いた一手などではないのだ——百万年たってもパートナーを組みたいとは絶対に思えない人物の条件をほぼすべて満たしている女とパートナーを組むということは。

だとしたら、なぜこんなことを考えているのだ？　この新たにわきだしてきた不健全な危険への欲求は、いったいどこからやってきたのだ？　よくわからなかった。たぶん昨日の朝、あの〈アパッチ・モーター・イン〉で、ジャスパーを電話帳でぶちのめすことに決めたときに、彼の内側で何かがはじけたのだろう。たぶんあの瞬間、古いシェイク（可能なかぎり困難な選択肢を選ぶことは避け、信頼のおけない流れのときでも穏やかな人生を送りたいと思っていた）、その男はショックと驚愕のあまり死んだのだろう。今ごろはあのモーテルの部屋の床に死んで倒れているのだろう。頭のすぐわきのカーペットには歯型のついた赤いゴムボールがころがっているにちがいない。

ジーナは見た目も悪くはなく、シェイクがこれまでに出会ったことのないような一種のきらめきを有している。だが、きらめきという理由でこの件に乗っかると、ありとあらゆるよくないことが自分の身にふりかかってくることになるのはわかっていた。

「顔をしかめてるわよ」ジーナが言った。彼女は目を覚まし、シェイクを見ていた。八時を少

CamScannerでスキャン

しまわったところだ。

「行くぞ」シェイクは言った。

ふたりはキャンパスをつっきり、〈ライト・ホール〉のすぐ外側に車を停めた。〈ライト・ホール〉は超現代的な三色使い（トリコロール）の建物で、大学の建物というよりは未来の刑務所のように見えた。三階に、歴史学のレジナルド・ゴーシュ博士の研究室があった。

ゴーシュ博士は細長い顔に細長い首の男で、ラップトップ・パソコンの上に覆いかぶさるようにしていた。スクリーンから顔を上げて戸口にジーナが立っているのを見ると、そして眼鏡を直してもまだジーナが戸口に立っているのを見ると、すばやく何回かたてつづけにつばを飲みこんだ。長い首の上でのどぼとけが何回も上がったり下がったりするのを、シェイクは見守った。

「ハーイ、博士」ジーナは明るく言った。「調子、どう？」

ゴーシュ博士はちょっと切望するような目でジーナを見たが、それから警戒したような顔になった。

「ああ」博士は言った。

「心配はいらないわよ、博士」ジーナは研究室にはいり、ドアを閉めた。「ここに来たのはあなたを厄介な目に遭わせるためじゃないから」

『ははは』とシェイクは心のなかで言った。

CamScannerでスキャン

ここに来たのはゆすったりたかったりするためじゃないということをゴーシュ博士に納得させるのに、数分かかった。それからさらに数分かけて、毎週二回ストリップ・クラブに通うことを性格異常とは思っていないことを請け合った。

「あれはただ研究のためなんだ、わかってくれるね」博士はシェイクに向かって、せっぱつまった口調で説明した。「演劇の脚本を書こうと思っていてね、それでただ――」

「研究するのは大事ですからね」シェイクは言った。

「そう、そうなんだ！」博士はデスクの上の小物をあれこれといじり、もう少しでうっかり『初心者のためのウィンドウズ・ビスタ』という本に自分の手をホッチキス留めするところだった。

「あたしたちがここへ来たのはそのためなのよ」ジーナが説明した。「あたしたち、ちょっと歴史の研究をしてて、いくつか質問があるの」

ゴーシュ博士の顔がぱっと明るくなった。「チューダー及びスチュアート王朝時代の英国についてかね？」

「そこじゃないんですが」シェイクが言った。遠まわしな言い方で話を進める時間はなかったので、リスクを計算して真実を、というより、少なくとも真実のいくらかを話すことにした。現在、貴重な宗教的遺物である可能性があるものを持っていて、それがどれぐらいの価値がありそうか知りたい、と話した。

ジーナはブリーフケースを持ち上げ、コマーシャルのモデルがやるような華々しい手つきで

披露した。
「聖遺物だって？」ゴーシュ博士の長い顔ががくんと落ちた。しばらく時間がかかった。「すまないが、それはわたしの専門分野ではないんだ。誰か、中世事情にくわしい学者のところへ――」
「でも、あたしはあなたの話を聞きたいのよ、博士」ジーナは言い、過剰にセクシーな英語を目に語らせるウインクを送った。その爆風範囲のぎりぎり端っこにいたシェイクでさえ、ちょっとぞくぞくした。
ゴーシュ博士はごくりとつばを飲みこんだ。「まあ、聖遺物の市場については多少は知ってるがね」博士は言った。「コレクターはいると聞いている。まさにグレーゾーンと言える世界だ。はっきりと違法というわけじゃないが、カトリック教会は快く思ってはいない。想像はつくだろうがね。本当に貴重な遺物もいくつかはありうるよ、理論的にはね。茨の冠でも見つけたと言うのでなければ――」
「あたしたち、百枚の包皮を持ってるの」ジーナが言った。
ゴーシュ博士は彼女を見た。ジーナはもう一度ブリーフケースを持ち上げてみせた。またもやコマーシャルのモデルのような華々しい手つき。
「あの百枚の包皮を持ってるのか？」
「あのって？」シェイクが言った。
「聞いたことがあるの？」

「おいおい」ゴーシュ博士は言った。「もちろんだ。宗教工芸品の聖杯と言えるものじゃないか」
「聖遺物の聖杯は〈聖杯〉なんじゃないのか？」シェイクは訊いた。
「よくある思い違いだよ」ゴーシュ博士は水を得た魚のように勢いを取りもどし、書棚のひとつの前に行くとあちこち本を探りはじめた。「それはロンドンのある億万長者が持っている。ヴァチカンがずっとそれを買い戻そうとしているらしいがね。要求額は途方もないらしい。ラオコーン像（ヴァチカン美術館に所蔵されている、アポロ神殿の神官の像）か何か、そういうレベルのものらしいぞ」
「聖遺物のことなんて何も知らないんじゃなかったの？」ジーナが言った。
ゴーシュ博士は鼻を鳴らした。「知らないよ」探していた本が見つかった。大きな黒い革表紙の聖書だった。「こんなのはすべて、ただのごく基本的な常識だ」
ジーナはシェイクに目くばせした。「ほら、言ったでしょ？　頭のいい人だって」
ゴーシュ博士は聖書をぱらぱらとめくった。「ほら、ここだ。『サムエル記上、十八章』。ダビデはサウル王の娘と結婚したがった。もちろん、サウル王は娘を一介の農民、羊飼いにすぎない男に嫁がせるのをよしとしなかった。そこでダビデにこう言ったのだ。もし、もしもダビデが証を立てることができたら、娘と結婚させてもいい、と」
「どうやって？」ジーナが訊いた。
「たったひとりで討って出て、ペリシテ人戦士百人の包皮をサウル王のもとに持ち帰ることで」

「それは、推測にすぎないが」シェイクは言った。「ペリシテ人がやすやすと手放すはずがないことをサウル王は知ってたんじゃないかな」

ゴーシュ博士はうなずいた。それからしばしぼんやりと長い首に指を走らせ、ギターを弾くかのように動かした。「ペリシテ人は、ご存知のとおり、歴史上きわめて不当なあつかいを受けているが本当のところは、きわめて進化した文化を持つ民族だったんだ。事実――」

「博士」ジーナが言った。「集中して」

「そうだな。ああ。そう、もちろん自殺に等しい任務だった。ダビデが成功する見込みはないとサウル王は確信していた。だが、ダビデはやりとげた、成功したんだ。彼は討って出て、百人のペリシテ人戦士を殺し、その包皮をサウル王のもとに持ち帰った」

「サウル王はどうしたんだ?」シェイクは訊いた。「ダビデに手を洗えと命じたあとで、ってことだが」

「サウル王はダビデに、包皮はほんの手始めにすぎないと言った。次はダビデは、サウル王の軍隊を潰滅の惨状に追いやったペリシテの巨人ゴリアテを殺しに行かなければならなかった。ダビデは絶対にその対決で生き延びるはずがないとサウル王は確信していた。だがもしダビデが成功して、ゴリアテを殺せば、それはそれでサウル王の目的にかなうわけだ。それからどうなったかは、むろんわれわれ全員の知るとおりだ」

「彼のやり方って好きよ」ジーナが言った。

「ダビデかね?」ゴーシュ博士が訊いた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「サウル王よ。取り引きのハンドルの握り方をよくわかってて、上手に運転してる。ヴ、ヴ、ヴルーン」

ゴーシュ博士は眼鏡を直し、パソコンに入力した。

「見てごらん。ほら。百枚の包皮。記録に残っている最後の所有者は一九三九年、ベルギーの聖職から追われたイエズス会士だ。それから戦争が起きて、ということはつまりナチスの占領だ。それからあとはすべてうわさや伝聞にすぎない。大勢のコレクターが探しているが実りはない」

「それで、どれぐらいの価値があるかはわかるのか?」シェイクが訊いた。

ゴーシュ博士は突然にやりと笑った。「これはここ数ヶ月でいちばんおもしろい一件だ。あの昔のホラー映画を知ってるかな? ほら、埃をかぶった書物に埋もれた白髪混じりの老教授が、純真な心の持ち主だけが人狼を殺すことができると説明するやつだが?」

「それと、大きな銀の弾丸がはいった銃と」

「エヘン」ジーナが言った。

「そのとおりだ」ゴーシュ博士は言った。それからパソコンに注意をもどす。「それの価値がどれぐらいかって? ああ、そうだな。断言はしづらいな。わたしが思うに、それからあの気のめいる学問、経済学の同僚の言葉をわかりやすく言い替えるなら、その価値は買い手がそれにいくら出すと言うかによるだろう」

「だが五百万ドルはないだろう」シェイクが言った。「ですよね?」

CamScannerでスキャン

ゴーシュ博士はまたしても長い首をギターよろしくひっかいた。「ありうるね。このサイトによると、二年前に聖アガサの脊椎が二百万ドルで売れてる。きみたちの包皮は少なくともそれぐらいはもたらしてくれるだろう、わたしが思うにね。おそらくはもっとずっと高いと思うよ。はるかに稀少なものだし、少なくとも八百から九百年前のものだろうから」

シェイクはあんぐりと口を開けた。ジーナの勝ちだ。

「ちょっと待って」ジーナが言った。「あたしは大学教授でも何でもないけど……ダビデとゴリアテだっけ？　それって八百から九百年よりはずっと昔の話のはずよ」

ゴーシュ博士はぽかんとした顔で彼女を見た。「ああ、もちろんだ」

「それじゃ――」

「きみらの包皮は本物ではない」ゴーシュ博士は言った。「まあ、むろん本物の包皮ではあるんだが、ダビデがペリシテ人から切り取った実物ではない。おそらく僧侶たちか中世の農民が、お金をもらうか、最後の審判の日に受ける恩恵が多くなると考えるかしてさしだしたものだろう」

「にせものってこと？」ジーナが言った。

「たいていの聖遺物はそうさ」ゴーシュ博士はくっくっと笑った。「ロンドンの億万長者が伝説の本当の聖杯を持っていると思うか、そうだろう？」

シェイクはそう考えていたのだが。本当に。

「でも――」

「それでもそれが持つ価値にはまったく変わりがないんだ」ゴーシュ博士は言った。「大事なのはそのにせものの稀少性、時代、そして品質だ。その裏にある物語だよ。理解するべきなのは、これらの聖遺物は何百年ものあいだずっと崇拝されてきたということだ。なかには、のちに聖人になった男性や女性の手でつくられたものもある。都市国家どうしが盗まれた聖遺物をめぐって戦争を起こした例もある。厳密な意味ではそれらはにせものと言えるかもしれんし、それがつくられた動機は金がからむものだったかもしれん——ほら、たとえば枢機卿になれる見込みをふやそうとした聖職者とか——が、最終的にはそういうにせもの自体が歴史的に重大な意味をもつ、唯一無二の宗教上の工芸品になっているんだ。ときには、にせもののほうが本物の遺物よりはるかに大きい価値をもつこともある、状況によってはね」

シェイクは一秒ほど時間をかけて、こうしたことすべてを考えあわせてみた。ゴーシュ博士にからかわれているのではないかと疑わないでもなかったが、ゴーシュ博士はどう見ても、誰かをからかったりするようなタイプではない。だがそれでも……

「あんた、おれたちをからかってるんじゃないだろうな？」

「え？ まさか！」

「エヘン、エヘン、エヘン、エヘン」ジーナが言った。「あたしたちの包皮だけど？」

「非常に珍しいものだ」ゴーシュ博士は言った。「実にユニークだ。聖人の骨なんかは、昔はそこらじゅうにあった。マーク・トウェインの『赤毛布外遊記』のあのおもしろいくだりを思い出せるなら、ヨーロッパじゅうの大聖堂にある〝本物の〟十字架の釘とかけらを集めれば

ちょっとした町ができるぐらいあると言っている。だがきみたちの包皮は——そういうようないわれのもので記録に残っている品はほかにはない。こんな遺物のにせものをつくろうと思い立ったやつは、誰だか知らないがとんでもない想像力を持っていたんだろうな」
「でなきゃとんでもない何かを」シェイクは言った。
ゴーシュ博士はパソコンで別のサイトにジャンプした。画面にざっと目を通す。
「ふむむ。どうやら多くの学者が、この包皮をつくらせたのは〈獅子心王（クール・ドゥ・リオン）〉その人だったのではないかと考えているようだ」
「〈ライオン・ハート〉ですって？」ジーナが訊いた。
シェイクは彼女に目を向けた。「フランス語がわかるのか？」
「習うより慣れよ（セトン・フォルジャン・デヴィアン・フォルジャロン）、ってやつよ」
「リチャードI世の別名だよ」ゴーシュ博士は続けた。「そう。だからこそ、その包皮はつくられたそのときから非常に貴重な価値を持つものだったんだ」すばやい手つきでキーボードをたたきつづける。スクリーンの発する青い光が博士の眼鏡のレンズに反射してきらめく。「これによると——実におもしろいな——ある時点では、かのダンテがその包皮を所有していたらしい。マキァヴェリがカードゲームで負けてローマ教皇クレメンスⅦ世に渡している。最終的にはローマ教皇ユリウスⅢ世の手に渡り、彼がフランスと取り引きして包皮を渡していたため、彼がボローニャに公会議を移転させたときも包皮はサイドラインで傍観していられた。マルティン・ルターが台頭してきたころには、包皮は非常に有名になり、愛されていたため、ル

CamScannerでスキャン

ターはほかの聖遺物をすべて焼いたときにも包皮はあえて焼き棄てなかったということだ」
「わかった」シェイクは言った。「そういうのはわかる。でも五百万だって？　たしかなのか？」
「まあ、たしかとは言えないが」ゴーシュ博士は言った。「おおよその見積り額としては妥当な数字と思うがね」
「そのおおよその見積り額って好きよ」ジーナが言った。それはシェイクも同じだったが、彼はあっさりとその希望に乗っかるほど世間知らずではなかった。それに、と心のなかでつぶやく。もしあのブリーフケースにはいっているものに本当に五百万ドルの価値があるのなら――アレクサンドラは絶対に探すのをやめはしないだろう。
ジーナが手にしているブリーフケースをゴーシュ博士がじっと見つめているのに、シェイクは気づいた。
「あの、ちょっといいかな」博士は言った。「ほんのちょっとだけ、それを見せてもらっても……？」
シェイクは考え、それからうなずいた。ジーナは掛け金をはずし、ブリーフケースをゴーシュ博士のほうに向けた。
ゴーシュ博士は困惑した顔になった。「わからないんだが」彼は言った。
シェイクは自分もかがみこんで見てみた。内側のガラスケースが――包皮とともに――消えていた。ブリーフケースはからっぽだった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

シェイクはジーナのほうを向いた。ジーナはからっぽのブリーフケースをじっと見下ろしていた。今にも笑いだしそうな、吐きはじめそうな、そしてわっと泣きだしそうな顔で。たとえジーナなみに卓越した、人を欺く才能を持っている人物でも、同時にこの三つの表情を嘘でつくれる人間がいるとは、シェイクには思えなかった。

「そんなはずない！」ジーナが言った。「ちくしょう！　ちくしょう！　ずっと離さずに持ってたのよ、絶対に一度だって——」

ジーナの動きが止まった。シェイクは待った。ジーナは目を閉じた。

「あいつ、殺してやる」ジーナが言った。ひどく静かなその声を、シェイクはかろうじて聴き取ることができた。

CamScannerでスキャン

24

ジーナがタウンカーのキーをシェイクに投げてよこしたので、シェイクが運転した。ジーナはかんかんに怒っていた。自分でも耐えがたいほど自分自身に腹を立てていた。ものすごい勢いで車を飛ばして街をつっきり、ストリップのモールに行って、『マーヴィン・オーツ宝石及び質店』の三、四軒先で停めた。店は十時に開くはずだが、十一時近いのにまったく何の気配も見せていなかった。

「やつはいないぞ」シェイクは言った。

ジーナは煙草を吸うために裏口のドアを細く開けたことを思い出した。路地に置かれた大型ごみ容器のあたりの暗がりで何かが動くのを見たように思ったことを思い出した。いまいましいことに、まるまる二秒間ほど、マーヴィン・オーツに背を向けていたのだ。

あんな変人野郎におめおめ包皮を盗ませるなんて、なんというとんまだったのだろう？ まさに自分の鼻先から盗ませるなんて？ すぐさま煙草はやめようと決意した。危険で愚かな習慣――おかげでこんなことになったのでは？

煙草を吸いはじめたのは十三歳のときだった。ほかの友だちはみな臆病者で、吸ってみようとしないから。テレビで見た映画『俺たちに明日はない』でフェイ・ダナウェイが吸っていたから。毎晩五分間、ポーチの階段に腰を下ろして煙草をふかすのが、母親と共通でできることだったから。そういう理由からだった。

「あいつ、最終的には姿をあらわすと思わない？」ジーナは訊いた。

「どう思う？」シェイクが言った。

「あたしならパナマに行くわ」

「そのとおりだ」

「でももしあいつが消えたんじゃなかったら」ジーナは言った。「包皮を店のなかに置いてちょっと出かけたのかもしれない、寝過ごしたか、今朝は店を開けるのが遅くなってるだけかもしれない」

ジーナは口をつぐんだ。すがろうとした藁もネタは尽きていた。「あいつは空でいちばん輝く賢い星とは言えないやつよ」ジーナは言った。

「とすると、きみはどうする？」シェイクが言った。ジーナを見つめる目つき——目のきらめき、口の片端だけがつりあがった笑み——から考えると、シェイクはこの状況を腹がたつぐらいおもしろがっていた。

「あんたならどうするの？」ジーナはむっとして言い返した。

「ま、公平な言い分だな」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「あいつはあたしたちのどれぐらい先を行ってると思う?」
「調べてみよう」シェイクは言った。
そこから一キロ半ほど西に車を走らせ、インターネット・カフェを見つけた。シェイクがコンピュータのひとつを半時間使う料金を払い、ジーナが航空機の運航時刻表を呼び出した。コンチネンタル航空のノンストップ便が午前七時にラスヴェガスを発っていた。その便は午後六時にパナマの首都パナマ・シティに到着予定になっている。
ジーナはほかの運航時刻表も呼び出した。腕時計を見る。こんちくしょう。
「こっちが乗れるいちばん早いのは四時に出るダラス経由の便よ。向こうに着くのは明日の朝」
「こんちくしょう?」
「あたし、声に出して言ってた?」
「やつが明日の朝までにジーグラーを見つけだして取り引きをまとめるのは、まあ無理だと思うね」シェイクが言った。
「それじゃ、まだ打つ手はあるって言ってるのね」
「とにかくやってみる以外にないって言ってるんだ」
ジーナはうなずいた。グレーの目をしたシェイクの女ボス。一秒ほどのあいだ、彼は何も言わなかった。実はほかの手があったことを思い出したのではないかと、ジーナは疑いはじめた。ジーナを〈クジラ〉かあの女ボスに引き渡して、保身をはかろうとしているのではないかと。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

が、やがてシェイクは言った。「パスポートが必要だ」
「つくってくれるやつ、知ってるわよ」ジーナは言った。「お金、いくら持ってる？」
「きみが残したおれの金がいくらあるかって？」シェイクは訊いた。
「しぃぃっ。過ぎ去ったことはって聞いたことない？　水に流せっていうのは？」
「いくら必要なんだ？」
「パスポートをつくれる額。あたしがおごるわ」ジーナは片手を大きく広げ、インターネット・カフェ全体を指し示す気前のいい手つきをしてみせた。
「太っ腹なことだ」シェイクは言った。「だがそのあと、飛行機代はどうやって払うんだ？」
ああ。ジーナはそこまで考えていなかった。
「ええと、それは――」
「まあいい、忘れろ」シェイクは言った。「靴に二千ドルはいってた」
「あんたの靴に？　ほんとに？」昨日の朝、〈トレジャー・アイランド〉で、ジーナはシェイクの靴も調べていた。
シェイクはすでに出口に向かっていた。「割り勘といこう」シェイクは言った。

CamScannerでスキャン

25

パスポート取得はまったく何の滞りもなくうまく運んだ。最近のできごとに照らしあわせてみると、シェイクにはそれが新鮮に思えた。ジーナが連れていってくれた老人――そこまでの道中、ジーナはタウンカーの助手席に低く身を沈め、野球帽のつばを深く引きおろしていた――は、経営する煙草屋の地下室に、怪物のような最先端のコンピュータ・スキャナー・プリンター装置を完備していた。

「旧式のやつになるぞ」老人はシェイクに説明した。「〇五年発行ってことになるが、それでも有効期限が切れるまで何年か残っている。新型のやつはいろいろ変更されて、ホログラムだのくそだの、個人識別マイクロチップだのがはめこまれてるからな。そういったしろものは外注に出さなきゃならんのだ、出来高払いでな。わかるだろう、そういうのはめんどうなんだ。そんなくそめんどうにかかずらってちゃ、儲けはほとんど出ないんだよ」

顔をしかめて、老人はデジタルカメラでシェイクの写真を撮った。

「それが連邦政府ってもんだ」シェイクは言った。「いつだって労働者の努力を台無しにしや

CamScannerでスキャン

かる」
「そのとおりだ」老人は腹立たしげに言った。二十分後、シェイクはパスポートを持って煙草屋を出た。
　空港に着くと、シェイクはジーナに、ターミナルにはいって航空券を買うあいだ、短期駐車場の車のなかでしばらく待ってろと言った。ヴェガスではジーナが人前に出るのを最小限にとどめなくてはならないからだ。
「あんたがあたしをここに置き去りにして、ひとりで飛行機に乗ってしまわないって、どうしたらわかるの？」
「それはおれも考えた」シェイクは白状した。それは今でも続いていた。「だが置き去りにするつもりはない」
「それはなぜって訊いてもいい？」
「わかってたら言うよ」
　彼はターミナルにはいり、航空券を買った。乗る予定の便の出発予定時刻の半時間前に、ふたりはセキュリティ・チェックを通り抜け、まったくぐずぐずすることなく、搭乗がはじまると同時に搭乗ゲートにはいった。
「ちょっと！」ジーナは搭乗券を見て声をあげた。「これ、エコノミーじゃない！」
「この旅行の予算は限られてるんだ」シェイクは言った。
　ジーナはシェイクをにらみつけたが、言い返すより先に、ふたりはスーツを着た中年男の大

CamScannerでスキャン

集団に囲まれていた。十人あまりのその男たちは、顔を真っ赤にしてネクタイをゆるめ、大きすぎる声で笑い、たがいに背中をたたきあっていた。しきりにゲートエリアを見まわして、自分たちの気さくさ（と彼らは考えているようだ）が周囲にも伝染しているかどうか、推し量ろうとしている。全員、スーツの襟に小さな紫色のネーム・タグをつけていた。

シェイクはちらりと彼らの搭乗券を二枚ほど盗み見た。座席の列の番号を自分の搭乗券の番号と比べる。顔をしかめる。

「このフライト、何時間だっけ？」シェイクはジーナに訊いた。

「あんたの言うとおりよ」ジーナはすこぶるきまじめな顔で言った。「ファーストクラスなんて贅沢、あたしたちには無理よね」

「そういうことじゃないんだ」

「ふううん」

ふたりのすぐうしろに並んでいる紫色のタグの会社員が、むっちりと肉のついた大きな手でシェイクをつついた。

「やあ、どうも」会社員は言った。「ジョージ・パートルだ」

もうひとり、紫色のタグの会社員が仲間の肩越しに目を向け、シェイクににやりと笑いかけた。「〝亀（タートル）〟みたいだろ、でも〝タ〟じゃなくて〝パ〟なんだぜ」

これが引き金となって、あたりにいる紫色のタグの会社員たちがまたしてもどっとわきあがり、背中をたたきあった。なかのふたりは「タートル、タートル」と唱和しはじめたが、女性

の客室乗務員がかたわらを通ったときにぴたりとやんだ。その女性が引き金となって、ひとしきり忍び笑いとあばらのこづきあいがはじまった。

シェイクはまたもや顔をしかめた。

「絶対、ファーストクラスも同じぐらいひどいわよ」ジーナが言い、忍び笑いをしながらシェイクのあばらをこづいた。

その一。くそフライトが取り消しになった。しかもロサンジェルス国際空港(LAX)の待機場で四時間じっとすわったあげくにだ。四時間だぞ！　くそラスヴェガスに車で向かっていれば、ほとんど到着する時間だ！　運転していれば、途中でハンバーガーを買いに寄ったとしても着いてるくらいだ！

その二。今夜ラスヴェガスに向かう便はもうない。ラスヴェガスだぞ？　全世界に誇る観光中心地だぞ？

「今夜のほかのどの便にも、空いているお席はございません」航空会社のカウンターの係員は断言した。

「それなら最初にそうはっきり言うべきだ」ディクランは男に言った。

ということは、車を運転して四、五時間後に向こうに着くか。もしくは明日の朝一の便を待って、十時に向こうに着くか。ディクランは電話をかけ、彼女に問い合わせた。彼女はため息をついて、言った。「明日の朝一の便に乗りなさい、ディクラン。かまわないわよ。とにか

く彼を見つけるのよ、いい？　そのほかのこともよ？」
はい、わかりました。ディクランは絶対に彼を見つける。そのほかのことも、想像以上に喜んでやるつもりだ。それこそ言われたとおり何でも。ディクランはじっと待っていたくはなかった。そこで一階に下り、レンタカーのカウンターに向かった。なぜなら、自分の車は自宅に置いて、青いバンで空港にやってきたからだ。
その三。使えるレンタカーがない。ＬＡＸで？　西海岸最大のくそ空港で？
「すみません、残念です」
残念だ。
その四。翌朝最初の便が遅れている。待機場で二時間止まっていたのだ。
その五。その朝の第一便には、ラスヴェガスでの選手権大会に向かう女子大生のソフトボール・チームが乗っている。オクシデンタル・カレッジの女子ソフトボール・チームだ。ディクランの周囲にみっしりと、バターのようなつやがある小麦色の肌ときらめくような金色の頬の産毛をもつ若い女が二十人、ひしめきあっていた。フルーツとキャンディとバターのような小麦色の肌の匂い。その匂いに刺激され、ディクランの股間の〝小さな兵士〟が狂わんばかりにいきりたっていた。
ここまで不運が重なるか。ディクランは激怒していた。全身の毛穴から毒気が湯気となって蒸発しているような気がしていた。神はおれを罰したがっているのか。ディクランのほうこそ、逆に神を罰してやりたかった。

飛行機が止まった。ようやくベルが鳴った。ディクランはシートベルトをはずした。彼のとなりの女子大生ソフトボール選手がバッグを取ろうと、頭上の荷物入れに腕をのばした。その動きでシャツがずりあがり、突然ディクランの目の前にバターのようなつやの小麦色の肌の帯があらわれた。おへそのなかの金色に輝く輪も。あのおへそにさわりたいと、"小さな兵士"が――くそくらえ。ホルモン昂進パッチめ！――ディクランに懇願した。ちょっとさわるだけ――きっと気づかれもしないだろう。おまえの舌でひとなめするんだ、ディクラン、すばやくちょっとだけ。

ディクランは即座に目をそらした。そういう事態が起きたときにするようにと彼女にアドバイスされたとおり、十から一まで逆に数える。

おへそ娘は機内の通路を歩いていき、ディクランはそのあとに続いた。ほかの乗客と一緒にぞろぞろと飛行機から出てプラスチック・チューブにはいり、プラスチック・チューブから空港に出た。ぞろぞろ、ぞろぞろ、のろのろと、どこまでも。なぜなら、行列の先頭のパレード先導役が車椅子の老人だからだ。

彼の前を歩くおへそ娘のパンツとシャツのあいだからのぞく背中の肌も、お腹と同じバターのようなつやのある小麦色をしていた。そして小さなタトゥもあった、ちょうど――

ディクランは即座に目をそらした。またしても、十から逆に数えはじめる。

十、九、八、七――

数えるのをやめた。

CamScannerでスキャン

目を細めて、焦点を合わせる。

このゲートのとなりのゲート。ぞろぞろと空港から別のプラスチック・チューブにはいり、別の飛行機に乗りこんでいく人々。

あの娘だ。

そして。ディクランの全身が喜びに震えた。その列のあの娘の横。シェイクだ。あのおべっか使い野郎！　この空港の、すぐそこに、すぐとなりの列にいる！

プラスチック・チューブにはいっていく。もはや隠れ場所はない。

「あててみようか」ジョージ・パートルが言った。

彼は通路側の席に、ジーナが窓ぎわの席にすわり、シェイクはそのあいだにねじこまれていた。すぐ前の列には紫色のタグ仲間が三人すわり、すぐうしろの列も同じだった。

「あんたたちふたりは、新婚さんだろう」

「まあね」ジーナが言った。

「だと思った。おれのような仕事をしてると、そういうことは読めるようになるんだ」パートルはばちんと指を鳴らし、にんまり笑ってふたりが食いついてくるのを待った。食いついてこないと見ると、彼は言った。「友だちづくりだよ！　ものを知らないやつはセールスとか呼ぶけど、それは製品のことじゃない。そりゃたしかに、おれはすごい製品を持ってるよ、だが誤解しないでくれ。どういう仕事か、あててみたくないか？」

「ねえ、あなた」ジーナがシェイクに言った。「ドラマミン(乗り物酔い予防薬)は残ってないかしら？この前みたいにまた吐いたりするといやだわ」

シェイクは鼻梁を指で強くつまんだ。「すまない、おまえ。今度はエチケット袋を忘れないようにしてくれ」

「猫科栄養補給品」ジョージ・パートルはまったく動じずに続けた。そしてその意味がしみこむのを待った。

「キャットフードのこと？」ジーナが言った。

「キャットフード？　いいや、ちがう。まるっきり、全然ちがうね。厳密にはキャットフードではない。キャットフードよりはるかに、はるかに意味があるものだ。おれの気に入ってるたとえとしては——」

「タートル！」すぐうしろの列のひとりが頭をつきだしてきた。「このきれいな若いお嬢さんにおれたちを紹介してくれよ」

ジョージ・パートルは邪魔をした仲間に冷たい短剣のような視線を向けたが、それからべらべらと、前後の列の紫色のタグの男たち六人全部の名前をあげていった。最後のひとり、ジーナのまん前の席にすわっていた男はテッド・ボックスマンという名前だった。

「〝精力絶倫男(コックスマン)〟みたいだろ」パートルが言った。「でも〝ゴ〟じゃなくて〝ボ〟なんだぜ」

これが引き金となって、紫色のタグの男たちは大笑いと嘲笑をはじめ、肩たたきとあばらこづきをしあった。コックスマンだけがそれに加わらなかった。彼は目を閉じて、前の席の背も

CamScannerでスキャン

たれにひたいを押しあてていた。

「あんたたちは何をしに行くんだ？　販売会議とかかい？」彼らの襟についている紫色のタグの意味が、シェイクにはわからなかった。ジョージ・パートルの名前の上に小さな文字でこう印刷されていた――「ビルディング・ブリッジズ・インターナショナル」

ジョージ・パートルはシェイクに流し目をくれた。「ま、言うなれば」そう言って、またしてもシェイクとジーナが食いついてくるのを待ったが、ふたりは食いつかなかった。

「ご乗客のみなさま」機内スピーカーから、ガーガーと割れた機長の声が響いた。「ただいま管制塔から、滑走路がちょっと混みあっているという連絡がありました。そのため、少々遅れが出る模様です」

「さっきのたとえの話にもどるけど」ジョージ・パートルが言った。「キャットフードなんて、わが社の機能強化猫科栄養補給品に比べると――」

シェイクはシートベルトをはずした。

「ターミナルで何か飲み物を買えるかしら？」ジーナが訊いた。

シェイクは立ち上がった。「好きにしてくれ」

ディクランはおへそ娘を乱暴に突いて押しのけた。娘は空港の床に尻もちをつき、大きく目を見開いてディクランを見上げた。

「ちょっと！」

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

「ちょっと」ディクランは応じた。もうひとつのゲートを目指して、列の前の人々を押しのけて進む。肘で人々をかきわけながら。

「お客様！」客室乗務員がどなった。「お客様！　順番が来るまでお待ちください！」

『わかったよ、ミスター・お上品な客室乗務員め』ディクランは心のなかでどなった。『順番が来るまでおれを待たせることができるんなら、やってみろ』

だがそのとき――ほとんど列の先頭に、車椅子に乗ったパレード先導役に迫ろうとしていた――ひとりの男が何かの騒ぎかとこちらを見ていることに気がついた。

その男は落ち着いていた。上質なスーツを着て、手首に大きくて重たげな腕時計をはめている。太い手首。あまりに太すぎる手首。あまりに落ち着いている。

ディクランは人々を押しのけるのをやめた。自分が天才でないことは知っている。だが、ある種のことには――ある種の、生きのびるという点で重要なことには――彼の感覚はきわめて研ぎ澄まされていた。もしそれがなければ、これまでにもう百回以上死んでいただろう。あのアルメニアの（一九八三年の夏だ、覚えているか？）貨物コンテナのなかで、たくさんの腐りかけた死体のひとつになっていただろう。

スーツを着て落ち着いている男は、連邦航空保安官（対ハイジャック訓練を受け、武装して航空機に乗っている人）だ。銃を持っている。

「お客様！　どうか列に、もとの場所におもどりください！」

ディクランは取り乱したお上品な客室乗務員のメロン頭をかち割ってやりたかった。だがそ

うはせず……

「すみません」礼儀正しく言った。「もちろんもどります。到着を急いてしまったことを、どうか許してください」

客室乗務員は勝ち誇ったように胸をそりかえらせた。一秒後、トルコの高官のようにふんぞりかえった態度でディクランに条件つきの許しを与えてくれ、そっけなくうなずいた。

ディクランは行列のもとの場所にもどった。シェイクはもう機上の人となっている。ディクランはじっと待った。待った。『くそ、くそ、くそ!』ようやく車椅子の老人が姿を消し、列が流れはじめた。

連邦航空保安官はごみ箱のかたわらに立っている。ディクランをじっと見ている。

ディクランはその前を通るときに、おずおずした笑みをちらりと向けた。『こんちくしょう』心のなかでつぶやいた。『おれがぼんくらだと思ってるな?』

急いでもうひとつのゲートのほうに歩いていく。カウンターの前に立つ。シェイクの飛行機はまだゲートに接続している。〝遅延〟のサインが出ていた。

ディクランは神に語りかけた。すべてを許してやる、何もかも。

シェイクがジョージ・パートルの前の窮屈な空間を通り、通路に出たとき、機内スピーカーがふたたびガーガーいいはじめた。

「いい知らせです、みなさん」機長が言い、機内じゅうにベルの音が響きわたった。

26

「今すぐあの飛行機に乗りたいんだ」ディクランは係員に言った。飛行機を指さす。

「すみません、お客様」今回の係員は黒人だった。「あの便の搭乗はすでに閉め切っているんです」

「大丈夫だ」ディクランは請け合った。「金ならある」

「連邦規定なんです」係員は、まるで連邦規定のせいで悲しんでいるとでもいうように、首を振ってみせた。「あの機はもう出発したんです」

ディクランは窓の外を見た。窓の向こうで、ジェイクの乗った飛行機がゲートから離れていこうとしている。

「くそ、くそ、くそったれめが!」

ディクランはうなり声をあげ、飛行機のスケジュール案内のパンフレットと航空会社系クレジットカードの勧誘パンフレットの山をカウンターから払いのけた。

近くにすわっていた顎ひげを生やした男が顎ひげをしごき、眼鏡の上縁越しにディクランを

CamScannerでスキャン

見つめた。

「何を見てんだ？」ディクランは男に訊いた。「おまえの尻にこぶしをめりこませてほしいか——」

バターのような肌の女子ソフトボール選手がひとり、かたわらを通りすぎた。キャンディとフルーツの匂いをたなびかせて。ディクランは彼女の両脚が動くのをうしろから見送った。

黒人の係員が電話に手をかけた。ディクランはスケジュール案内のパンフレットと航空会社のクレジットカード勧誘パンフレットをひろい集め、カウンターの上にもどした。前よりもきれいに、きっちりと重ねて。

「どうもすみません」黒人係員に言う。「めんどうは起こしませんよ、約束します」

一瞬、目と目が合った。黒人係員は電話から手を離した。

「気を落ち着けるんだな、兄弟」係員は言った。

ディクランがどれほどそうしたがっているか、この男がわかってくれさえすれば。ディクランはこめかみをこすり、首を振った。腕に貼ったパッチを指さす。「このいまいましい薬のせいだ」言い訳した。

黒人係員はわかったような顔でうなずいた。「チューインガムでも買うんだな。棒つきキャンディとか、そういうものでも。そうすりゃ、渇望を抑えるのにちょっとは役に立つぜ」

本当か？　ディクランはあやしいと思った。シェイクの乗った飛行機がくるりと向きを変え、直進して視界の外に出ていくのを見守った。

「あんた、あのパナマ行きのグループのお仲間かい？」黒人係員が言った。
ディクランは静かな場所に行き、携帯電話で彼女にかけた。
「やつは飛行機に乗ってます」報告する。「パナマ行きですが？」
彼女のふくみ笑いが聞こえた。「もちろんね」彼女は言った。
ディクランはカウンターに引き返し、次の便の航空券を買った。六時間後に出発する、夜間に飛ぶ便だ。
彼が乗ってきた便のあの上品ぶった客室乗務員が男性用トイレから出てきた。スーツケースをころがして、コンコースのなめらかな床を歩いていく。
おっ。
ディクランはにやりとした。上品ぶった客室乗務員のあとをつけて駐車場に行き、彼の車に向かう。客室乗務員は携帯電話でしゃべっていた。笑いながらしゃべっている。ディクランはその背後から、静かに流れる水のように忍び寄り、客室乗務員の頭を手でつかむと、車のドアウインドウにたたきつけた。ガラスにちょっとひびがはいったが、今日びの車のガラスは安全面の理由から以前よりはるかに頑丈になっていて、数年前なら割れたはずなのに砕けはしなかった。
客室乗務員は油じみたなめらかなセメントの上に倒れた。ディクランは男が泡を吹きながら懇願するのをやめるまで、蹴りつけた。それから、上品ぶった客室乗務員のぼろぼろになった身体を車の後部座席に押しこみ、スーツケースから出した服を上にかぶせて下にあるものを隠

した。

これから夜中に飛んで、あのおべっか使い野郎を追ってパナマに行くのだ。

気分がずいぶんましになった。

CamScannerでスキャン

27

ジャスパーは疲れていた。このすべてがはじまった朝から数えて二度めの真夜中になろうとしていた。もう何時間眠っていないのか……計算する気にもなれなかった。すなわち、ずいぶん長いこと眠っていないのだ。

街じゅうをまわっていた。ほとんどの場所を二回訪れていた。あらゆる情報源をたずね、あらゆる市場に電話をかけ、脅したりすかしたりした。おそらく百回ほど携帯電話にジーナかあの野郎を見かけたと思った人々からの通報がかかっていたが、誰も本当には見ていなかったことが判明した。

『ジャスパー、おまえはどう思う？』そう自問する。彼の考えでは、ジーナとあの野郎はおそらくもうこの街を出ている。あの野郎、シェイクは頭がいい男だという印象をジャスパーは受けていた。ジーナの頭がいいことははっきりしている。

頭のいいやつらをつかまえるには落ち着いてじっくりとよく考え、峡谷——ジャスパーは大人になった今でも、昔の西部劇が大好きだった——を抜ける近道を見つけることだ。そしてや

CamScannerでスキャン

つらより先にやつらの狙いを見抜き、先まわりすることだ。

『ジャスパー、おまえはどう思う?』。彼の考えでは、貴重な時間のむだだ――街じゅうを歩きまわって同じ場所を何度も訪ね、ベルボーイや給仕の助手たちに写真のこの娘を見なかったかと訊いてまわるのは。

だが、それがミスター・モビーがやれと言ったことなのだ。ミスター・モビーはジャスパーに、ジャスパーがどう思っているかなどと訊いたりはしない。この世の終わり、氷の地獄が出てくるときまで、そんなことはしないのだ。

ミスター・モビーの事務室の前で、ジャスパーは一分ほど時間をかけてもう一度確認した。彼の人生で、これからやろうとしていること以外の選択肢はあるだろうか? いや、ない。こうするしかない、ほかに道はなかった。ジャスパーはドアをノックし、ミスター・モビーがはいれと言った。

ミスター・モビーはジャスパーを見上げた。ジャスパーの顔を見た。訊く必要はなかった。

「LAに行かせてもらえるでしょうか? 向こうで探してみても?」ジャスパーは言った。

「どうしてLAを当たりたいんだ?」ミスター・モビーは言ったが、いつもの毒はふくまれていなかった。ミスター・モビーの気が散っているのがわかった。キャビネットの上のテレビを見ているのだ。「これを見ろ」

ジャスパーは見た。テレビに映っているのは、ロビーの監視カメラの録画テープだった。高い位置からの映像は行き来する客やダンサーたちの頭を映している。ひとつの頭が同じところ

にとどまっていた。テープに映っているロビーの用心棒はロック・スターだ。ジャスパーには我慢ならないあの長髪男、邪悪な赤ちゃん〈クジラ〉を思わせる男だ。

「昨夜のですか？」ジャスパーは言った。

「ああ。とにかく見てろ」ミスター・モビーはリモコンのボタンを押し、画面の動きを止めた。

「何が見える？」

ジャスパーに見えるのは、ふたりの客とロック・スターと――ちょうどドアからはいってきた――二本のおさげのついた黒髪かつらをかぶった娘だ。

なんてこった。ジーナだ。

「ううッ、ふう」ミスター・モビーが言った。

「ジーナは昨夜、ここにいたんですか？　昨夜ここで何をやってたんですか？」

自分でも驚いたことに、ジャスパーはミスター・モビーがいつもならまぬけなばかの質問と考えるようなことをたずねていた。だがミスター・モビーはテレビ画面に釘づけになっていて、気づきもしなければ気にもしなかった。

「それはこれから見つける」ミスター・モビーは言った。「だが今やってるのはそれじゃない」ちがうボタンを押すと、画面は何コマか先送りになって、それからふたたび止まった。黒髪のかつらの娘は間違いなくジーナだった。「今度は何が見える？」

ジーナの背後に娘がいた。ジーナと一緒に、ジーナの腰に片手をあて、ジーナを押すようにして用心棒の前を通っていく。

ルーシーだ。
「共犯者だ」ミスター・モビーがジャスパーに代わって答えた。顔がむっつりと厳しい。
ジャスパーは胸がぎゅっと締めつけられるのを感じた。『落ち着け、落ち着け』自分に言い聞かせる。なんといっても、ルーシーはミスター・モビーのお気に入りなのだ。彼女はジャスパーの見てきたほかのどの娘ともちがい、ミスター・モビーを怒らせてもとがめられずにすませることができる。彼女とミスター・モビーはもうほぼ二年、一緒にいる。ミスター・モビーは彼女に対しては本物の人間らしい感情を持ちあわせているのだ。
「ルーシーに話を聞いてみたほうがいいでしょう」ジャスパーは言った。自分の声がミスター・モビーの耳には、自分に聞こえているのとはちがう響きで聞こえていてほしかった。
「聞く話などない」ミスター・モビーは言った。「あいつは何もわかってないに決まってる、絶対に」もう一度テープを見つめる。ジャスパーは目の隅で、ミスター・モビーの顔にちらりとでも本物の人間らしい感情が出ていないかと探した。かけらもなかった。
「今これを見たんですか？」ジャスパーは訊いた。
「一時間ぐらい前からだ。おまえがここにいなかったから、先にあのロン毛をあいつの家に送っといた。たぶんやつがけりをつけてるとは思うが、おまえもちょっと行って、やつがしくじってないかどうか確認してこい」
ジャスパーの心臓がさらにきつく締めつけられた。とんでもない激しさで。まるで、ネジから ネジ山が剝ぎ取られていくような感じだった。

一時間前。

「御意（ぎょい）」ジャスパーは言った。

ジャスパーは車を飛ばした。四十五口径銃はドアにはさまれたときにシェイクに奪われていたが、予備の銃を持っていた。それをとなりの助手席に置いていた。たった今、警官に呼び止められたらどうなるか。その警官のためにも、警官に呼び止められずにすんだことを喜んでいた。

ルーシーのアパートの前の駐車場に猛スピードではいる。これから何をするかはもう決めてあった。もしロック・スターがまだ始末を終えてなければ、もしまだすべてがすんでいなければ、ルーシーにこう言うつもりだった。どうやらあんたを愛しているようだ、そこのところを考えて、おれと一緒にどこか遠くに逃げないか？

ルーシーの安全を守り、敬意を払い、ちゃんとした知的で対等な人間としてあつかうと約束するつもりだった。彼女を幸せにするために全力を尽くすつもりだった。自分ではなく、彼女が幸せだと思えるようにすること。そこのところが、多くの男が犯してきた根本的なまちがいだと、ジャスパーは考えていた。いい人間を目指すつもりだった。これまでに本気でやろうとしたことはなかったが、ルーシーのためなら、心の底からやりたいと思えた。

ルーシーの部屋に向かう階段を、飛ぶように駆け上がる。ルーシーに心を告げようと決めていた。その結果に直面する覚悟はできている。その結果とは、ミスター・モビーだ。

CamScannerでスキャン

一時間前。

もしまだすべてが終わっていなければ。

ルーシーの部屋のドアは閉まっていた。ジャスパーはひと蹴りで開けた。鍵穴のまわりの木部が木っ端みじんにはじけていた。

ロック・スターはソファにすわっていたが、三十センチほど宙に飛びあがり、警戒をあらわにジャスパーを見上げた。

「くそ！」それから、はいってきたのがジャスパーだとわかると、また言った。「くそ」ちょっと調子が変わっていた。まるで、ほっとしたのと当惑したのと、自嘲がまじっているような。

「びっくりして肝が冷えたぜ、J！」

「彼女はどこだ？」ジャスパーは言った。

ロック・スターは肩をすくめた。「まだ帰ってない」

ジャスパーは安堵の波がつま先に押し寄せてくるのを感じた。

ふたたび冷静になっていた。深い安心感のおかげで、われに返っていた。

「来てくれてうれしいぜ、お仲間」ロック・スターが言ったが、ジャスパーには、この男が何かいらだっているのが見てとれた。ロック・スターはルーシーのテレビのチャンネルを次々とすごい速さで切り替えていた。「でもよ、ちょっと聞いてくれよ、もしあんたがよかったらさ、ミスター・ネビーはおれひとりでかたをつけていいって言ったんだ、わかるだろ？　おれはこいつが、ほら、なんちゅうか、おれのはじめてのホンマもんの大仕事になるって思ってたんだ

よ、わかるだろ？」

「わかる」ジャスパーは言った。

「よっしゃ！」ロック・スターは喜びと安心のあまり飛び跳ねた。目にかかる髪の毛を払いあげ、テレビが見えるようにする。「別にあんたに参加してもらいたくないってわけじゃねえんだ、兄弟。つまりさ、一緒に楽しもうって言ってるんだ。一九九九年みたいなパーティーやろうぜ、ヒッヒー」

ジャスパーはちょっと考えた。「ここらに電話帳はあるか？」

「はあ？　知るもんか」

「気にするな」ジャスパーは古典的なやり方でやることにした。予備に持っていた銃の台尻でロック・スターを殴ってソファからたたき落とし、ロック・スターの銃を手のとどかないところに投げた。ロック・スターは這って逃げようとした。ジャスパーが思っていたよりは速い動きだったが、頭を強く殴られたせいでくらくらしており、這い進む方向がまちがっていた。玄関ドアのほうではなく、バスルームにはいってしまい、行き止まりになった。

ジャスパーはロック・スターについてバスルームにはいり、もう一回殴った。ロック・スターの携帯電話を見つけて、ミスター・モビーにかけた。

呼び出し音が鳴っているあいだに、ジャスパーはロック・スターに言った。「終わりましたとミスター・Mに言え。それからこう言うんだ。『後始末はおれとジャスパーでやります』それ以外に一言でも言ったら、殺すからな」

CamScannerでスキャン

ロック・スターはどうにかうなずいた。ミスター・モビーが出た。ジャスパーは携帯電話をロック・スターの歯が折れて血にまみれた口に近づけ、もう一方の手で銃をロック・スターの腹にぐっと押しつけた。

「終わりました」ロック・スターは言った。歯が折れているせいで声の調子がおかしくなっていたが、ミスター・モビーが気づくとはジャスパーは思わなかった。「あとはおれとジャスパーでやります」

「後始末」ジャスパーがささやいた。

「後始末を」ロック・スターは電話に言った。

「よし」ミスター・モビーが言うのが聞こえた。ジャスパーは電話を切った。

電話を床にたたきつけ、ばらばらになった破片をロック・スターのポケットにもどす。

「この状況でなかったら」ロック・スターに向かって言う。「おまえを殺すところだ。だがあとまわしにできない仕事があるんだ。おまえにとっちゃ幸運だったな。おれの言ってることがわかるか?」

ロック・スターはうなずいた。ちょっと泣いていた。

「おまえは姿を消せ。おれはミスター・モビーに、おまえはこの仕事をやり抜くだけの度胸がなかったと言う。おまえのことは心配いらない、おまえはちゃんと口をしっかりつぐむから、と言うつもりだ。だがミスター・モビーはそれでも人をやっておまえを探させるかもしれん、だからおまえは本当に姿を消すのがいちばんいいんだ。おまえの言葉かおれの言葉ということ

になったら、ミスター・モビーはおれの言葉を信じるだろう。だがおれが先におまえを消す。わかるな？」

ロック・スターはうなずいた。

ジャスパーはちょっと考えた。それから、気を変えた――それについてはまったく恥じるところはなかった、その変化が理にかなったものだからだ――そしてロック・スターの頭を撃った。

死体を車のトランクに運んだ。それからふたたび階段を上がって、かたづけをはじめた。ソファを正しい向きに起こして、ロック・スターの銃を床から拾いあげた。身体を起こしたとき、ルーシーが戸口に立っているのが見えた。

『いいか、おまえ』ジャスパーは心のなかで言った。『今だ。今こそチャンスだぞ』

「ルーシー」ゆっくりと言う。

だが、ルーシーはドアの鍵穴のまわりのはじけた木部を見た。ジャスパーが手にしている銃を見た。それから、最後にジャスパーの顔を見上げた彼女の目には、最悪の種類の呆然とした恐怖が浮かんでいた。最悪の種類の問いかけと。

『あなたが？　どうしてあなたが……？』

ジャスパーは自分を殺しにきたのだと、ルーシーは考えていた。

いや、ちがう。ちがう、ちがうぞ、おい。

「ルーシー」ジャスパーは言った。「ちがうんだ」

CamScannerでスキャン

だがルーシーはすでに背を向けて逃げ出していた。ジャスパーは――いまだかつて経験したことがないほどこわばり締めつけられている心臓を抱え――彼女を追いかけてつかまえようとはしなかった。

ルーシーはどこまでもどこまでもどこまでも車を走らせた。やがて、燃料残量ライトがちかちかとまたたきだした。ヴェガスの東二百四十キロ地点で、ドライブインに寄った。ガソリンを入れるために。

まだ身体が震えていた。

だが同時に――砂漠の冷たい風に吹きつけられながら――高揚した気分も感じていた。自由になったのを。

目から鱗が落ちたようだった。子どものころ、教会のミサで聞いた話が思い出された。聖パウロだったっけ？　あのとき、アパートの戸口に立ったとき、はじめてものがはっきりと見えたのだ。

神の導きが――ジャスパー、彼女を殺しにきたジャスパーの形をとって――贈り物をもたらしてくれたのだ。

もう何年むだにしてきたことだろう――じっと待ちながら、ふりをしながら、願いをかけながら。

勇気がわくのを待ちながら。自分が今送っている人生はそれほど悪いわけではないというふ

りをしながら。救い主が空からバケツを落として、嵐の海から救ってくれますようにと願いをかけながら。

この何年ものあいだに、いったい何度ここを去ろうと考えたことだろう？　いったい何度、そうする寸前まで行ったことだろう？

ここで送った人生にいいことなど何ひとつなかった。まったく何も、いいことなどなかった。ようやくそれに気づいたのだ。その、お尻を蹴られたようなショックこそが、彼女が必要としていたものだったのだ。

大学に行こう。そう思った。そしていい男と出会おう。女でもいい。そこのところはまだ自分でもはっきりとはしなかったが、それがどうだというのだ？

夜のただなかで、砂漠のなかのドライブインで、ガソリンを車に入れながら、ルーシーは笑った。高いハイヒールをはいてよろめき、風にあおられた緋色の超ミニワンピースの裾を太腿のまわりにまとわりつかせながら、高らかに笑った。

今や何も持っていなかった。財布には二百ドルがはいっている。腕時計が高級品だから、売ればいい。

今、彼女はとうとう、すべてを手にしていた。

ジャスパーはトランクの中身の後始末をして、クラブにもどった。ミスター・モビーは毒を噴きそうなほど機嫌が悪かった。ロック・スターが怖気づいて遁走したとジャスパーが告げる

と、ミスター・モビーは言った。「おまえがいてくれてよかった、くそ神に感謝するぜ、ジャスパー」

それを聞いて、ジャスパーは誇らしいと同時にちょっとばつの悪さを感じた。

「あのあばずれを見つけ出す」ミスター・モビーは言った。「それから、そもそもこの件をめちゃくちゃにしやがった、あのとんまの元囚人野郎も見つけ出すぞ」

ジャスパーは――こちらも毒を噴きそうなほど凶悪な気分になっていた――うなずいた。彼もまったくもって同感だった。ああ、必ず見つけ出してやる。

28

パナマ・シティへの乗り継ぎ便は、ダラスを出て二時間たったところでメキシコ湾で発生した暴風圏のせいでダラス空港に引き返す憂き目に遭った。シェイクとジーナはその夜のほとんどを、空港ターミナルのかたいプラスチック椅子の上で半分眠りながらすごした。ジョージ・タートルとテッド・〝コックスマン〟その他の、目いっぱい酒を飲み、背中をたたきあう〈ビルディング・ブリッジズ〉団体も同じだった。運がいいと言うべきかどうか、彼らもパナマを目指していた。シェイクは、栄養強化された猫科用栄養補給品について学ぶべきことはすべて学ばされた。ジーナは小声でシェイクに、あんたの靴ひもを貸して、それで首を吊るから、とささやいた。シェイクは彼女に、おれが先に首を吊るから待ってくれ、と答えた。

翌日、一時すぎに、一行はようやく、パナマ共和国の首都パナマ・シティのトクメン国際空港に着陸した。

難局のなかのせめてもの明るい一面として、この暴風圏のせいで中央アメリカに向かう飛行機はすべて遅れたはずだ、とシェイクは計算した。だから、ふたりがこちらに向かっているこ

とを、もしアレクサンドラやモビーが発見していたとしても——その可能性はかなり高かった——向こうは少なくとも半日は遅れをとっているはずだ。反面、マーヴィン・オーツと包皮は、今や少なくとも一日先行していることになる。

ふたりは税関を抜け、手荷物受け渡し所の回転ベルトコンベアのところで〈ビルディング・ブリッジズ〉一団と分かれた。ジーナはやけに浮わついた調子で、紫色のタグの男たちのほとんどと、熱のこもった盛大な、別れの抱擁を交わしていた。

シェイクはお金の両替所を探しに出た。パナマの公式通貨が、見慣れた裏面緑色の米ドル紙幣だと知って、ちょっと驚いた。次に驚いたのは、空港からタクシーに乗って走っている最中に見たパナマ・シティそのものだった。予想していたのとはまったくちがっていた。太平洋の縁にちょこんと乗っかっているような鮮烈な緑色の熱帯雨林からそびえ立っているのは、まぎれもなく本物の都市だった——何十というきらめく摩天楼が林立し、現在建築中のビルも何十となくある。シェイクが経験したもうひとつの中米都市——何年も前に一度だけ、友だちが〝輸出入ビジネス〟から足を洗うのを助けるために数日間滞在した、危険で薄汚いサン・サルバドルとはまったくの別世界だった。前の旅行のことは、思い出したくもなかった。

シェイクは窓を下ろした。ここの熱気は濃密で湿っていた。そしてこの匂い。ラスヴェガスでは、砂漠の空気は乾燥しており、匂いは無機的なものだった——車の排気ガス、灼けたアスファルト、カジノホテルの周囲にめぐらされた運河や礁湖、巨大噴水に投入された塩素。ここの匂いはもっと豊かで甘やかで、ジャングルっぽいものだ。花開いている生命、腐りゆく生命、

今にも降りそうな雨、海になだれこもうとしている川。

そして、車の排気ガスもたっぷり。

それもひっくるめてすべて、シェイクは気に入っていた。

タクシー運転手がクラクションを数回鳴らし、前のバスに追い越しをかけた。バスの運転手がクラクションを返した。ここの交通も運転手たちも、これまで遭遇したなかで最悪だということにシェイクは気づいていたが、それでもここのクラクションは合衆国よりもはるかに感情を豊かにあらわしており、礼儀正しく、音楽的だった。そこもまた、パナマが気に入った理由のひとつだ。

そしてバスもだ。アメリカのがたがきた古いスクールバスが、それぞれ個別に、派手な原色で塗られ、サイケデリックな縞模様や炎や映画のシーンや、あどけない目をしたスペイン美女の肖像と、手のこんだ流れるような書体で書かれたその美女の名前で彩られている。フロントガラスでさえ、運転手が外をのぞけるだけの狭いガラスの帯ひとすじだけを残し、ペイントされていた。運転手はまるで、コンクリートのトーチカの銃眼からのぞく兵士のようだ。

タクシー運転手は、追い越したばかりのバスをシェイクが見ていることに気づいた。

「ディアボロス・ロホス」運転手は言った。

「赤い悪魔ども?」一秒ほどして、シェイクは訊いた。

「バスの運転手はとんでもなくイカれた運転をするからな」運転手は愛想を尽かしたというようないらだちまじりで首を振ってみせ、それから速いリズムでクラクションを鳴らすと、もう

一台バスを追い抜いた。鋳鉄製の街灯にすんでのところでぶつからずにすんだ。
「これまで見たかぎりじゃ、パナマが気に入ったよ」シェイクはジーナに言った。
「この湿気であたしの髪がどういうことになるか知ってる?」ジーナは訊いた。「それにもし巨大ゴキブリなんかがいたら、今から言っとくけど、あたし、金切り声をあげるわよ」
ジーナはシェイクが空港で買ったガイドブックを見て、ホテルを選んだ。シェイクはそのホテルの二ブロック手前で、タクシー運転手に下ろしてくれと言った。念のために。
「カルナヴァルを楽しんでくれ」運転手はふたりに言った。シェイクは思い出した。二日後が脂の火曜日(マルディ・グラ)だ。
外観は及第点と思えるホテルに、ジーナのあとに続いてはいった。なかにはいると、そのホテルは及第点という以上によかった——上品で落ち着いた大理石、いたるところに飾られている蘭の生花。断じてエコノミークラスではなく、ジーナは満足したようだった。
「いらっしゃいませ」フロント係が英語で言った。
「予約をとってないんだけど」ジーナが言った。
「問題はございません」フロント係は言った。「お部屋はひとつですか、ふたつですか?」
「ふたつよ」ジーナは言った。
「ひとつだ」シェイクが言った。
フロント係は愛想のいい顔で待った。愛想のいい困惑。
「あんた、あたしがその気になるのを心配してたんじゃないの?」ジーナはシェイクに言った。

CamScannerでスキャン

「それとも、そう願ってんの？」
「ひと部屋でお願いします」シェイクはフロント係に言った。
「それはイエスって答えだと受け取るわよ」ジーナは言った。
「付帯費用が出たときの保証のため、すみませんがクレジットカードを見せていただけますか」
シェイクが驚いたことに、ジーナはマスターカードを出した。
「カード払いにはしないで」ジーナはフロント係に言った。「チェックアウトのときに現金で払うわ」
「もちろんです。ただ、ナンバーを控えさせていただくだけです」
フロント係はカードを受け取り、それに出ている名前を読み上げた。ジーナを見た。それから、シェイクを見た。
「テッド・ボックスマンさんですね？」
「〝コックスマン〟みたいでしょ」ジーナが言った。「でも〝コ〟じゃなくて〝ボ〟なのよ」
この部屋、イケてるじゃん。ジーナは大喜びで部屋を見まわした。LAで泊まった〈ペニンシュラ〉とほとんど同じくらいの贅沢なつくりだ。海が見晴らせる専用バルコニーに、古風な猫脚バスタブがある広々としたバスルーム。
ジーナはふたつのクイーンサイズ・ベッドの片方の上で飛び跳ねた。実のところ、この部屋

CamScannerでスキャン

は〈ペニンシュラ〉より上だ、と判断していた。シーツもいいし、個性も豊か——ほのかな植民地様式（コロニアル）の香り——で、何よりいいのは、自腹を切って支払わずにすむというところだ。

シェイクがバルコニーに出ているのを見守る。手すりに寄りかかっている彼の、シャツの下の筋肉の動きを眺める。そうしながら考える……まあ、たしかに、〈ペニンシュラ〉の部屋も自腹を切って払ったわけではなかった。〈クジラ〉からくすねた三十万ドルのなかから払ったのだった。

はるか遠い昔のことのように思えた。こんなことになるなんて、愉快じゃないの。あのときはたかが三十万ドルであんなに興奮していた。それが今は、紆余曲折（うよきょくせつ）と、何度かの恐ろしい経験を経てここに来て、五百万ドルが支払われる日を心待ちにしている。もしかしたら、もっと多いかもしれない。

ああ……まあ、その半分だけど。今度はパートナーがいることを忘れてはいけない。

高級スーツに身を包んだシェイクはどんなふうに見えるだろう。きっと、すごくいいにちがいない。シェイクはジーナの好みのタイプの身体をしていた。引き締まっていて、肩幅は広いが威圧的に盛りあがってはおらず、やるとなったらスポーツも得意な男。だがそちらには向かわなかった、ありがたいことだ。ちょっとがに股ぎみだが、そこにもある種の魅力がある。

スーツを脱いだらどう見えるだろう、と想像する。全部脱いだら。すてきな胸筋にちがいない。

そう思った。

「この部屋、イケてるわね」ジーナは言った。

「こんないい部屋で薬を盛られて身ぐるみ剝がれたことはないな」シェイクが肩越しに言った。
「黙りなさいよ。あんなこと、永遠に根に持つつもり?」
「シャワーを浴びたい」
「あたしもよ。それから、そのあとで服を買いに行きたいわ」マスターカードを掲げ、指関節の上でくるくるまわす。ずっと前に、ニューヨークのブラックジャックのディーラーから教わった技だ。「キャットフードちゃんがカードがないことに気づく前にね」
「キャットフードはもうひとりのほうだぞ」
「ちょっと待って。コックスマンってどっちだった?」
「さあな」
シェイクはバスルームにはいってドアを閉じた。シャワーが流れはじめる音が聞こえた。
「ドアを閉めなくたっていいじゃない!」ジーナは叫んだ。「のぞいたりしないわよ!」
本当はのぞき見する気満々だったのだが。

街の中心的ショッピング・ストリート、〈ビア・エスパーニャ〉はたいして大きくもなく、ロサンジェルスのロデオ・ドライヴにあるようなものは何もなかった——フェンディも、プラダも、ドルチェ&ガッバーナも。でも、地元の超高級ブティックがジーナの目を惹きつけ(郷(パナマ)に入りては、でしょ?)、ジーナはシェイクを店のなかに引きずりこんだ。
まさにぴったりとフィットするグリーンのドレスを着て、ジーナは試着室から出た。

CamScannerでスキャン

シェイクは革張りソファにすわり、女性店員から渡されたミネラルウォーターをちびちびと飲んでいた。
「どう？」ジーナは素足の片方でつま先立ってくるりとまわってみせた。「あんたがいつもやる、〝ただ今熟考中〟っていうふりはやんなくていいわよ」
シェイクは熟考した。
「悪くないね」そう言った。
ジーナはにんまりして、もう一度くるりとまわった。この男は本当に口からでまかせばかり言う。彼女がそれを知っていることを、彼も知っている、そうわかっていた。

ふたりはホテルにもどって着替えた。それからシェイクはコンシェルジュに、パナマ・シティでいちばんお薦めのレストランはどこかと訊いた。
「〈マノロ・カラコル〉ですね」コンシェルジュはためらうことなく言った。「美しい店ですよ」
「パナマ・シティでいちばん料理がうまい店だ」シェイクは目的をはっきりさせた。
「〈マノロ・カラコル〉です」コンシェルジュはくりかえした。
シェイクは疑わしく思いながらロビーをつっきり、フロント係にセカンド・オピニオンを求めた。
「〈マノロ・カラコル〉です」フロント係は言った。「まちがいありません」

そのレストランは歴史地区（カスコ・ビエホ）という、旧市街の一角にあった。カスコ・ビエホは旅行客にとっては安全な場所だが、その周囲が物騒な地域なので、タクシーで行くほうがいいでしょうとフロント係がアドバイスしてくれた。

「パナマ・シティでいちばんいいレストランはどこかな?」タクシー運転手に、シェイクは訊いた。「いちばん料理のうまい店は?」

ジーナはもう黙ってとシェイクに言った。

「料理ってのは、おれには大事なんだ」シェイクは言った。

「〈ユーラシア〉がとても、とてもいいネ」タクシー運転手は言った。

「それはどこだ?」シェイクは訊いた。

ジーナはシェイクの前に身を乗り出した。「カスコ・ビエホに行って」タクシー運転手に指示する。「〈マノロ・なんとかかんとか〉っていう店に行って。それからお願いだから、そこに着くまで、あたしの友だちの言うことは無視して」

29

テッドはフォークの先でテーブルクロスの縫い目をなぞり、ネルリデスが注文してくれた、エキゾチックに見えるがあまりおいしくない飲み物の氷が溶けるのを眺めながら、彼女が婦人用化粧室からもどってくるのを待っていた。

そのレストランはほとんどからっぽに近かった。客がいるのはもうひとつのテーブルだけで、そのテーブルは部屋の向こう端にあった。そしてウェイターがだらけた姿勢でバーカウンターに寄りかかり、テッドをにらみつけていた。

気のせいではないとテッドは確信していた――ウェイターは彼をにらみつけている。レストランはあまり清潔そうでもなく、料理もあまりおいしくなかった。だが、テッドはあまり批判的にならないように努めていた。ほかの人々がそうした態度をとるのを見たときにあまり好ましいと思わないからだ。もしかしたら、自分が独自の文化的価値観を勝手にパナマに押しつけているだけかもしれないのだ。たとえば彼の父親は、マッシュルームを一度たりともためしてみようとしない。前に一度、〈ゴールデン・コラル〉で、テッドはビュッフェのブ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ルーベリー・パイを父親に持っていったことがあった。チェリー・パイが品切れだったからだ。父親は半信半疑という顔でとりあえずひと口食べた。

「気に入った？」テッドはたずねた。この一年、母親が死んで以来ずっと、ほぼ毎晩、父親をディナーに連れて行っていた。なぜなら、弟は——

テッドはその先を考えるのをやめた。またしても、批判的な領域ににじり寄っていたからだ。

「気に入ったかどうかなんぞ、知るもんか！」父親はどなった。まるでこう言っているかのようだった——『味ってのが何なのかわかりもせんのに、その味が気に入ったかどうかなんぞ、このおれにわかると思うか？』テッドはそれが本心の暴露だと考え、おもしろいと思った。そう、そういう状況で——〈ゴールデン・コラル〉での父親とのディナー——せいぜい期待できる程度の、おもしろみだ。

ウェイターはテッドをにらみつけている。飲み物に浮かんだ氷は溶けていた。ネルリデスは化粧室から出てこない。

『ぼくはこんなとこで何をやってるんだ？』

この十二時間かそこらのあいだに、そう自問したのはこれがはじめてではなかった。どちらかというと、二百回めぐらいというに近い。

ヴィヴィアンのことを考えた。ヴィヴィアンのことを考えまいと努めた。

今は何も望んでいなかった。ただ、パナマにあるこのレストランでテーブルにひたいを押しつけ、今にも下痢になりそうだというようなことを——ヴィヴィアンのことを、永遠にいなく

なって、もう二十六ヶ月になる彼女のことを考えながら――思わないようにするだけ。
『ぼくはこんなとこで何をやってるんだ?』

飛行機のなかでもそう自問していた。ホテルに向かう送迎バンのなかでも。ランチしながらのオリエンテーションの最中もずっと、絶え間なく。〈ビルディング・ブリッジズ〉の〝世話役〟はフランクという名前の男で、オリエンテーションの最初の部分で自らの職業履歴をくわしく説明していた。彼は成功したプロゴルファーであり、成功した住宅建築業者兼開発業者でもあり、成功したラジオのトークショーのホスト役でもあった。フランクの説明によれば、このオリエンテーションで、〈ビルディング・ブリッジズ〉の提供するツアーは、一般の人々による誤解はさておき、けっして人生の敗者のためのものではないことがはっきりと示されるということだった。これはれっきとした上流の人々のための仕組みなのだ。自分が何を求めているかをはっきりと知っており、〝あえて下のほうを見る〟ことを恐れない男たちのための。

ほかの男たちの大半がうなずいた。テッドの友だちのジョージ・パートル――テッドの、本当のところは知り合いにすぎないジョージ――もうなずいてこう言った。「アーメン、兄弟」

これは〈ビルディング・ブリッジズ〉での、ジョージの三度めの〝視察旅行〟――とジョージは呼んでいた――だった。彼はすでに、タイとウクライナにも行っていた。

ジョージは仕事上の知り合いだった。テッドはオクラホマ・シティの市営の〈集会及び観光局〉でマーケティング担当役員をしており、大規模な会議や集会や大勢の観光客を当市に誘致するという、報われることの少なく、驚くほど薄給の業務に携わっていた。オクラホマは住む

にはいい場所でも、大会や観光客を誘いこめるようなめぼしい長所は何もない。ラスヴェガスはもちろん、ダラスのような都市と比べても勝ち目はない。ジョージは、〈集会及び観光局〉を従属支所とする、〈広域オクラホマ・シティ商工会議所〉に勤めている。数ヶ月前、中国の旅行規制が大幅に緩和されたのを受けて、中国人観光客をオクラホマ・シティにおびき寄せようという計画案をたずさえて、ジョージはテッドの部署にやってきた。その計画案には、英国植民地時代の町並み復元で大成功しているヴァージニア州のウィリアムズバーグにならい、キャットフードと西部開拓時代の〈牛の町〉建設での町おこしもふくまれていた。

「これからみなさんがお会いになるギャルたちは」世話役のフランクは、ランチ・オリエンテーションで言っていた。「みなさんの郷里の女性たちとはとても、とてもちがっています」

「アーメン、兄弟」

「こっちのギャルたちは、内面で男を評価します。太っているとか、はげているとか、胸筋が六つに割れていないとかで評価はしません。一年に百奪三振を達成できるかどうかなんて、彼女たちは気にしません」

ジョージはこの旅行に参加するよう、テッドにしつこくしつこく誘いかけ、ついにテッドは、うんと言わなければジョージのこの誘いかけは永久にやむことがないという神の啓示を受けた。そしてうんと言ったのだった。あまりに疲弊していて、ほかの選択肢を考えることができなかった。ヴィヴィアンに去られて以来、毎晩一、二時間しか眠っていなかったのだ。

「よっしゃ」とうとうテッドがうんと言ったとき、ジョージは言った。それから、急に声の調

CamScannerでスキャン

子が静かで真剣なものになった。「自分の人生を前に進めなきゃならないぞ、テッド」

その言葉は正しいと、テッドは思った。

世話役のフランクは、ちょっと悪そうな笑みを浮かべてみなに言った。ここのラテン娘たちは、いろんな古風なよき風習は保っていながら、閨房では大胆です――わたしの言ってる意味がおわかりですかな、お国の女性たちよりはるかに先入観のない開けた心の持ち主なのです。

グループの男のほとんど全員がにやにや笑い、うなずいていた。

『ぼくはこんなとこで何をやってるんだ？』

ランチ・オリエンテーションのその時点で、テッドはこの宴会場からそっと抜けだし、タクシーを拾って空港にもどろうかと、真剣に考えていた。だがそのときにふたたびヴィヴィアンのことが頭に浮かび、行動に移せずにいるあいだに、五十人から六十人のラテン娘たちがぞろぞろと宴会場にはいってきて、ツアー中に四回設定されている合コン、〈一日一回のお見合いハッピータイム〉の第一回がはじまったのだった。

この合コンで、上流階級であるアメリカ人参加者に対するラテン系花嫁候補者の割合は一対三を下まわることは絶対にありません、とフランクは断言した。通常はそれよりずっといい比率になります、と。

ラテン娘のほとんどは、テッドが見たところ、二十代のようだった。〈ビルディング・ブリッジズ〉グループの男の大半は四十代か五十代だ。それ以上の歳に見える男もたくさんいた。三十四歳のテッドは、まだ若いほうだった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ラテン娘たちのほうから男たちに近づくことは許されていなかったので、男たちがそれぞれのペースで慎重にテーブルからテーブルへと動いていった。テーブルひとつにつき四人のラテン娘がすわり、男たちを待ち受けていた。

十字架の道行きの留（りゅう）（キリスト受難中の諸事件を順次に十四の絵その他であらわし、それぞれに木の十字架を付したもの。信者は順を追ってそれぞれの前で祈りを捧げ黙想する）みたいだな、と男のひとりがにやにや笑いながら言い、その周囲の男たちがどっと笑うのが、テッドの耳に聞こえた。

通訳はあまりおらず、三つのテーブルにつきひとりという程度だったが、世話役のフランクは全員に、コミュニケーション――〝本物のコミュニケーション〟のことを言ってるんだよ、言葉に頼るものじゃなくてね――には何の問題もないと請け合った。

折を見て宴会場からそっと出ていけばよかった、とテッドは思った。だがいったんラテン娘たちがやってきてからは、気がつくと――彼の一生はすべからくそんなふうだった――厳然たる行動の流れに巻かれて押し流され、男たちとラテン娘たちの一団と一緒にホテルの送迎バンに押しこめられ、気がつくと旧市街を歩くガイドなしの散策ツアーに出ており、ついにはほとんど客のいないレストランで、ジョージがディナーに誘えとしつこく言い張った〝デート相手〟と一緒にディナーをしていたのだった。

『ぼくはこんなとこで何をやってるんだ？』

彼の〝デート相手〟、ネルリデスが婦人用化粧室からもどってきた。テッドは礼儀正しく立ちあがった。それが世界一こっけいなことだとでもいうように、ネルリデスはげらげら笑った。

CamScannerでスキャン

「よしよし、いいぞ」散策ツアーの最中、ネルリデスが何の前触れもなしにテッドの腕に腕をからめてきたときに、ジョージがテッドにそうささやいた。

ネルリデスは魅力的と言ってもいいかもしれない、とテッドは考えた。彼女のような身体が好きだという男は大勢いることを、彼は知っていた。だが彼にとって、彼女はちょっと恐ろしくもあった。彼女の目の焦点が本当に合うことは一度もなく、彼女はやけに盛大に大笑いしていた。散策ツアーで、車に轢かれた犬のわきを通ったときも、彼女は指さして大笑いしていた。

バーのウェイターは、今や本当にテッドをにらみつけていた。断じて気のせいではない。ウェイターはネルリデスが売春婦だと思っているのだろうか。そうテッドは考えた。

ネルリデスは絶え間なく大声でしゃべっていた。全部スペイン語で。情報の断片を集めると、彼女はパナマではなく、コロンビアのカルタヘナ出身のようだった。ときおり、英語の単語がひとつふたつ聞き取れた。「ショッピング」が数回。「豊胸手術」が一回。

『そうなのか？』テッドは警戒して考えた。『この女は売春婦なのか？』

『ぼくはこんなとこで何をやってるんだ？』

そして心を決めた。もうやめるぞ。会計を頼み、ネルリデスに礼儀正しくおやすみと言って別れを告げるとしよう。タクシーでホテルにもどり、荷物をまとめて航空会社に電話し、明朝一番の便で家に帰るのだ。たとえ航空券の変更にひと財産といえる額がかかったとしても、〈ビルディング・ブリッジズ〉にすでに払いこんだ内金がむだになるとしても。テッドはかまわなかった。流れにまかせて流されるのはもうごめんだった。この女性と結婚するつもりはな

CamScannerでスキャン

かったし、彼女の豊胸手術――それがどういうものであれ――の費用を払うつもりもなかった。
自分の人生を前に進める必要はないのだ。ヴィヴィアンが自分の人生の一部、それも大部分を占めていたわけではないというふりをする必要はないのだ。それに、ジョージが上司に提出した、まがいものの西部開拓時代の〈牛の町〉づくりというばかげた企画にも、断じて屈するつもりはなかった。たとえジョージが、オクラホマ・シティに来たくてうずうずしている中国人観光客がどれだけいるかという演説をぶって、しつこくしつこく迫ってきてもだ。
『ぼくはこんなとこで何をやってるんだ?』
『もうやめるぞ、それだけだ』
テッド・ボックスマンは気分がぐっとよくなるのを感じた。ウェイターを手招きし、財布を出そうとした。

カスコ・ビエホはシェイクに、キューバの首都ハバナで見た絵画を思い出させた。同等の比率の魅力と崩壊。建物から剥がれていく絵の具の色は、グアバやマンゴーやパパイヤといった熱帯の虹の色彩だ。ニューオーリンズのフレンチ・クォーターも昔はこんなふうに見えていたかもしれない。シェイクの時代よりもずっと前、ストリップ・クラブやTシャツ店や、ひとり分の値段でふたりが飲める記念グラス入りのカクテル、〈ハリケーン〉に席捲される前には。
明るいマンゴー色のワンピースを着た女の子が三階のベランダから身を乗りだし、下の街路にいる幼い弟に一枚のコインを落としてやった。ふたりのあいだにあるからまった電線を巧み

にすり抜けて落ちたコインを弟は受け止め、通りの先にあるアイスクリームの自動販売機に向かい、走っていく。

レストランは植民地時代の建物を復元したものだった。木のテーブルに白いスタッコ塗りの壁、厨房は屋外で、赤銅色の煙出庇（スモークフード）が上に張り出している。シェイクはほっとした。言われたとおり、たしかに美しい店だったが、料理についての懸念が払拭されたわけではない。

テーブルに向かって歩きながら、鏡に映った自分の姿がちらりと見えた。スーツを着た自分を――ちゃんと身体に合ったスーツかどうかはともかく――最後に見たのはいつだったか、思い出せなかった。ひげも剃っていたし、ジーナがやんわりと言い張ったのに従い、髪も切って整えていた。髪を切ったのは、ホテルのロビーにある美容室の女の子だったが、両眉のあいだに数本生えていた黒い剛毛も抜いてくれていた。それを抜きながら、彼女は音楽的になまった英語で、人生には痛いけれどやらなくちゃならないことがたくさんあるのよ、とさとしてくれた。

シェイクは椅子を引いてジーナをすわらせた。このレストランに到着したとき、混み合った店内をすばやく見渡したのと、鏡に映る自分をちらりと見た以外は、ジーナから目を離すことができなかった。そう、本当に目を離したくなかったのだと、認めざるをえなかった。ジーナはダークグリーンのシルクのドレスを着ていた。さっき買ったなかの一枚で、いろいろと想像の余地を残しながらも、同時にその想像を非常に興味をそそりたてる方向に誘導するようなカットのドレスだ。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

シェイクはメニューを頼んだ。ウェイターは、メニューはないと言った。シェフがいいと思った素材を料理し、ウェイターがそれをあなたに運び、あなたはそれを食べるのだ。それについて自分がどう思うか、シェイクにはよくわからなかったが、何も言わなかった。

「それじゃ、その包皮を買いたがってるジーグラーって男について、もっとよく教えてちょうだい」ウェイターがふたりのワイングラスを満たして立ち去ると、ジーナが言った。

シェイクが話すべきことはたいしてなかった。「最初は合法的領域で仕事をやってたんだ、ニューヨークの金融界でね。だがしだいに街の暗黒部分を好むようになっていった。そして九〇年代半ばに最初の大掛かりな信用詐欺をやってのけた。老人たちのことを話しただろう？」

「くわしく話して」ジーナは言った。

「典型的なピラミッド構造のマルチ商法だ。退職者連中を狙ってフロリダ州とアリゾナ州をまわり、ウォートンの学位だのハイテクの何だかんだと大ボラを吹いて彼らを信服させた。すっからかんになるまで金を搾りとったあげくに、この国からずらかったんだ」

「でもつかまったんでしょ？」

コースの最初の料理がやってきた。料理用バナナ（プランテーン）のフライは空気よりも軽く、ガーリック・マヨネーズのようなものがかかっていた。百万年たってもシェイクには思いつかない組み合わせだが、とてもとてもおいしかった。

「最終的にはね。やつは二匹めのドジョウを狙ってもどってきたんだが、今度はつかまった。裁判の数日前に、やつは主イエス・キリストを心に受け入れ、改心を示したんだ」

「みんなそれにだまされたの？」
「たぶんちがう。だがやつはほかのいくつかの知的犯罪をＦＢＩが追うのを手伝うと約束して、取り引きを成立させた。その手の犯罪はいろいろとこみいってて、なかなか難解なものなんだ。経済学の大学院なみの学位をとってなけりゃ、自分が強奪されたことすら理解できないくらいだ。司法側のやつらはしょせんただの警官だ、盗聴器の隠し方とか事件報告書の書き方を知っている程度の勤め人にすぎない。彼らのほとんどは小数点以下二桁を越えたところでわけがわからなくなる。ジーグラーは自分の能力を役立てようと申し出たのさ、悪いことでなくよいことのほうにね」
　ジーナはくっくっと笑った。「それで、みんな納得したの？」
「やつはほぼ一年、ちゃんと球を蹴ってた。ＦＢＩは大喜びしてたとアレクサンドラは言ってた。逮捕、逮捕、また逮捕ってことでね。ケイマン諸島の口座がぞろぞろと明るみに出た」
「いつものことよね」ジーナは言った。「〝だが、それから〟ってね」
「だが、それから」シェイクは続けた。「連邦政府の資源を使って直接の競合者どもと個人的に怨みのある敵をすべて刑務所送りにして、さらに直接の競合者どもと私怨のある敵どもと連邦政府の機能のしかたについてすべて学んだあと、ジーグラーは消えたんだ」
「自分の能力を悪いことに役立てるほうがずっとおもしろいって判断したのね」
　次の料理がやってきた。二種の前菜。タコは温かく、ローストした粒コショウとトマトが添えられていて、まるでトスカーナ料理のようだ。スズキは冷製で、オレンジとコリアンダーが

爆発するようなパンチを効かせている。どちらもとんでもなく新鮮だった。シェイクは目を閉じてじっくりと噛みしめた。

「やつはずっと商売にいそしんでた」シェイクは言った。「何年か前にまた巨額の金をせしめたんだ。サーバーファームと銀行の海外送金システムを使って何かやったんだ」

「どういうふうにやったの？」

「これが個人授業だとは知らなかったよ」

「あたしは生きてるあいだはずっと学びたいのよ」ジーナは人差し指の爪の先で考えこむように歯をたたいた。「で、その神出鬼没のミスター・ジーグラーだけど。あんた、本当に彼があたしたちの前にのこのこ出てくると思ってるの？」

「そう願ってるよ」シェイクは言った。「ただ、心配なのはきみのお仲間のマーヴィン・オーツだ。おれたちがやつを見つけることができず、従って包皮を見つけることができなきゃ――」

「それは問題にはならないわ」

「まあ、そうだろうな」

ウェイターが次の料理を運んできた。甘くダークでスモーキーなソースのかかったアヒル肉。モレ（メキシコ料理のチョコレート風味のソース）とカンザスシティ・バーベキュー風味の出会い。これは本当の傑作だ。シェイクは手をあげて次の会話に移るのを制し、ふたりは無言で食べた。

車エビのショウガ焼きはアヒルよりもさらにおいしく、シイラのグリル、レモン風味は車エビよりさらにおいしかった。さらに、チンゲン菜とハマグリのバターソテーが添えられた豚ヒ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

レ肉も出てきた。

「ワオ」デザートを食べ終えて、シェイクは言った。濃厚な甘いシロップに漬けた刻みココナッツに、ミニチュアサイズのフランに、シナモンで香りをつけた緑茶。

「刑務所の食事に勝ってる？」

シェイクはにんまりした。「服役したことはあるのか？」

「〈クジラ〉のとこで働くのは、服役にはいる？」

「その前は何をやってたんだ？」

「まあ何でもやったわよ。スターバックスでも働いたし、モールで携帯電話も売ったわ。バニーガールもやった。機会があれば、合法とは言えない類の進取の気性に富んだいろんな行為もした。でも身体を売ったことは一度もないわ。あんたがそう考えてるならだけど」

「そんなことは考えてなかった」

「それだけはやらないわ。ラップダンスをするのだって好きじゃなかった。セックスは利益じゃなく、喜びを得るためにやるべきよ。もしくは喜びと利益を得るために。利益だけを得るためじゃない」

「愛はどうなんだ？」

「セックスは喜びと利益と愛のためかって？　それとも喜びと利益はあっても愛はなくていいのかって？」

「まあ、それは世界の偉大な難問のひとつだ、そうだよな？」シェイクは言った。

ウェイターがエスプレッソと勘定書きを持ってきた。その額は――税金、チップ、ワインも込みで――七十五ドルもいかなかった。スペイン語を勉強して、このあたりでアパートを見つけるにはどれぐらい時間がかかるだろうとシェイクは考えた。

「〈クジラ〉から三十万を盗んだときも、絶対に楽しんでいただろう」

「それはちがうわよ」ジーナはくすくす笑った。「そっちはどうなの？　車の運転以外では？」

「おれはコックだった」

「あら」

「仮釈放の許可をもらうには何か職業と言えるものが必要でね」シェイクは言った。「たいていの厨房は出身地なんか気にしない。時間どおりに出勤して、ウェイターどもを刺したりしなきゃいいんだ」

「あたしが若かったころ、って十七ぐらいだったけど、トップレスの靴磨き娘をやってたわ。それが風俗業界にはいる入り口だった。初日に客の男のホテルの部屋に行ったんだけど、あたしは本当に靴を磨くだけでいいって思ってたの。とにかくかわいく見えてトップレスで、ちょっと踊ったりでもすりゃいいんだって思ってたのよ」

シェイクは笑った。「その男は何て言ったんだ？」

「すまなさそうにしてた。次の朝に大きなインタビュー仕事があるから、靴を本当にきれいに見えるようにしたかったんだって言ったわ」

「話してくれ」

「合法的とは言えない類の進取の気性に富むいろんな行為について？」

「生きているあいだはいろいろと学びたいんだ」

ジーナは肩をすくめた。「たいていは短期間のバイトだったわ。詐欺とも呼べないぐらいのたわいもないこと。どこかの金持ち男の娘の友だちが大学三年のときにヨーロッパに遊びにいってるあいだ、なりすまして授業に出るとか。そういったこと。友だちと組んで男をひっかける仕事もやったけど、そういうのは準備に永遠っていうくらい時間がかかるの」

「ずいぶんと濃い人生を生きてるんだな」シェイクは言った。「きみぐらいの年齢の女の子にしては」

「二十六よ」ジーナは言い、鷹のような目でシェイクの反応を探った。「どう？　嘘はついちゃだめよ。ちゃんとわかるから」

「二十四だと思ってたよ」シェイクは言った。本当のことだった。

ジーナは満足そうな顔になり、エスプレッソを口に運んだ。「それで、あんたは十九だったのよね、ええと、はじめてのときは？」

「記憶力がいいな」

「何があったの？」

ジーナが言っている意味はシェイクにもわかった。考えてみた。「まずいやつらとつきあっちまったんだ。そっちはどうなんだ？」

ジーナは彼から目をそらした。まったく彼女らしくない仕草だった。

「あたしはまずいやつらのなかに生まれちゃったのよ」彼女は言った。「あたしの言ってる意味、わかるならね」

シェイクにはわかった。そしてほんのつかのま、テーブルの向こう側にいる彼女の、キャンドルの光に照らされてとがった輪郭が和らいだ顔を見て、彼女が認めているよりもはるかに複雑で悲しげでかわいらしい若い女性がちらりと見えたように思った。

もしかしたらそれはただ、彼女がシェイクにちらりと見せようと思ったものにすぎないのかもしれない。確信はもてなかった。

ジーナはふたたび彼に目をもどした。にっこりと笑った。ウインクした。

「寝る前にちょっと一杯どう？」

30

ウェイターは奥に行き、レストランのマネージャーを連れてもどってきた。今やテッドは三人ににらまれていた。ネルリデスとウェイターとレストランのマネージャーに。マネージャーは短躯でひげも剃っておらず、汗と煙草の鼻を刺すような臭いを放っていた。

ウェイターとマネージャーはテッドに向かい、怒りながら早口でまくしたてた。スペイン語で。それからネルリデスがテッドに向かい、怒りながら早口でまくしたてた。スペイン語で。どうやら彼女は翻訳していると勘違いしているようだった。

テッドは説明しようというこころみを続けた――英語で、身振り手振りで、知っているわずかなスペイン語の単語で――どういうわけか財布をなくしてしまったが、大丈夫、ちゃんと支払いはするつもりだ、財布がないことにもっと早く気づかなかったのは、ホテルの送迎バンが無料だったからで、財布はたぶんホテルの自分の部屋にあるだろう、絶対にウェイターやマネージャーやネルリデスをだますつもりなどないのだ、と。

ホテルの部屋にもどって、財布を見つけて、それからまたもどってきて代金を払うつもりだ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ということを、なんとかしてわかってもらおうとした。それを態度で示そうとして、ドアのほうに一歩踏み出した。

「オイオイオイ！」ウェイターとマネージャーの両方がそろって声をあげ、それぞれがテッドの腕をつかんで彼を止めた。ふたりは彼をレストランの奥に連行した。ネルリデスがあとからついてくる。息が詰まりそうなほど暑くせせこましい厨房を抜けて、息が詰まりそうなほど暑くせせこましい事務所にはいっていく。

マネージャーはデスクの上の、コンピュータの横に置かれた電話を指さし、誰かに電話して、大至急金を持ってこさせたほうがいいとテッドにわからせた。さもないと、彼、マネージャーは警察に電話して、テッドを逮捕させるぞ。

こんなことがわが身に起こるなんて、信じられなかった。テッドは汗みずくになっていた。誰に電話をしたらいいかもわからなかった。ホテルに電話をかけるわけにはいかない。ジョージはまだ〝デート〟の最中だろう。世話役のフランクは名字も知らなかった。ほかの男たちは、たとえ名字を覚えていたとしても、まだそれぞれの〝デート〟の最中だ。クレジットカード会社に電話をかけることもできない。クレジットカードの番号は財布のなかのクレジットカードに印字されており、それは今手元にないからだ。弟に電話をすることもできなかった。当たり前だ。ハンナという商工会議所の、仲のいい同僚に電話してもよかったが、どんなに恥をかくことになるだろう？　それに夜の十時に、合衆国にいる彼女に何ができるというのだ？　それに彼女のむっつりした夫が電話に出てきたら？

息が詰まりそうなほど暑くせせこましい事務所で、三人の人間ににらみつけられ、スペイン語でどなりつけられながら、はっきりとものを考えるのはとんでもなくむずかしいことだった。『アメージング・レース（アメリカCBSのリアリティ番組。渡された所持金と最低限の荷物を持って、次々に指定される目的地に向かいゴールをめざす）』に出ている競争者たちがときおり、テッド（居心地のいい自宅の居心地のいいソファでくつろぎ、アイスティーのグラスを手にしている）から見るとどうかと思われる選択をしているのはこういうことなのかと、今は理解できた。これまでにはけっしてわからなかったことだ。たとえば、エルミタージュ美術館まで三十ブロックもあるのにタクシーに乗らずに歩くといった選択――レースをしている最中なのに。

「ペイパル！」テッドはせっぱつまった声で言い、コンピュータを指さした。

スペイン語のどなり声がぴたりとやんだ。レストランのマネージャーがうなずいた。「ペイパル」と言い、友好的とも言える手つきでテッドの肩を平手でたたいた。「よし」

テッドはコンピュータの前の椅子にすわり、汗ばんだ手のひらをズボンの太腿にこすりつけてぬぐうと、パスワードを覚えていたことを神に感謝した。自分の口座から八十四ドルをマネージャーが封筒の裏に書きつけたEメール・アドレスに送れというEメールを送った。それからログオフし、念のためにクッキーと履歴を消し、エクスプローラーを閉じた。

ウェイターとネルリデスはどこかに消えていた。マネージャーは椅子にすわり、ふたりで取り引きが処理されるのを待った。十五分後、マネージャーの口座に八十四ドルが出現すると、彼はもう一度テッドの肩をたたいた。

CamScannerでスキャン

「行け」マネージャーは言った。

テッドはレストランの外に出ると、夜の空気を何度か深く吸いこんだ。実のところひんやりともしていなかったのだが、少なくともレストランの事務所で吸っていた空気よりははるかにさわやかだった。

歩道の縁石のところで、タクシーが待っていた。テッドはすんでのところで、タクシーに乗っても払う金がないことを思い出した。

彼は歩きはじめた。ホテルはそれほど遠くはない。たかが数キロ先にすぎない、と計算する。いつも方向感覚はしっかりしているし、歩きたい気分だった。財布はどうなったのかと考えようとした。きっといつか、いろんな人にこんなおもしろいことがあったよと話せるエピソードになるさ。そう自分に言い聞かせたが、本当にそう信じているわけではなかった。

気がつくと、周囲の雰囲気が変化していた。今や街灯も音楽も少なくなり、レストランやクラブもへっていた。実をいえば、もはやレストランもクラブもまったくなくなっていた。荒れた感じの灰色のアパートが立ち並んでいるだけで、路地からはすえた生ごみの臭いが漂っている。

テッドは足を速めた。歩道にあいた穴をよけて歩く。その穴は、誰かがコカ・コーラの赤いプラスチックケースを詰めて埋めようとしていたが、穴のほうがケースよりも大きかった。前方では、通りの反対側で、停まっている車のボンネットに三人の若い男がすわり、マリファナ煙草をまわして吸いながら缶ビールを飲んでいる。三人はテッドに気づき、車のボンネットか

CamScannerでスキャン

らすべり降りると、ずりさがるズボンを引き上げながら、通りを渡って歩いてきた。歩調を加減しており、次の角にテッドが着く寸前に到着するようになっていた。
「やあ」無愛想で無頓着に聞こえてほしいと願いながら、テッドは言った。じりじりと男たちを迂回しようとしたが、男たちはにじり寄ってきた。
いちばん背の高い男がスペイン語でテッドに何か言った。
「スペイン語話せない（ノ・アーブラ・エスパニョール）」テッドは言った。じりじりと迂回をこころみる。若い男たちも同じようにじりじりと迫ってきた。いちばん背の低い男がテッドにマリファナ煙草を差し出した。中間の身長の男がナイフを手にしているのが見えた。
このとき、テッドは思い出した。神の啓示のように鮮やかに浮かびあがってきた——飛行機で一緒だったとても魅力的なあの女性、手荷物受け渡し所のベルトコンベアの前で驚くほど熱烈に抱擁（ハグ）されたこと、そのときに上腕をきつく絞めあげられ、もう一方の手が彼の背中にまわされて——
「財布をよこせ」ナイフを持った若い男が言った。完璧な英語だった。

CamScannerでスキャン

31

部屋にもどってきたときには、真夜中をちょっとまわっていた。シェイクはジーナにどっちのベッドを使いたいかと訊いた。シェイクとしては窓側のベッドを使いたかったが、できるかぎり紳士らしくふるまおうとしたのだ。

「黙って」ジーナは言った。シェイクの背後に立つ彼女の肩が背中に押しつけられるのが感じられた。ジーナは彼を大きな革張り椅子に連れていった。「すわって」

シェイクはすわった。ジーナはラジオをつけ、しばらくいじってから、重厚な重低音を響かせるヒップホップを見つけた。若い女性シンガーが今歌ったばかりの単語のつづりを叫んでいる。シェイクはたぶん、百回聞いても聴き取ることはできないだろう。だが、気に入った。面のような緑色のドレスを着て、彼に背を向け、ビートに合わせて身体を動かしはじめるジーナの姿を眺めるのか。

ビートに合わせて、彼女はシェイクのほうにやってきた。面と向き合い、まだ身体を動かしながらうっすらと笑みを浮かべ、片方の肩からドレスのストラップをずらした。

「どういうつもりだい、おい？」シェイクはたずねた。
ジーナはくるりと背を向け、もう片方のストラップもずらして、肩越しにシェイクを見つめた。その視線には、ふざけ半分の健全さと、ふざけ半分の健全さとはまったく正反対の何か——何なのかはよくわからないが——の双方が同時にあらわれていた。そのあいだもずっと、ジーナはビートに合わせて身体を動かしつづけていた。ビートに合わせて泳ぐような仕草で踊っている。
「嘘をついたわ」ジーナは言った。「ときどき、ラップダンスを踊るのが好きなときがあるの。喜びのためにやるときはね」
「それと利益と」
彼女は答えなかった。シェイクの身体に身をすり寄せてずりあげ、それから下にずりさがった。シェイクは彼女の匂いを吸いこんだ。ふたたび彼女がずりあがってきたとき、彼女の唇、あの唇がほとんど彼の唇にふれそうになった。ほとんど、だがふれはしない。
持てる意志の力を——本気で——総動員しなければならなかったが、彼はジーナの両肩に手をかけた。
「さわっちゃだめなのよ、ミスター。でも例外をつくってあげてもいいわ」
シェイクはそっと彼女を自分から引き離した。腕をのばした距離まで。
「おれたちはプロに徹することにしよう」そう言った。
「どうして……」

いい質問だ。
ジーナはピートに合わせて動きつづけていた。シェイクの手の下で動きつづける。おかげで制すのはちっとも楽ではなかった。
「どっちのベッドがいい？」シェイクはたずねた。
ジーナはピートに合わせて動くのをやめ、彼を見つめた。驚いてはいなかった。おそらく、シェイクの抵抗に失望したのだろう。それとも喜んだのか。シェイクにはわからなかった。
「あたしを信用してないのね、そうでしょ？」ジーナは言った。
「おれは誰のことも本当に信用することはない」
「あたしを本当に信用しちゃだめよ」ジーナは言った。
「完璧な組み合わせだ」
ジーナは歩いていってラジオを消し、窓側のベッドの上にどすんとすわってあぐらをかいた。
「シェイク？」ドレスのストラップをもとにもどした。もう片方のも。
「ジーナ？」
「あたしは自分を信用してるかどうかもよくわからないわ。あたしが本当にあたしなのかも。わかる？」
彼女が言おうとしていることはわかるとシェイクは思った。そしてそれをありがたいと思った。
「おれは自分が何に足を踏み入れようとしているかは知ってる」シェイクは言った。「まった

CamScannerでスキャン

く何の保証もないことだ。口に出してる分も、出してない分もふくめて」
ジーナは顔に垂れかかった髪の毛をかきあげた。一瞬、シェイクはもう少しで立ちあがりそうになった。部屋のなかを歩いていき、彼女にキスしそうに。
だが、彼は言った。「明日の朝は忙しく動かなきゃならない。包皮を見つけようと思うなら、いろいろとやらなきゃならないぞ」
ジーナは笑った。「それはどうかしら」
「きみのめざましい計画ってのは何なんだ？　パナマ・シティにはホテルが百軒ぐらいあって、きみのマーヴィン坊やはどこにもぐりこんでるかわからないんだぞ。どんな名前で泊まってるかもわからないし、何の手がかりも――」
シェイクは口をつぐんだ。ジーナは両手を膝の上で組み、とても礼儀正しく、彼が話し終えるのを待っていた。
「あいつがそんなとんまだと思ってるのか？　本名を使うようなばかだと？」
「そうよ」ジーナは言った。
シェイクはデスクの上の電話帳をつかんだ。
「パナマ・シティにはホテルが百軒ぐらいあるって、さっき言ったわよね」ジーナは信じられないというような目で彼を見つめた。「いちいち電話するつもり？」
シェイクはにやりとして、電話帳を広げ、めくりはじめた。
「おれはそんなとんまじゃない」そう言った。

CamScannerでスキャン

32

何億ドルも持ってるやつがどうして、こんな湯気がたつほど暑くて蒸し蒸しして、不潔で、おそらくはマラリアがはびこっている湿地だらけの国に移住したりするんだ？　それがマーヴィン・オーツの疑問だった。こんな、街路番号に合理的な意味がまったく見出せず、交差点を渡るたびに通りの名前が変わっているような国に？　十分ほどで、レンタカーでの移動を見限ったが、タクシー運転手も、どこに何があるかまったくわかっていないようだった。最後に乗ったタクシーの運ちゃんは――ここに住んでるんだろうが、このパナマ・シティに！――こともあろうに、マーヴィンの地図を貸してもらえないかと言ってきた。最初からくその役にもたっていない地図を。

ロナルド・ジーグラーは、億万長者のばか野郎は、『ロード・オブ・ザ・リング』の映画を見てないのか？　ニュージーランドという国のことを聞いたことがないのか？　マーヴィンなら、数億ドルを保有して合衆国から逃げ出すというなら、そこに行くのに。でなければ、せめてチュニジアあたりに。同じ暑くても乾いた暑さで、ひと足踏み出すごとに、中華料理のくそ

点心みたいに容赦なく蒸し焼きにされているような気分を味わわずにすみそうなところに。
マーヴィンは重い足取りでのろのろと、ついさっき歩いてきたブロックを引き返していた。二七六番地のとなりは二一四番地、それが当たり前なのだ。腕に蚊が止まったような気がしてぴしゃりとたたく。やってくる飛行機の機内で、パナマ運河の歴史について読んだが、そこには二種類の蚊がいると書いてあった。一種類はマラリアを媒介する蚊、もう一種類は黄熱病を媒介する蚊。
すばらしい。
今朝、ホテルを出る前に、農薬なみに強力な防虫剤をスプレーしてきたが、高温多湿のせいで汗が滝のように流れ落ち、防虫剤も一緒に流れてしまっていた。
チェックインしたときに、ホテルのフロント係から、熱帯雨林にナマケモノを見にいく日帰りツアーを予約しないかと訊かれた。
くそくそくそったれめ。
本当は三種類めの蚊もいることを、彼は思い出していた。デング熱を媒介する蚊だ。
マーヴィンは顔をしかめた。すべりだしはしごく順調だった。自画自賛になるが、あのブロンドのヒヨッコ娘があのブリーフケースを持ってやってきたときの彼の対応はまさにめざましいと言えた。クールにふるまい、クールに徹し、何も逃さなかった。あの包皮はみずからさらわれたのだ――的確な判断と芸術的な即興演技のたまものだ。
だが、買い手候補者のジーグラーを見つけるのは、思っていた以上にむずかしかった。この

CamScannerでスキャン

酷暑の地獄の沼地のような都市をもう二日間歩きまわっているが、たったひとつの手がかりもつかめていない。

マーヴィンはさらに一ブロックのろのろと歩いた。絶対にこっちじゃないと確信している方向だったが、ほかにめざましいアイデアはなかったし、探しているその店が本日分のリストの最後だった。そして、そうもちろんだ、当たり前じゃないか、その店はそこにあった。まさしく、あるはずのないところに。

マーヴィンはドアを押し開けた。ベルが一度、チリンと鳴った。もっと冷たくなれそうなエアコンの空気を盛大に吸いこみ、あたりを見まわした。磨きぬかれた木張りの床、汚れひとつないガラスケース、たいそう趣味のいい額入りの絵画。

ああ、ああ、ああ、何だっていいさ。ヴェガスにあるマーヴィンの店のような、真剣な本物の古物コレクターを相手にする場所と、この手のばかげた体裁だけを保っているきどった店とは比べようがないのだ。この店は見るからに、ありふれたくずのような品をものすごい高値で素人の好事家や金持ちの旅行客や、地元のボトックス注射でむくんだ見てくれだけはいい金持ち主婦たちに売りつける場所だ。

大きな窓のガラスを通してはいってくる、澄んだウイスキー色の光さえ、高価そうに見えた。じゃらじゃら鳴るブレスレットを重ねづけした娘がじゃらじゃらと歩いてきて、にっこり笑い、スペイン語で何か言った。

「きみの上司と話をしたい」マーヴィンは娘に言った。椅子はないかとあたりを見まわす。足

が完全にくたびれていた。やわらかくなったチーズみたいにくたくただった。
「もちろん」娘は言い、じゃらじゃらと音をたてながら奥にはいった。
二分ほどのち、上司が出てきた。クラーク・ゲーブルのように見せようとしているようだ――黒い髪をポマードでうしろになでつけ、黒い口ひげをごく細くつくり、おそらくひかえめながら趣味がいいという点で完璧だと思っているのであろうダークスーツを着ている。カフスボタンはそのスーツよりはるかに高そうだった。
「ラスヴェガスのマーヴィン・オーツです」マーヴィンはきびきびと言った。まるで、自分が誰だかこの男が知っているはずだと思っているかのように。本当のところはそう思っているわけではなかったが、敵を即座に守勢にまわらせるのが戦略的にいって賢いやりかただということは、経験からわかっていた。
「ああ！　もちろんですな」男の言い方にあまりに真情がこもっていたので、一瞬マーヴィンは面くらった。もしかしたら、この男は本当に自分のことを聞いたことがあるのかもしれない。そんなことがあるはずないとは言えない。本当の真剣なコレクターの世界で、マーヴィンがまったくの無名であるはずがないのだ。インターネットだの何だのがあるんだし。「これは光栄です、セニョール・オーツ。わたしの名前はアントニオ・コルネーホです。何なりとお申しつけください」
「なかなかりっぱな住まいだな」マーヴィンは思いきりタメ口で言った。「諸経費のくそ始末を気に突っ込まれて死にそうなんじゃないか」

「すみませんが?」肛門性交野郎は言った。彼の英語力はマーヴィンが思っていたほどではないようだ。「どういうご用なんでしょうか、セニョール・オーツ?」

「あるコレクターを探してるんだ。聖遺物にご執心の男、ローランド・ジーグラーってやつだ」

店内にはじゃらじゃら娘とガラスケースをひやかしてまわっている腰の曲がった老人の客がひとりいただけだが、その名前を聞いてふたりともが顔を上げた。

「ローランド・ジーグラー?」コーンホールは考えこむふうをした。「ふうむ。残念ながら、そういう名前の方は知りませんな」

「おいおい」マーヴィンは言った。「億万長者のコレクターだよ。世界的に知れ渡った逃亡者で、ここ三年パナマに隠れ住んでるやつだ。名前を聞いたことがないと言ったか?」

「残念ながらありませんな」

「残念ながらないのか」

コーンホールはちょっと考えた。「電話帳はおためしになられましたか、セニョール・オーツ?」

「もちろんだ」マーヴィンは侮辱された気分を味わいながら、言った。その場に立ちつくし、途方に暮れた。椅子があればすわれるのにと願った。もう五時になろうとしていて、お腹がぺこぺこだった。

「忘れてくれ」とうとうそう言うと、足音荒く店から出た。ドアを激しい勢いで開けたせいで、

ベルが二度、ヂリンヂリンと鳴った。

夕食をとっても、マーヴィンの機嫌は直らなかった。このばかげた役にも立たない旅行にすでに注ぎこんだ金額をすべて計上してみた。飛行機代、レンタカー、ホテル代、タクシー代、食事代。ヴェガスの店を閉めているあいだ、刻一刻と消えている収入のことも勘定に入れると、そもそもこの包皮に出会わなければよかったのではないかと思えてきた。

だが、それはばかげている。この包皮には何百万ドルという価値があるのだ。あとはただ知恵を働かせるだけだ。賢く、忍耐強く。バスタブで冷水を浴びてすっきりして、ひと晩ぐっすり眠る必要があった。

マーヴィンはシケたホテルにとぼとぼともどり、階段を上がった——エレベーターは故障中だったのだ、当然ながら。三階に着いたときには、すでにひと風呂浴びたような状態になっていた。

吸入器を一服してから、部屋のドアの鍵をあけた。室内清掃係が特にたいした理由もなくブラインドを下ろしていたので、室内は薄暗かった。マーヴィンは重い足を引きずりながら窓まで歩いていき、ブラインドを引き開けた。夕方前の陽射しが流れこみ、女が見えた。バスルームわきの椅子にすわっている女が、彼を見てにんまりと笑った。

「くそ」マーヴィンはため息をついた。

CamScannerでスキャン

33

「あたしを覚えてる？」ジーナは言った。

マーヴィンはくるりと背を向けて逃げようとしたが、シェイクはそれを見越してドアのわきに立っていた。マーヴィンの前に足を踏み出して彼をひっつかみ、マーヴィンの目がこれまで見たことがないほど飛び出したのに一瞬ぎょっとして、マーヴィンをくるりとまわして部屋の内側に向かせた。

マーヴィンはジーナを見た。「聞いてくれ、おれは持ってない――」口をつぐむ。吸入器からまた一服する。「あん――あんたたちはここで何をやってるんだ？」

「どう思う」ジーナはシェイクに訊いた。「あたしは『じゃ、また会いましょう』って言って帰ったほうがいいのかしら？」

シェイクは「あたしを覚えてる？」というせりふはなかなかいいと思った。あまり押しつけがましすぎなくていい。だからそうジーナに言った。

「聞いてくれ」マーヴィンが言った。

CamScannerでスキャン

「あたしのアレを持ってないの、マーヴィン？」ジーナは言った。「最後までちゃんと言い終えたら、デザートを食べていいわよ」

「あの包皮はあんたたちのものじゃないだろう！」言いながら、目を飛び出させてしらばっくれていたマーヴィンは、本当に目を飛び出させてすねたような不機嫌になっていた。

「あれは絶対にあんたのじゃないわ」

「あんたたちはあれの価値なんか知ってもいなかったじゃないか。どうせペリシテ族（フィリスティン）とフィルハーモニーの区別もつかないんだろうが」

ジーナはシェイクを見た。

「最初のは聖地イスラエルの古代部族だ、たいていの人々が思っているよりはるかに進んだ文明を持っていた」シェイクは言った。「後者は一種のオーケストラだ」

「ほおら」ジーナはマーヴィンに言った。「あたしだって知ってたわ」

「何をされても絶対にあんたたちには渡さないぞ」

「無理よ」ジーナは親切に説明をしてやった。「渡してもらうわ。ここにいるこのシェイクはね、素手で男を殴り殺して服役してて、刑務所から出てきたばかりなのよ。そうよね、シェイク？」

シェイクは穏やかに肩をすくめてみせた。「一部は砂利を詰めたソックスも使ったがね」

マーヴィンは神経質そうな目をシェイクに向け、がっくりと肩を落とした。「どうやって見つけたんだ？」

CamScannerでスキャン

「あんたは這った跡を残してたのよ、でっかいナメクジさん」ジーナは言った。「今後のために教えておこうか？　名前は偽名を使いなさい」

「パナマ・シティのホテル全部に電話をかけたのか？」

「空港のレンタカー屋に電話したんだ」シェイクは言った。「全部で七軒だった」

「エイヴィスの気のいいお姉さんが、パナマ・シティでしばらくどこに泊まるか訊いたの、覚えてる？」ジーナは説明した。

「ああ」

「アレはどこにある？」シェイクは言った。

「ここにはない」マーヴィンは言った。「おれがそこまでとんまだと思うか？」

シェイクとジーナはしばし考えた。

「ベッドよ」ジーナが言った。

シェイクはベッドカバーのひだを足先で持ち上げ、ベッドの下をのぞいた。それから手をさしこんで、大きな詰め物入り封筒をひっぱりだした。

「くそ」

シェイクは詰め物入り封筒を開け、薄いガラスケースを取り出した。包皮の列をじっと眺める。これに五百万ドルの価値があるとは、とても信じがたかった。一枚につき五万ドルという計算になる。遠き昔日、これらを寄進した修道僧だか農夫だかは見返りにいったい何をもらったのだろう。いったいどういうふうにおこなわれたのだろう。すべて一度に、工場のベルトコ

ンベアみたいにやってくる男たちを、ナイフを持ったひとりの男が処理したのだろうか？
シェイクは顔をしかめた。アメリカの歴史のなかで、宗教に関係なく、幼児期にふつうに包皮切除がおこなわれる時代に生まれたことを感謝した。おかげで記憶に残らずにすんだ。

「これで仕事にかかれるぞ」ジーナに言った。

もっとよく見ようとして、ガラスケースのふたを開けようとした。

「開けちゃだめ！」ジーナとマーヴィンが同時にどなった。

「了解」シェイクは言い、包皮をおさめたガラスケースを詰め物入り封筒にもどした。詰め物入り封筒を、このためだけに買って持ってきた革製のデイパックに入れる。

「発見者報酬をもらいたい」マーヴィンが口走った。「十パーセントだ。発見者報酬を要求する」

「まかせといて」ジーナは言い、シェイクのあとに続いてドアから出た。下りはじめた階段の半ばほどまで、マーヴィンが部屋の壁を蹴りつける音が聞こえていた。

CamScannerでスキャン

34

一時間で、リストにある店舗をやっと三軒まわれた。古物市場がこれほど大きいことに、シェイクは驚いていた。いや——そういった店のひとつのオーナーである、ローマ皇帝のような風貌と態度を持つ、やけに偉そうな中年女性に訂正されたように——〝骨董品〟市場だ。

四軒めに飛びこんだ店は、その日の営業を終えて店じまいしようとしているところだった。

「こんにちは（ボンジョルノ）」シェイクは店員に言った。二十代後半の女性で、コルク抜きのようにねじった髪を四方八方につったたせている。大量につけている金属製ブレスレットは船一艘を沈めることができそうだ。もしくは、船一艘をつくれるか。上唇の中央をつっきるようにひとすじ、小さく青白い傷痕があり、そのせいですでに美人なのがいっそう魅力的に見えた。

「いかがいたしましょう？」店員は訊いた。

「あなたをひとり、お持ち帰りしたいわ」ジーナがウインクしながら言った。

店員は面くらった顔で微笑み返した。

「ちょっと見るだけなんだ」シェイクが言った。

CamScannerでスキャン

「店主を連れてきます」娘は言った。

シェイクとジーナは手近のガラスケースに歩いていった。なかにはつや出し加工された深紅のベルベットの上に、シェイクにすらわかる美しい細工が施された、本当に古いネックレスがずらりと並んでいた。

風雅な黒い口ひげの礼儀正しい男性が音もたてずにすべるように歩いてきて、カウンターの前にやってきた。

「フランスの品です」男は言った。「フランス人がパナマ運河を建設するためにやってきたとき、絶対に成功させてやるという大熱狂にわきたっていて、みな家族を引き連れて、持っている貴重品も全部持ってやってきたんですな」男は長い指でうやうやしげにガラスケースにふれた。「今は昔の話ですが」

「フランス人?」シェイクは訊いた。パナマ運河を建設したのはアメリカ人だと思いこんでいた。それればかりか、古物と骨董品の違いもわかっておらず、ロンドンにいる誰かが本物の聖杯を持っていると思いこんでいたのだ。

「フェルディナン・ド・レセップスの像はまだ見てないんですか? なかなか魅力的な話なんですよ」

風雅で礼儀正しい男性は自己紹介をして――店主のアントニオ・コルネーホです――その話を語りはじめた。一八七〇年代、フランス人は壮大な妄想を基礎にした壮大な計画をもってパナマ運河建設にとりかかった。ド・レセップスはその十年前にスエズ運河を建設したカリスマ

的建築技術者だった。だが、エジプトの砂漠は平坦で乾燥していたが、パナマのジャングルとパナマの山岳地帯はまったくちがっていた。運河建設に携わる何万人もの労働者が、マラリアと黄熱病で生命を落とした。請け負ったフランスの会社は金を吐き出したあげくに倒産し、国家的な財政恐慌を引き起こし、何千人という個人投資家たちを破滅させたあげく、政府を転覆させた。のちに、ド・レセップスの運河建設会社が巨額の金を使って、新聞社に好意的な記事を書いてもらうための賄賂や政府の高官への賄賂を送っていたことが判明した。結局、フランス人は予定していた運河の十分の一も完成させることはできなかった。

だが、フランス人はへこたれなかった。二十年後、フィリップ・ビュノー＝ヴァリーヤという、これもまたカリスマ的なフランス人のやり手実業家が当時のアメリカ大統領テディ（セオドア）・ルーズヴェルトとアメリカ人を説得して、ニカラグアに建設しようとしていた運河をとりやめさせ、フランス人がつくりかけて挫折した場所を採用させた。ビュノー＝ヴァリーヤはアメリカ人たちに根まわしをして、フランスの運河会社の残骸を買わせた。それによって、奇遇ながら、彼はくそ大量の株の持ち主となった。

「あらまあ」ジーナが言い、彼女がフランス語を話せることをシェイクは思い出した。彼女がほかにどれだけ隠れた才能を有しているのか、考えたくはなかった。

昨夜彼女があのグリーンのドレスのストラップを肩からずらしたときにどのように見えたかが思い出された。

「お国のアメリカ議会はすでにニカラグアでの竣工を決定していました」コルネーホは言った。

CamScannerでスキャン

「だがピュノー＝ヴァリーヤは、ニカラグアでは火山が爆発するぞと言ってアメリカ人を脅しました。そしてその仮説を裏付けるために、議員ひとりひとりにニカラグアの当時の切手を送りつけたんです」

「その切手には火山の絵が描かれていたんだね？」シェイクが推測した。

コルネーホはうなずいて、もうひとつ別のガラスケースにふたりを導いた。そしてまさにその切手を指さした。

「どのようなコレクションに加えてもいい、すばらしい逸品ですよ」

「実を言うと」シェイクは言った。「切手には興味はないんだ」

「わたしたちが興味を持ってるのはああいうものなの」ジーナはベルベットの上に鎮座している古いロザリオを指さした。十字架の中央には丸いガラスがはめこまれ、その小さな丸いガラスのなかに、骨のように見える小さな青白いかけらがはいっていた。

「おやまあ」コルネーホは言い、ケースの鍵をあけにかかった。「そちらのお嬢さんはすばらしくお目が高いですな」

「わたしたちの包皮と合わせたらいいかもね」ジーナが言った。コルネーホの動きが止まった。彼の息づかいの音がシェイクにも聞こえた。

「そいつは売りに出すことになってただろう、キンポウゲちゃん」シェイクが言った。

「包皮、とおっしゃいましたか？」コルネーホが訊いた。

「お祖母さまが亡くなったときにわたしたちに残してくださった、何かばかげた古いカトリッ

CamScannerでスキャン

クの品物なの。ベルギーだったかしら？　とても古いもののようなんだけど、誰も知らないのよ」

「そいつの落ち着き先を見つけてやりたいんだ」シェイクが説明した。「でも、ご存知だろうけど、いい仲介人がいないとなかなかむずかしくてね」

コルネーホはネクタイをなでつけた。ロザリオだの何だのをふたりに売りつけようとしていたことなど、すっかり忘れ去っていた。

「そういう、慎重さがもっとも大事とされる場合に信頼できるのは、ひとりの紳士だけです」そう言った。

「ぼくたちは〈ブラッドリー〉ホテルに泊まってる」シェイクは言った。「ボックスマン夫妻だ。もし何かわかったら、電話をくれるかな？」

「もちろんです」コルネーホはつぶやいた。ちょっとうわの空のように見えるのは、五百万ドルの取り引きの仲介料を計算しているからだろう、とシェイクは考えた。

35

コルネーホの店を出て、ホテルに歩いてもどりはじめたころには、もう暗くなっていた。どの通りもこみあっていた。あちこちのアパートのベランダに即席に取りつけられたスピーカーからサルサ音楽がほとばしり、カルナヴァルで浮かれ騒ぐ人々が大挙してくりだして、飲んで踊って笑いころげていた。仮装している人も大勢いる。手作りの悪魔の仮面が人気のようだが、羽毛使いや、強烈な色彩の深紅や藍色やお日さまみたいな黄色に染められた熱帯のラップドレスも目立っている。みな地元の人々で、みな身長が百五十センチそこそこのようだ。シェイクとジーナは呼び止められ、ビールだのダンスだの油じみのついた紙皿に載った小皿料理だのに誘われた。シェイクはこの浮かれ騒ぎぶりと故郷ニューオーリンズのマルディ・グラのようす――よそから来たバカな旅行客どもが、ほかの飲んだくれているよそから来たバカな旅行客どもに向けておっぱいをちらつかせる――とを比べてみたが、ちがいは見つからなかった。

「これってすてき」ジーナが言った。「ホンモノって感じ」

まるで彼の心を読んだかのようだ。彼女が本当に人の心を読んだりできませんようにと、

シェイクは頷った。さもないと、どうしようもなく深みにはまるのは確実だ。

「ああ、わかってるさ」弱々しく自分に向かって認める。ジーナに関しては、もうすでに深みにはまっているという自覚があった。

「見て」ジーナが海の上に浮かんでいる満月を指さした。

「青い月だ」シェイクは言った。

「黄色いわよ」

「ひと月のうちの二度めの満月のことだ」シェイクは説明した。「とても珍しい現象だ」

ジーナはシェイクの腕に腕をからめてきた。「確率はどれぐらいかしら?」

「とてもだ」シェイクは認めた。「二月に二度満月を見るなんてありえない。うるう年でもね」

「あたしはあたしたちのことを言ってるんだけど」

「それ以上に薄いだろうな。よくわからないが」

ジーナはにっこりした。「もしかしたらここでは、あたしたちよりもずっと大きな力が働いているのかもね」

シェイクが答えるより先に、反対方向から速いスピードで人ごみをかきわけてきた男がどすんと強くぶつかってきた。

「失礼」シェイクは言った。こういう状況、この男のようにこちらを五十キロ近く上回る体重の相手がぶつかってきたという状況では穏便にすませようというぐらいの知恵はあったからだ。

そのまま何歩か歩きつづけたが、そこで足を止めた。考えた。振り返った。

CamScannerでスキャン

返っていた。

彼を五十キロ近く上回る体重の男も足を止めていた。考えていた。そしてまさに今、振りひしゃげた弾丸のような顔。

彼を五十キロ近く上回る体重の男。弾丸のような形のはげ頭。コンクリート塀にぶつかって

ディクランだった。

ディクランとシェイクはたがいに見つめあった。双方が心の底から信じられないと思っている、だろうとシェイクは推測した。

それからディクランは腰のうしろにさしていた銃を引き抜いた。シェイクはタパス料理を食べながら悪魔と踊っていたジーナをぐいとつかんだ。

「何?」ジーナが訊いた。

「おれたちよりずっと大きな力だ」シェイクは言った。

シェイクが気に入っているのは、ジーナには重要なことを二度言う必要がないというところだった。「走れ」ふたりは走った。こみあっている人波のせいでどうしてものろくなるが、それはディクランも同じだとわかっていた——しかもこっちより大きく、敏捷さが少ない向こうはいっそうのろくなるはずだ。

もちろん、カルナヴァルで浮かれ騒ぐ人々をブルドーザーのように両側に押しのけながら突き進もうとディクランが決意しなければだが。背後で危機的な叫び声があがりはじめたのが聞

CamScannerでスキャン

こえ、肩越しに振り返ると、確信できた。ディクランはまさにその決意をしたのだ。人でこみあった通りでディクランが発砲してくるとは思えなかった。それは無辜の第三者をうっかり撃ってしまうことをディクランが恐れているからではなく、シェイクの口をラジオペンチでこじあけて大量の排水管洗浄液を流しこむ作業をするより先にうっかりシェイクを殺してしまうことを恐れているからだ。

「もっと速く走れ」シェイクはジーナに言った。

ふたりはもうひとつのこみあった通りをつっきった。ディクランは十五メートルほどうしろに迫っている。向こうが速くなることはなかったが、まくこともできなかった。通りの角に来て、そこを曲がると、広い大通りに出た。だがなんたることか、そこを横断するのは不可能だった。カルナヴァルのパレードの真っ最中で、大通りいっぱいに練り歩いていた——平床トラックの背にのった手作りの山車や、ふんぞりかえって歩くサルサバンド、そろいのコスチュームを着て踊りながら練り歩くダンサーの隊列が。シェイクはジーナをひっぱって、大通りに沿って歩きはじめた。出し物のあいだに隙間が見つかれば、そこを走って突破するつもりだった。

ディクランが角を曲がり、ふたりを見つけた。

「来い」シェイクは言った。ふたりはパレードのただなかにつっこんでいった。五十人編成のサルサバンドのように見えるもののただなかに。バンドはめまぐるしくまわったり向きを変えたりして、シェイクを左右に打ち倒さんばかりだ。シェイクは首をすくめ、身を縮め、向きを

変え、何だかよくわからない楽器を演奏しているふたりの楽隊員のあいだに押しこまれた。もう少しで楽器のひとつに串刺しにされそうになり、くるりとまわってその運命を免れたところで、とんでもなく高く巻き上げた、炎のように真っ赤なターバンをぐらぐらさせながらサルサを踊っている背の高い女性とぶつかった。これは楽隊に続いてやってきた踊り子隊だった。ターバンを巻いてサルサを踊る長身の女性たちの大部隊だ。先頭のターバン女性にからかうようにわきに押しのけられたシェイクは、次のターバン女性にひっつかまれてくるりと振りまわされた。第三のターバン女性がおもしろがって加わってきて、シェイクのうしろで激しく腰を揺すってみせた。

ジーナを見失っていた。ディクランも見失っていた。自分がどの方角を向いているのかも、よくわからなかった。必死になってジーナの手を見つけ、ひっつかむと、彼女をひっぱってようやくパレードから抜けだし、大通りを渡った。

大通りの反対側で、本当は青くない幸運の青い月(ブルームーン)に感謝した。シェイクは振り返ってディクランを確認するひまもなく、ジーナをひっぱってわき道を数メートル走った。ちょうどバス停に止まろうとしていた〈赤い悪魔(ディアブロ・ロホ)〉目指して。バスは紫とグリーンとオレンジに塗られ、車体の長さいっぱいに、ピンストライプのパジャマを着て、野球ボールの海で背泳ぎをしている男のように見える肖像画が描かれていた。

ディクランの弾丸に脳みそをふっ飛ばされるときは、その寸前に弾丸を感じるものだろうかとシェイクは考えた。

CamScannerでスキャン

「本気で走れ」シェイクは言った。
ジーナを引きずるようにしてバスのドアが閉まる寸前にステップを駆け上がった。
バスが発車するときに、窓から外を見た。ディクランはほんの数メートルうしろに迫っていた。どたどたとバスのあとを追いかけてきた――シェイクが思った以上に長いあいだ、思った以上に速いスピードで。それからバスはスピードを上げ、巨大なはげた弾丸頭は背後に沈んでいった。バスが角を曲がる寸前、ディクランが走るのをやめ、よろよろと歩道の縁石のところに寄ると、膝に銃を押し当てて背を丸め、疲労困憊（ひろうこんぱい）のあまりゲロを吐くのが見えた。
シェイクも背を丸めていた。疲労と安堵のあまり。
「確率はどのくらいだ？」シェイクは言い、ジーナのほうを向いた。
それはジーナではなかった。シェイクがつかんでいた手は、高く巻き上げたターバンをした背の高い女性のものだった。
そしてそれは女性ではなかった。彼女――彼――は男だった。ドレスを着て、プロなみの化粧をした若い男だった。
そう言えば――今になって考えてみると――あのターバン大部隊は全員、やけに背が高かったような気がする。
「やあ」ターバンを巻いた女装男はちょっと警戒ぎみの声で言った。
シェイクは肩にかけていた革製デイパックを調べた。ジッパーが開いている。からっぽだった。

ジーナは消え、ときを同じくして五百万ドルの価値を持つ包皮も消えた。偶然の一致などではない。
「こんなの、信じられるか」シェイクはつぶやいたが、本当は考えておくべきだったとわかっていた。
「あんた、英語話せるの？」ターバンの女装男が言った。「アタシも英語話すのよ。うわ、奇遇！　アタシも信じられないわ。これって運命かもよ、ねえ？」
シェイクはターバンの女装男の手に折りたたみ式剃刀が握られているのに気がついた。
女装男はシェイクが剃刀を見ているのを見て、すばやくドレスの折りひだのなかにたくしこんで隠した。それから、ちょっと気まずそうに肩をすくめた。
「どんなに用心してもしすぎるってことはないでしょ、ねえ？」女装男は言った。
「そうだな」シェイクは同意した。

ターバンを巻いた女装男はラモンという名前だと自己紹介をし、シェイクが求めているバス停を指さした。まっすぐ前方。
「ありがとう」シェイクは女装男に言った。「取り違えてすまなかった」
「いいわよ」ラモンは言った。「でもさ、もし今夜泊まる宿が必要っていうんなら……」
「ホテルでからっぽの部屋が待ってるっていう確信があるんだ」シェイクは言った。
ラモンはわかったわというようにうなずいた。「あんたのその女の子って、まるで……何て

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

言うんだっけ？ 太文字で書く〝災厄〟ってやつ、みたいな？」
そしてシェイクに携帯用水筒(フラスコ)を渡した。シェイクはひと口飲んだ。ラム酒だ。かなり度が強いものだ。
「そう言ってもいいだろうな」シェイクは言った。
ラモンはまた、わかったというようにうなずいた。「でもそれだけの価値はある女、でしょ？」
シェイクはもうひと口ぐいとラム酒を飲んだ。何も答えなかった。

CamScannerでスキャン

36

フロント係は、ホテルにもどってきたシェイクの顔を覚えていた。
「こんばんは（ブエナ・ノーチェス）、セニョール・ボックスマン」フロント係は言った。
シェイクはエレベーターに向かおうとしたが、途中で足を止めた。
「何か伝言は？」フロント係に訊いた。「セニョール・ボックスマンからないか？」
フロント係は面くらったような顔になった。「いいえ。ございませんが」
シェイクはエレベーターに乗り、上階に向かった。部屋のドアロックを開け、なかにはいり、室内を見まわした。
どちらのベッドもからっぽだった。ドアのわきの椅子もからっぽ。もうひとつの椅子もからっぽ。ベランダにも誰もいない。窓からさしこむ満月の月光が明るく、見るべきものはすべて見えた。わざわざ明かりをつける必要もなかった。
「ジーナ？」呼んでみた。
返事はなかった。あるとも思っていなかった。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

からっぽの革製デイパックを肩から下ろして床に落とし、ドアのわきの椅子にがっくりと腰を下ろした。が、すぐにまた立ちあがった。今は、昨夜この同じ椅子で起きそうになったことを思い出したい気分ではなかったからだ。

そのとき、水が流れるような静かな音が耳にはいった。

振り向くと、バスルームの閉じたドアの下に細い光のすじが見えた。

バスルームのドアには鍵がかかっていなかった。押し開けると、ジーナが大きな猫脚つきバスタブのなかで、首まで泡につかっていた。そして缶入りのダイエット・コークを飲んでいた。

「あたしを見てびっくりした?」ジーナは訊いた。

「ああ、いや」シェイクは嘘をついた。

「万が一、どっちかがピンチっちゃったときのために、分かれて逃げるほうが賢いと思ったの」コークの缶の縁でこめかみをたたいて見せる。「いつでも頭を使わなくちゃね」

シェイクは腕組みをして、壁に寄りかかった。ジーナを見て本当にうれしがっているのがあからさまに出ていないといいがと心のなかで願っていた。また、心の底から真剣に、彼女をバスタブから引きずりだして電話のコードで縛りあげ、レクシーに電話して居場所を教えようかと考えていることも、あからさまに出ていないといいが、とも願っていた。

「それにもちろん、包皮はきみが持ってるほうが安全だと考えたんだな」

「あんたをだしぬいて巻き上げるとしても、現金に変わるまで待つわよ、シェイク」

「まだしばらくは、おれは役に立つってわけか」

ジーナは彼のほうに泡を吹いて飛ばした。「あんたはこれまでのところ、ちゃんと自分の分をかせいでるわよ」
「で、包皮はどこだ？」
ジーナは彼の背後を指さした。シェイクは振り向いた。洗面台の横のカウンターの上にタオルが積んであり、その上に詰め物入り封筒がのっていた。
「わかってるだろうな」シェイクは言った。「おれが今これを取ってドアから出ていって、永遠に姿を消したとしても、文句を言うすじあいは全然ないってことを？」
「でももしそうしたら、あたしと一緒にお風呂にはいることはできなくなるのよ、いいの？」
シェイクは考えた。ジーナはにいっと笑った。
「選ぶのはそっちよ」彼女は言った。
結果がどうなるか、しばらく彼女に考えさせたいと思ったが、それで損をするのは誰だ？
シェイクは服を脱ぎはじめた。
「ほんとにうれしいわ」ジーナは言った。「2番のカーテンを選んでくれて」
「包皮はもうあの封筒のなかにはないんだろう？」
ジーナは笑みを浮かべ、シェイクはバスタブにすべりこんだ。彼女の横に。ジーナにキスをした。それから、もう一度キスをした。二度めで、ふたりの前歯がぶつかりあって音をたてた。
「ベッドの下よ」ジーナは言い、シェイクは三度めのキスをした。「あたしはそれほどとんまじゃないの」

ふたりはバスタブのなかでセックスをしようとはしなかった——どちらも相応の経験を積んでおり、ロマンティックな理論と実践とはちがうということを知っていたからだ。そこで急いで身体をふき、ジーナのベッド、窓側のベッドを目指した。が、シェイクのベッド——近いほう——にしかたどりつけなかった。それもかろうじて。

最初の回は、心地よくはあったがめざましくはなかった。性急でぎこちなく、まるで、抱擁したほうがいいのかどうかよくわからない相手と握手をするかのようだった。もしくは、その逆。

「ちょおっと！」シェイクから身体を離しながら、ジーナが言った。「今のがあたしたちにできる最高のやつだって思うの？」

シェイクは数分休憩し、それからふたたび挑戦した。

二度めはだいぶ長く続いた。めざましくないとは言えなかった。

夜明けのやわらかなピンク色の輝きが顔の上に広がってきて、ジーナは目を覚ました。ふたりは窓側のベッドに寝ていた。どうやってシェイクのベッドからこっちに移ったのか、まったく覚えていなかった。太腿の内側にある四つの小さな黒っぽいあざ——指の跡のような——がどうしてできたのか、その記憶もまったくなかった。まあ、いい。気にしない。ジーナは幸せのため息を漏らした。思い出したのだ。

煙草を吸いたかったが、煙草の箱はドレッサーの上だった。一キロ以上も遠くのように思えたし、あまりにけだるかった。ここでシェイクの肩に頭をのせて横たわっているだけで、とても心地よかった。頬の片方はシェイクの肌のぬくもりで温かく、もう一方は早朝のひんやりした空気にふれている。

「起きてる？」ジーナは訊いた。

「ううん」シェイクは眠たげに言った。

「あんたは年をとってるからね、わかるわよ。ゆっくり休むことが必要よ」

「昨夜がんばったから、休息をとる必要がある。それはたしかだ」

「電話してくると思う？」ジーナは訊いた。

頬の下でシェイクの胸がちょっと動くのが感じられた。

「ジーグラーか？」シェイクは訊いた。

「ほかに誰がいるの？」

「包皮をほしいと思うなら、かけてくるさ」

「あんた、政界にはいるべきだわ」

「ああ。やつはかけてくると思うよ」

「どうかしら」

「やつは包皮をほしがると思う」

「そもそも、ギビーはどうやってあれを手に入れたんだと思う？」

シェイクは肩をすくめた。「どこかの敗残者が負債を返そうとしたか。さもなきゃ、まったくの別件から、思いがけずころがりこんできたかだろうな。もしかしたら落とし物受け渡し所に残されてたのかも」

「そしてモビーは正確な査定をおこなって、価値を見出したってわけね」ジーナはちょっと考えた。「モビーは何百万もする宝を差し出してでも、あたしを自分の手で殺したがってたのね」

「それは誇らしく思ってるのかい、それともおびえてるのか？」

ジーナはその質問を無視した。

「これまでのところ、あたしもパナマは気に入ってるわ」考えこみながら言った。「中米のことなんてまったく何も知らないけど」

「それでいい。サン・サルバドルなんかくその穴だ。少なくとも、二十年前はそうだった」

「シェイク？」

「ジーナ？」

「あたしにまた眠ってもらいたいと思ってる？」

「おれを存分に休ませたいと思うならね」

「してあげられることは全部してあげたいわ」

頭のてっぺんにシェイクがキスするのを感じた。シェイクの唇は一秒ほど

ジーナは肘をついて上半身を起こし、彼の唇にキスした。最初思っていた以上の喜びのこもったキスを。

「ジーナ?」ふたたび空気が吸えるようになってから、シェイクは言った。

「シェイク?」

シェイクは笑い、ふたたび眠りにはいっていった。ジーナは彼の寝顔を見守った。これまでに起きたことすべてと、これから起きそうなことすべてについて考え、それから彼の肩に頭を押しつけて、目を閉じた。

37

二度めにシェイクが目覚めたとき、窓から流れこんでくる陽光は、ぎらぎらしたきつい陽射しに変わっていた——真っ昼間のぎらつきに。ジーナはベランダに出ており——手すりに素足を両方とも押しつけ、煙草を吸いながらパナマのガイドブックを読んでいる——ナイトスタンドの上の電話が鳴っていた。

「出てくれるでしょ、キンポウゲちゃん？」ジーナは本から目を上げもせずに声をかけた。

彼女の疑問は形だけのものだったが、シェイクは真剣に考えをめぐらせた。

この電話に出れば、彼の認識によれば、新しいドアが開く。興味深いどこか——たとえば五百万ドル——に通じているかもしれないが。もしかしたら彼が現在陥っているよりもはるかに大きな災厄、大文字の災厄がいっぱい詰まっている部屋に通じているのかもしれない。

問題は、シェイクがたった今陥っているその部屋をけっこう気に入っていることだ。その部屋に彼と一緒にいる人物を気に入っていることだ。

だがまあ、やるか。五百万ドルだろう？

上体を起こすと、あちこち妙な場所が痛んだ。通常なら、シェイクは時計を巻きもどしたいと願うようなことはない――若さのかわりに知恵を得ることで満足していた――が、今は節々の痛みを感じながら、ジーナが足の爪にペディキュアを塗るのを見ていると、心の底から、大ばかだった十九歳のころの超常的なスタミナと弾力性がいくらかでもよみがえればと願っていた。

いったいおれは若さと引き替えにどれだけの知恵を手にしたのだろう？　論争の余地の残る疑問だ。シェイクは電話を取った。

「はい？」

「今日の五時」男の声が言った。アメリカ人だ。「ソベラニア国立公園で」

「もうちょっとくわしく教えてもらいたいが？」

「五月五日（シンコ・デ・マヨ）広場からガンボアまでSACAバスに乗れ。運転手にキャノピータワーの入り口で下ろしてくれと言え」

「そこに行けばいいんだな」

「展望台の前からはじまる、マークのついた小径をたどれ。だいたい四百メートルほどでジャングルにはいる」

この男、本気か？

「タクシーじゃなく、バスに乗れ。ふたりだけで来い。ずっと見張ってるぞ」

「最新鋭の録音装置を隠し持っていってもいいかな？」シェイクはからかった。

「遅れるな」
電話がカチリと音をたて、切れた。
ジーナが室内にもどっていた。足の外側だけを使う奇妙な歩き方をしている。どうやら、シェイクが眠っているあいだに足の爪に塗った真っ赤なペディキュアを汚したくないようだ。
「パナマには、太陽が大西洋に沈んで太平洋から上がってくるのが見える場所があるって知ってた？」
シェイクは首を振った。そんなことは聞いたこともなかったし、信じていいかどうかもよくわからなかった。
「ミツユビナマケモノをぜひ見てみたいわ」ジーナは言った。「で？　あたしたち、仕事にかかるの？」
「二、三時間したら出かけなきゃならない」シェイクは言った。
「時間はあんまりないけど、せっかくのチャンスを楽しみましょ」ジーナはガイドブックを投げ捨て、シェイクと一緒にベッドに飛びこんだ。
「穏やかにしてくれ」シェイクは言った。「体力が落ちたらおれのツキがなくなる」
ジーナは彼にまたがり、穏やかさ以上に熱意をこめて――シェイクに有無を言わせず――ふたりのパーツをたしあわせてずっとすばらしい〝ひとつ〟を創りあげた。
「あんたとあたしの両方だよ、おい」ジーナが言った。

ホテルから出る前に、ふたりはフロントの前で足を止め、ホテルの支配人に会いたいと告げた。フロント係が電話をかけた。数分後、表情豊かな眉毛を持つ、神経質そうな若い男があらわれた。せいぜいで二十か二十一歳というところだろう。

男は眉毛でわびながら、ジーナとシェイクに、自分はホテルの支配人補佐にすぎないと説明した。不幸な誤解がないように説明しますが、支配人当人はただいまこの街を離れ、基準値調査と呼ばれることをしにロンドンに行っているんです。そこで最高級のホテルに滞在し、この〈ブラッドリー〉をどうすれば改善できるかというアイデアを携えてパナマにもどってくるんです。

「こういうことは問題ではありませんよね、セニョール・ボックスマン？」支配人補佐は神経質そうに訊いた。「セニョーラ・ボックスマン？」

「問題じゃないさ」シェイクは請け合った。

ジーナは例の詰め物入り封筒をカウンターに置いた。さっき部屋でシェイクが包皮のはいったガラスケースをもう一度ちゃんとなかにおさめていた。そのときジーナはじっとシェイクを見ていた。ジーナが見ているのを、シェイクは見ていた。

「ふたりでホテルの金庫にあずけたいものがあるんだ」シェイクは説明した。

「喜んで」支配人補佐は言った。「ただちにおあずかりいたします」

詰め物入り封筒に手をのばした。その手をジーナが遮った。

「わたしの年長の夫は、ふたりでホテルの金庫にあずけたいものがある、と言ったのよね？」

支配人補佐の眉毛がぴくんと跳ねあがり、お辞儀をして許しを乞うた。
「おおせのとおりです」支配人補佐は言った。
ふたりを連れて、奥の金庫に向かった。自分が何を期待していたのか、シェイクは自分でもよくわかっていなかった。どっしりとした巨大な金庫、大きな真鍮のハンドルのついた古風な物体。だがそれはごくふつうの金庫だった。大きいが何ということもないふつうの金庫で、デジタルのキーパッドがついている。少なくとも、じゅうぶん頑強そうには見えた。
ホテルの支配人補佐が暗証番号を入力して金庫のロックを解くあいだ、シェイクとジーナは礼儀正しく目をそらしていた。それから、支配人補佐はベルトにとりつけてある小さなキーリングの鍵束から小さな鍵を選び、預り物トレーのひとつの鍵を開けた。トレーがすべり出てくる。ジーナがそのなかに詰め物入り封筒を置いた。
支配人補佐はトレーをすべりこませ、ロックした。それから金庫の扉を閉じた。赤いライトがついた。
「ご覧あれ(ヴォワラ)！」支配人補佐は言った。
「ぼくらが今のを引き出したくなったら？」シェイクが訊いた。
「しごく簡単です。おふたりのどちらかがわたしにお知らせくだされればそれで――」
「だめだ」シェイクが言った。
「だめよ」ジーナが言った。
「すみませんが？」支配人補佐が言った。

「絶対に金庫を開けないでくれ」シェイクが言った。「ぼくの妻が一緒でないときに、ぼくのために金庫を開けるな」

「すみませんが、そのご指示はちょっと理解に苦しみます。もし——」

「絶対に金庫を開けないで」ジーナが言った。「わたしの夫が一緒でないときに、わたしのために金庫を開けないで」

「いかなる状況にあってもだ」シェイクが言った。「たとえぼくが懇願しても……」

「たとえわたしがなだめようとすかそうと……」ジーナが言った。

「いかなる状況にあっても」

「わたしたちの両方がここにそろっていないかぎり、金庫は閉じたままにする」

「ぼくたちの両方が」

「ちゃんと目を覚ましていて、きびきびと動き、冷静に同意に達していること」

「そうでないかぎり、金庫は閉じたままにする」

「わかった?」ジーナが訊いた。

若い支配人補佐の眉毛が内心の混乱をあらわしてアクロバティックな動きをした。ジーナが手をのばし、親指と人差し指で支配人補佐の顎をはさみ、ゆっくりとうなずかせた。

「いつの日か理解できるようになるわよ、坊や」ジーナは彼に請け合った。「あなたが結婚したらね」

38

ふたりは五月五日広場（シンコ・デ・マヨ）から北のガンボアに向かうバスに乗った。道中の大部分は本物のジャングルだった。シェイクは感銘を受けた。〝原始的な〟という言葉であらわされる状態がどういうものか、今わかったと思った。ときおり、樹々の隙間から、巨大な貨物船が運河を上るか、もしくは下るかするちょっと目障りな眺めが見えた。

「これまでずっと、ただ水がいっぱいに詰まった巨大なコンクリートの溝みたいなもんだと思ってたよ」シェイクは言った。運河は――少なくとも今シェイクが見ているのは――異国情趣豊かな蛇行する川のようなもので、両岸には緑色のひしめきあうような野生のジャングルが続いていた。

「〝運河〟という言葉は誤解を受けやすいのよ」ジーナも同意した。「なんていうか、その、退屈なものって思わせるわよね。人工的な。LAのチョロたちなんか、夏場に干あがってる運河に飾りたてた車を走らせてレースをしてるわよ」

バスはぜいぜいいいながら走り、やがて止まった。キャノピータワー・エコロッジの入り口

だった。ふたりは道路を歩いて丘を上り、展望台にたどりついた。そこはかつて展望台だったところで、今はエコロッジ本体になっていた。マークのついた小径がジャングルのなかに続いているのが見えた。

シェイクは腕時計に目をやった。あと数分で五時だ。太陽は西（もしかしたら東？）の山々のうしろに沈んでおり、前方の熱帯雨林が黒々と威嚇するように、同時に黒々と誘いかけてくるように見えた。さまざまな鳥が甲高い叫び声をあげたり、さえずったり、ホーッと鳴いたりしている。さまざまな鳥たち、及びサルたちが。及び、神のみぞ知る何かが。

ふたりは歩きはじめた。ジャングルがふたりと明かりの周囲に押し迫ってきた。湖の底を歩いているような気がした。奇妙な、だが平穏でもある。甲高い叫び声やさえずり、ホーッという声のボリュームと迫力がどんどん増してきた。

「怖いか？」シェイクはジーナに訊いた。

「ナマケモノを探してるの」ジーナは言った。「すっごくかわいい顔をしてるんだって」

小さな広場のようなところに出て、ふたりは足を止めた。シェイクはもう一度腕時計を見た。

「だいたい四百メートルぐらいのところだ」シェイクは言った。

「ジーグラーはこんなとこに住んでると思う？」

「やつは芝居がかったことが好きなんだと思う」シェイクは言った。「もしくは、自分はそうだと思っているか」

「ここは暗くなってからの安全な居場所とは言えないですね」ふたりの背後で声がした。

ふたりは振り向いた。レモン色のグアヤベラ・シャツ（スモックに似たゆったりしたスポーツシャツ）を着た男が空き地の縁に立ち、きどった笑いを浮かべた顔でふたりを見ていた。四十がらみのアメリカ人、身体の端々が丸みを帯び、大きな懐中電灯を手にしている。男は懐中電灯の光でシェイクをひとなめし、ジーナの上にしばしとどまらせた。

「それじゃ、どうしておれたちはここにいるんだ?」シェイクが訊いた。

「わたしはミスター・ジーグラーの秘書です」男は言った。「ロナルドと言います。何なりとお申しつけください」

「ボックスマン夫妻だ」

「もちろんそうでしょうとも」男はすました笑いを浮かべた。「セニョール・コルネーホが言っていたものをお持ちになりましたか?」

「あんたはセニョール・ジーグラーの現金を持ってきたのか?」

「一本取られました」秘書は懐中電灯の光線を、自分の背後のジャングルのほうに向けた。

「一緒にいらしてください」

ふたりは男のあとについて狭い小径を進んでいった。道はジグザグに曲がり、上ったかと思うと急な下りになり、のびた草の下にかなり長いあいだ隠れたりしていた。十五分ほどして——もうほとんど真っ暗になっていた——第二の、さっきよりも小さな空き地に出た。そこには泥まみれの四輪駆動車が停まっていた。

「公園のこのあたりでは、自動車の使用は許されてないんです」秘書は説明した。「ですがミ

スター・ジーグラーはかなりの……影響力をお持ちなので」

シェイクとジーナは四駆の後部座席に乗りこんだ。ジーグラーの秘書は運転席にすわった。車はジャングルのなかを二、三百メートルほどはずみながら走り、それから舗装された道路に出た。その道の先に、ようやく、パナマ・シティからふたりがたどってきたハイウェイだと思われる道路が出てきた。

芝居がかっている。

「バス停で拾ってくれればよかったのに」シェイクは言った。

秘書は返事をしなかった。

「で、あなたのそのボスについて話してちょうだい」ジーナが言った。

「わたしの——ジーグラーのことですか？」

シェイクはジーナを見やった。

「そうですね」秘書は言った。「彼は、地に足のついた堅実な人間で、たまたま大当たりしたと言っていいんじゃないでしょうか」

「頭はいい？」シェイクが訊いた。

「そう考えておくべきでしょうな」

「そうなのかな？」

「三十になる前に最初の一億ドルをかせいだ男ですから」

「盗んだっていう意味だろう」

秘書の目がすばやくバックミラーに向けられ、それからすぐにまた離れたことに、シェイクは気づいた。
「あなたがたおふたりはどうなんです?」秘書は訊いた。
「あたしたちが頭がいいかってこと?」ジーナが訊いた。
「パナマを楽しんでらっしゃいますか?」
「思っていたようなところじゃなかったと言えば、ぼくたちふたりの心を代弁することになると思う」シェイクは言った。
「彼があたしたちふたりの心を代弁してくれてるわ」ジーナが言った。
車はほとんどカリブ海に達しそうなほど北上し、それから海岸に沿って東に向かった。ヘッドライトの明かりに、ぬかるんだ泥道のわきに積まれた生ごみの山や極楽鳥たち、学校から家までの長い距離を歩いている、しみひとつないチェックの制服を着た女学生たちが浮かび上がる。
ポルトベーロの街に着く寸前に、ジーグラーの秘書は四駆を止めた。そして断崖を指さした。昔の要塞の崩れかけた石の廃墟が立ち並び、月に照らされた海を見晴らせる場所だ。
「ディナーをお楽しみください」秘書はふたりに言った。
シェイクとジーナは外に出た。秘書は四駆に乗ったまま、貝殻や砂利を鳴らしながら走り去った。
廃墟の中央に、何列もの錆びた鉄の大砲に囲まれて緑の芝生がカーペットのように広がって

おり、そこにテーブルがセットされていた。キャンドルと花が飾られ、糊のきいた白いテーブルクロスがかかっている。糊のきいた白いお仕着せを着た肌の黒いパナマ人のウェイターがふたり、テーブルのわきで直立不動の姿勢で立っていた。

シェイクはジーナのために椅子を引いた。満月を一夜過ぎた月に照らされて、断崖の上からの眺めはまさに壮観だった。

ウェイターの片方がふたりの膝にナプキンを置いていった。もう片方がグラスにシャンパンを注いでいく。

「ミスター・ジーグラーはじきにお見えになります」ウェイターは言った。それから、ふたりは暗い闇に溶けていった。

シェイクはシャンパンの味を見た。「上物だ」

「ここじゃスキューバダイビングをするのに、午前中は太平洋でやって、午後はカリブ海でできるって書いてあったわ」ジーナが言った。

「死ぬ前にやりたい不思議なことリストに載せとくよ」シェイクは言った。

「あたしを厄介ばらいできたらってことね、ふふん？」

シェイクはただ微笑んだだけだった。シャンパンを味わい、眼下の水面で月の光がきらきらとゆらめき輝く眺めを楽しみながら、この瞬間の純粋に官能的な喜びが全身を脈打ちながら走り抜けるにまかせていた。ジーナは靴を片方蹴って脱ぎ、素足をシェイクの膝にのせた。そして意味ありげにつま先を縮めていた。彼女は海みたいな匂いがした。もしくは、海が彼女のよ

うな匂いなのかもしれない。どちらにせよ、すばらしいことに変わりはない。
この瞬間に生きる？　今シェイクは、これこそがずっと長く生きることになってもかまわないと思える瞬間だと知った。
ジーナもまったく同じことを考えているかもしれないと思ったが、本当のところを言うと、まったく見当もつかなかった。彼女がそう考えていてくれればいいと願った。せめて、それが彼女の考えていることの一部にあればいいと願った。
「これって悪くないわよね」ジーナが言った。
「ああ」
ジーナは意味ありげにつま先を縮めつづけていた。「さっきの秘書、あんたもくさいと思う？」ジーナが訊いた。
シェイクはうなずいた。シャンパンのグラスを飲み干し、顎を上げてジーナの背後を示す。ジーナは振り向いた。男がひとり、こちらに歩いてきていた。秘書のロナルドだった。グアヤベラ・シャツを脱いで、麻のテーラードスーツに着替えていた。
「ようこそ」ロナルドは笑顔で言った。
「あてさせてくれ」シェイクは言った。「ロナルド・ジーグラーだな」
「うまくだませた、かな？」
「たしかに」シェイクは嘘をついた。
「ご存知のとおり、今日びじゃ、いい助手を手に入れるのは本当にむずかしいんでね」ジーグ

ラーは笑った。腰を下ろしたが、ジーナに完全にノックアウトされたことを表に出すまいとして多大な努力を払っていた。「だが、まじめな話、気分を害したわけじゃないだろうね？　大丈夫だろうね？」

「全然」シェイクは言った。

「なら、食べるとしよう！」

ジーナの目には、ジーグラーは魅力的とは言えなかった。はっきり言って魅力的には見えない。まあ、実のところ、全然魅力的ではなかった。何というか、生焼けのパンのように生っ白い男で、小さいビーズのような目がちょっと寄りすぎという間隔でついていた。髪の毛は冬枯れした芝のような色で、短く刈りこんである。だが歯はきれいで、いかにも自信過剰という態度には、ほとんどめまいを起こしそうだった。

それと――ああ、ジーナ？――この男が二億ドルもの財産を所有しているという事実。まさに、目がくらむような思いだ。彼の話では、無人島をふたつ所有しているということだった。ひとつはパナマの太平洋側の沖にあり、もうひとつはカリブ海側の沖にあるという。

なのにこの男はちょっと生っ白く、ちょっとビーズみたいな目をしている。人をうわべだけで判断しちゃだめ、とジーナは自分を戒めた。

シェイクがジーグラーに、なぜパナマに住むことに決めたのかと訊いていた。

「ここはかつて海賊どもから海岸を守るための要塞だった」ジーグラーは言い、フォークで小

エビを突き刺した。

この男はそういうことをよくした――訊かれたことに答えない、少なくともすぐには答えない、さらに少なくとも、たいていの人が質問に答えるときのような素直なやりかたでは答えない。シェイクはそれが大嫌いだと、ジーナにはわかった。だが、シェイクはかまわず質問をしつづけた。おそらく、ジーグラーがふたりをはぐらかすのが気に入らなかったからだろう。

ジーナはやれやれと頭を振った。『まったく男ってのは』そう思った。

「二百年のあいだ」ジーグラーは続けた。「このパナマ地峡を通る黄金は、世界のほかの部分の黄金すべてを合わせたよりも多かった。〈新世界〉からの黄金すべてがスペインに送られた。インカの黄金も。アステカの黄金も。海賊どもは――責めることができるだろうか？――欲望に抵抗できなかった。海賊どもも、自分を海賊などと思ってすらいなかった人々も、そこらじゅうにころがっている大量の黄金をそのまま見逃すようなばかではなかった」

「あんたは自分のことを、現代版の海賊だと考えているんだろう」シェイクは言った。

ジーグラーはにやりと笑い、もう一匹の小エビをフォークで突き刺した。質問に答えまいとする準備だ。シェイクが歯を食いしばるのをジーナは感じとった。

「海賊というのはふつうの悪党とはちがったんだ。そこのところを理解してもらわなければならない。海賊というのは、地下室の窓を破ってお屋敷に押し入り、家宝の銀器を盗んでいくような、どこかの下層階級の下衆どもとはちがうんだ。スカーフをマスクがわりにして顔を隠して、街角の現金預払機をねじまわしでこじあけて強奪するような、イカれたうすのろとはちが

う。現代の言葉に直してくれたまえ。わかるか？　海賊は技能と脳みそと大胆さを生かして生計をたてていたんだよ。想像してみてくれ」

「大勢のお年寄りをだまして老後の蓄えを奪うこととか？」シェイクが訊いた。

「金持ちから奪うだけだよ、シェイク？」ジーグラーは言った。「そしてそれをすべて貧しい人々に与えるだけだよ？」

双方、たがいに快活な笑みを浮かべて見つめあっていた。強烈な嫌悪を感じながら。

ジーナはふたりを見守っていた。もしもこれから、そう、たとえば今月の残りずっとをどちらかひとりとセックスしなくてはならないとなったら――そう考えるだけでもおぞましいが――もちろん、即座にジーグラーではなくシェイクを選ぶだろう。同じ条件で、ジーグラーよりもここのふたりのウェイターを選ぶし、あの骨董品店のブレスレットをじゃらじゃらいわせていた娘なら確実に選ぶだろう。さらにはあの店の気さくな店主でも。すべてが同じ条件なら。だが人生では、そういうことはめったにない。

それにしても奇妙なことだ。もっと慎重に考えてみると――今月の残りずっと、いや、今年の残りずっとでも、シェイクとだけセックスをしてほかの誰ともしないと考えてみると――それをおぞましいとはまったく思わないのだ。落ち着きを失うことも、閉所恐怖症に陥ることもない。今から一年、いや、三年ものあいだ、ふたりでいることを想像することだってできた。一緒にぶらぶらと歩き、一緒に朝食を食べながら興味深い事業計画を検討し、一日のうちに太平洋とカリブ海の両方でスキューバダイビングをするさまを。

本当にそんなに大それたことなのだろうか？　いつの日か妻になり、ママになると考えることが？　そうなっても彼女は彼女のままなのだ、ただ妻でもありママでもあるだけだ。ほかの誰かのではなく彼女なりのやり方で、妻の役目だのママの役目だのを果たすだけだ。

そうよ、と彼女は認めた。それって大それたことなのよ。でも悪いことだとはかぎらない。彼女は大それたことが好きだ。自分でもびっくりして、こう考えるのが好きなのだ――『ワオ、あたしがこんなことしてるなんて、信じられない』

シェイクとのセックスが退屈だと感じるようになるにはまだまだ長くかかるだろうと思えた。そして彼との会話が退屈になることがあるとは思えなかった。シェイクは、彼女がこれまで出会ったほかの誰ともちがい、気をゆるめず警戒するというやり方を心得ていた。

こうしたことをつらつら考えるのは興味深いことだった。だが、それが役に立つことかどうか、ジーナにはわからなかった。

シェイクならすぐにわかってくれるだろうという確信はあった――高級ドライクリーニングのチェーン店経営というアイデアを。

「さて、ジーナ」ジーグラーがにこやかな笑みを満面に浮かべてジーナのほうを向いた。自分の歯がきれいなことを知っており、完璧な形の乳首を持っているストリッパーと同じようにそれを有効活用していた。相手の面前につきつけることで。「きみに話したかな、ジーナ？　マンハッタンにわたしが所有しているマンションのことを？　高層マンションの最上階だよ、ニューヨーク市内でセントラルパークがいちばんよく見晴らせるんだ」

ジーナは驚いた。「国外逃亡するって、国外に逃亡することだって思ってたわ」
「FBIのことか？」ジーグラーはせせら笑った。「やつらはとんまだ。地方支所の捜査官なんざ、運転免許試験場で写真を撮ってるやつらから進化のはしごを一段上っただけみたいなもんだ」
シェイクがまたもや歯を食いしばったのが感じられた。笑ってしまいそうだ。「それって本当なの？」ジーナは興味津々で息もつけないというふりをして、たずねた。シェイクにいっそう歯を食いしばらせたいという、それだけのために。
だがシェイクは彼女の本心を見抜いていた。ジーナをじろりと見たが、それから、彼女のことは無視して、ウェイターが前に置いた魚料理の皿に注意を集中することに決めたようだった。
「わたしは偽造パスポートをつくった」ジーグラーは話を続けた。「手を尽くしたよ。カラーコンタクトを入れ、人工のつけ鼻をしたし、特殊なヒール入りの靴をはいて歩き方を変えた。だが――いいか、すばらしくずる賢いアイデアを思いついたんだ――つまり、それがわたしの生計のたてかたなんだ。わたしの脳みそを使い、想像力を使い、常にのしあがる方法を見つけ出すこと……」ふと言葉をとぎれさせ、グラスをもてあそんだ。彼のシャンパンは四杯めだった。ジーナはいつも数えていた。それはほぼいつでも、役に立つ情報なのだ。「何の話をしていたんだったかな？」
「あんたがどんなにずる賢いかだ」シェイクが言った。魚から目を上げもしなかった。
「そう」ジーグラーは言った。「それでもだ。たぶんわたしは、フルタイムでニューヨークに

もどることはできるだろう。郵便箱に本名を出すこともできるだろう。それでもやつらはわたしをつかまえることはできないんだ」

「でもあなたはそんなことはしない」ジーナはおもねるように言った。「だってあなたは、自分の持ってる島が大好きだから」

「きみもきっと好きになるよ、ジーナ」ジーグラーは言った。

「パナマには金を持った年寄りが大勢いるしな」シェイクが言った。それから、「このスズキは悪くない」

ジーグラーは椅子の背もたれに寄りかかり、くっくっと笑った。

「きみの言うとおりだ」彼は言った。「告発されたとおり有罪だ。パナマを選んだのは、目隠ししてダーツを投げたわけじゃない。ここにはある種の……チャンスがあるんだ、わたしのような技能の持ち主にとってはね。何年か前、『フォーブズ』誌が退職後に暮らすのにいい、世界でもトップクラスの場所のひとつとして、ここの名をあげていた。温暖な気候、それほど金はかからないのに最優秀クラスの医療。そのうえ現地人の多くが英語を話す」

「現地人？」シェイクが言った。

「考えてみたまえ」ジーグラーはシェイクを無視して続けた。「きみは、そうだな、たとえばフィラデルフィアで六十二歳になった、ベビーブーマー世代の先端だ。学校管理者かな、たとえば。子どもたちはみな成人して家を離れた。そこそこの年金をもらい、家計にも余裕がある。だがそれでじゅうぶんだとはかぎらないんだ。現在、きみは人生にふたつのものを求めてい

る」
ジーグラーは指を一本立てた。「金融資産の保全」もう一本立てる。「冒険」
「相反するわ」ジーナが口をはさんだ。
「パナマでは両立するんだ」ジーグラーは言った。「ここでは、すべてを手にすることができる。そうだ、待てよ、第三もあった。料理と掃除をする住み込みのメイドだ。月に二百五十ドルでね。なかなか強力な誘惑だよ、ナショナル・パブリック・ラジオを愛聴して、カーボン複写式クレジットであちこちのエコツアーに参加するような御仁にもね。ボケテ（パナマ西部にある小さな町、山岳リゾートとして有名）あたりをのぞいてみるといい。高地がいいって？　あらゆる丘の斜面にゲートつきの高級コミュニティが林立してるさ。ボカラトン（フロリダ州パームビーチ郡にあるリゾート都市）にそっくりに見えるぞ」
「『誘惑に打ち克つ最良の方法は、それに屈することだ』」ジーナが言った。「オスカー・ワイルドよ」
シェイクとジーグラーはそろって彼女を見た。
「何よ？」ジーナは言った。「あたしは大学に行ったのよ」
「そうなのか？」シェイクが言った。
「まあね」ジーナは言った。話せば長くなる。
シェイクは魚を食べ終えた。その魚は、ちょっと生臭いとジーナには思えた。
「それじゃ、今はカモどものほうからあんたのところにやってくるってわけだ」シェイクは言った。「悪いおぜん立てじゃない」

ジーグラーはウェイターのひとりを手招きした。ウェイターはジーグラーのグラスになみなみと注いだ。

「火に手をつっこんで得たものは鉄だけじゃなかったんだよ」ジーグラーは言った。「いいかね？　たとえば医療ツアーだ。その企画はもうはじまっている。それから、ＩＭＢだ」

「インターネットで映画を見るのがどういうビジネスになるの？」ジーナが言った。

「国際結婚ビジネスだよ。とんでもなくもうかる、しかもどんどんふえる一方だ。ばかな負け犬の独り者どもが大勢いるんだよ。自分がデートしている相手がばかな負け犬の独り者だとは気づかないような女を探してる——でなきゃ少なくとも、プレカリスタス——いわゆるスラム街——から脱出するチャンスになるなら、そのことに気づかないふりをする女を探してるやつらだ。ウェブサイトの手数料だけでもウハウハだよ。それからツアーグループを本国から連れてきて、ここの独身娘たちと合コンさせるんだ」

「現地の娘とね」シェイクは言った。

ジーグラーはその軽いジャブを受け流した。もしくは、まったく気づかなかったのかもしれない、とジーナは考えた。ジーグラーは首を振った。「問題はだね、パナマ人の娘は見た目がかなりまずい部類にはいるってことだ。愛想はいいんだ、そこそこ。だが。少なくとも合コンの相手としては今ひとつだ。そこがここで安くあげようとしたときの欠点になる。やる気のある労働力の供給ができないんだ、わかるね？」

「で、解決法は？」ジーナがたずねた。ジーグラーのような男が「問題は……」と言うときは、

かならずすでに「解決法は……」を用意してあり、それが出動態勢にはいっているのだ。
「解決法はだ」ジーグラーはジーナのほうに身を乗り出し、またもやきれいな歯を見せた。「カルタヘナ（コロンビア北西部の都市）だ。飛行機で一時間、船で四時間の距離だ。それからコロンビア人の、、、、女たちだ、すごいぞ。ホットで貧しくて、安く輸送できる。まさに三連勝単式ってところだ」
「ふうん」ジーナは言った。なかなか興味をそそられる話だ。彼女は新しいことを学ぶのが大好きだった。
「で、どうなるんだ」シェイクは言った。「その娘たちは、思うにろくに英語もしゃべれんだろう。それにおそらく、ホットで貧しくて安く輸送できるって以外にもいろいろ問題を抱えてるんだろう。約束の地（エル・ノルテ）にやってきたそういう娘たちを、自分の国で相手を見つけられなかった負け犬の独り者たちと結婚させようっていうとき、若い娘はそういう男と喜んで結婚するのか？」
「そんなことを誰が気にするかね？」ジーグラーの言いかたは、ジーナから見ても心から困惑しているようだった。今回はじめて、彼が質問にまともに答えたことに、ジーナは気づいた。
ウェイターたちがデザートと、ピンク色のデザートワインを運んできた。
「そろそろ本題にはいろうじゃないの、坊やたち」ジーナは言った。
ジーナがジーグラーといちゃつくのは、シェイクは気にしてはいなかった。それが彼女の性質だからだ。いわば、数学が得意な人間がほとんど何も考えずに方程式を解くようなものだろ

う。彼女は楽しんでいるのだ。傲慢なすまし屋の人間性を見極め、ジーグラーを懐柔してこれまで以上に愚かにさせることを。それに、シェイクが傲慢なすまし屋にがまんできないことは、今回は特に、読心術者でなくても一目瞭然だ。それがいっそう、彼女にいちゃつくのを楽しませているのだ。

それならなぜシェイクは不安になっているのだろう？

それは、ジーナがジーグラーといちゃついている理由のうち四つまでは見つけたが、まだ見つけていない理由がさらにあと四つほどあることがわかっているからだ。そしておそらく、そのふたつほどはジーナ本人もまだわかっていないものなのだろう。

そしてそう、シェイクの考えでは、非常に上手な嘘が常に真実の種を内包しているのと同じように、少しは本気の部分がなければ、これだけ説得力のあるいちゃつきかたができるものではない。

『ちくしょう』シェイクは自分に腹を立てていた。『今のおれは十三歳の坊主か、おい？』

ちらりとジーグラーをうかがう。青白くてぶよっとした太り方で、ずる賢そうな目は鈍重で黒いプラスチックのボタンのようだ。傲慢で愚かなすまし屋を絵に描いたようだ。

どうしてこんな男が何百万ドルもの財をなし、島をふたつも私有するようなことになったのだろう？　さらにその何百万ドルと島に加え、どれほどかは知らないがジーナのような若い娘をはべらせられるだけの余力もあるのだ。

あのテーブルのあの席にすわっているのが、どうしてシェイクではないのだろう？

刑務所で読んだ本に、ある文明（たとえばコロンブスの時代のヨーロッパ文明）がほかの文明（ジーグラーがさっき言っていた黄金だらけのインカ文明やアステカ文明）を征服した理由について書いたものがあった。その逆はない。その本の著者によると、インカ人やアステカ人もヨーロッパ人と同じくらい賢かったし、同じ大きさの金玉を持っていたそうだ。つまるところは、特定の文明が発展した特定の大陸が産出する、特定の天然資源が問題だということだ。細かいところまですべて思い出せるわけではないが、根本的には、ヨーロッパ人とアジア人は牛や馬を家畜化したことに関係があった。一方インカ人はラマと天竺鼠を飼っていたぐらいで、それらは鋤を引かせたり、戦争をする際の乗り物になったりするほどの大きさではなかった。

ジーグラーは金持ちの家の生まれだということを、シェイクは知っていた。私立の学校に通い、ハーヴァードとウォートンを出ている。おそらく子ども時代に何か困難な目に遭ったのだろう――たいていの子どもたちと同じように――が、ジーグラーは少年院にも刑務所にもはいったことはないだろう。両親が当然のように顧問弁護士を地元の地方検事にさしむけたのだろうから。

シェイクはひとり顔をしかめた。もしかすると、この理論は大陸にはあてはまっても人間にはあてはまらないのかもしれない。仕事の関係で会った人々のなかには、無一文から出発して、インカ征服に匹敵するような大成功をおさめた人々もたくさんいた。たとえばアレクサンドラだ。一方、生まれ育った環境がどうであれ、最終的にはろくでなしになった人々も大勢いた。

自分がろくでなしになったのを、本当に責任がある本人以外のすべての人やもののせいにするのが好きな輩だ。そういうやつらは殉教者なみの自己憐憫を芸術の域にまで高めていた。

そういうやつらの仲間入りはするまいと、シェイクは考えた。

「さて、きみたち」ジーグラーが言った。「これはただの推測にすぎないが——問題の包皮だが、本来はきみたちの持ち物ではないんだろう、ちがうかね？」

「ちょっと、ローランド」ジーナが言った。「いったいまたどうして、そんなことを思うのよ？」

彼女はシェイクの膝に片手を起き、もう一方の手をテーブルにのせた。デザート皿のすぐ横に。おっと、待てよ——ジーナのもう一方の手は一秒前にデザート皿の横に置かれたが、その前はいったいどこに消えていたのだろうと、シェイクはいぶかった。

そんな自分にすっかり嫌気がさして顔を横に向け、眼下の海、月光に照らされてきらめいている水面を見る。遠くのほうに小さな島が見てとれた——青白い砂の細い帯に黒々としたジャングルがのった姿は、月がまばゆく輝く空にあいた穴のようだった。

「問題の包皮がきみたちのものでないと、どうして思うのか、かね？」ジーグラーは言った。百回に一回、彼は質問をはぐらかしたりせずにまともに答えるが、まずその質問をくりかえさなくてはならない。「そうだな、たまたまわたしはロサンジェルスにいる人のいいロシア人女性と、ヴェガスにいるそれほど人のよくないクジラを知っているからかな」

「彼女はアルメニア人だ」シェイクは言った。「そして彼女もそれほど人がいいわけじゃない」

「それでこう考えたわけだ」ジーグラーは続けた。シェイクを無視して。「わたしはどこにも属さない飛び込みのやつらと取り引きをするのか？　それとも協調性のあるよき市民として本来の取り引き相手に警笛を鳴らしてやるのか？」

「飛び込みのやつらっていうのは」ジーナが指摘する。「包皮を持っているほうなのよ、それを忘れないで。ま、いわばね。そして包皮をファミリーのお友だち価格で売りたいって言ってるのよ」

ジーグラーは唇をすぼめ、椅子の前の脚を浮かせてうしろに傾け、考えているふりをした。このすまし屋が時間をかせぐというのなら、一分ぐらいはかかるだろう――シェイクは考えた――もしくは、刑務所の臭いどろどろ粥のはいったなべに頭をつっこんで息絶えさせるのにかかる時間ぐらい。どれぐらいかかるかは知らないが。

「七？」とうとうジーグラーが言った。

七百万。どっひゃー。ジーナがしくじることはないとわかっていた。自分がへまをしないように、シェイクはじっと水面を見つめていた。

「九」すかさずジーナが言った。「あたしたちはここに慈善（チャリティー）をしに来てるわけじゃないのよ」

ジーグラーは笑い、指をぱちんと鳴らしてウェイターを呼んだ。むろんこのすまし屋は、思惑どおりの答えが出るまでは手を打つつもりはないのだ。

「数字をすりあわせる前に、ちょっとドライブに出るとしよう」彼は言った。「特別にきみたちに見せたいものがあるんだ」

39

ジーグラーはふたりを市街地に連れていった。美しい港（ポルトベーロ）はもはやそれほど美しく（ベーロ）はなく、波型鉄板の屋根をのせたセメントブロックの建物のかたまりと、半分しか舗装されていないぬかるんだ街路と、生ごみの大型缶から大型缶へとうろついているうさんくさそうな眉毛の犬たちと、目をみはるように美しい海の眺めがあるにすぎなかった。この街はパナマ・シティから車でほんの二時間の距離だが、距離というより何百年もの時差があるように思えた。

車は古い植民地（コロニアル）ふうの教会の前で停まった。石組みはさっきの海を臨む要塞のものとよく似ていたが、教会は長い年月をかけて修復されていた。おそらくは何度も。崩れてはいなかった。ただ、今にも崩れそうに見えるだけだ。

教会の重厚な木の扉は閉じて、鍵がかかっていた。ジーグラーはにやりと笑い、辛抱だよ、辛抱強く待つんだ、とふたりに言った。シェイクもジーナもそれ以外のことはしていなかったが。数分後、内側で鍵がこすれる音が聞こえ、鉄のかんぬきががちゃりと音をたてた。扉を開けたのは十代後半の少年だった。白いシャツを着て、ボタンをいちばん上まで留めている。通

りをうろついていた犬たちと同じ、うさんくさそうな眉毛に見えた。三人がはいっていくと、少年はジーグラーにすばやくお辞儀をして、すばやく扉を閉めると、物陰に溶けこんだ。
教会の内部は何十という――もしかしたら何百かもしれない――蠟燭のゆらめく光に照らされていた。
ジーグラーはふたりの反応を確認した。シェイクはたいした反応は示さなかった。かつてニューオーリンズにいたころに侍者をした経験があり、平日夜明け前のミサの当番だけではない働きをしていたのだ。だがジーナは〝まああ〟という顔をしてジーグラーを喜ばせた。
「想像してみたまえ」ジーグラーはささやいた。「石、蠟燭の光。すべて同じだ。四百年前もこれと同じだったのだ。入江を海賊たちが航行している。要塞から大砲がぶっぱなされている。唯一の希望は救済だ――まさしくここだよ」
ふたりを連れて祭壇の裏側にまわる。かつて侍者だったシェイクの少年時代の肝っ玉が跳びあがった。司祭以外の者がここに上がることは許されていないのだ。つかまって地獄に連れていかれる。少なくともとんでもない癇癪持ちのヴォワザン神父に奥の聖具室に連れていかれ、靴を投げつけられる。
「あんたも行く？」ジーナがささやいた。
シェイクはうなずいた。ふたりが向こう側にまわるまで待ち、それからすばやく十字を切ってあとにつづいた。カトリック教会に導かれた少年時代が何か教えてくれたとするなら、それは自分の賭け金すべてを抱えこんで手放さないこと、だ。

「これを見てごらん」ジーグラーがささやき、聖なる布の片隅をめくりあげて、祭壇の中央を指さした。葉巻の箱ほどの大きさの小さな四角形が大理石からくり抜かれ、ガラスをかぶせてあった。この仕切りのなかにあるのは、人間の手の骨だった。蠟燭の光に照らされたそれは、黄色いバターのようなやわらかな色に見えた。

「カッパドキアの聖テルウィンだ」ジーグラーは小声で言った。「九世紀に殉教した聖人だ。今はトルコになっている場所でね。ほとんどの人間が、新世界があるなんて夢にも思っていなかったころだ」

ジーナは骸骨の手を見つめた。「本物なの？」

「本物よりずっといいんだ」ジーグラーは言った。「今が十四世紀だとしよう、いいかね？　ヨーロッパじゅうに黒死病が蔓延(まんえん)している。人々はパニックに陥っている。農夫たちがいぶかりはじめる。おい、わしらの司祭様や僧正様たちゃ神の耳を持ってるはずだよな？　それなのにどうしてあいつらは金持ちで、どうしてわしの、そうだな、女房はくさい膿(うみ)の出るあばただらけになって死んでいくんだ？　教会は懸念した。よくない宣伝効果だからな。そしてある司祭、スペイン北部のある村の男だったが、何かしたほうがいいと考える。それで自分の手を切り落とすんだ。それから発見する、いわく、カッパドキアの聖テルウィンの手の骨をね。その当時、あまり世に知られていない聖人だ——賢い司祭だ、そうすればバレる心配はないだろうと踏んだんだ。そしてその後、いいかね、黒死病は、少なくともスペイン北部では、少なくともしばらくのあいだ、おさまるんだ。聖テルウィンの手のおかげでね」

「その聖テルウィンの手を発見した男の手が突然消えたことに、誰も気づかなかったのか？」シェイクがたずねた。
ジーグラーは答えは明白だというようにせせら笑った。つまり、彼は答えがどうなのかわかっていないのだろうとシェイクは考えた。
「で、問題の数字は最終的にどうなるのかしら？」ジーナが訊いた。
「スペイン人どもがこれを持ち込んだんだな」シェイクは言った。すまし屋ジーグラーがその質問に答える気になるまで、もう半時間ほどかかるだろうと踏んだからだ。「アメリカに移住してきて、教会堂を建てたときに、それを神聖化するための聖遺物が必要だったから」
「このあたりは危険な世界だった」ジーグラーはシェイクに話を先取りされたことに、やんわりとながらいらだっているようだった。にせの聖テルウィンの手の骨を見下ろすその目は、心の底から魅了されているようだった。「疫病やら海賊やら、野獣やら、インディアンたちやらでね。守ってくれるものが必要だった。聖遺物はスペイン人にとって、火薬と同じぐらい大事なものだった。彼らは本当に真剣な信仰を持っていたんだ。思い出してくれ、やつらは宗教裁判をもたらした人間たちなんだ」
「そしてそれが、あんたがにせの聖遺物を収集する理由なんだな」シェイクは推測した。「あんたは本当に真剣な信仰を持っているからだ」
ジーグラーは今度はやんわりというい以上にいらだっていたが、それをくっくっと笑うことでかなり上手に隠しおおせた。

「子どもだったころ、ほかの子たちが集めてたよ、ほら、野球カード？　それから〈スターウォーズ〉のフィギュアとか？　わたしには意味がわからなかった。収集するなら、珍しいものであるべきだ。ほとんど入手不可能なものでなければ。それに歴史を有しているべきだ、少なくとも歴史の物語の一部だと言えるものでなければ。その物語もその品本体と同じくらい魅力的なものでなければならない。物語こそが収集に価するものなんだから」

このときはじめて、シェイクの心の針はこの男を軽蔑しない方向にほんの少しだけふれた。だがその感情が続いたのは三秒ほどだった。ジーグラーがすました笑みを浮かべているのに気づいたからだ。

ジーグラーは祭壇のほうに頭を傾けてみせた。「だが、あれはスペイン人たちが十六世紀に持ってきた骨ではないんだ」さらにまたすました笑みを浮かべる。

「それはあんたが盗んだんだな」シェイクが推測した。

「まさか、ちがうさ！」ジーグラーは気分を害したようだった。「あれには相当な額を払った。もちろん、わたしがそれを買ったよき紳士――偶然ながら、まさにこの教会の見習い僧だったんだが――あれがどういういきさつで彼の所有物になったのかは、皆目わからないんだがね」

「もしかしたらいつの日か」シェイクは言った。「この新しいにせものが、あんたの持ってる古いにせものよりも価値があがるってこともあるんだろうな」

ジーグラーはぽかんとした眼差しをシェイクに向けた。それから、再起動し、またもやにやりと笑った。

「今のところ、聖テルウィンの黒死病退治の手がわたしのコレクションのなかでナンバーワンの珠玉の品なんだ。ぜひともそれを、わたしのコレクションのなかのナンバーツーの珠玉品にしたい。どうだい？　わたしたちがおたがいに合意に達することができればだが」
「百枚の包皮」ジーナが言った。「それのことよね」
「八百万」ジーグラーが言った。「受け取るか、退くかだ。それから念のための一言をいいかね？　わたしははったりは打たない」
シェイクはジーナを見た。ジーナは目だけでシェイクに告げた。『やったね、くそ！』
「八百万だ」シェイクは言った。「ここは慈善（チャリティー）でいいことにしよう」

やったね、くそ！　八百万ドル。ジーナの奔放で手前勝手な夢のなかではない――まあ、たしかに最高に奔放で手前勝手な夢で見たかもしれないが、でも現実だ。
生っ白男はさらに海岸ぞいに北に向かった。彼いわく、私有の飛行場に向かっており、そこにパナマ・シティにもどるプライベート・ジェットが待っているということだった。ジーナとシェイクだけで、ジーグラーは乗らない――わたしはこっちに残る必要があるからね、とこれまでと同じような謎めいた言い方で、ジーグラーはふたりに言った。
飛行場に向かう車内で、ジーナは興味をそそられる詳細やあれこれの関係性に考えをめぐらせた。古い包皮に八百万ドルも払う男ってどういうタイプの男なのか？
その質問の答えはひとつだけだ。常識はずれな額の大金を持っている男。

島をふたつと、マンハッタンにセントラルパークを見晴らせる住まいを持っている男。言い換えれば、まさにジーナの好みのタイプの男だ。

でも正直なところ——八百万ドルで満足していい？

四百万よ、と自分に思い出させる。それがラスヴェガスでシェイクとした約束だ。

シェイクは窓の外を見ている。彼女のパートナー。

ばかげてない？　今となっちゃ、ラスヴェガスがどんなに遠い遠い昔に思えることか？

シェイクがこちらを向き、じっと見ていたジーナの視線を捉えた。彼はウインクした。今ここで彼に飛びつきたくなった。この四駆の後部座席で。

飛行場に着いた。ジーグラーは歩いて、ふたりを小型ジェット機に連れていった。パイロットはディナーのときのウェイターの片方で、あまり信頼できる気がしなかった。

『八百万ドルを手に入れる寸前に飛行機事故で死ぬとしたら』ジーナは考えた。『それこそ死んでも死にきれない』

四百万ドルだってば。いつも取り分は半額だということを自分に思い出させなければならないというのは、奇妙なことだった。

「現金を用意するのにちょっと時間が必要だ」ジーグラーが言った。「明日ではなく、その次の日の夕方でどうかね？」

「ああ」シェイクが言った。

「それから、気を悪くしないでもらいたいんだが、念のため警戒措置みたいなものをとりたい。

きみたちの誠実さを疑うというわけじゃないんだが、こちら側で真贋認定のプロを連れていきたい」

「それからこっちは、次はどこか公共の場所で会いたい」シェイクが言った。「そっちの誠実さを疑うというわけじゃないんだが」

「タボガ島にしよう」ジーグラーは言った。「パナマシティの海岸のちょっと沖にある島だ。フェリーを使うといい。丘のてっぺんに教会がある。イグレシアス・サン・ペドロ教会だ。その前の広場で会おう。明後日の晩、九時だ」

「そっちは金を持ってくる」シェイクが言った。

「そっちは包皮を持ってくる」ジーグラーが言った。

ウェイター兼パイロットが進み出て、小型ジェット機のドアを開けた。

ジーグラーはジーナの手を取って、キスした。

「会えてうれしかった」そう言いながら、ジーナのもう一方の手に紙片をすべりこませた。

シェイクは――ふたりに背を向け、飛行機のステップを上がっており――気づいていない。

「こちらこそ」ジーナは言った。

「それじゃ、また近いうちに」ジーグラーはきどった笑みを浮かべて、ジーナに言った。

それから車にもどりはじめた。シェイクはステップのいちばん上に立ち、こちらに向き直ってジーグラーが去るのを見守っていた。

「ところで、きみたち」ジーグラーが声をはりあげて呼びかけた。「実ははったりをかましていた。

いたんだよ。わたしは一千万までは出した！」
そして笑いながら、四駆に乗りこみ、走り去った。
ホテルにもどると、ふたりはベッドに倒れこみ、貪りあった。シェイクはひどく年老いた気分とひどく若い気分の両方を味わった。それは奇妙な感覚だったが、そんなことをとやかく言うつもりはなかった。
ことがすんだあと、本当に疲れきっていたのに、シェイクは眠れなかった。ジーナの息づかいから、彼女も同じだとわかった。
「で、どう思う？」しばらくして、ジーナが訊いてきた。
「あいつはすまし屋だ、ってのがひとつ」
「島をふたつ所有してるすまし屋よ」
「それでもすまし屋にはちがいない」
「それでも島をふたつ所有してる」
「それならここでやつと一緒になるがいいさ」シェイクは言った。
ジーナはくっくっと笑った。「あんたが嫉妬深いタイプだとは思ってなかったわ」
「ちがうさ」
「嫉妬してないの？」ジーナはたずねた。「それとも嫉妬深いタイプじゃないの？」
シェイクは笑った。おれが本気でそれに答えると思ってるのかと言うように。

「ひとつ、ずっと悩まされてることがあるんだ」シェイクは言った。
「ふうん？」
「アレクサンドラがこれにからんでたことだ」
「あんたのグレーの瞳のアルメニア人の、それほど人のよくない美女ボスね」
「わからん。彼女があんなすまし屋と包皮を取り引きするなんて」
「八百万ドルよ、キンポウゲちゃん」
「それでもだ。そういうのは彼女のやり方じゃない。モビーなら、きみを手に入れるためならそれぐらいの金は払っただろう、すぐにね。あんなやつがどうして包皮なんかに目クジラをたてるんだ？」
「それって駄洒落のつもり？」
「口に出す前からひどいってわかってたよ」
「そう？」ジーナはこの詮索をシェイクほどは興味深いと思っていないようだった。ナイトスタンドの明かりを消してもいい？　そうシェイクに訊いた。その前にすでに——もちろんだ——ナイトスタンドの明かりを消していたのだが。
「いいよ」
「そっちの取り分で何をする？　そっちの四百万で？」
「笑うなよ」
ジーナは笑った。「どこかで自分の小さなレストランを開くって言うんじゃないわよね？」

「ちっとも変じゃないぞ」シェイクは言った。「アメリカの地域に根ざしながら垢抜けた料理を出すレストランだ。材料も地元で育てる」
「あの大きな帽子をかぶるの？」
「コック帽か？　かもな」
「彼女と踊ったことある？」
「誰のことだ？」
「誰のことかわかるでしょ」
闇のなかでシェイクは笑みを浮かべた。ちょっと驚いていた。ジーナがそういったことを気にするということに。
「レクシーとは一度もそんなことはない」シェイクは言った。
「わかるわ」
「妬いてるのか？」
「あたしはそういうタイプじゃないのよ」ジーナは上体を乗り出してきて、彼にキスした。

40

翌朝、シェイクが目を覚ますと、ジーナはすでに着替えて、バスルームで自分の前に香水をスプレーしていた。それから噴霧の雲をすばやく通り抜けた。

「あんたって怠け者よね」シェイクが目を覚ましたことに気づいて、言った。「もう九時よ」

「そっちは何か予定を持った女の子みたいだね」

ジーナは部屋のほうに出てくると、ベッドにひょいと腰掛け、一分ほど、シェイクのまわりのマットレスで跳ねて楽しんでいた。

「ちょっと外に出て、あちこち見てこようと思うの。あの像、ほら、あの店の男が言ってたやつも見ておかなきゃよね？」

「フェルディナン・ド・レセップス」シェイクは言った。

「それに、ほかにもいろいろ見るものはあるもの。前にも言ったけど、ほんとにナマケモノを見てみたいのよ。だってほんとに、パナマなんて次にいつやってこられる？　でしょ？」

それから、ひと呼吸置く間もなく、すぐに続けてひと息で訊いた。

「一緒に来たい？」
シェイクは片肘をついて上体を支え、まじまじと彼女を見た。この誘いかけは心からのものだろうか？　それとも先まわりして彼の疑念を制すべく計算されたものだろうか？　それとも――この娘が考えることなんて誰にわかる？――その両方だろうか？
ベッドでのふるまいから、ジーナがついに自分に飽きたわけではないことは、わかっていた。
「ああ」シェイクは言った。「仲間に入れてくれ」
「いいわよ」シェイクの答えに驚いたにせよ、ショックを受けたにせよ、ジーナはそんなようすはみじんも見せなかった。ナイトスタンドからルームサービス用メニューを取り上げ、ぱらぱらとめくりはじめた。「朝食を頼む、それとも外に出る？　あたしはお腹がぺこぺこってほどじゃないけど、コーヒーと卵ぐらいは食べてもいいわ」
「気を遣わなくていいよ」シェイクはもう一度、まじまじと彼女を観察しながら言った。「おれ抜きで出かけてくれ。おれはもうちょっと眠って、それからマッサージを受けられる場所を探すよ」
ジーナの目は何ひとつ明かさなかった。「あんたは年寄りだものね」ジーナは言った。「かわいそうな、かわいそうな坊や」
「杖を売ってくれそうなとこを見つけにいくとしよう」
ジーナはルームサービス用メニューをテントのように立て、帽子みたいにシェイクの頭にのせた。ものの一秒で、それは落ちた。

「わかったわ、じゃあね」ジーナは言った。
シェイクは待った。彼女が抜け目がなければ、もう一度訊いてくるはずだ。ねえ、ほんとにあたしと一緒に観光したくないの？　もっと抜け目がなければ、何も訊かないはずだ。そんな見え透いた策略に頼ったりはしないだろう。
「マッサージってどういうタイプの？　ハッピーエンドがつくタイプはやめたほうがいいわよ」
「ハッピーエンドのどこが悪いんだ？」シェイクは訊いた。
「そんなものは現実にはないからよ」ジーナは言った。「あたしの経験ではね」
「大学出の女の子の口から出る、不可解な警句だな」
「話せば長くなるわ。あんたのお行儀がよかったら、そのうち言おうと思ってたのよ。あたしは星(スター)を追跡する学部だったのよ」
「何だって？」
「簡単に言うとね」
ジーナはぴょんとベッドから飛び下りた。
「寝直したかったら寝直すといいわ。それか、あたしと一緒に出かけたいんなら一緒にくるといい。黙ってて。自分がしたいことをちゃんとわかってる男が好きよ」
ジーナを読むのは不可能だった。だが、読もうところみるのはたしかに楽しい。
「おれは自分のしたいことはわかってる」シェイクは言った。「ディナーはここにもどってく

るかい？」
「了解」ジーナは言い、ドアに向かう途中でキスを投げてきた。
シェイクはベランダに出て、彼女がホテルを出るのを眺めた。彼女はまわりをまったく気にかけるようすもなく、通りに出ていった——肩越しに振り返ってベランダを見上げることもしなかった。シェイクがこっそり観察しているかもしれないという可能性など考えてもいないか、振り返って見上げなくても彼がそうしていることがわかっているかの、どちらかだ。
彼女を尾行して、どこに行くのか見てみようかと考えたが、やめることに決めた。そういうのは、健全な関係を土台にした行為とは言えないからだ。
それに、シェイクのほうにもやらなければならない用事があった。
ジーナが角を曲がって見えなくなると、シェイクは部屋のなかにはいり、すばやく服を身に着けた。

41

ジーナは角を曲がった。リムジンが彼女を待っていた。ジーナは後部座席に乗りこんだ。運転手は昨夜のディナーのパナマ人ウェイターの片方だった。パイロットでなかったほうだ。

ジーグラーが〈ミモザ〉カクテルを手渡してきた。

「どこに行くのかしら?」ジーナは訊いた。

「今にわかる」

「何にせよね」突然不機嫌な気分になったが、なぜなのかはわからなかった。今朝早い時間には、とても上機嫌だったのだ。おめかしして、冒険に出る準備をするのは、いつも快いスリルを感じさせてくれる。そのおかげで、これまで本当に麻薬(ドラッグ)に深入りしたことはなかった。とっさにあれこれ嘘を創作するのは空を飛ぶのに似ている。ジャズを、それもすばらしいジャズのアドリブを演奏するのにも似ている——コカインやエクスタシーなんてくらべものにならない。

ファーストキスを思い出すことはできないし、処女を失ったときのことも、頭のなかではあやふやだ。相手が誰だったかはわかっている、もちろんだ——そんなに悪い思い出ではなかっ

た。ただ、はっきり思い出せないだけだ。あれは海辺の別荘に泊まった最初の夜のことだったか、それともその次の夜、彼の両親が街にもどったあとで浜辺に毛布を敷いておこなったのだったか？　そうした夜のどれかだ、それはたしかだ。それとも、もしかすると、ビーチハウスの最初の夜の前の晩だったかも。あのときだったかもしれない。

ちょっと休ませて。本当に遠い昔のことだ、ジーナはまだ十五歳だった。そしてその体験は――ちゃんと直視しよう――魔法のようにすばらしいとは言いがたかった。

だがなんと、はじめて万引きしたときのことは明瞭に記憶していた。十歳だった。〈濡れたアザラシ〉と呼ばれるモール、ジーナの母親は〈濡れたアソコ〉と呼んでいたモールの、ある店で。十歳だったジーナは、もちろん冗談というものはわからなかった。彼女はじっと指輪を見ていた。それにさわってはいけない、だからジーナはそれにさわった。そういうときの感覚が好きだった。ぞくぞくする感覚が。指輪を取り上げ、ポケットに入れて、店のドアから出たときのぞくぞくする感じが気に入った。

その数分後、警備員が〈スバロ〉レストランの前でジーナに追いつき、ぐいと腕をつかんだとき――そのとき、ジーナは自分が嘘をつく天性の才能に恵まれていることを発見した。それはまさしく――ジャズの比喩に固執するなら――自分が完璧な音程を出せることを発見したとか、もしくはサキソフォンをはじめて持って、美しい音楽を奏でるための指づかいを正確に知っていることを発見したとかいうのに似ていた。

店から持って出た指輪は本当にあたしのよ、とジーナは警備員に言い張った。別の指輪をた

めしたときに下に置いて、そのままうっかり置いて忘れてたの。その指輪は二ヶ月前にママからもらったお誕生プレゼントだったの、とジーナは説明した。ママの大おばさんの悲しい形見をママがもらってたのよ。その大おばさんは子どものころ、『オズの魔法使い』でロリポップギルド・マンチキンのひとりを演ってたのよ、でもせっかくの映画界での活躍も、糖尿病で若くして死んだせいで断ち切られちゃったの。お誕生パーティーには、子どもたちがなかでぽんぽん飛び跳ねる風船みたいなドームもあったけど、跳ねるときは指輪をしちゃだめって言われたのよ。万が一、指輪がバルーンドームやほかの子に刺さったら大変だから。

いったい全体、どこから出てきたんだろう？　ジーナにもまったくわからなかった。だが十歳にして、彼女は確実にふたつのことを学んでいた。トラブルにはいっていくのはおもしろい。トラブルから脱出すると眠気を催す。

「完璧な音程を出せる人って、知ってる？」ジーナはジーグラーに訊いた。

「え？」ジーグラーはぽかんとした顔でジーナを見た。生っ白男は、自分を非難する質問も、考えさせられる質問も、自分についてでない質問も、されるのが好きではない。これもまた、彼がシェイクとちがう――それも大きく――ところだ。

「何でもないわ」ジーナは〈ミモザ〉の残りをあおった。さっき、ホテルの部屋で、今日一緒に来たいかどうかとシェイクに訊いたときのことを思い起こしていた。彼が最初は行くと言い、それから行かないと言ったことについて考えた。そのあいだずっとジーナを観察していたことを。ジーナはにんまりした。シェイクに嘘をつくのは、シェイクとセックスするのとほとんど

同じくらい好きだった。それもまったく同じ理由で。彼はプレイのしかたを知っているのだ。彼はジーナのゲームを盛り上げてくれる。

そのせいで今、不機嫌な気分になっているのだろうか？　シェイクに嘘をついたから？　だがそれは意味をなさない。ひとつのものが同時にいい気分と悪い気分を感じさせるなんてことがあるだろうか？　なぜなら、不機嫌なのはさておいて、あのおなじみの高揚したうなりも血管に感じているからだ。あの、やってはいけないことをしたときにいつも起きるぞくぞく感を。

自分に正直になるなら、シェイクにも非があると認めなければならない。彼はあまりにのんきでおおらかすぎる。野心ゼロだ。あんなことでは自分のレストランをはじめる日など永遠にやってこないと、ジーナにはわかっていた。

その一方で、あんなことをしたのはひどかっただろうか？

ここではたくさんのいろんな矛盾した感情が混じりあっていた。とりわけ、午前九時半にしては。それって、いわば、ヴェガス時間の六時半みたいなものだ。

「きみが来てくれるか、不安だった」ジーグラーが言った。

「それなら、どうやらあたしのことをあまりよくわかってないようね」満面に笑みを浮かべ、ジーナは言った。

シェイクは階段を下りていった。フロントにいるのは、表情豊かな眉毛をした、あの神経質

な若い支配人補佐だった。シェイクが近づいてくるのを見て、支配人補佐の眉毛が緊張した。
「あわてなくていい」シェイクは安心させるように言った。「金庫を開けてくれと頼んだりしないよ」
「もちろんそうですよね、セニョール・ボックスマン」支配人補佐は言った。
「金庫を開けろ」シェイクは言った。
「は？」支配人補佐は泡を食ったようになり、両手を頬に当てた。オスロにあるエドゥアルド・ムンクの絵のようだった。シェイクはその絵、「叫び」を知っていた。ミュール・クリーク刑務所にいた男のひとりが、何年か前にそれを盗んだグループの男たちのひとりを知っていると主張していたからだ。だがその後、そのグループに何かが起きた。それが何だったかは思い出せなかったが、彼らは結局、絵を放り出した。典型的な犯罪者どもの烏合の衆だ。いいアイデアひとつと悪いアイデア九つを思いつく社会不適合者どもの集まりだ。
「冗談だよ」シェイクは支配人補佐に言った。ここまでとんでもないあわてかたをさせるとは思っていなかったのだ。「おれのために金庫を開けてもらうつもりはないよ」
支配人補佐の眉毛が大きな安堵を表現した。「はい、セニョール・ボックスマン。もちろんそうでしょう」
「ひとつ訊きたいことがある」
「どうぞ」
「この地域でいちばんいかがわしい安酒場はどこだ？」

「すみませんがもう一度おっしゃっていただけますか、セニョール？」
「いちばん安い酒といちばんブスの売春婦を置いてる店は？」
支配人補佐は眉毛の姿勢をまっすぐに正すと、鼻梁から静かに笑うような音を出した。
「セニョール・ボックスマン」彼は言った。「わたしはそのような場所についてはいっさい存じません」
「だが義理の兄弟はいるだろう」シェイクは言った。「なあ？」
支配人補佐は弱々しくうなずいた。「ええ。三人います」
「それならきっと、そのなかのひとりはメジャー級のろくでなしのはずだ。役立たずだっけか？　そうだろう？」
自分が正しいことはわかった。支配人補佐の眉毛があちこち踊ったあとにぐっと寄せられたことから。
「だから」シェイクは言った。「あんたの義理の兄弟のペンデイホが入り浸ってる店はどこだ？」

空港で、ジーグラーのパナマ人のウェイター兼運転手は、ふたりをパナマ人のウェイター兼パイロットに引き渡した。小型ジェット機に乗って一時間ほど飛ぶ。東から西へ、実質的に地峡の全長を飛んだが、生っ白男はジーナに行き先を教えなかった。なぜシェイク抜きでジーナと会いたいと思ったのかも話さなかった。

第二の疑問については、訊かなくても答えはよくわかっていた。そして彼の動機を考えたとき、ジーグラーは謎に包まれた人物というわけではないので、第一の疑問についても答えはわかっていると思えた。

やっぱりそうだ。海岸からすぐ沖に散らばるたくさんの小島の上で、飛行機はバンクして大きくまわり、ありえないような緑色でありえないほど澄みきった水の上を低くかすめ、海岸からいちばん遠くにある島に着陸した。

「わが隠れ家にようこそ」ジーグラーは満面に笑みを浮かべて言った。ジーナはびっくりしておもしろがっているふりをした。

実際、ある意味おもしろかった。ジーグラーの家がよく見えるところにきてからは。砂糖のような白砂のビーチの上に立っている豪邸。広々としたチーク材のベランダは、海の上に一部張り出すようにつくられていた。そちらに向かって小径を歩いていくと、糊のきいた白いお仕着せを着た女性が屋敷から走り出てきて、アロエの香りのする冷たいおしぼりをジーナに渡した。

「さて」ジーグラーが言った。「波(サーフ)がいいかね、芝(ターフ)がいいかね?」

「ランチの場所?」

ジーグラーはくっくっと笑った。「わたしのジャングルを散策したいかい、わたしの珊瑚礁でシュノーケルをしたいかい?」

『この男はこういう島をふたつ持っているのよ』ジーナは考えた。

珊瑚礁を選んだ。客用寝室のひとつ――ホテルの客室のゆうに三倍の大きさがある――に、ジーナのサイズのデザイナー・ブランドのビキニが六組そろえてあった。そのひとつに着替え、ビーチで待つジーグラーのところに行った。

ふたりはマスクをつけ、何十メートルか沖に泳いで出た。水中にもぐってものの三十秒で、巨大なまだらのエイが見えた。コーヒーテーブルほどの大きさがある。エイはジーナのほうに悠々とやってきて、ジーナの下を通り、それから両側のひれの先端をぴしっと振ると、すばやく泳ぎ去った。一時間後、さらに二匹のベルベットのようにつややかなエイと、ウミガメ三匹、それから虹色に輝く魚の数えきれないほどの大群を目にしていた。ほかにもまだいろいろ。

シュノーケルをしたのは、ほかにはディズニーワールドだけだった。いくつかある親水公園(ウォーターパーク)のひとつにある、せせこましいちっぽけな人工の礁湖のなかで、まわりで水をはね散らしている幼児の誰かがおもらしをしませんようにと祈りながらの体験だった。

「これって超すてきね」ジーナは言った。こう言ったのは水中で、シュノーケルのマウスピースを口にくわえていた。おそらくそれが、生っ白坊やがマスクとそのうしろのちょっと間隔の狭いビーズみたいな目をこちらに向けたときの当惑したような表情の説明になるのだろう。

「なーらて?」彼は言った。

ジーナはもう一度こころみた。「これ。超。すてき。よね」

ジーグラーは注意を払わなかった。彼女の手首をつかんで、左のほうを指さしていた。その指の先をたどると、何気なく通りすぎていくものが見えた。三センチぐらいに見えるとすると、

実際は一・二メートルから一・五メートルほどだろうと思える長さの、なめらかで美しい――サメ。

ジーグラーはそのサメを指さした。それから、ジーナを指さした。

ジーナはとまどった。あたしにあれを、その、つかまえろと言っているのか？　もしジーナがあのサメをつかまえようとすると思っているんなら、ジーグラーは真剣に頭がおかしいと言える。

ジーグラーはもう一度サメを指さし、それからジーナを指さし、さらに自分を指さした。それからシュノーケルのマウスピースをくわえたままにんまり笑った。そのときようやく、ジーナは気がついた。彼が何を言おうとしていたのか。

その店は〈エル・ペリコ〉といった。この店がパナマ・シティで最低の安酒場ではないとするなら、シェイクは最低の店のそばに近寄りたいとは思わなかった。少なくとも危険物処理用スーツを着て機動隊を派遣してもらわないかぎりは。

まだ正午だったが、すでに十数人の客がいた――めいめいがひとりですわっている。バーカウンターで酒のグラスを囲うように背を丸めているか、小さなテーブルにひとりですわっているかしている客たちは、風を入れるために開け放してある大きな両開き扉の入り口から流れこんでくる光のせいで、黒々とした影になっている。目つきのきつい、あばた顔のストリッパーが小さなステージに出て何かしていた。ポールのまわりで、のろのろと足を引きずるようにし

て動いていたが、最大限の拡大解釈をしても、踊っていると呼べるしろものではなかった。

シェイクは暗さと煙草の煙の靄に目が慣れるまで待った。今回ばかりは、自分の直感が正しいことを願った。これまでの経験からすると、彼の直感は通常、およそ半分の確率で正しい。確率を考える場合、半々というのは過去に起きたあらゆる経験のなかでもおそらく最悪と言えるだろう。たとえば、もし直感が通常まちがっているとするなら、賢いプレーヤーはそれを無視することを学ぶからだ。

今朝の直感は、まちがってはいなかった。バーカウンターのいちばん遠い端に、ディクランの大きな弾丸の形をしたはげ頭を見つけたからだ。ディクランはグラスを囲うように背を丸め、ストリッパーを見つめていた。シェイクには背中を向けて。

シェイクはカウンターの向こうが鏡張りでないことを確認し、音をたてずにディクランの背後に忍び寄った。ディクランのスツールの横木を足で踏みつけ、前腕で大きな弾丸の形をしたはげ頭をカウンターの上にたたきつけた。もう一方の手で、ディクランのウエストバンドにはさんであったグロックをつかむ。

ディクランはくるりと向きを変え、獰猛に殴りかかってきた。シェイクはひょいとパンチをかわし、グロックの銃身をディクランの腹にたたきこんだ。

それから思い出そうとした――シェイクは車の男であって、銃の男ではない――グロックには安全装置があっただろうか。もしそれがあり、かかったままになっていたら、ディクランはすばやくその意味するところを読みとり、シェイクは死人になるだろう。

だが、ディクランは動かなかった。ただ、当然だろうが、どっと頭に押し寄せた血流がつぶれたような醜い顔をいっそう醜くし、激怒のあまりにあざのように黒ずんだ紫色に変えていた。

「落ち着けよ、にいちゃん」シェイクは言った。必要な情報を引き出すまでは、ディクランに血管破裂を起こさせたくなかった。

「このくそったれめが」ディクランはわめいた。「殺してやる」

カウンターの向こうのほうから、バーテンダーがうんざり顔でふたりを見やった。うんざりしたようなスペイン語で何か言う。たぶんこういう意味だろうとシェイクは推測した――「外でやってくれ」

ほかの客もストリッパーも、こちらを見ようともしない。ディクランの頭がカウンターにひびを入れ、ショットグラスが飛びあがってもだ。

「彼女はこのパナマにいるのか？」シェイクは訊いた。彼女がここにいるはずはなかったが、レクシーがこの件に関わっているということ自体がそもそもおかしいのだ。

彼女がこのパナマにいないのなら、シェイクの計画は大幅な見直しを迫られる。しかも、もともとたいした計画ではないのだ。

「くそったれめが！」ディクランは言った。「てめえの頭を玉葱みたいに引きちぎって、それから――」

「黙れ」シェイクはディクランの肋骨の下にグロックの筒先をきつく押しこみ、ディクランの腕の男性ホルモン昂進パッチを剥ぎ取った。

「くそ！」

「彼女はここにいるのか？」

ディクランはただシェイクをにらみつけた。自分は嘘がへたであるという自覚があったし、嘘をつこうとすら思わなかった。

シェイクは緊張を解いた。一、二メートルあとずさる。万一、怒りくるったディクランがグロックで撃たれる危険を冒しても核弾頭のような頭でシェイクに頭突きしてくることを警戒してのことだった。

五分五分だな、とシェイクは考えた。

バーテンダーはシェイクの手の銃を見た。シェイクを見た。そしてまたスペイン語で何か言った。今度は、ドアのほうに追い払うような仕草もついていた。

「ナニモモンダイナイ（アイ・ノー・プロブレマ）」シェイクは安心させようとした。

「おれを彼女のところに連れていけ」ディクランに言った。「今すぐだ」

42

ランチはベランダで食べた。ふたりのウェイターはジーナがこれまでに見たことのないパナマ人だった。ジーグラーはワインを三杯飲んだだけで、あまり食べなかった。熱帯の島、ふたつも所有している熱帯の島のひとつに住んでいるというのに、どうして青白い肌をしていられるのか――ジーナには不思議だった。ジーナの鼻の頭はすでに日焼けしはじめていた。

「しばらくするとだね」ジーグラーはグラスを振って四杯めのワインをウェイターに催促しながら言った。「ただゼロをつけたしていくだけになる。金をかせぐってのはね。そうなると、人生に何かもっと大きなものを求めはじめるんだ。何か意味のあることを。だからわたしはここで暮らすのが好きなんだと思うね。ここには信じられるものがある。匂いを嗅げるだろう？その……何ていうか……」ジーグラーは深く息を吸いこんだ。「野生ってやつだ」

たしかにジーナも何か匂いを嗅ぐことはできたが、それは野生ではなかった。すばらしいシュノーケル体験で高揚した気分が続き、ランチのあいだずっと、気のあるそぶりで実にお行儀よくしていたが、だんだんまた不機嫌な気分になってきていた。生っ白男は自分ひとりで

しゃべりまくるのが好きで、ジーナはもうけっこうな時間、じっと彼の話を拝聴していた。
「この国はまだ飼い馴らされていない。わたしは飼い馴らされていないものが好きなんだ」
「話を切り替えましょう、ローランド」ジーナは言った。
ジーグラーは手すりのところに行き、バスケットにはいったパンのくずを下で泳いでいる魚たちに投げてやった。
「わたしは例の包皮に八百万も払いたくないんだよ、ジーナ。できることならね」
「それは交渉して決めた値段でしょ」
「それは売り手がふたりだったときに交渉して決めた値段だ」
ジーグラーはもったいぶったようすで、その発言の余韻をしばし宙に漂わせた。ジーナがその暗号を解いて彼の言う意味を理解するのに一秒ほどかかるとでもいうように。そのあとで、ジーナが鋭く息を呑んでこう言うとでも思っているのだろう──
『ちょっと待って、あなたが言ってるのって──まさか……？』
頼むからやめて。ジーグラーのこの動きは、昨夜彼が紙片を手にすべりこませてくる前から、すでに読めていたのだ。
「あたしもその場にいたのよ、ローランド。覚えてるでしょ？」
「きみは半分を受け取ることになってる、そうだろう？」ジーグラーは言った。「だから四百万だな？」
「続けて」

「わたしが言ってるのは、わたしときみのふたりで、われわれの資金の動きを改善する方法を考えようということだ」
「シェイクを切るのね」
「六百万。全部きみひとりのものだ」
「そっちは二百万の節約……」
「きみには二百万よけいにはいる」
「あたしが二百万よけいに手に入れるためにパートナーを裏切るなんて、どうして思うの？」
ジーグラーは手すりの前でくるりとこちらを向き、にやりと笑いかけた。
「その目さ」彼は言った。

そのレストランは観光案内所の最上階にあった。アレクサンドラは屋外のテラス席にすわり、お茶を飲みながらミラフローレス閘門（パナマ運河の太平洋口から六キロ地点にある二段式の水門）をまっすぐ見下ろしていた。シェイクが怒りくるったディクランを前に立たせて近づいてくるのを見ても、彼女の顔は驚きの色ひとつ見せなかった。
「シェイク」彼女は楽しげに言った。「会えてうれしいわ」
「レクシー」シェイクは彼女の向かい側に腰を下ろした。
「パナマ・シティって美しい街よね？」彼女は言った。「とても国際色豊かで。この運河にはすっかり魅了されたわ」

シェイクも見下ろした。ロシア文字のはいった貨物船、アパートのビルが横倒しになったような、とんでもなく大きな貨物船が、おもちゃのように見える小さなはしけ二台に曳かれて閘門のほうに進んでいく。二台のはしけは四十五度の角度に開いて運河の両側を走っていた。

「フランス人のことは知ってるかい？」シェイクは言った。「最初はフランス人があれを造ろうとしたってことだけど？」

「フランス人」レクシーははねつけるように言った。「あなたは知ってるかしら、シェイク？あの閘門が造られた当時のあなたたちの大統領、初代ルーズヴェルトだけど、彼はあれを造るにあたってどうすれば美しい閘門にできるかを考えるのに、有名人を何人も雇ったのよ？どういう装飾や付属物をつければいいか？　有名な建築家たちにたずねた——そのなかには、ニューヨークにセントラルパークを配置した男もはいってたのよ」

「で、どういうふうにすることになったんだい？」

「それは自分の目で見てみなさい、そうでしょ？」アレクサンドラは手を薙ぐように振って閘門の眺めを指し示した。「建築家たちは美はすでにそこにあるって考えたの。工業技術の粋にね。だから大統領に進言したのよ、閘門にはふれてはなりません、それをしたら台なしになってしまいますよ、ってね」

シェイクはにっこりした。「いい進言だ」

「わたしもそう思うわ」アレクサンドラはお茶を飲んだ。相変わらず憤懣やるかたなしといった顔でのっそりとシェイクの前に立っているディクランには目もくれずに、言う。「あなたが

ここでディクランを——何て言うんだったかしら？——出し抜いているのはわかってるわ」
「残念ながらそういうことだ」
「くそったれめが」ディクランが言った。「銃を返せ」
「銃はしばらく持たせてもらおうと思うんだ、ディクラン。おまえさえよければな」
ディクランは殉教したアルメニア人のような苦しみに満ちた目をアレクサンドラに向け、裁定を求めた。アレクサンドラは肩をすくめた。
「見つけた者勝ちよ」彼女は言った。「シェイクのためにおいしいお茶をもらってきてちょうだい」
ディクランは自分が序列に疑問をはさめる立場にはないことをよくわかっていた。彼はどかどかと歩いていった。
「それで」アレクサンドラが言った。
シェイクは彼女を見つめた。なぜいつも、こういう美しいが危険な女性たちに惹かれるのだろうか？ 性格における何らかの欠陥に惹かれるのだろうか？ それとも強さに？
頭のなかで計算して、一瞬想像した。小さな女の子、今ごろは四歳になっているだろうか、レクシーのグレーの目と彼の……何だろう？ 彼の鼻、ぐらいか。
「ちょっと考えてみてくれ、レクシー」シェイクは言った。「もしおれたちがあのまま一緒にいたら、もしかしたら所帯を持って落ち着いていたかもしれない。家族をつくって、郊外にかわいい小さな家を買って」

「そうね」グレーの目がきらめいた。「もしわたしたちがあのまま一緒にいたら、まさしくそのとおりになっていたと思うわ」

「わからないさ」

アレクサンドラは答えかけたが、やめた。ふたりは共に、閘門のなかの泡立つ水面を眺めていた。ロシア籍の貨物船がゆっくりと確実に上がっていきはじめるのをじっと見つめた。

「それで」とうとうシェイクは言った。「トラブルを都市の大きさにたとえたら、今おれがいるのはどの街だろう？」

アレクサンドラはお茶を飲み、考えこんだ。「ニューヨークかしらね」

「そりゃずいぶん大きな街だな」

「トラブルだらけのね」

「わかってるよ、レクシー。おれたちはもう、昔のよしみなんてことできみに頼みこめるような時点はとっくにすぎてる。でも——」

「残念ながらそのとおりよ、シェイク」アレクサンドラは言った。

「そうだと思ったよ」シェイクは言った。

「あの娘」アレクサンドラは言った。シェイクは驚いた。「ジーナだったかしら？　あなた、あの娘を気に入ってるの？」

「そうだと思う」

「でもあなたを誘いこんだのは彼女なんでしょう？　トラブルの街へ連れこんだのは？」

「おれが誘われるままになったんだ、かなりの部分」
「いつだって勇気ある男よね、シェイク」
その勇気と八百万ドルの半分があれば、幸先のいいスタートを切ることができるだろうかと、シェイクは考えた。アレクサンドラから隠れて。ディック・モビーから隠れて。かなり楽観的な気分のときは、できるかもしれないと思えた。その可能性はある。少なくとも二、三年のあいだは。
「おれはこの先一生、背後を気にして振り返りながら生きていくのはいやなんだ、レクシー」
シェイクは言った。「心の底から、そんな生きかたはしたくないと思ってる。だから知りたいんだ——」
「その代償が何かを知りたいのね？」
「ああ。そうだ」
「巻きこまれてしまったこのごたごたから抜け出すために？」
「ああ」シェイクは言った。
「あなたは、代償があるって考えているのね」
「いや。そう願ってるんだ」
アレクサンドラはお茶を飲んで、考えこんだ。「きっと代償はとても高くつくわよ」
「相当な高額でも払う用意はできてるよ、レクシー」シェイクは言った。「まあ、きみの言っているのが金ということならだが——」

CamScannerでスキャン

「お金じゃないとしたら？」アレクサンドラは言った。
この言葉にシェイクの動きが止まった。「包皮か？」
アレクサンドラは振り払うように手を振った。
「おれにはわからん」シェイクは言ったが、だんだんわかりかけてきていた。突然ひどく暑いように感じた。暑く、じっとりしてきた。
「そう？」アレクサンドラはしらばっくれた顔でたずねて、シェイクの自己欺瞞のむなしいところみが一瞬成功しかけたかに思わせた。
「おれに」シェイクはゆっくりと言った。「ジーナをきみに引き渡せと言うんだな」
「そうなの？」アレクサンドラのグレーの瞳がきらめいた。
ディクランがシェイクのお茶を持ってもどってきた。シェイクの前に受け皿とカップを置き、いくつか離れたテーブルに歩いていくと、苦い顔をしてすわった。
シェイクはカップの取っ手を二時から三時方向に向けた。さらに三時から四時、四時から五時に。
立ちあがってさよならと言い、歩み去れ。そしてどうにかうまくいくように祈るんだ。そう自分に言い聞かせた。
このまますわってろ。口をつぐんでよく考えるんだ。そう自分に言い聞かせた。
カードゲームと同じように人生においても、いつだって賢いプレイがあり、いつだってとんまなプレイがあるものだ。そしてその中間というものはないんだ。そう自分に言い聞かせた。

立ちあがった。それから、また腰を下ろした。
「でも、どうして――」言いかけた。
アレクサンドラは慰めるように、シェイクの手の上に手を置いた。「お茶を飲みなさい、シェイク」そう言った。「交渉はランチのときにすればいいわ」
パナマ・シティに飛行機でもどってきたときには、六時半近くになっていた。ジーグラーは運転手にホテルまで送らせようとジーナに申し出た。
「ひとりで大丈夫よ」ジーナは言った。
「本当かい？」
「やっておきたい用事もひとつふたつあるしね」
ジーグラーは昨夜したように、ジーナの手にキスをした。
「わたしの提案について考えてくれるかな？」
「あたしはいつだって、あらゆる提案を考えるわ」ジーナはおふざけはいっさいなしで答えた。
そして背を向けようとしたが、生っ白男はまだ手を離さなかった。
「あいつと知り合ってどれぐらいになる？」ジーグラーは訊いた。「あのシェイクってやつと？」
「じゅうぶん長いわよ」
「やつがきみを切り捨てようとしないと確信できるほど長いのか？」

ジーナは肩をすくめた。「彼はやるかもしれないわね」
「だがきみは、そうなることを見越すくらい自分が賢いと思っている、そうだろう？」
ジーナはうなずきかけたが、それからちょっと考えてみて、うなずくのをやめた。
「ひとりで大丈夫よ」ジーナは言った。「今日はすてきな一日をありがとう」
「わたしは本気なんだ、ジーナ」ジーグラーは言った。「これがうまくいったら、わたしと一緒にあの島にもどってほしい。人生をよく生きる方法を教えてやろう」
「あたしが習う必要があると思ってるの？」
ジーグラーはくっくっと笑ったが、何も言わなかった。シェイクだったら、こう言っただろうと、ジーナは想像した。――「いいや、だがきみなら練習して生かせるだろう」――よけいに手にはいる二百万ドルってどんな感じだろう？　よけいに手にはいる二百万ドルって、すっごく愛に満ちている、そうじゃない？
「また明日ね」ジーナは言った。
リムジンの色づけされた窓が音もなく上がっていく。半分ほど上がったとき、ジーナは身をかがめ、すばやくチュッと音をたててキスした。ジーグラーの口がある場所のガラスに。それから、ジーグラーが何か言うより先にくるりと踵を返し、タクシー乗り場に向かった。

43

ジーナがホテルにもどってきたのは八時すぎだった。シェイクはベッドに横になり、スペイン語の料理番組を見ていた。
「今日は楽しかったかい？」
「楽しかったわ」ジーナは言った。「シュノーケリングに行って、イトマキエイを見たわ」
「ナマケモノじゃなしに？」
「ナマケモノが水中に住んでるなんて思ってやしないわよ、カボチャちゃん」
シェイクはにっこりした。
ジーナは彼のそばに行き、キスした。「そっちはどうだった？」
「ミラフローレス閘門に行ったよ。運河がどういう働きをするか、すべてわかったよ」
「おもしろかった？」
「おもしろかった」シェイクは言った。
それから、ジーナにキスを返した。「明日は大仕事になるぞ」

CamScannerでスキャン

「部屋から出ずにルームサービスを頼んでいい？　あたしはもうくたくたよ」
「おれもだ」シェイクは言った。「早めに寝るとしよう」
ジーナは彼の目をのぞきこんだ。シェイクは彼女の目をのぞきこんだ。
「きみがいい一日を過ごせてよかったよ」シェイクは言った。
「そっちもね」ジーナは言った。

44

テッド・ボックスマンが〝踏んだり蹴ったり〟という言いまわしの意味を完全に理解できたのは、読んでいたペーパーバックの最後にたどりついたときだった。それはホラー小説で、ホテルのギフトショップで売っていた、英語で書かれた数少ない本のひとつだった。メキシコを旅行しているアメリカ人観光客の若者たちのグループが、残虐非道な巨大な熱帯性の吸血蔦がはびこる丘に囚われたという話だった。話は先の予測がつかず、どんどん恐ろしく、はらはらさせる展開になっていき、テッドは好奇心とつのりくる恐怖に駆られて次から次へとページをめくっていった。そして本の最後にたどりついたとき、ラストの三章が落丁になっていることを知ったのだった。

もちろん、ホテルのギフトショップには、同じ本はもうなかった。

これは踏まれた傷のようなものだ。テッドの傷は比喩的なものであると同時に、まったく比喩でない部分もあった。比喩的な傷という面では、彼はこの二日間、パナマ・シティに囚われていた。合衆国に帰るフライトがすべて予約で満杯だったからだ。明後日まで、乗れそうな便

はまったくなかった。そのあいだずっとホテルの部屋に閉じこもっていたのは、お金がなかったから（本代と食事代は部屋代につけてもらっていた）で、シティバンクが約束してくれた、盗まれたクレジットカードの代替カードは、当然ながら二十四時間以内に届くことはない。とはいえ、ホテルの部屋から出たかったというわけではない。世話役のフランクや、〈ビルディング・ブリッジズ〉のほかの男たちみな（現在は階下の宴会場のひとつで開かれている〈第四日めのハッピータイム〉合コンを楽しんでいる）にはうとましがられていた。どうやら最初の晩の〝デート〟相手のネルリデスが〈ビルディング・ブリッジズ〉に正式に苦情を申し立ててきたらしい。

　このことがグループ全員によくない影響をもたらした、とフランクはテッドに言った。ひとつには、女の子相手にちょっとばかり強引にすぎた――それもまた、伝統的な求愛行動過程のひとつには変わりないんだが――ともあれ、〈ビルディング・ブリッジズ〉の客がレストランの支払いをごまかそうとしたとなると……まあ、そのせいで全員が貧乏でせっぱつまっている負け犬に見えてしまうんだよ、まあ実際には断じてそうではないんだが。

「いいや、あんたたちは全員、完全に負け犬だよ」テッドはそう言った。それはおそらくは言うべきではない意見だったかもしれないが、そのときのテッドは本当に怒っていたし、比喩でないほうの傷（身体を見下ろしてみろ）がまだずきずきと痛んでいた。

　フランクはテッドを〝シケたろくでなし野郎〟呼ばわりし、今後〈ビルディング・ブリッジズ〉のパナマ・シティでのイベントいっさいに出入り禁止を言い渡した。テッドがすでに百

パーセント返金不可の預り金を全額払っていることや、たとえ——これこそまさに皮肉と言えよう——テッドの崇拝するヒーロー級ジャズピアニスト、セロニアス・モンク本人が死からよみがえってきて未明まで踊り騒いでいたとしても、テッドは〈ビルディング・ブリッジズ〉のイベントに参加するつもりがないことにもおかまいなしに。

比喩でないほうの傷は、最初の夜に路上で強奪にあったときに負わされたものだった。人けのない通りでからんできた若い男たちは財布を出せとテッドに要求した。財布はすでに盗まれたとテッドは説明した。この情報は、中くらいの背の男、ナイフを持っていて英語をしゃべれる唯一の男によってほかのふたりに翻訳されたが、懐疑の目で迎えられた。スペイン語が理解できなくても、それはテッドにもわかった。強盗たちのあいだで、早口のスペイン語で短い討議がおこなわれた。それから、背の低い強盗が背の高い強盗に向かって何か言い、テッドを指さした。

「コイツ、アンタのボディチェックしたくない」中くらいの背の男が親切に説明してくれた。何を言われたのか、背の高い強盗はこの発言でかんかんに怒ったようだった。

「コイツ、アンタの尻にさわりたくない」

言うまでもなく、テッドもどちらもされたくなかった。望みがわいてきた。背の低い強盗のスペイン語はひどく早口で、怒りくるっていたが、背の高い強盗は〝尻にさわりたくない〟方針のおかげで動こうとしなかったからだ。だがそれから、背の低い強盗が代案と思われることを提案し——テッドには不吉なものに思えた——背の高い強盗は肩をすくめた。

「ズボンを脱げ」中くらいの背の強盗がテッドに指示した。

るように思えた。まさかナイフを投げてきたりはしないだろう。たしかにナイフを投げてはこなかったが、彼らはほとんどいっぱいに中身のはいったビールの缶を投げつけることはできた。そして覚えているだろうか、ここは〈ニューヨーク・ヤンキース〉の抑え投手、マリアーノ・リベラ、何シーズンか前にテッドの空想上の野球リーグでテッドを勝利に導いてくれたスーパースター投手を生み出した国なのだ。テッドは肩越しに振り返り、強盗たちがナイフを投げてくるかどうか見きわめようとした。その瞬間、ほとんど満杯のビール缶が命中したのだ。まっこうからひたいに。テッドはよろめいて壁に激突した。ビールが顔を流れ落ち、目に刺すような痛みが走った。ビールだけじゃない――テッドは気づいた――血もまじっていた。

あとでわかったのだが、ひたいの傷は小さな切り傷にすぎなかった。縫う必要もなかった。だがあのときは、そんなことはわかっていなかったのだ。そしてもっと大事なのは、強盗たちもそれを知らなかったということだ。テッドの顔が血だらけになり、顎から血が滴り落ちるのを見て、強盗たちはあわてふためいた。テッドのまわりに集まり、取り乱したようすでわび言葉を浴びせた。スペイン語と英語の両方で。中くらいの背の強盗はナイフをしまい、なぜだか知らないが、テッドにガムを差し出した。テッドは、なぜだか知らないが、そのガムを受け取った。それから強盗たちは走りだし、夜闇のなかに消えていった。

この一日でテッドの身に起きたことで、それがいちばんいいことだった。ひたいにビール缶が命中したことが。そういう一日のしめくくりとしてはなかなかのものだった。

テッドはテレビをつけ、それから消した。本を読み終われないせいで、気がくるいそうになっていた。吸血蔦がはびこる山の斜面でろくな終わり方にはならないと、ほぼ確信できていたが、問題は〝何が起きるか〟ではなく、〝どういうふうに起きるか〟なのだ。それがよい本をよい本たらしめるのだ。

テッドは階段を下りていった。宴会場の扉をいくつか通りすぎていかなければならなかった。世話役のフランクやジョージ・パートルや、神よ助けたまえ、ネルリデスなどと顔を合わせはしまいかと恐ろしかったが、宴会場の扉はどれも閉じていた。扉の向こうから笑い声と、八〇年代のひどいポップ・ロックのくぐもった重低音のビートが漏れ聞こえた。テッドは急ぎ足でフロントデスクに向かった。フロント係は、はい、英語の本を売っている書店を知っていますよ、と答えた。それから、いいえ、遠くはないですよ、歩いていけます。歩いていっても危険はありませんよ。

「本当かい?」テッドはたずねた。

「本当です」フロント係は言った。「大丈夫です」

テッドには、熱帯性の吸血蔦の本をもう一冊買うようなお金はなかったが、対策はすでに考えてあった。本を買うつもりはなかった。棚の前に立ち、ラストの三章を読めばいいのだ。ヘン!

彼は意気揚々とホテルを出た。言われたとおり、歩いても遠くはなく、道中危険な目にも遭わなかった。書店は明るくて風通しのいい、快適な店で、併設している小さなカフェは表の歩

道にまで張り出していた。英語の本のコーナーはそのカフェの横にあり、そこそこの大きさだった。テッドはそこの書棚に目を走らせ、吸血蔦の本を探した。絶対にここにあるとわかっていた。世界的なベストセラーだったからだ。ホテルのギフトショップで売っているんだから、絶対にここにあるはず——

ここにはなかった。もう一度、探し直した。万一、不注意な立ち読み客が別の場所に置いた可能性を考えて、棚の上半分を調べ、下半分を調べた。同じ著者の別の小説はあったが、それはすでに読んでいた。そっちの本は六冊も置いてあった。

踏んだり蹴ったりの上にまた蹴られたじゃないか。テッドは顔をしかめてそう考えた。ただ自己憐憫に浸っているだけだとわかってはいたが。

帰ろうとして背を向けた。そのときに、カフェのテーブル席のひとつにすわり、本を読んでいる魅力的なパナマ人女性に目がとまった。やさしげで知的な茶色の目をした女性で、コルク抜きのようにくるくるねじった髪を四方八方に突き立たせている頭が魅力的だ。褐色の腕にはどちらも十本あまりのブレスレットをつけ、スペイン語に翻訳されたフラナリー・オコナーの本を読んでいる。

テッドは大学時代にフラナリー・オコナーの小説を好きだったことを思い出した。そしてその女性の肘のところに積まれた本に目を向けた。フラナリー・オコナーの同じ小説の英語版があり、その下に——

『なんてこった！』探していたあの吸血蔦小説じゃないか！　それも英語の！

テッドは迷ったあげくに、その女性のテーブルに歩いていった。彼女が目を上げてこちらを見たときにまたもや迷ったが、彼女の知的な茶色い瞳がひどくやさしげで、好奇心に満ちているように見えた――訊いてみたところで何の害がある？　この窮状を説明すれば、きっと彼女は音楽を思わせる声で笑うだろう。喜んで本を見せてくれ、ラスト三章をすばやく流し読みさせてくれるだろう。

「すみません」テッドは言った。「こんなことを言うと本当に頭がおかしいと思われるかもしれませんが、ちょっとお願いをきいてくれないでしょうか？」

女性は眉をひそめた。その目はもはややさしげには見えなかった。彼女はため息をつき、ひどく迷惑しているという顔を見せた。

「とっとと」彼女は言った。「失せろ」

テッドは驚愕してあとずさり、椅子に強くぶつかった。そして思わず、腰を下ろしていた。

彼女はこれを見て、テッドがとっとと失せるどころかその逆のことをしていると誤解し、威嚇のようなうなり声を漏らした。

「とっとと失せろって言ったのよ」女はうなった。それから本をかき集めて立ちあがり、レジカウンターに歩いていった。たくさんのブレスレットをじゃらじゃら鳴らしながら。

ここ数日のマリアナの人生は、次から次へといらつくことの連続だった。

まずは仕事だ。ボスだ。コルネーホはこの二日というもの、妙な時間にしきりに店に出入り

していた。〝極秘の仕事〟ということだった。それが何なのかは知らないが、そのせいで、彼女は昨日も遅くまでずっと働かなくてはならず、今日もランチをとる時間もなかったのだ。

次に、アパート。大家だ。たかが二、三週間妹を泊めるだけで契約条項に違反すると主張するのだ。この条項違反をたてにとって、大家はマリアナのひどく水漏れする冷蔵庫の修理を拒んでいた。

それから、家族。マリアナの妹だ。数日前に青天の霹靂のように突然あらわれ、好きなだけマリアナの部屋に泊まれると思っているようだ。同じことを、母親も父親もふたりの祖母も、四人の兄弟も思っているようだった。四人とも――兄弟のことだ――もっと広さに余裕があるアパートやら家やらに住んでいる。帳簿係という申し分のない仕事を特に明白で理にかなっている理由もなしにあっさり辞めるという無責任な決意をした、怠け者で散らかし屋で無責任な妹を泊めることができるはずなのだ。

そして今、このありさまだ。

マリアナはうんざりしてホテルの宴会場を見まわした。アメリカ人の男たちは――主よ、お許しください、でもほかの言葉はありません――気色悪い。流し目を使い、身繕いに余念がなく、体毛もなくて太っていて、ほとんどはマリアナの父親くらいの歳だ。たがいに陰険な目つきでひそひそと話しあい、気に入った女に目をつけると、紫色の小さな舌で貪欲そうに唇を湿らせる。

この会合にやってきてものの三十秒で、このイベントはこの上なく露骨に欺瞞的な建前のも

とに開催されたものだということに気づいていた。
『おまえはそんなばかじゃないはずだよ』もし母親がこれを見たら、そううなるだろう。
そうよ、あたしはそんなばかじゃないはずだった。マリアナは縮みあがりながら、認めた。でもこの人生に、そしてこの地にいる男たち――だいたいがラテン系の男たち――にも、うんざりしていたのだ。一方〈ビルディング・ブリッジズ〉のウェブサイトは非常にスマートで、非常にプロっぽくできていた。これに乗っかって何が悪いわけ？　マリアナはそう考えたのだ。ちょっとしたおふざけ、英語力を磨く絶好のチャンスだと考えたのだ。この午後の会合で、もしそれ以上のものが得られるなら……そう、そうなったらそれは――ちょっと考えて、適した英語の口語を思い出す――それはたなぼたってことよ。
同じテーブルにいるほかの女たちのうちふたりは、明らかにコロン（パナマ第二の都市）から来た売春婦だった。もうひとりは美人だがひどくやせこけた若いコロンビア人の少女で、どう見ても十六歳を越してはおらず、スペイン語もろくにしゃべれない。少女はテーブルに置かれたナッツを全部ひとりで食べ、それからもっとないかとあたりを見まわしていた。
マリアナはそのコロンビア人少女に十ドル札をそっと握らせ、できるだけ早く、ここから逃げるようにと言った。少女は意味が理解できないという顔で、マリアナをぽかんと見つめた。
マリアナはため息をつき、戸口に向かった。
「どこへ行くんだい、お嬢ちゃん？」植毛した髪の毛がひどく歪んでいる男が言った。マリアナは首を振って、男を迂回しようとした。男はふたたび彼女の前に立ちはだかり、それから笑

い声をあげて、ふたりでダンスをしているかのように腰をまわしてみせた。マリアナは男の胸骨をにらんで穴をあけんばかりの形相でじっと待った。やがて男は興味を失い、ふらふらと離れていった。

絶対に、絶対にこんなところを母親に見られませんように。この午後のことは墓場まで持っていこうと、マリアナは誓った。この午後と、ここで起きたすべてを。

ホテルを出て、ウルグアイ通りのはずれに新しくできた書店に歩いていった。カフェが併設されたその書店は期待どおりに静かで、本の紙がこすれる音も、コーヒーの香りも、木の床のきしみも心をなだめてくれた。買いたい本を何冊か選び、腰を落ち着けて読みはじめた。ようやくくつろいだ気分になり、心の平穏が少しずつもどってきたと思えたそのときに、そのアメリカ人が近寄ってきた。

「すみません」その男は言った。マリアナは警戒して目を上げた。あのホテルにいたアメリカ人のひとりがここまであとをつけてきたのだろうか？　どうして？「ちょっとお願いをきいてくれないでしょうか？」

アメリカ人はひたいに大きめのばんそうこうを貼っており、その中央に湿ったピンク色のしみがにじんでいた。そのばんそうこうの下に何があるのか想像したくなかった。なぜそうなっているのかも。

『気色悪い』

「とっとと失せろ！」彼女はばんそうこう男に言い、できるかぎりのすばやさで本を集めた。

テッドは呆然として、ブレスレットをいっぱいつけてコルク抜きみたいな髪を四方八方に突き立てた女性が荒々しく去っていくのを見つめた。それから、自分が何をしているかを理解するより先に、立ちあがってどたどたと彼女を追いかけた。

顔が真っ赤になり、ひたいの傷がずきずき脈打つのが感じられた。『いったいぼくは何をしてるんだ？』驚きながら考えた。自分が何をしているのか、ま
っ
た
くわからなかった！　まるで――まるで幽体離脱体験をしているようだった。ただし、彼は目下、肉体のなかにしっかりととどまっていた。しっかりと確実に。彼の身体はテッドからの入力はまったくないまま、猛スピードで、ブレスレットをいっぱいつけた女性に向かって突き進んでいた。

女性はレジの前に並び、本の代金を払う順番がくるのを待っていた。テッドを見た彼女の目には、テッドの魂から決意を一滴も余すことなく灼き尽くしてしまえそうな獰猛さが浮かんでいた。だが、奇妙なことに、そうはならなかった。そもそもそこには決意などまったくなかったのだから。

「あらゆる聖なるものにかけて」彼女は言った。「あたしをそっとしておいてくれなかったら、四人の兄弟に言って――」

「頼むからいの一秒だけ待ってくれ、お願いだ」テッドは言った。思っていた以上に力強い声が出ていた。女性の顔に浮かんだ驚きの表情から、それがわかった。「きみがなぜそんな無礼な態度をとるのかわからないし、たぶんぼくの知ったこっちゃないんだろうけど、ぼくはただ

きみに礼儀正しく問いかけたってことをわかってもらいたいだけで、ぼくは本当はものすごく礼儀正しい人間なんだ、本当に世界じゅうがもっと、おしなべて礼儀正しくていねいな場所になりますようにと願っている人間のひとりなんだ、そもそも最初に話しかけようかよくよく考えたんだ、だってきみの邪魔をしたくなかったから、本当にナンパしようなんて下心はなかったんだ、でも声をかけた、たしかにそれは間違いだったかもしれない、けどだからといってあんなに邪険にされるほどのことでもないはずだ、それにきみだってただこう言えばよかったんだ、ただこう言うだけでよかったはずだ、わかるだろう、『ごめんなさい、今読書中なんです』って、それならこっちだってこう言ったんだ、まさしくこうだ、『お邪魔をしてすみませんでした』って、そしてきみを置いて立ち去っただろう、それ以上何も言わずにね、そしてきみだってきみの四人の兄弟を使って、何だか知らないけどぼくにさせたかったことをさせる必要もなかったんだ、それって——言わせてもらえるか？——ぼくは心から恐ろしくないってわけじゃないけど、この数日間にぼくに起きたいろんなことを考えると、まあきみにはまったく想像もつかないだろうけど」

テッドはしゃべりつづけた。止めようと考える前に言葉が次々と迸り出ていた。財布が盗まれたことや、そもそもどうして説得されて、このとんでもなく愚かで屈辱的な〈ビルディング・ブリッジズ〉ツアーに参加することになったのかや、男にせよ女にせよ正気の大会企画者ならカンザス・シティやサンアントニオをさしおいてオクラホマ・シティを選んだりするはずがないことや、みすぼらしいレストランに閉じこめられてみすぼらしい食事には不釣合いな高

額の請求をされたことや、そのあと強盗に遭ってほとんど満杯のビール缶をひたいにぶつけられたことや、どうしてお金がないのかや、せっかく買った吸血鬼小説の最後の三章がついていなかったことや、それが絶対にすがりつきたい最後の一本の藁だったことや、声をかける前に今から言うことで彼女の気分を害するのではなかろうかと申し訳なく思ったが、それをしなければ心からパナマを嫌いになりそうだと思ったこと等々。ヴィヴィアンにこっぴどくふられたものの、その喪失感の崖の縁で両足のかかとを踏ん張って、かろうじて滑落を免れていることまで、ほとんどしゃべっていた。

女性は、もはやテッドのひたいのばんそうこうを見つめてはいなかった。ようやく本当にテッドを見ているようだった。彼の目を、ひたい以外の彼の顔を。

そこに見つけたものに、彼女はちょっと驚いたようだった。

「さっきの表現は何なの？」彼女は訊いた。『いいの一秒だけ待ってくれ』っていうのは？」

テッドは大きく息を吸いこまなければならなかった。心底疲れきっていた。

「〝いの〟っていうのは一種の強調みたいなものかな、たぶん」テッドは言った。「汚い言葉のかわりに使ったんだ」

「そのかわりに汚い言葉を使いたかったってこと？」

「ああ」テッドは認めた。「そうだ」

「でもあなたは礼儀正しいからそれができなかった？」

「そろそろ帰るよ」テッドは言った。すっかり疲れきっていた。悲しいうえにきまりが悪かっ

た。ただもう家に帰り、もはやたいして好きとは言えない暮らしにもどりたかった。「邪魔をしてすまなかった」

テッドが驚いたことに、女性は笑いだした。音楽的な声とは言えなかった——どちらかというとクラクションのような鼻声だった——が、不愉快なものではなかった。

「パナマを嫌いにならないで」彼女は言った。「パナマに来た誰もがいの一番にひどい日を過ごすことだってあると思うわ」

45

目を覚ますと九時をちょっとすぎていた。つまり、タボガ島でジーグラーと会うまで残り十二時間ということだ。

「ちょっと下見をしておきたくないか?」シェイクはジーナに訊いた。

ジーナはうなずいた。「あたしの心が読めるのね」

ふたりは包皮をホテルの金庫に残したまま、すりきれたような小さなフェリーに乗ってタボガ島に渡った。フェリーは植民地時代からずっと働いているように見えた。太平洋はガラスのように平らに凪いでいたが、ポルトベロあたりのカリブ海に比べると青緑色がちょっと濃く深かった。手すりのそばに立って潮風を顔に受けながら、シェイクは直感した。こっちの水のほうがきっと冷たい——どちらの海にもつま先を浸したことすらないのだが。

フェリーにはほかに数人乗っているだけだった。このことについてシェイクが訊ねると、潮焼けした老人が、タボガ島は主に週末にパナマ・シティからの日帰り客でにぎわう行楽地だと教えてくれた。ウィークデイのあいだは、この島は眠っている。そう老人は言った。シェイク

は——下見中——このことを記憶に留めた。

フェリーの船着き場は、人けのないホテルと砂のビーチの向かい側にあった。丸石敷きの歩道が丘のまわりをまわるようにして、丘の上の中央広場に続いている。白塗り壁の石造りの教会の向かい側で、潮焼けした老人たちがのんびりとすわってチェスをしていた。いたるところに花が咲いている——勝手に生えている野生のものや、広場を縁取るように並んでいる古い建物の鉄製のバルコニーからあふれださんばかりに——ハイビスカスや西洋夾竹桃（オレアンダー）、百日紅（サルスベリ）などがあふれていた。この丘の上で陽射しを浴びていると、シェイクはシロップのようなねっとりした金色になっていくような気がした。

「ジーグラーはどうしてこの場所を選んだんだと思う?」ジーナが訊いた。

シェイクは首を振った。「わからんな」

今夜落ち合う予定の教会に歩いていき、扉をためしてみた。鍵がかかっていた。広場には、小さなレストランが一軒あった。白い長いエプロンをつけたウェイターが屋外席のテーブルのセッティングをはじめている。看板には、レストランは十時まで開いていると書いてあった。

シェイクは広場をつっきって反対端に向かった。そこからは見晴らしがきき、湾をわたってパナマ・シティにもどっていくフェリーが見えた。島の周囲四分の一ほどに、もっと小さい木の船着き場がずらりと並び、小さな釣り舟が何艘か、水面で浮き沈みしている。

「人目はあるが静かだ」シェイクは言った。「もしフェリーに乗り損ねたり、ジーグラーがフェリーで何かあやしいことをしようとしたら、釣り舟を雇えばいい。街から離れてはいるが、

神経をとがらせるほどじゃない。ジーグラーも、おれたちが下見にくることは承知しているはずだ」
「大丈夫そうってこと?」
「ああ」シェイクは言った。それが悩ましいところだった。
ジーナはチェスの勝負をしているひと組のところに歩いていった。チェス盤をじっと見ながら、すぐ横にいた老人の肩に手をかけた。きわめて親しみやすく、いかにも何げない仕草だ。ジーナ本人は自分がそれをしたことに気づいているのだろうかと、シェイクは考えた。そしてまさにこのとき、気づいた。これまでにこの娘に恋してしまうという危険に陥っていなかったとしても、今そうなっている。
しかもまさにそうなっているのだ、ちがうか? 危険に陥っている。
ほんの一秒、真剣に考えろと、自分に言い聞かせる。おまえは四十二歳だぞ、十七歳じゃないんだ。だいたい、ジーナみたいな娘と一緒に暮らすなんて、いったいどうなると思うんだ?
ジーナがぶらぶらともどってきた。
「チェスを習いたいわ」ジーナは言った。
「神よ、世界を助けたまえ」
「ジーグラーはあたしたちをだまそうとしてると思う?」ジーナが訊いた。
「五分五分だな」
「彼が申し出た値段は、包皮の価値よりはるかに高額よ」

「彼ほどの大金持ちになると、八百万ドルなんて誤差みたいなものなんだろう。どうして裏切ったりするようなめんどうを起こしたがるっていうんだ?」

「でも自尊心の問題があるかも」

「一方ではな。そうかもな」ふたりがここに来てからの十分から十五分のあいだにはじめて、潮焼けした老人チェスプレーヤーのひとりが駒をひとつ動かした。「それにやつはゲームをするのが好きだということがわかっている」

「それで?」

「こっちが人目につくようにしているかぎり、大丈夫だと思う」自分たちが大丈夫でいられる見込みを――せめてわずかでも――大きくしてくれそうなもうひとつの要因については、シェイクは言わなかった。ディクランから取り上げたグロック19、それがシェイクが持っている革製のデイパックの底に隠してあった。ジーナが、タボガ島のビーチがよさげだったときのために、タオルと日焼け止めを持っていこうと言ったのだ。

ここで、ひとつの疑問がわいてくる。なぜシェイクはタオルの下に銃を隠したのか? なぜジーナに銃のことを話さなかったのか? なぜジーナに、レクシーと会ったことや、彼女が提案した取り引きのことを話さなかったのか?

疑問は三つだ、とシェイクは気づいた。そのどれにも、答えが出なかった。少なくとも、自分で認めたいと思う答えは。

「驚きだよ」シェイクは何げなさそうに言った。「ジーグラーがおれたちの片方だけと取り引

きしようとしなかったっていうのは」
「あたしたちがおたがいすっごく好きあってるって、彼にもわかってるのよ」ジーナは一拍もはずさずに言った。彼女は絶対にへまはしない。彼女はシェイクの肩に、愛情たっぷりに肩をぶつけてきた。「そろそろランチにしない？」

一時をちょっとまわっていたが、広場のレストランの客はシェイクとジーナだけだった。エプロンをつけたウェイターが運んできたのは、尾頭つきでまるごとシンプルに揚げただけなのにおいしいコルビーナにココナツ入り炊きこみご飯（アロス・コン・ココ）を添えたものと、キンキンに冷えた地ビール〈アトラス〉のボトル二本だった。
灼けつくような陽射しを浴びて眠気を誘う広場（プラザ）、いたるところに花が咲いている。花の香と太平洋の匂い。潮の香はカリブ海の匂いと微妙にちがっていた。こちらのほうがさわやかですがすがしく、ちょっと騒がしい。料理とワイン、向かい側にはジーナ。
シェイクがそう言おうとしたとき、ジーナが機先を制した。
「こういうのっていいわね」ジーナはプラザを見渡しながら言った。「こういうのが、あたしが送るべき暮らしだったのかもしれない」
「最終的な暮らしじゃなくて？」
ジーナは首を振って、微笑んだ。「司令部で取りちがえが起きたのよ。あたしが生まれたときに」

「発送用書類を入れる箱に社内ファイルがまぎれこんだとか」
「わかるの？」
「ああ」
シェイクはビールを飲み干しながら、じっと彼女を見つめた。
ジーナがこちらを向き、彼の視線を捉えた。「何？」
「見極められないいんだ」シェイクは言った。「きみが悪くなったいい子なのか、よくなった悪い子なのか、それとも……」
「ただの悪い子なのか？」
「そういうことを言いたいわけじゃない」
「警告はもうしたわよ、スウィーティ」
「知ってる」シェイクは言った。「黄金の心なんてありはしない」
ジーナの表情がいつになくまじめになった。ほとんど憂愁と言えるくらいに。
「問題は、あたしは誰かってこと」ジーナは言った。「ときどき……」
「何だ？」
「わからない。自由意志ってものがあるとして、それがただの幻想だったら？ ギリシャの神々とか何かがあるみたいなことを言ってるんじゃないの。でも生まれた環境や、育った環境があるとして、自分の身の上がどういうものか気づくころには、もうすでにすべて決まってるのよ。全部決まってるの。自分で選択をしていると思っても、本当はそうじゃない。頭のいい

人っていうのはそれに気づく人よ。自分はすでにこうなってて、何をしたってそれを変えることはできないって。たとえ……」
「たとえ？」シェイクは訊いた。
「たとえ、ときどき変えることができたらと願っても」
シェイクはそれについて考えた。「もしかしたら、願うことがはじまりかもしれない」そう言った。
「そういうふうになると思う？」
「確率はどれぐらいかな？」
ふたりは微笑みあった。長いひとときが流れた——灼けつくような陽射しを浴びた物憂げな、花の香りのするそのひとときを、シェイクは終わらせたくなかった。というより、もし時間がすぎていかなければならないのなら、ジーナの手を取ってそれを、このひとときを追っていきたかった。花の香りのする泡に包まれて守られながら。このひとときがどこに向かうものであろうと、現在を——それとも未来だろうか？——永遠にうしろに置き去りにして。
「自然が呼んでるわ」ジーナが言った。「競走馬なみに大量のおしっこをしたくなったときのお上品な言い方ってそれだったわよね」立ちあがる。「あっという間にもどってくるわ」
ジーナがレストランにはいっていくのをシェイクは見守った。広場でチェスをしている老人たちのうちのひと組が、やけに熱心に勝負にのめりこんでいることにシェイクは気づいた。そのふたりは盤上に深く身を乗り出し、頭と頭がほとんどくっつきそうになっている。

シェイクはジーナのビールに目をやった。行動の道徳的意味合いをちょっと考え、それから彼女の代わりにビールを飲み干した。

腕時計を見る。時間はたっぷりある。本土へのフェリーに乗って、ちょっと昼寝をし、ホテルの金庫から包皮を回収しても余裕で九時より前にこの島にもどってこられる。ジーグラーが早めにあらわれることは確信できていた。シェイクはそれよりかなり先にここに着いておきたかった。

ジーグラーには現金をかき集める時間など必要ない。ジーグラーはなぜ嘘をついたのだろう。またもや、シェイクは考えた。ジーグラーはなぜ、必要もないのにまる一日取り引きを遅らせたのだろう。

いくつかの理由が考えられた。そのどれもが、気に入らなかった。

ジーナのバッグは椅子の上にあった。これ見よがしに椅子の上に残されている。まるで、トイレからもどってくるつもりだとシェイクに明言しているかのように。

シェイクはもう一度、腕時計を見た。

長いエプロンをつけたウェイターが近寄ってきた。「コーヒーはいかがですか？　奥様（セニョーラ）も？」

シェイクはため息をついた。

「セニョーラはもどってこないよ」シェイクは言った。

46

しらふだったとき、平日にしらふで、そのうえ何かにひどく腹をたてたとき、ジーナの母親はジーナのお尻をよくぶったたいた。目から火花が飛ぶようなぶったたきかたで。ジーナは高校に上がったときに、それをジョークにしてみんなにしゃべった──あたしの足が速いのは母親につかまらないようによく走って逃げてたおかげなのよ。

陸上競技部のほかの女子たち──ジーナ以外は全員黒人だったが、ジーナみたいな白人の子がそんなに速く走れることが信じられないようだった。だが彼女たちの多くが、ぶったたかれることについてはよく知っていたので、ジーナのジョークは大いにウケた。

それはまったくのジョークというわけでもなかった。こつは、ぶったたかれているときに、頭のなかで速く走ることだ。感じているひどい痛みよりも常に一歩先にいつづけることだ。どこかましなところにたどりつくまで、そのひどい痛みに追いつかせないことだ。そしてどこか、陽射しを浴びているところで、こう考える。「ふう、あれってあたしの身に振りかかってたことだったんだっけ？」まるで、昨夜は本当に恐ろしかったけれど、朝になってみたらばかげて

見える夢を見たみたいに。たとえば、アルミホイルに包まれたチワワに激しく吠えられていた、みたいな。

ジーナはボートから下りた。今現在、ひどい痛みを覚えていた。自分がシェイクに対していることで。でもね、お友だち、信じてちょうだい、あいつだってすごく速かったのよ。

ジーナは頭のなかでは、常に一歩先にいた。いつかそのうち、ときが来たら、ちょっとひと休みして、今感じているこのひどい痛みを追いつかせてあげよう——六百万ドルの金持ちになって、どこか遠い遠いところに向かう飛行機に乗ったら。ときが来たら、喜んで、今感じているこのひどい痛みをドバイのすてきなレストランでのディナーに連れていってあげよう。そして一緒に問題点を検討するとしよう。

大学に通っていた一年のあいだに、この哲学を完璧に集約しているワーズワースの言葉に出会った——『強い情念が〝静寂のなかで追想される〟ときに、もっともよく創造力が働く』

まさにそのとおり。恐れ入る。

ジーナはアマドール・コーズウェイでタクシーを拾い、ホテルにもどった。ロビーにはいっていく。例の眉毛の若い支配人補佐はコンピュータの上にかぶさるようにして仕事に励んでいて、ジーナには気づかなかった。ジーナはフロントデスクのベルを鳴らし、支配人補佐をびくっとさせた。とはいえ、どのぐらいがベルのせいで、どのぐらいがこのところしょっちゅう驚いているという現状のせいなのか、見極めるのはむずかしかった。

「ハーイ！」

「セニョーラ・ボックスマン」支配人補佐は警戒するように言った。
「こんにちは、キューティ・パイ」
「いかがいたし——」
「あたしのために金庫を開けてもらいたいの、お願い」
「は？ですが、セニョーラ——残念ながら——」支配人補佐は気を取り直し、くすくす笑ってみせた。「ご冗談ですね」彼は言った。「当然ですよね」
ジーナは前に身を乗り出した。「あたしはね」親しみをこめて、共犯どうしのひそひそ話のようにささやきかける。「生まれてこのかた、こんなに真剣なことってないわ」
支配人補佐はまたもやくすくす笑おうとした。が、悲惨な失敗に終わった。彼の頬に、かすかな薔薇色の発疹のようなものがあらわれた。この哀れな男が気の毒だと思わないでもなかったが、今はやさしくしているような時間はなかった。
ジーナは使いたくない笑みを選んだ。母親から受け継いだやつ、唇と歯で笑うがけっして目は笑っていない笑みを。
「金庫を開けてちょうだい」彼女は言った。
「おおせのとおりに」支配人補佐はかすれた声で言った。
シェイクにはひとつ有利な点があった。ジーナがどこに向かったか、わかっていた。革製のデイパックからディクランのグロックを取り出して、ズボンのウエストバンドにさし、小走り

に丘を下って島の遠い方の側にある船着き場に向かった。次のフェリーの出発は二十分後で、つまりジーナは個人所有の釣り舟を雇って本土にもどったことになる。シェイクも同じことを計画していた。

だがむろん――これも予期しておくべきだった――ジーナはほかの漁師全員にお金を払っていた。釣り舟は一艘も見当たらなかった。

『きみはチェスの指し方を知ってるんだよな？』頭のなかのジーナに問いかける。頭のなかのジーナはただ微笑み返し、人差し指を唇にあてる。『しぃぃぃっ』

シェイクは小走りにフェリー乗り場に向かった。まだ時間はじゅうぶんにある。このフェリーがパナマ・シティの船着き場に着いた時点でジーナに四十分ほど遅れをとることになると計算した。その半分は、ホテルまで自分に運転させろとタクシー運転手を説得できれば――金か銃かその両方かで――差を縮めることができる。残りの半分は……まあ、自分の側にささやかな幸運が働くことを願うのみだ。ホテルの支配人補佐、金庫の組み合わせ番号を知っているあの男が数分間、ジーナに対抗できる根性を持っていることを願うしかない。

彼がそれ以上長くジーナに抵抗できるようにと願うようなことはしなかった。できるはずがないからだ。

シェイクはフェリー乗り場に近づいた。フェリーのエンジンはすでにかかっているが、渡り板はまだ渡されている。そこに向かおうとしたとき、背後から誰かが近づいてくるのが感じられた。腰のうしろのくぼみに何かが突きつけられるのを感じた。

「筋肉ひとつ動かしてみろ、おまえは死ぬぞ」声が言った。

シェイクはすべての筋肉の動きを止めた。声の主をつきとめようとした。

「マーヴィンか？」とうとう言った。驚いていた。肩越しにゆっくりと目を動かす。そのとおりだった。シェイクの背中に、ウインドブレーカーのポケットに入れた銃と思われるものを突きつけているのは、マーヴィン・オーツだった。目の飛び出した、ヴェガスの質店の所有者兼経営者だ。

「口を閉じて、おれの言うとおりにしろ」マーヴィンが命じた。

「こんなことをしてる時間はないんだ、マーヴィン」シェイクは冷静に、すばやく振り向いた。

「おい、動くなと言っ――」マーヴィンは口をつぐんだ。シェイクのグロックの銃口がひたいに押しつけられていることに気づいたからだ。「うお」

「指だろ？」シェイクが訊いた。

マーヴィンはうなずき、ウインドブレーカーのポケットから手を出した。

「あんたは銃を持ってないって、あの女は言ってたのに！」マーヴィンはすすり泣いた。

「あの女？」

「おれはただ、発見者報酬がほしいだけだ。十パーセント。でなきゃ十五」

「おまえはジーナと組んでるのか？」

「包皮はあんたが持ってるって言ってたぞ」

シェイクはじっと待った。マーヴィンの突き出た目がさらに大きくふくらんだ。

「あンの嘘つき！」

フェリーは船着き場から離れていた。マーヴィンを撃ちたいという考えに、シェイクはひどくそそられた。少なくとも、グロックの台尻でこいつをぶん殴ってやりたかった。が、シェイクかその誘惑に屈するより先に、汗まみれになって考えていたマーヴィンが声をあげた。「そうだ！」

「そうだ？」

「おれは知ってるぞ」マーヴィンが勝ち誇ったように宣言した。「あの女がどこにいるか」

「そんなはずはない」

「知ってるとも！　おれが包皮を手に入れたら、そこで落ち合おうと言われたんだ。旧市街のその場所で。まさにそこを知ってるぞ！　フランス広場、とかなんとかいうところだ。フランス人の男の像のところで。ジーグラーがそこに行くから、そこで金が手に入るんだ。そうなんだよ！」

宇宙は無限で、さまざまな可能性と変化に満ちていることを、シェイクはよく知っていた。たとえば、どこかのある惑星で、シェイクは自分のレストランを持ち、経営しているかもしれない。また別のどこかの惑星では、フェルディナン・ド・レセップスはパナマ地峡を貫通する海抜ゼロ運河の建設に成功しているかもしれない。だが宇宙のどんなに暗い辺境の片隅にも、ジーグラーと本当に落ち合う場所をマーヴィン・オーツに教えるほどとんまなジーナが存在するとは思えなかった。

マーヴィンがシェイクに多少の足止めをくわせることを、ジーナは確信していたはずだ。だが同時に、この男がそれほど長くシェイクを足止めできるはずはないことも確信していたはずだ。

そしてマーヴィンが即座に持てる情報をぶちまけることも確信していたはずだ。

そして――

シェイクはにんまりした。当然だ。

「で、おれたち、今からどうするんだ?」マーヴィンが熱のこもった口調で訊いた。

「おまえは」シェイクは言った。「その丘の上まで上っていけ。広場にレストランがある。そこですわってランチを食え。それからいいホテルを見つけてひと晩ぐっすり眠って、明朝フェリーで本土にもどれ」

マーヴィンはうなずき、このすべてを復唱しようとした。

「それから、飛行機で家に帰るんだ」

「家に帰る? 何でだ?」

「なぜなら、おまえが帰らないと」シェイクは説明した。「おれはおまえを追いかけて、砂利の詰まったソックスでぶん殴って本気で死なせてしまいそうだからだ」

マーヴィンは渋い顔になった。シェイクの手の銃を見る。

「銃を持ってるからってだけで、おれに指図できると思ってるんだろう」マーヴィンは言った。

「そのとおりだ」シェイクは言った。

マーヴィンは考えてみた。それからくるりと向きを変え、怒った足取りで丘を上りはじめた。

数秒後、足を止め、こちらを振り返った。

「せめておれの出費分を弁償してくれたっていいだろう」マーヴィンは言い、吸入器を口にあてた。「このとんまな旅のために二千ドル近くはたいてるんだから！」

シェイクは丘のてっぺんに向けて銃を振った。歩きつづけろ。

「小切手を郵送してやるよ」そう請け合った。

47

ジーナがジーグラーと落ち合う予定の銅像は、フランス広場の中央にあった。ジーナはすぐにそれを見つけた。大きな口ひげをつけた男の黒い胸像は、オベリスクと呼ばれるものに近い。その胸像をのせている石の円柱に、『フェルディナン・マリー・ド・レセップス』という名が彫りこまれていた。骨董品店のあの気さくな男が語ってくれた話にその名前が出ていたことを、ジーナは覚えていた。話のほとんどは覚えていない。フランス人と、パナマ運河になる前のパナマ運河がどうとかいう話だったが、ジーナはほとんど気を留めていなかった。その店のキュートなメキシコ娘（タマーリ）の店員をじっと見て、誰を思い出させるのか見つけようと懸命だったからだ。『マイネーム・イズ・アール』に出ていたラテン系の女優だったっけ？　まっすぐでなしに、栓抜きみたいに縮らせた髪の？

「さて、さて、さて」ジーグラーが言った。ジーナの背後から音もなく忍び寄ってきていた。彼はきっかり十分前に来ていた。太陽はちょうど沈みはじめたところだ。「きみの顔を見られて驚いたと言いたいところだが、驚いてはいないよ、ジーナ」

彼の言動は軽薄だった。そこがジーナをとまどわせた。「あたしたち、すでに話はついてたはずよね、ローランド」ジーナは言った。「取り引きをしよう、たしかそう言ったわよね？」

「持ってきたか？」

ジーナはバッグを振ってみせた——本物のバッグ、ホテルに置いてあったほうを。タボガ島でシェイクをだますために置いてきたのは、ダミーのバッグだった。

「そっちは？」

ジーグラーは手にしていた、小さなハード・スーツケースを持ち上げてみせた。彼がスーツケースを持ち歩いていても、それほどおかしくは見えなかった。人でいっぱいの混み合った広場では、もっと奇怪なものを持ち歩いている人々が大勢いる——たとえば、大きな陶製(セラミック)のヤギを持ち歩いている男だっている。

「取り引きを完成させるために」ジーグラーは言った。「ちょっとそこのわたしのオフィスに寄ってもらいたい」

すぐ近くのビルの戸口に向かって、うなずいてみせる。

「どうしてここじゃだめなの？」ジーナは訊いた。周囲に人が大勢いる場所のほうがよかった。警官みたいに見える男がそばにいる場所のほうが。

ジーグラーは腹だたしげに顔をしかめた。「人だらけの広場のど真ん中で、六百万ドルもの現金の引き渡しなんてやりたくないね」

「人だらけの広場の端っこに行けばいいじゃない」ジーナは提案した。

ジーグラーはじっと彼女を見た。「そっちで決めることだ」そう言った。

何を決めろと彼が言っているのか、ジーナはわかっていた。受け取るか、立ち去るか。ジーナは迷った。シェイクならどうするかわかっていたが、六百万ドルもの大金に背を向けて歩み去るつもりはなかった。

「いいわ」ジーナは言った。

生っ白男はきれいな歯並びを見せて笑った。「ついてきなさい」

ふたりは建物のなかにはいった。ジーグラーは鍵束を出して、通ってきたドアに鍵をかけようとした。ジーナはその手に自分の手を重ね、止めた。

「大丈夫よ」ジーナは言った。

ジーグラーは肩をすくめた。薄暗い照明しかない狭い廊下を通って、薄暗い照明しかない大きな部屋にはいった。部屋の中央に、パナマ運河のとても古い、巨大な縮小模型があった。

「うわあ」ジーナは言った。

「独立広場にある大博物館の改修をするあいだ、何点かをここに保存してあるんだ。警備員を配備して、ここにあるあいだも気持ちよくゆっくり昼寝(シエスタ)ができるようにしてある。われわれとわれわれの客人のことだよ、もちろん」

背後に誰かが立っていることに気づいて、ジーナのうなじの毛が立った。彼女は振り向いた。

「セニョール・コルネーホを覚えているだろう?」ジーグラーが言った。

骨董店の愛想のいい店主。コルネーホはお辞儀をした。ジーナは緊張を解いた。まったく、

すっかりびくついちゃったじゃないの。

「彼は商品を鑑定するために来たんだ」ジーグラーが言った。

「万が一、ごたごたが起きたときのために？」

「念の入れすぎということはないからな」

「先にこっちが六百万ドルの鑑定をするっていうのはどう？」ジーナは言った。

「それをするのはここじゃない」

ジーグラーはジーナとコルネーホを連れてパナマ運河の縮小模型のわきを通り、また別の廊下を進んでいき、階段を上がって、ひとまわり小さな石壁の部屋にはいっていった。フラシ天張りのソファが二脚置かれ、無数の蠟燭がともされている。

「すっごくロマンティックね」ジーナは言った。ジーグラーのこの蠟燭への執着ぶりはどうしたことだろう？　今にはじまったことではないが、こいつの生っ白い頭のネジは明らかに二本ほどはずれかけているにちがいない。

ジーグラーは広場を見晴らすバルコニーの前に行き、カーテンを開けた。とっぷりと日が暮れていたが、月はたとえようもなく美しく熟していた。

「これだけ超弩級の貴重な品の取り引きとなれば、適切な雰囲気と環境で行う必要がある」

ジーグラーは言った。「そう思わんかね？」

「あたしはそのスーツケースにはいってるものを見たいと思うわ」

ジーグラーはコーヒーテーブルの上にスーツケースを置き、開いた。

「数えたいかね？」

「そうね」ジーナは言った。

スーツケースの中には、百ドル札の束がぎっしり詰まっていた。これだけの額の現金が一ヶ所に集まっているのを見たら、きっと目をまわすだろうとジーナは思っていたが、そうはならなかった。彼女は冷静で、頭もはっきりしていた。適当な札束をひとつ取り上げ、ぱらぱらとめくる。ひと束一万。ずっと前に思える、モビーの札束と同じだ。ジーナは札束をもどし、さらにいくつかの束をめくってみた。

ジーグラーはいかにも芝居がかった忍耐を見せ、じっと待っていた。「で？」

「いいわ」

「包皮は？」ジーグラーが訊いた。

「一時間後に電話をして、どこにあるか教えてあげる」ジーナは言った。

ジーグラーはスーツケースのふたをぴしゃりと閉じた。危うくジーナの指をはさむところだった。

「果敢な試みだな」ジーグラーは言った。

「まさかひっかかるなんて思ってたわけじゃないわ」ジーナは言った。が、本当のところは、もしかしたらひっかかるかもしれないと思っていたのだ。

バッグを開け、ホテルの金庫から引き取ってきた詰め物入り封筒を取り出す。ジーグラーはコルネーホを指さした。ジーナはコルネーホに封筒を渡した。

コルネーホは詰め物入り封筒を開け、ひどく慎重な手つきで、包皮をおさめたガラスケースを出した。長い時間――ジーナが金を数えるのにかけた時間よりも長い時間をかけて、慎重に中身を吟味した。

「おお、これは」数秒ごとに、コルネーホは声をあげた。

ジーグラーは足先で細かく床をたたいていた。この男は本当は――ジーナにはわかっていた――忍耐強いタイプなどではないのだ。ジーナの考えでは、四十歳になるまでに二億ドルをかせげるような男は、忍耐強くある必要などないのだろう。

「裁定は?」ついに耐えきれなくなり、ジーグラーは言った。

「ああ」コルネーホはゆっくりと言った。「絶対と断言するためには、むろん、もっと時間をかけて広範に調べたいものですが、それでも――」

「本物か?」ジーグラーは言った。

「本物ですな」コルネーホは、ちょっとお辞儀をしながら断言した。

ジーグラーの喜びようは、ほとんど子どもじみていた。両手でガラスケースをつかみ、長いあいだ食い入るように包皮を見つめた。

「考えてもみろ」小声でささやいたが、みなまでは言わなかった。

ジーナとコルネーホはじっと待った。ジーナはちょっととまどい、ちょっと薄気味悪いと感じていた。コルネーホはただとまどっているようだった。それから、咳払いをした。

「セニョール・ジーグラー。そろそろ……」

「ああ、そうだな」ジーグラーは包皮から目を上げずに言った。「そろそろお引き取りいただけるかな?」
コルネーホはもう一度お辞儀をすると、部屋のもう一方の端にあるドアから外にすべり出た。それまでジーナはそのドアに気づいていなかった。
彼女はスーツケースに手をのばした。「ここで交換する?」声をかける。
ジーグラーは包皮から目を上げた。その目がふたたび焦点をとりもどすまで、一秒ほど要した。彼は包皮のはいったガラスケースを詰め物入り封筒のなかにもどした。
「ちょっと待ってくれ」彼は言った。「わたしの誘いはどうする?」
「考えてみたんだけど」ジーナは言った。「島にいると閉所恐怖症になっちゃうわ。あたしは広々と開けた空間が必要なギャルなの」
そして、現金の詰まったスーツケースをコーヒーテーブルの上から取りあげようとした。スーツケースは重かった。当然といえば当然だが。
「実を言うとだね、ジーナ」ジーグラーが言った。「いい知らせと悪い知らせがある」
ジーナの手がスーツケースの持ち手をがっちりと握りしめた。
『ちくしょう』彼女は考えた。ただ単純に。『ちくしょう』
これまで何もかもがあまりにもスムーズに進みすぎていた。
もうちょっと頭を働かせるべきだったのだ。こんなまぬけではないはずだった。
『ちくしょう』

「いい知らせのほうだが」ジーグラーは言った。「今やわたしは、百枚のとんでもなく珍しく、とんでもなく高価な包皮の栄えある所有者だ。世界でもっとも貴重な聖遺物のね」

ジーグラーはにやにやときどった笑いを浮かべ、待っていた。ジーナはこの男を満足させてやりたくなかった。

「悪い知らせを知りたいかね？」とうとう、ジーグラーは言った。

「あんたは一億ドルとふたつの島を持ってたって、あたしみたいな女の子ひとり手に入れられないような、生っ白いとんま男でしょ？　そういうのってすっごく惨めじゃない？」

ジーグラーのすました笑みを浮かべた口の片隅がちょっとひきつったが、じきに回復した。

彼は、コルネーホが出ていったドアのほうを向いた。

「みなさん？」ジーグラーが声を張り上げた。

ジーナは目を閉じた。『ちくしょう』

ふたたび目を開けると、ディック・モビーとジャスパーが室内に足を踏み入れたところだった。どちらも銃を抜いていた。

「この下衆野郎」ジーナはジーグラーに言った。

「お探しのこうるさい娘を見つけたよとわたしが電話で言ったときの、ミスター・モビーの喜びようを想像してもらいたいね」ジーグラーはジーナの指を一本ずつ、スーツケースの持ち手から引きはがしていった。「すまんね、ベイビー。あんたはかわいこちゃんだが、六百万ドルの価値はない」

ジーナはこの瞬間の現実からちょっと距離を置こうとして、ある意味客観的に、ジーグラーのこみいった裏切りの骨太な構造を鑑賞した。
「あんたは金を手放さずに包皮を……」
「そしてここにいるあんたのお仲間も謝肉祭(カーニバル)のご褒美を手に入れる、と」ジーグラーはにやにや笑った。「みんなが得をする」
〈クジラ〉は冷たい死の目でジーナを見つめた。
「生きたままおまえの皮を剝いでやる」ジーナに言った。「このくそったれた女(アマ)め」
「おっと」ジーグラーがくっくっと笑う。「どうやらみんなが得というわけじゃなさそうだな」
ジーナはこういう状況は得意としていた。冷静さを保つ。たいていの女の子ならパニクるか吐くかパンツを濡らすかするところだが、ジーナはそんなことはなかった。
「みんなでちょっと車に乗って、場所を変えようか」ジーグラーが言った。「どこか、もっと人目のないところへ――音の漏れないところへ」
ジーナはパニクりそうになった。吐くか、パンツを濡らすかしそうな気がした。だが、そんなことはしなかった。そこのところが大事なちがいなのよ、と自分に言い聞かせる。たった今、冷静でいられることが差をつくるのだ、と信じようとした。
「車じゃなくて散歩するのはどう？」ジーナは言った。「散歩するにはもってこいの気持ちのいい夕べだもの」
「つかまえろ」モビーがジャスパーに言った。

「あんただ！」声がした。

ジーナは振り向いた。〈クジラ〉とジーグラーとジャスパーも振り向いた。

「誰だ、おまえは？」ジーナとジーグラーが通ってきた戸口にあらわれた男に、モビーが訊いた。

「あんただ！」男はもう一度、興奮したようすで言った。血走ったようなぎらつく目でジーナを見つめており、室内にほかの人間がいることには気づいてもいないようだった。「あんただってわかったよ！　そこの広場で見たときにね！」

男は赤毛の長身で、開けっぴろげで人なつっこそうな顔をしていた。ジーナはこれまでに、この男を見たことはなかった。この男が何を言っているのか、さっぱりわからなかった。とはいえ、現在の窮状と、もう命運尽きて逃げ場がないという強烈な感覚から考えると、細かいことにこだわるつもりはなかった。

「あら！」ジーナはうれしそうに言った。「ああらまあまあ！　元気だった？」

男は眉をひそめた。「あんた、ぼくのことを覚えてないだろう？」

ジーナは笑った。「もちろん覚えてるわよ！」

「そのくそったれ野郎を追い出せ」〈クジラ〉がジーグラーにどなった。

「どうやってここにはいってきた？」ジーグラーが詰問した。「これは内輪だけの……集まりなんだが」

「横のドアに鍵がかかってなかったよ」男はジーグラーに言った。目はジーナから離していな

い。ジーナにはまだ、この男がなぜ自分を知っているると思っているのか、まったくわかっていなかった。
「あたしはシェンナ・ミラーじゃないわよ」ジーナは言った。「もしあなたがそう考えてるんだったらね。女優だっけ？ ときどき間違われるけど」
「あんたはぼくの財布を盗んだんだ！」男は言った。
ジーナは目をぱちくりさせた。考えようとする。彼の——ああ！
飛行機だ。空港。パナマ・シティに着陸したときの、手荷物受け渡し所。
「コックスマン？」ジーナは言った。
男は顔をしかめた。「その名前で呼んでもらいたくないね。ぼくの名前はテッド・ボックスマンだ」
「行くぞ！」〈クジラ〉がどなった。
「われわれはこれから出かけるところなんだ」ジーグラーが言った。現金の詰まったスーツケースを床に置いて、コックスマンの腕をつかもうとした。コックスマンを戸口から外に追い出せるように。だが、コックスマンは腕をもぎ離した。
「いやだ！」コックスマンは言った。「この女に、彼女がしたことの結果を説明したいんだ」
「どうぞゆっくり話して」ジーナが励ます。彼女の電算処理機が白熱し、うなりをあげていた。
ドアその一、ジーナの左手にある、彼女とジーグラーが通ってきたほうの戸口は、コックスマンでふさがれている。ドアその二、ジーナの右手にあるほうはジャスパーと〈クジラ〉でふさ

がれている。最善の逃げ道はおそらく、まっすぐ前方のバルコニーだろう。遮るものはたいしてないが、バルコニー案には六メートル下の玉石敷き地面に落ちることも含まれ、おそらく重要な骨を何本か折ることになりそうだった。その見込みは、あまり乗り気になれるものではない。

だがその一方で、生きたまま皮を剝がれる案と比べた場合は、あまり悩む余地はない。

「あんたのおかげで、ぼくは人生で最悪の三日間を過ごした」コックスマンは言った。「そして心から本当に、それに対してあんたにお礼を言いたいんだ」

ジーナは小首をかしげた。意に反して好奇心をそそられていた。「ほんとに？　どうして？」

ジーグラーがまたもやコックスマンの腕をつかんだが、ジーグラーもまた、好奇心をそそられたようだった。

「それこそが、ぼくが必要としてた、喝を入れるひと蹴りだったんだ」コックスマンは言った。「それが必要だったというのは、この一年半というもの、ぼくはすっかり自己憐憫に浸って過ごしてたからなんだ。もしあんたがぼくの財布を盗んでなかったら、そのせいでぼくの身に起きたいろんなことが起きていなかったら、もちろんあれがおもしろかったとか言うつもりはないけど、百万年たってもきっとぼくは――」

「よう、テッド」ジャスパーが静かに言った。

コックスマンはしゃべるのをやめて、ジャスパーを見た。ジャスパーは銃を上に向けてから横に向け、逆向きのL字形のようなものを見せた。コックスマンが見逃すことのないようにだ。

「銃を持ってるのか」コックスマンが言った。仰天していた。
「そのとおりだ」ジャスパーが言った。
「うわ」コックスマンは言った。それから、モビーの銃にも目を向けた。床の上のスーツケースを見た。そしてようやく気づいたようだった。彼の人生で最悪の三日間はまだ終わっていないことに。「うわ」
ジーグラーは、包皮のはいった詰め物入り封筒をコーヒーテーブルに置き、両手を使ってコックスマンをドアから引き離す態勢にはいった。コックスマンは今度は素直にひっぱられるままになり、ソファの上に倒れこんだ。
「そこにすわってろ」ジーグラーが言った。「動くな。わかったな？　警察を呼ぶとか、そんなようなまねを何かしたら、死ぬことになるぞ」
「ああ」コックスマンは言った。「わかった」
「だめだ」ジャスパーが言った。
「こいつはおれたちを見た」〈クジラ〉が言った。
コックスマンには、このやりとりの意味が理解できていない、とジーナにはわかった。コックスマンは説明を求めるようにジーナを見た。ジーナは喉もとに、針で刺されたような鋭い痛みを感じた。
「その人をここから出してあげたらどう？」ジーナは言った。
「おまえはおれに、おまえの友だちをここから出してもらいたいと言ってるのか？」〈クジ

ラ〉が訊いた。ジーナは恐るべきまちがいを犯したことに気づいた。それは今日最初のまちがいというわけでもなかった。

「よし」ジーグラーが言った。「みんなでドライブに出るとしよう」

ジーナはさっと全身に力をこめた。だがそのとき、モビーが――このまるまると太った毒トカゲ、まるで彼女が何をするつもりか知っているかのように――右側に二歩寄って、ジーナとバルコニーのあいだに立ちふさがった。

「その女をつかまえて、連れていけ」〈クジラ〉はジャスパーに言った。

「まあそう急ぐな」新たな声が言った。ジーナの心に安堵の波が押し寄せ、今度は本当に、パンツを濡らしそうになった。

48

シェイクが部屋にはいってきた。グロックを手にして。まだ荒い息をしていた——全速力で広場をつっきり、この建物を走り抜け、もう一度もどって階段を見つけるまで走り、階段を上がり、廊下をたどってようやくここに来たのだ——が、それをさとらせまいとしていた。

シェイクのすぐ左にジーグラーが立っていた。ジーグラーの左には、シェイクの知らない赤毛の男がソファにすわっていた。さらに時計まわりに言うと、銃を持ったモビーがバルコニーの前に立っており、銃を持ったジャスパーが壁を背に立っていた。そしてジーナがシェイクの右側にいる。

「いったいこのくそは誰だ?」モビーが言い、銃をジーナからシェイクに向ける。ジャスパーは銃をずっとジーナに向けていた。シェイクはジャスパーに銃を向けた。

「よう、ジャスパー」シェイクは言った。

「シェイク」

「鼻の調子はどうだ?」

「痛い」
シェイクはちらりとジーナを見た。「デザートはほしくなかったのか？」
「ああ」ジーナは言った。「また会えて本当にうれしいわ」
「もしかしたらおれは、『考え直せ』と言って去るべきだったかな？」
ジーナは考えた。「『まあそう急ぐな』でよかったのよ」
「一時間ぐらいあったら、本当にいいせりふを何か思いつけそうだがな。いつだってそういうもんだ」
「わかるわ」ジーナは同意した。「どうしてこんなに長くかかったの？」
ディック・モビーが断片をつなぎあわせて、ジャスパーのほうを向いた。「こいつがモーテルでおれをだましやがったとんまか？」
「こいつです」ジャスパーが言った。「何もかもめちゃめちゃにしたやつです」
ジャスパーの言い方は静かできっぱりしていた——ジャスパーが思い描いている〝何もかも〟は、シェイクに電話帳で頭を殴られたことや、ホテルの客室のドアに鼻をはさまれたことだけではないように、シェイクは感じた。
シェイクはもう一度、ちらりとジーナを見た。「どうしてこんなに長くかかったかって？」
「わからなかったなんて言わないでよね」ジーナは言った。「ひどくがっかりしちゃうわ」
「おれはきみの予備案だったんだな」
「そんな言われ方をされると……どうかしらね」

「冷血な計算か？」

「あたしの言ってる意味、わかる？」

本土へともどるフェリーのなかで、シェイクは細部までつきあわせてすべて考えあわせてみた。ジーナはタボガ島へシェイクを置き去りにしたかったわけではない、ただちょっと遅らせたかっただけなのだ。だからマーヴィンにふたつの働きをさせた――シェイクの足止めをすると同時にジーナの行き先をシェイクに知らせるという働きを。そして、もしジーグラーとの取り引きがつつがなく終わっていたら、ジーナはシェイクが姿をあらわす前に消えて――お金を全部持って――いただろう。もし何か支障が生じたら……そう、そのときは――こうして彼が救いに来てくれるというわけだ。

「なかなかよくできた計画だったよ」シェイクはジーナに言った。「きみが予定どおりあの彫像のもとにいなかったというところを除いてはな」

「生っ白男がどこか人目のないところに行きたいって言ったからよ」

「前におれが言ったこと、覚えてるか？」

ジーナは顔をしかめた。「わかってる、わかってるったら」

レセップスの彫像のところにやってきたとき、シェイクはいったい何があったのだろうかと推測を働かせた。ジーグラー――傲慢で短気なすまし屋野郎――は包皮をしっかりと手中におさめるまではあまり遠くに行きたがらないだろうとも推測できた。それで、広場沿いにある建物すべての窓を調べていった。実をいうと何を探しているのかすらよくわかっていなかったの

だが、やがて蠟燭の光でやわらかく輝いている窓が目にはいったのだ。
ジーグラーはじりじりとコーヒーテーブルのほうににじり寄っていた。手をのばして詰め物入り封筒を取ろうとする。
「もし誰も気にしなければ」ジーグラーは言った。「わたしはこれをつかんで立ち去るから、あんたたちはどうぞゆっくり――」
シェイクとモビーとジャスパーは三人そろってジーグラーに銃を向けた。ジーグラーは凍りついた。
「どうやらみんな気にするようだな、生っ白坊や」シェイクは言った。
そして自分の銃をふたたびジャスパーに向けた。ジャスパーは自分の銃をジーナに向けた。
モビーは自分の銃をシェイクに向けた。
「これを生きのびられると思ってるんなら」モビーがシェイクに言った。「おまえはおれが思っていたよりはるかにうすのろだぜ」
シェイクはその発言を無視することにした。たしかにこの一週間以上というもの、いろいろと問題の多い決意をしたことを認めないわけにはいかない。
「さて、諸君」シェイクは言った。「ここの壁が石でできていることに、みんなも気づいていると思う。跳弾の雨が降り注いで全員がやられるという可能性が非常に大きそうだが、それ抜きでこの状況を解決したいと思わないか？」
ジャスパーは、たとえどんな新たな武器が出てきてもシェイクとやりあわねばならないにも

かかわらず、まったく同じことを考えているようだった。

一方、〈クジラ〉は純然たる邪悪の目つきでジーナをにらみつけていた。

「おまえのかわいいガールフレンドだが」〈クジラ〉はジーナに向かって言った。「あのイダルゴのくそ女(アマ)は、おまえが今夜地獄に行ったときに、ちゃんとおまえだとわかるかな？　皮のないおまえを見たときに？」

このときはじめて、シェイクは、ジーナの頭脳が働きを止めるところを見たと思った。彼女の顔は空白になっていた。一瞬、シェイクは、皮を剝がれるという脅しのせいかと思ったが、それから、彼女は恐怖ではなく憤慨(ふんがい)して震えているのだと気づいた。

「あんた、ルーシーを殺したの？」ジーナはモビーに訊いた。今にも飛び出してモビーに躍りかかり、喉をかきむしりそうな形相になっていた。

「ジーナ」シェイクが言った。それが聞こえていたとしても、ジーナはそんなようすは見せなかった。

「あの女はろくでなしだった」モビーはジーナに言った。「そんなことはとっくにわかってたがな」

シェイクは身構えた。もうあと一秒で、ジーナがモビーに飛びかかり、シェイクはまっぷたつに引き裂かれる前にグロックから何発の弾丸を送り出せるか、身をもって知ることになるだろう。ちらりとジャスパーを見る。ジャスパーもまったく同じ、不幸なすじがきを考えていることがわかった。だが神の介入が望めそうにない今、この避けられない結末を止める方法は何

ひとつなかった。ジーナを飛びかからせずにすむ方法は——

「ルーシーは死んじゃいない」ジャスパーが言った。

モビーとジーナが彼を見た。

「え？」モビーが言った。ジーナも言った。シェイクも言った。

ジャスパーは肩をすくめた。ルーシーは死んでないと言ったのだ。ほかに何をつけ加えろと言うのだ？

「あのロン毛野郎が始末したと言ったじゃないか」モビーが言った。「あいつ、おれに言ったんだぞ。あの女をいたぶって、それから始末したと」

「そうする予定だったんだ」ジャスパーは言った。「だが、おれは気に入らなかった」

「ルーシーは生きてるの？」ジーナは言った。「無事でいるの？」

「コンのくそったれ野郎が」モビーがジャスパーに向かってつばを散らしながらわめいた。

「誰がおまえに、予定したことが気に入るかどうかなんぞ訊いた？」

「ルーシーは無事だ」ジャスパーはジーナに言った。そして心の底からの非友好的な視線をシェイクに向けた。「ルーシーは行っちまった」

「ルーシー・イダルゴ？」ソファの男が言った。ひたいにばんそうこうを貼っているその顔には、うっすらと見覚えがあるような気がしたが、シェイクにははっきりとはわからなかった。

「あんた、ルーシーを知ってるの？」ジーナが驚いたように訊いた。

「すまんが」シェイクが言った。「その男は誰だ？」

「コックスマンよ」ジーナが言った。「覚えてない？　彼はテッドと呼んでもらいたがってるけど。彼はね、広場であたしを見かけて、あとをつけてここにやってきたのよ。あたしが彼の財布をすったことにお礼を言うために」

「お礼を言う？」シェイクは言った。

「その女を撃て」モビーがジャスパーに言った。ジーナのことだ。

「はあ？」ジャスパーが言った。

「何が起きようと」と〈クジラ〉は言った。「そのくそったれ女には死んでもらう」

「おれが女を撃つ」ジャスパーは言った。「すると彼がおれを撃つ」シェイクのことだ。

「それから、おれがやつを撃つ」〈クジラ〉は言った。「それがそんなにくそむずかしいことか？」

シェイクはジャスパーに数秒やった。水のなかにオールを入れる時間を。それから、漕ぎはじめるのに手を貸しにかかった。

「ジャスパー」シェイクは言った。「そのすじがきには根本的な欠陥があることを、おれが指摘する必要はないよな」

「よし」モビーが言った。「おれとおまえでこいつを撃とう」銃をジーナからシェイクに向ける。

シェイクは銃をジャスパーから〈クジラ〉に向けた。「ジャスパー」シェイクは言った。「こういうのはどうだ。一緒に――」

「静かにしておれに考えさせろ」ジャスパーはシェイクに言った。「おまえさえいなけりゃ、そもそもこんなことは何も起きちゃいないんだ」

「次もまたやってやる」シェイクは言い、ジャスパーを見た。ジャスパーはシェイクを見つめ返した。ジャスパーの表情は和らいではいなかったが、少なくとも彼は引き金を引いてシェイクをふっ飛ばしはしなかった。

ジャスパーはソファの男を見た。「どういう意味だ？ ルーシーを知ってるのか？」

「知ってると思うよ」その男、テッドは言った。「つまりさ、ルーシー・イダルゴっていう女性なら知ってるんだ。昨夜会ったばかりだ。ディナーの席で？ 彼女はぼくのガールフレンドの妹なんだ。まあその、実をいうとガールフレンドってわけでもないんだけど、マリアナは——完全なるまちがいと先走りからこうなったんだけど。でもほら、ときどきあるだろう、誰かと出会って、一日じゅう一緒にすごしてみて、そうするとその次の日にはそういう関係ができ——」

テッドはしゃべるのをやめた。ジャスパーが、驚いて興奮したようすで自分に銃を向けたことに気づいたからだ。ジャスパーもまたそれに気づいて、銃をまたシェイクに向け直した。

シェイクは銃をモビーからジャスパーに向けた。

「ルーシーはここにいるのか？」ジャスパーが言った。「おまえは彼女がどこにいるか知ってるのか？」

「もちろん」テッドは言った。「ルーシーは二、三週間前から、ぼくの……彼女の姉さんの家

にいるよ」
「いったいどれぐらいの確率だろうな」シェイクは静かにジーナに訊いた。「それが同じルーシー・イダルゴだってのは？」
ジーナは首を振った。「見当もつかないわ。あたしの脳みそ、このままだと爆発しそう」
「彼女は仕事をやめたところなんだ」テッドは言った。「簿記係をしてたんだが、ちょっと仕事から離れて人生を立て直そうとしてるんだ」
「簿記係？」ジャスパーは言い、眉をひそめた。
『くそ』シェイクは考えた。それから、いちかばちか言ってみた。「よう、テッド、あんたのガールフレンドの妹のルーシーは簿記係みたいに見えるのか？」
テッドは当惑したようすで、自分の靴を見下ろした。「わからない。それって、ほら、だいたい簿記係ってどういうふうに見えるものなんだ？」
「その簿記係は」ジーナが言った。「史上最高に美しいボディって博物館に展示されてるみたいな、イカすスタイルをしてる？」
「本当のところは、ぼくにはわからないな」テッドはむにゃむにゃと言った。「ぼくは気づかなかった」
「ジャスパー」シェイクは言った。「どうやら、大当たりのようだぜ」
「ふん」ジャスパーは言った。眠たげな目をした丸い顔は驚きでいっぱいのように見える。
「ジャスパー」モビーがうなった。「どうにかしてけりをつけろ」

シェイクはもうひとつ、慎重にためしてみることにした。「あんたはこんな状況なんて望んでないはずだ」言ってみた。「そうだろう、ジャスパー？」
「ああ」ジャスパーは言った。
「いったいどうしたんだ、くそ！」ディック・モビーが銃をシェイクからジャスパーに向けた。シェイクは銃をさっとジャスパーから〈クジラ〉に向けた。〈クジラ〉は即座に銃をシェイクにもどした。ジャスパーはまだシェイクに銃を向けたままだ。ジーグラーとコックスマンはどちらもソファにすわり、人間にできるかぎりで小さくなろうとしている。そしてジーナは──シェイクにはわかった──ドアに向けて走り出すタイミングをじっとはかっている。
「それはやめろ」シェイクはジーナに言った。「頼む」
「それをすると、解決できる問題よりめんどうな問題がふえるってこと？」ジーナは訊いた。
「そうだ」
「おまえはくそったれたプロだと思ってたがな」モビーがジャスパーに言った。「自分の仕事をちゃんとしろ、くそ」
「おれたちは岐路に立つふたりの男だ」シェイクはジャスパーに言った。「ここに、新しく人生をはじめるチャンスがある。残りの人生を立て直すんだ」
「そんなたわごとにはもう手遅れだ」ジャスパーは悲しげに首を振った。
「おれは」シェイクは言った。「レストランを開くつもりだ。りっぱなものなんかじゃない。ただ地元産の材料を使って、細部まで心配りの行き届いているレストランだ。あんたは、ルー

シーに電話をするんだ。彼女と一緒にコーヒーを飲んで、どうなるかようすを見てみろ。ここにいるテッドがおぜん立てをしてくれる」ちょっと待った。「なあ、テッド?」
「そのとおり!」コックスマンが言った。「そうするよ」
「そのくそったれ野郎を撃て!」モビーがジャスパーにどなった。怒りくるっている。
「遅すぎることはないんだ、ジャスパー」シェイクは言った。「自分で選び取らなきゃ、二度目のチャンスはないんだぞ。あんたが選ぶんだ」
「そいつを撃て!」〈クジラ〉はもはや、本気でどなっていた。「そいつを撃て、このうすのろの青光りするぼんくら――」
ジャスパーはくるりと向きを変え、たてつづけに三発撃った。あまりにすばやかったため、一発の長い銃声のように聞こえた。〈クジラ〉の白いシャツが鮮やかな朱に染まり、巨体がぐらりとうしろ向きに倒れた。そのままどすんと壁にぶつかり、蠟燭を棚からたたき落として、それから壁にそってずるずるとすべり落ちた。あまりに太っているせいで、倒れるというよりは、両わきに溶けて流れるというように近かった。
「黙れ、くそ」ジャスパーは言った。
石の床に落ちた蠟燭はまだ炎が燃えていた。ジャスパーはそれを踏みつけ、靴の先でもみ消した。
それから銃をふたたびシェイクに向けた。シェイクの銃はジャスパーにずっと向けてあった。
「これで問題が単純化されたな」シェイクは言った。宙に漂う火薬の鋭く刺すような臭いが口

のなかに感じられた。「だが困った状況にいるってのは変わらない」

「ちょっと言っていい？」ジーナが訊いた。

「だめだ」シェイクとジャスパーが同時に言った。

「ちぇっ！」

シェイクはちらりと、ソファの横のスーツケースを見た。「いくらだ？」

「六百万」ジーナが言った。

「六百万ドルか？」ジャスパーが言った。

シェイクはうなずいた。「半分はあんたのだ」ジャスパーに言った。

「ちょっと！」ジーナが言った。

「黙れ、頼む」シェイクがジーナに言った。

「ちょっと見てみよう」ジャスパーが言った。

シェイクはジーナを指さし、それからスーツケースを指さした。「見せてやってくれ、頼む」

ジーナは顔をしかめたが、スーツケースのところに歩いていった。ジーグラーのそばを通るときに、新たな立場の逆転を利用して中指を立てて見せる。それから、スーツケースを開けた。

大量の現金を見て、シェイクは口笛を吹いた。

「どうする、ジャスパー？」シェイクは訊いた。

ジャスパーは考えていた。

「わかんないわ、どうしてちゃっちゃと――」

「ジーナ」シェイクが遮る。

「わかってるわよ」ジーナはため息をついた。「お願い」

「わかった」ジャスパーが言った。「そっちは例のものを取っとけばいい――何だっけか？」

「宗教的にも歴史的にも非常に重要な包皮」シェイクが言った。

「おい！」ジーグラーが言った。

「黙りなさいよ」ジーナが言った。

「包皮？」ジャスパーが言った。「まさかそれは――」

「残念ながらそのとおりだ」シェイクは言った。「話せば長くなる。三数えるぞ、いいか？」

ジャスパーはうなずいた。

「一……」

ジャスパーは銃を下ろした。「くそ」彼は言った。「あんたを信用する」

シェイクも銃を下ろした。十五分ぶりにようやく息を吐いた。

「なんて日だ」シェイクは言った。

「動くな！」ジーグラーが言った。目が血走っている。ジーグラーのポケットから小型のリヴォルヴァーが引き出されるところを、シェイクは見た。ジーグラーはジーナの腕をつかみ、ぐいと引き寄せると、ジーナの首すじに銃口を押しつけた。「うしろにさがれ、さもないとこの女を撃つ――」

ジーナがうしろ向きに足を蹴りあげ、ジーグラーの股間に命中させた。ジーグラーはぎゃっ

と悲鳴をあげ、身体をふたつ折りにした。リヴォルヴァーががちゃんと音をたてて、床に落ちた。
「せっかくの華麗な脅しを最後までやらせてやらなかったのか」ジーナはジーグラーに向かって言葉を投げつけた。
「くそったれ」シェイクが言った。
ジーグラーは飛びついた。だがリヴォルヴァーにではない。ジーナにでもなく。飛びつこうとしたのは、コーヒーテーブルの上の詰め物入り封筒だった。包皮に。だが、シェイクの見たところ、彼は股間を蹴り飛ばされた直後の自分の運動能力を過信していたようだった。ジーグラーは悲鳴をあげ、またしても身体をふたつ折りにした。ジーナがリヴォルヴァーを拾いあげ、ジーグラーの頭に狙いをつけた。
「やめろ」シェイクが言った。
彼女は考えた。「少なくともふたつは、ちゃんとした理由が必要よね」
「きみは人殺しじゃない」シェイクは言った。「それに人殺しになりたくもないはずだ」
「こいつのおちんちんを撃つだけにしてもいいわよ、妥協案としてそれでどう?」だが一秒ほどして、ジーナはリヴォルヴァーを投げ捨てた。
シェイクはグロックをウエストバンドにさした。「ジャスパー」声をかける。「このくそ野郎を縛りあげる材料は何かあるか?」
ジャスパーはちょっとのあいだ考えた。それから、バルコニーに行き、カーテンをまとめるひもを見つけて、すべて引きちぎった。それをシェイクに投げる。

シェイクはジーグラーの両手をしっかりと縛り、両足を縛り、両手を両足に縛りつけた。残ったひもで、そうやってまとめた身体を太い石の柱に縛りつける。この柱なら、ジーグラーがこの世の終わりまでもがきつづけてもびくともしないだろう。

「さてと」作業を終えると、シェイクは言った。

「宗教的にも歴史的にも非常に重要な包皮だって？」コックスマンが言った。「うわあ。興味深いな。すごく興味深いと思うよ。これって絶対、故郷に帰ってみんなに話せる、おもしろいみやげ話になるよね」シェイクの目には、この哀れな男はどうやら公式なショック状態に陥っているように見えた。目がぎらぎらと光り、動作がロボットみたいに角ばっている。そして詰め物入り封筒からほっそりしたガラスケースを取り出し、しげしげと見つめていた。

「開けるな！」シェイクが叫んだ。ジーグラーがどなった。ジーナも叫んだ。

テッドはぎょっとしたように顔を上げた。だが、遅すぎた。彼はすでに留め金をはずしており、ガラスのふたを持ち上げていた。

一秒ほどは何も起きなかった。シェイクの頭に疑問が浮かんだ――このにせの包皮は、実はにせの包皮のにせものなんじゃないか、古代のひどくもろくはかないやつなんかじゃなしに？

だがそれから、一枚、また一枚と、包皮がふわふわとガラスから舞いあがりはじめた。一枚、また一枚、さらにまた一枚、次々と包皮が上に舞いあがっていき、とうとう部屋のなかはふわふわと舞う包皮だらけになった。百枚の青白い蛾の亡霊が、無数の蠟燭の炎がつくる上昇気流に乗ってはためき、舞い踊っていた。ふるふるとはためき、踊りながら――シェイクははっと

気づいた――蠟燭の炎に向かっていく。
「やめろぉぉぉっ！」ジーグラーの喉から、絶望した獣のうめき声を思わせる、低い引き裂くような音が漏れた。同時に、ひらひらと揺れる包皮の最初の一枚が、蠟燭の炎にふれた。包皮はぱっと燃えあがり、オレンジ色の火花をひとつ散らして、消え失せた。細くたなびくひとすじの煙の巻きひげを残して。
「やめろぉぉぉっ！」
さらに二枚の包皮が燃えた。さらに数枚。それから急に、花火のように、膨大な小魚の群れが突然ひとつになって燃えあがったかのように、部屋全体が次々と炸裂するオレンジ色の火花でいっぱいになった。
煙が渦巻き、それから静かになった。何のにおいもしなかった。シェイクはありがたいと思った。
「やめろ、やめろ、やめろ」ジーグラーが言った。今やすすり泣いていた。
シェイクはさるぐつわに使えるものが何かないかとあたりを見まわした。そのとき、石を金属がこするような音が聞こえた。湿って泡を吹いている息づかいのような、必死で息を吸いこもうとしているような音が。そちらに目を向けると、〈クジラ〉が――まだ生きていたのだ、かろうじて――床から銃を引きずるように持ち上げ、ジャスパーに狙いをつけているところだった。
シェイクが反応するより先に、モビーは発砲した。ジャスパーも撃ち返し、〈クジラ〉を氷

遠に黙らせた。それから、ジャスパーはゆっくりと床に倒れていった。
シェイクは急いでそちらに行き、ジャスパーの横に膝をついた。
「ジャスパー、おい、どうした？」シェイクは言った。「何か言え」
ジャスパーは顔をしかめた。「くそ」彼は言った。
「どこを撃たれた？」
「デブ白野郎はおれの膝を撃ちやがった」ジャスパーは言った。「いいほうの膝を」
シェイクは目を下に向け、黒っぽい湿ったしみを見つめた。安堵のあまり笑い出した。「それですんだんだな、おい」
「もう二度と、邪悪なデブ白野郎のもとで働きはせんぞ」ジャスパーは痛みに歯を食いしばりながら言った。
「もうそんなことをする必要はないぜ」シェイクが思い出させた。「あんたは今や、公式に金持ちなんだ。デブ白野郎の一個大隊を買い集めて、大きな居心地のいいリクライニング椅子にすわったあんたをあちこち運ばせることだってできるぜ」
シェイクの目がうるみはじめていた。部屋じゅうに煙が充満していた。蠟燭の煙、発砲による煙、あぶられた包皮の煙。ジーグラーはまだすすり泣いていた。コックスマンはぎゅっと目をつぶり、ひとりで何かつぶやいている——何かこういうようなことを言っているのだろう、五分五分で賭けてもいい、とシェイクは考えた——「これはただの夢だ、これはただの夢だ」
そしてジーナは……

シェイクは煙の充満する室内を見まわした。
ジーナは消えていた。
現金の詰まったスーツケースも消えていた。
シェイクは跳ねるように立ちあがった。まっすぐバルコニーに行き、カーテンを引き開ける。鉄製の手すりをしっかりとつかみ、眼下の広場を探した。
いた――金髪の頭がちらりと見えただけだが――ジーナが、眼下のカルナヴァルの人ごみのなかに消えていくところだった。
ジャスパーがよろめきながら身を起こした。「何があった？」
「何が、と言うよりは」シェイクはため息まじりに言った。「誰が、と言うべきだろうな」

49

シェイクはカーテンを引き裂き、できるかぎり丁寧に、ジャスパーの膝に巻きつけた。残った布でジーグラーにさるぐつわをかませた。ジーグラーはもはやすすり泣くのはやめ、呪詛（じゅそ）と脅迫と罵倒をわめきはじめていた。持てる財力のすべてをなげうってでもシェイクを追いつめ、拷問して苦しめてやる、等々。

コックスマンのテッドは、杖にするのにぴったりの長さの鋳鉄製の燭台を見つけてきて、ジャスパーに差し出した。テッドがちょっと落ちついてきたので、シェイクは次のような説明をした。彼、シェイクは、合衆国政府のために働いている麻薬取締局（DEA）の捜査官で、ジャスパーはアルコール・タバコ・火器局（ATF）の潜入工作員なのだ。そしてテッドは、悪い、悪い男ふたりを逮捕するのを手伝って、祖国に多大なる奉仕をしたところなのだ。

テッドが本当にそれをすべて鵜呑みにしたのかはわからなかったが、テッドがそうしたがっていることはわかった。そこが大事なところだ。それに、テッドが少なくともその最後の部分——悪い、悪い男たち——については絶対に本当だと確信していることもわかっていた。

シェイクとテッドはジャスパーを助けて歩かせながら、廊下をエレベーターまで運んだ。

シェイクがボタンを押し、三人は鉄の矢印がじりじりと1から2、それから3へ進むのを待った。

「大丈夫そうか？」シェイクはジャスパーに訊いた。

「くそ」ジャスパーは撃たれた膝を上から見下ろした。

「金のことだ」

ジャスパーは笑みを浮かべた。ごくわずかだけ。「ヴェガスにもどりゃ、ミスター・モビーの金庫がある」

「で、あんたは組み合わせ錠の番号を知ってるんだな？」

「今じゃおれだけがな」

「そりゃよかった」

「だがまず第一に……」ジャスパーは問いかけるようにテッドを見た。

「もちろんだよ」テッドが言った。「いいよ。でももしかしたら、その……」

「もしルーシーがおれと直接会いたくないと言うんなら」ジャスパーは言った。「それはわかる。電話で話すだけでいいんだ。おれはただ、いくつかのことをはっきりさせておきたいんだと、ルーシーに言ってくれ。そのあとはもう二度と煩わすようなことはしない、それが望みなんだろうから」

テッドはうなずいた。「それならよさそうだね。大丈夫そうだ」

「ルーシーに、おれがよろしく言ってたと言ってくれ」シェイクが言った。「ええと、その……ラスヴェガスでの調査を手伝ってくれてありがとうと言っといてくれ」

「あいつはどうするんだ？」ジャスパーが言った。ジーグラーが縛られている部屋のほうに、頭を傾ける。

「やつはまだわかってないだろうが」シェイクは言った。「やつの悪い一日はまだはじまったばかりだ」

エレベーターがベルの音とともに到着し、扉が開いた。三人はなかに乗りこみ、一階に下りた。ベルがまた鳴り、ドアが開いた。

そこに立っていた——アレクサンドラとディクランが。

アレクサンドラがにっこりとテッドに笑いかけた。それからジャスパーに、それからシェイクに。

ディクランはシェイクをにらみつけた。「くそ銃を返せ」

シェイクはグロックを渡した。「三階だ。廊下をまっすぐ行って左側」

シェイクとジャスパーとテッドはエレベーターから出た。アレクサンドラとディクランが乗りこんだ。エレベーターの扉が閉じたあと、ジャスパーがシェイクにもの問いたげな視線を向けた。

「あれがLAでアルメニア人マフィアをまとめている女性か」

「そのとおりだ」

「だが――」
「彼女は金を追って動いていたわけじゃない。包皮を売りたくなかったんだ。もっとわかる方法で役に立てたかったんだ」
「ジーグラーに接近するためか?」ジャスパーが推測した。
シェイクはうなずいた。「おとりの餌さ。包皮をちらつかせればジーグラーが動くから広い場所におびき出せる、そこをレクシーがつかまえる」
「それから官憲に引き渡せばいいってか?」
「超有名なお尋ね者の逮捕だからな。全国ネットのニュースになるし、誰もが昇進できる」
「彼女のおかげってわけか」
ジーグラーのような大物が褒美となると、レクシーは合衆国当局の多大な恩恵を買い取ることができるはずだ。何枚かの起訴状が書類の山の底に埋められる。大陪審が二名ほど、お役御免になる。「彼女は二ヶ月ほどかけて、副検事総長に根回ししてきてるんだ」
テッドがこの会話についてこようとしていたが、たいして益はなかった。実のところ、まったく何も収穫はなかった。
「それじゃ」テッドは言った。「ぼくはそろそろホテルにもどったほうがよさそうだね、もしそれでいいんなら。ルーシーには明日の朝、話してみるよ。それからあんたに電話する。それから時間を決めて……」
テッドは言葉を切った。うなずいたのが彼ひとりだけで、ジャスパーはうなずかなかったか

らだ。
「今すぐでどうだ」ジャスパーの言い方には、どんな種類の疑問符もついていなかった。
「まあね」テッドは言った。「その……」
今度はジャスパーがうなずいた。一秒後、テッドも空気を読んでうなずいた。
「タクシーで行こう」ジャスパーが言った。
テッドはまだうなずきながら、急ぎ足で広場をつっきり、手を上げてタクシーを止めた。
「その膝の手当てをしたほうがいいぞ」シェイクはジャスパーに言った。
「それはあとでいい」テッドが本当にタクシーを止め、逃げ出そうと企てていないことがはっきりすると、ジャスパーはシェイクに背を向けた。「あんたは本当にレストランを開くつもりなのか？」
「先週のおれだったら、そんなばかなってあんたに言っただろう。おれはただ、自分とまわりのみんなをごまかしてただけだった。だが今なら……」シェイクは肩をすくめた。「誰にわかる、そうだろう？　もしも〈クジラ〉の金だの何だのでいい投資先を探すようだったら、おれを思い出してくれ」
「ああ、そうしよう」
ジャスパーは今度はちゃんと笑っていた。彼はシェイクと握手をし、足を引きずりながら歩いていった。

50

シェイクは持っている最後の現金を使ってタクシーを拾い、ホテルにもどった。部屋のドアの前で長いあいだじっと待った。おそらく半時間ほど。修理人が廊下を歩いてきて、奇妙な目つきでシェイクを見るまで、じっと。

『背を向けて立ち去れ』シェイクは自分に言い聞かせた。『なかにはいるんじゃない。そんなことをしてもいっそうつらくなるだけだ。おまえは報われないばかな一縷の希望を棄てたくないだけなんだ』

ドアの鍵を開け、なかにはいった。部屋はからっぽだった。バスルームもからっぽ。バスタブもからっぽ。

ジーナはいない。

そのとおり、なかにはいったことで、いっそう暗澹たる気分になった。

ミニバーにあったラム酒のミニチュア・ボトルを二本飲み、さらにもっと飲んで、不安な夢に満ちた眠りに落ちていった。彼は青白い蛾の亡霊になり、はためき燃えていた。頭がライオ

ンでゴーシュ博士の声をした男が、おれの包皮をよこせと要求していた。シェイクがこれまで見たなかで、最高にくそったれた夢のひとつだった。

51

ジャスパーはテッドと一緒にアパートのドアの前に立ち、待った。ドアの反対側の、鍵が開くがちゃりという音に耳をすます。たかがドア一枚にえらくたくさんの鍵がついているようだったが、それが気になるのかどうか、よくわからなかった。今このとき、自分が急いでいるのか、それともそのまったく逆なのかも、よくわからなかった。

本当のことを言うと、今このとき確信がもてることなどひとつもなかった。ルーシーの顔を見たら言おうと考えていたことすべて、ここに来るタクシーのなかであれこれ考えていたことすべてが、頭から抜け落ち、指のあいだからこぼれ落ちていた。

あらかじめ電話をかけることはできなかった。ジャスパーの携帯電話のバッテリーが切れていたからだ。

「ちょっといいか」今にして、明日の朝まで待つほうがいいんじゃないかと思えてきたジャスパーは、テッドに言った。が、ルーシーの姉の部屋のドアはすでに開いていた。

ドアを開けたのは、かわいらしいパナマ娘、ルーシーの姉で、手に負えないくらい量の多い

髪をして、どちらの腕にもたくさんのブレスレットをつけていた。テッドを見て、彼女は顔いっぱいに笑みを浮かべた。ジャスパーを見たときも、顔はまだ笑っていたが、いくぶん当惑した感じになっていた。

「やあ、マリアナ!」テッドが言った。「こちらはジャスパー。彼、ルーシーの友だちなんだけど?」

マリアナはこれを真に受けた。彼女の背後から、若い女性の声がスペイン語で何か呼びかけた。マリアナはスペイン語で言い返した。ジャスパーの耳に、足音が聞こえた。それは文字どおり彼が聞いた音――なかにいるルーシーがハイヒールで戸口に出てくる音――だったが、同時に、フットボール選手時代からの隠喩的な表現でもあった。クォーターバックが足音を聞くときというのは、これからどんな猛攻を受けるかについて考えるのであって、投げなければならないパスのことを考えるどころではない。

いつものジャスパーは、クォーターバックの士気を萎えさせる足音をたてるほうだった。だが今はじめて、その逆の側にまわっていた。

マリアナがドアを大きく開け放った。

「オラ、ルーシー!」テッドが言った。

ルーシーはジャスパーを見た。ジャスパーはルーシーを見た。

「あんた、誰?」ルーシーは言った。

「おれはジャスパーと言います」ジャスパーは言った。深く息を吸いこんで、ここ数分間ずっ

とためていた呼吸を補った。「どうやらあなたはちがうルーシーのようだ」
このルーシーは、彼のルーシーとは似ても似つかなかった。こちらのほうが背が高く、丸みが少なく、肌の黒さが濃い。身体つきは彼のルーシーに似ていなくもなかったが、小さな鼻と口の形は、この一時間半というもの、ずっとキスしたいと考えていたものとはまったくちがっていた。
テッドは心からの同情をこめてジャスパーを見ていた。それをジャスパーはありがたく受け止めた。こいつを撃たなくてよかったと思った。
「これについては本当に気の毒だと思うよ、ジャスパー」テッドは言った。
奇妙なことながら、ジャスパーは平気だった。膝はとんでもなく痛かったし、水を一杯飲みたくてたまらなかったし、しばらくのあいだすわって休む必要があった。だが、彼のルーシーを見つけようと考えたとき、彼女がこのパナマにいると考えたときに胸のなかで羽ばたきはじめた想いは――今でもまだ羽ばたいていた。
なぜなら、いつかきっと彼女を見つけるからだ。それだけの、簡単なことだ。いつか彼女を見つけて、どうしてああいうことになったかを釈明し、それから訊くのだ。彼女の口にキスしていいかと。
この確かな未来を考えることで、彼の心は力強い平穏に満たされた。長いあいだ知らなかった類の平穏に。膝はまだ、とんでもなく痛かったが、それでも。
「水を一杯もらってもいいかな」ジャスパーはこっちのルーシーとマリアナとテッドに訊いた。

「それから、ちょっと休ませてもらっても？」

CamScannerでスキャン

52

朝になって、シェイクはななめにさしこむまばゆい陽光と、ドアの鍵ががちゃりと鳴ってドアが開く音で目を覚ました。
ベッドの上で身を起こす。速すぎるくらいだったが、気にしなかった。
客室清掃係がカートをころがして部屋にはいってきた。ジーナじゃない。客室清掃係はシェイクを見ると、スペイン語で謝罪の言葉をまくしたてはじめた。
「大丈夫だ、問題ないよ」シェイクは彼女を安心させてやった。もう一度横になり、それからまた身を起こした。今度はもうちょっとゆっくりと。
「出ていってほしイ?」客室清掃係は言った。
「いや、大丈夫だ。問題ない」
客室清掃係はうなずいて問いかけた。『本当に?』
シェイクはうなずいて答えた。『本当だ』
客室清掃係が埃をはらいはじめたので、シェイクはそそくさとシャワーを浴びはじめた。熱

い お湯のおかげで、いろんな意味で活性化したが、重要な意味では効かなかった。ひげを剃って、服を着替え、室内にもどった。客室清掃係はテレビのＣＮＮチャンネルをつけ、それを聞きながら大理石の床をモップでからぶきしていた。

実のところ、シェイクにはまとめるような荷物はなかった。最後に一度、じっくりと室内を見まわした。こんなことをしても――この部屋であった何もかもを思い出したところで――いっそうつらい思いをするだけだとわかってはいたが。そして実際、そのとおりだった。

「カルナヴァル、楽しんでる、ネ？」客室清掃係が訊いた。

シェイクは考えた。「ああ」彼は言った。「金はかかるが楽しいよ」

もちろん、何百万ドルものことを言っているわけではない。

「……カリフォルニア州立ミュール・クリーク刑務所です」重々しい声が言った。

シェイクはテレビに目を向けた。画面には、知りすぎるほどよく知っている、砂漠の低地が続く風景が広角ショットで映し出されていた。ずんぐりした灰色の建物群、有刺鉄線を上にのせた金網フェンス。

「三人の男が」レポーターの重々しい声は続く。「軽量コンクリートブロック壁をくり抜き、看守ふたりを制圧して脱走しました。ひとりは――」

画面が刑務所の外観から、オレンジ色の囚人服を着た、いかにも凶悪そうなろくでなし野郎の上半身写真に切り替わった。ヴェーダー・ウォレスだ。世界をにらみつけている。まっすぐシェイクをにらんでいる。

シェイクは顔をしかめた。そのニュースの残りをわざわざ聞く気はなかった。エレベーターに乗ってロビーに下りた。フロントデスクにいたホテルの支配人補佐がシェイクを見て、さっと青ざめた。

「セニョール・ボックスマン」支配人補佐の眉毛が哀れなほどぺたりとひれ伏し、許しを請うた。「本当にすみません。セニョーラが、奥様がどうしてもと――わたしは努力はしたんですが――ですが金庫を……その――」

「それについては心配はいらないよ」シェイクは言った。「おれもきみも、太刀打ちできなかったんだ」

「はい、セニョール」支配人補佐は悲しげにその事実を直視した。

「勘定だが」シェイクは言った。

「セニョーラが、もちろん」支配人補佐は言った。「お支払いくださいました。昨日でしたが？」

シェイクはヴェガスのホテルのことを思い出した。気を失う直前のあのとき。

「あいつはおれに借りがあったんだ」支配人補佐に言う。「だがあいつを見つけたら、やっぱり殺してやりたいよ」

「はあ」支配人補佐は言い、わかったような顔でうなずいた。シェイクが本当にそれをすることはない――ジーナを見つけることも、殺すこともないとわかっているかのようだった。そのどちらも、どんなにその両方をしたいと願おうが、実現することはないと。

シェイクはホテルを出て、歩く力が尽きるまで歩いた。ふと気がつくと土手道の上にいた。ベンチに腰をかけ、きらきら光る水面と、あまりきらめきの感じられない自分の未来の展望をぼんやりと見つめていた。

だがまあとにかく、と考える。楽しかったじゃないか。それにすべてを——激しく乱高下する波の全体を——平均してみると、全体の傾向としては上向きではある。たとえば、つい一週間前は、狭い狭い独房で暮らしていたのだ。あのころは、食堂でバタースコッチでなくバナナ・プディングが出たときが、彼にとってのいい日だった。あのころは、太平洋の島でジーナみたいな娘と新鮮な魚料理を食べる日がくるなんて、夢にも思っていなかったのだ。

ジーナみたいな娘が存在するなんて、夢にも思っていなかった。それはたしかだ。きっと、決断をするにあたっての、何か格言のような文句があるだろう。人生の潮流の気まぐれな流れに身をまかせてはいけないというような文句が。

ポケットを探ると、コインが一枚見つかった。片方の面には、王家の盾の上にとまった鳥の絵が刻印され、もう一方の側には、鳥に似た容貌の男の鋭いわし鼻が目立つ横顔が刻印されている。このパナマでは紙幣はUSドル札だが、コインはパナマのバルボア通貨なのだ。

シェイクはコインを投げあげ、前腕の上に落として、表か裏かあてようとした。そのとき、背後にパタパタというエンジン音が聞こえ、振り返った。

ジーナが、かなりがたのきたオレンジ色のヤマハのバイクにまたがり、ヘルメットを脱いで微笑みかけてきた。

「三百万ドルが何か足りなくて寂しいって言うの」ジーナは言った。
シェイクは冷静にふるまおうとしたが、ポーカーフェイスでいったい誰をだまそうというのだ？　シェイクも微笑んだ。
「そのバイクはどこで手に入れたんだ？」
「友だちからちょっと借りたの」ジーナは言った。
「その友だちってのは、一般に友だちっていう定義に合った友だちなのか？　借りたってのは、一般に借りたっていう定義に合った借りたなのか？」
ジーナはシートのうしろを軽くたたいてみせた。「ふたり分の席はあるわよ、ほら」
シェイクは立ちあがり、ジーナにコインを投げた。ジーナは受け止めた。コインを見る。
「表よ。どう？　そっちの勝ちよ」
「どうしておれのとこにもどることに決めたんだ？」
「あたしが決めたって誰が言ったの？」ジーナは訊いた。「来たいなら来なさいよ」
シェイクは一瞬、迷った――またしてもだ、いったい誰をだまそうというのだ？――それからバイクのうしろにまわり、ジーナのうしろにまたがろうとした。ジーナがスロットルをふかし、シェイクの下からバイクのシートがすり抜けていった。数メートル先で、ジーナが止まった。
「おっと、しまった」ジーナが言った。
「ああ。今やおれの最後のバルボアはそっちが持ってるんだからな」

「来なさいよ。今のはちょっとからかっただけよ」

シェイクは歩いていき、再度またがろうとした。またしても、ジーナはぎりぎりのところで早出しした。

シェイクはその場に立って、腕組みをした。ジーナがこの上なく甘美な笑みを向ける。「悪かったわ。本当にごめん。来てよ」

「きみがまたおれを踏みつけにしないとどうしてわかる？」シェイクは訊いた。

ジーナはエンジンをかけ、ウインクしてよこした。

謝辞

本書を書くにあたって、わたしなりに事実関係をはっきりさせ、それを明確に保つことを心がけました。読者として、わたしは細部まで正確かつ慎重な調査と、正確な歴史に基づく小説が好きです。すなわち、わたしはごくわずかな自由裁量を使ったにすぎず、今はそのところを指摘しておくことにします。

フィリップ・ビュノー＝ヴァリーヤ、ニカラグアでなくパナマに運河を建設すべくアメリカ人を説得するうえで大きな役割を果たしたフランス人は、この小説ではほら吹きのペテン師めいた印象で語られています。これはデーヴィッド・マカルーの巧妙な娯楽大作『海と海をつなぐ道――パナマ運河建設史』を読んで得た印象ですが、ほかの歴史学者のなかには、ビュノー＝ヴァリーヤの奸智策略ぶりにもっと好意的な見方を与えている人々もいます（お察しのとおり、フランス人の歴史学者たちですが、まあ）。

この小説の核となる百枚の包皮ですが、実際に第二次世界大戦の最後のあたりで消えています。ですがそれはベルギーではなく東プロシアで起きたことです。現在、ソビエト連邦崩壊後に発表されたさまざまな文書をもとに専門家たちが推測しているところでは、最後に確認され

ている包皮を所有していたベルギーのイエズス会士たちが、聖職を剝奪されたあと、東プロシアから無事に脱出するのと引き替えに、包皮を赤軍の幹部たちに渡したと見られています。この点において考えられるのは、現在、包皮はその本当の価値や重要性に気づいていない個人収集家の手にあるかもしれないということです。この包皮の複雑な歴史を理解するのに、カリフォルニア州オークランドにある生殖関連古代遺物研究所の所長であるトム・クーニー教授に大変お世話になりました。

リロ・カイリーの〈スモーク・ディテクター〉や、フレイミング・リップスの〈ターン・イット・オン〉がラスヴェガスのストリップ・クラブで演奏されていたという話は聞いたことがありませんが、プリンスの〈キス〉は何度となく（細部まで正確かつ慎重な調査です、前述参照）演奏されていると聞いています。また、そこのダンサーが小説内のそのシーンでジーナが着ていたのとまったく同じ衣裳を着ていたことも一度ありました。

パナマの読者は、ジーナがナマケモノを見つけようとしてできなかったのは信じられないと笑うことでしょうし、実際そのとおりです。パナマのジャングルでナマケモノを見つけるのはばかばかしいほど簡単なことなのです。とりわけ、わたしがやったように、マリオ・ベルナール・グレコのような一流の動物学者のガイドを雇った場合には。マリオの話では、というか、少なくともマリオが言っていたとわたしは思うのですが、ナマケモノが木から下りてくるのは五日に一回だけ、排便のためだといいます。が、裏づけが取れなかったため、このことは小説には出しませんでした。原稿整理編集者に激しく非難されそうだったからです（後述参照）。

本書の完成にあたり、お礼を言いたい人々がいます。感謝のリストは努めて短くとどめようと思います。なぜなら、リストが長くなれば、それに漏れたと言って怒る人々が増えそうだからです。

とりわけ、リチャード・パークス、マージョリー・ブラマン、ペギー・ヘイジマンには大変お世話になりました。

また、わが原稿整理編集者、モーリーン・サグデンにもお礼を言わなければなりません。彼女は塩酸メタンフェタミン（覚醒剤）常用者は正常人より排尿の頻度が少ない傾向があることや、統計によると、〝適切な〟性交の平均的な営みの持続時間は三分から七分のあいだにすぎない（！）ことを指摘してくれました。

最後になりましたが、親切にも、この小説のごく初期段階の草稿を読んで、いろいろ注意をくれた次の方々に。ティーナ・ブース、ディーディー・ガードナー、ジョナサン・フルドジンスキー、ジェフ・ホフマン、レイチェル・ロング、マーク・ポワリエ、エド・ラゴフ、ウィル・ストラウス、ジョアンヌ・ゴルフ。